

藤井寺市・柏原市

# 船 橋 遺 跡 Ⅲ

大和川改修（高規格堤防）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター



飛鳥時代工芸生産遺物（罎の羽口・棒状土製品・ガラス小玉鋳型・漆壺・砥石・鉄滓・炉壁）



3 - 376住居出土遺物（飛鳥時代土器群）



4 - 285溝出土弥生土器（飛鳥時代の溝から出土した弥生土器群）



3 - 496井戸下層出土土器一括（弥生時代）

# 序 文

船橋遺跡は、大阪府柏原市および藤井寺市に所在し、奈良盆地から大阪平野に流れる現大和川と北流する石川との合流地点の下流に位置し、現大和川を挟んで両側に拡がります。

旧大和川は、石川の合流点から、北ないしは北西に流れており、当遺跡は、本来、大和川の左岸に位置し、通称国府台地と呼ばれる洪積段丘の段丘崖から扇状地性低地に立地していました。大和川の付け替えに伴い、遺跡の中心部が分断されることとなりました。そのために、現大和川の河床や河岸が浸食されることにより、雨後によく、土器や石器などの優品が採集されることが知られていました。その大和川も2004年に付け替え300周年を迎えることとなりました。

今回の発掘調査は、大和川高規格堤防建設に先立って行われたもので、現大和川右岸側に位置します。現大和川左岸側の調査は、すでに、当センターで1996年度の調査成果が『船橋遺跡』として刊行され、2000年度に実施された調査成果が、それに続き『船橋遺跡Ⅱ』として刊行されました。本書は、それに続く3冊目の本報告書にあたります。

船橋遺跡は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であり、今回の調査成果から、主に、飛鳥時代前半の、掘立柱建物、土坑、溝など様々な遺構が検出され、また、それらに伴う土器や木器なども多数出土しました。

今回、特に注目される遺物としては、ガラス玉の鋳型が出土しています。ガラス玉の鋳型は、他遺跡出土のものには、方形のものがありますが、船橋遺跡出土例は、渦巻き状に玉が配置されており、円形のものでした。

他に、漆壺なども出土していることから、その時代には、当地域が工房の一画を担っていたと考えられます。

それらは、沖積低地に立地する遺跡の定めとして、河川のもたらした地形環境の変化に伴い、各時代の遺跡の一端を窺うことができる資料として、重要なものでした。

最後に、調査に際して、大阪府教育委員会ならびに国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所をはじめとする、関係者の方々のご指導、ご協力に感謝申し上げますとともに、今後とも当センターの埋蔵文化財調査事業に一層のご理解とご協力をお願いする次第であります。

2005年3月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野正好

# 例 言

- 1、本書は、大阪府藤井寺市川北3丁目・柏原市大正2丁目所在の船橋遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、調査は国土交通省近畿地方整備局大和川工事事務所（現 大和川河川事務所）から財団法人 大阪府文化財調査研究センター（現 大阪府文化財センター 平成14年4月から）が委託を受け実施した。

確認調査は大和川改修（高規格堤防）事業に伴う船橋遺跡発掘調査として平成12年3月23日から平成13年3月10日まで委託を受けた中で、平成12年12月4日から12月27日まで調査を行った。

大和川改修（高規格堤防）事業に伴う船橋遺跡発掘調査（その3）は、平成14年3月21日から平成15年3月25日まで委託を受け、平成14年5月9日から平成15年3月20日まで調査を行った。

大和川改修（高規格堤防）事業に伴う船橋遺跡発掘調査（その4）は、平成15年3月26日から平成16年3月25日まで委託を受け、平成15年5月15日から平成15年11月28日まで調査を行い、その後平成16年3月25日まで遺物整理作業を行った。

その後、上記の調査の遺物整理・報告書作成作業を、大和川改修（高規格堤防）事業に伴う船橋遺跡発掘調査（その5）として平成16年2月27日から平成17年3月10日まで委託を受け、平成17年3月10日本書刊行を持って完了した。

- 3、調査は以下の体制で実施した。

調査部長 井藤 徹(平成14年3月まで)・玉井 功(平成14年4月から)、南部調査事務所所長 瀬川 健(平成14年3月まで)・渡邊 昌宏(平成14年4月から平成15年3月まで)・藤田 憲司(平成15年4月から)、調査第二係(平成14年4月から。平成14年3月までは第三係)係長 寺川 史郎(平成15年3月まで)・森屋 美佐子(平成15年4月から)、主任技師 立花 正治[写真]、技師 木嶋 崇晴(平成13年3月まで)、技師 三宮 昌弘(平成14年4月から。平成16年7月から主任技師)、非常勤専門調査員 大島 施子(平成14年4月から平成15年7月まで) 調整課課長 赤木 克視、係長 藤永 正明(平成13年3月まで)・森屋 直樹(平成13年4月から)、技師 岡戸 哲紀(平成14年1月まで)・山元 健(平成14年2月から平成16年3月まで)、信太 真美世(平成16年4月から)

古市分室非常勤職員 秋山 敦子・宇川 里香・岡本 悦子・川田 嘉代子・片山 憲子・京嶋 孝之・田中 映子・辻村 尚也・中村 慎子・松永 しのぶ・山口 純枝・山中 真由美・行川 勝

- 4、調査の実施に当たっては、地元藤井寺市教育委員会、柏原市教育委員会、藤井寺市川北地区自治会、柏原市大正西連合区第四区自治会、大阪府教育委員会をはじめとし、下記の方々に御指導、御協力を賜った。記して謝意を表したい。

【調査指導】(順不同・敬称略)

京嶋 覚・佐藤 隆・伊藤 幸司(以上、(財)大阪市文化財協会)

- 5、本書の作成に当たっては、執筆・編集は三宮 昌弘が担当した。
- 6、本調査に係わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

# 凡 例

- 1、遺構実測図・断面図の基準高は、すべて東京湾平均海水位（T.P.）を用い、m単位で表示した。
- 2、遺構図の座標は国土座標軸（世界測地系）を使用し、第Ⅵ座標系に準拠する。表記はすべてm単位である。ただし、確認調査は旧座標系を使用している。遺構図に付した方位は、すべて座標北である。
- 3、現地調査や遺物整理は、平成15年3月までは、財団法人 大阪文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』1988年に準拠し、平成15年4月からは、財団法人 大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル（暫定版）』2003年に準拠して行った。
- 4、土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2003年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人 日本色彩研究所色票監修に準拠した。  
土質の記載は、基本的に「第Ⅲ章1、基本層序」に示したものに準拠する。
- 5、遺構番号は、各調査で通し番号をつけ、（その3）・（その4）の遺構に関しては、報告書中では遺構番号の頭に「3-・4-」を付けた。また、複数遺構の複合体である建物・柵列・方形周溝墓などに関しては遺構種別の末尾に番号を振った。
- 6、各遺構の実測図の縮尺は、建物類を1/80に統一した他は1/20か1/40である。遺物実測図は、石器類に関しては、図116-9が1/1である以外は2/3、他の遺物は1/4である。
- 7、建物の柱穴は半割状況を図示し、上面で柱痕などを、下面で柱穴下端などを半分ずつ図示した。他に出土状況図なども、実測時点に残っていたセクション等はそのまま図示する。ただし全て最終的には全掘している。出土状況のエレベーション図は平面図と記録したレベルから起こしたものである。密集している部分は省略した遺物もある。断面図と合成したのも同じ。
- 8、遺物実測図の輪郭以外の線種の意味するものは基本的には以下のとおり。  
実線 {明確な屈曲}。一つ開き破線 {異種調整境}。二つ開き破線 {開きが1mmのもの：同種調整境、開きが2mm以上のもの：ゆるい屈曲}。点線 {釉や附着物の範囲（断面のものは粘土接合痕}。
- 9、土器胎土の記載に関しては、胎土内の砂粒に関しては、径0.5mmを境として、それ以上のものを混和材として入れられた可能性のあるものとして「混和砂粒」とし、それ以下のものを「微細粒」とした。また、「赤色粒・黒色粒・白色粘土粒」は砂粒ではないがそれに準じるものとした。  
「生駒西麓産胎土」は土色では判断せず、粘土素地自体が粗粒で、角閃石が他の砂粒と同じ程度かそれ以上あるものに対して使用し、結果的に狭義のものになっている。
- 10、基本的な土器編年は、飛鳥～奈良時代に関しては飛鳥・平城宮編年を、須恵器に関しては陶邑編年を使用する。弥生土器に関しては1990『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社の河内編年を使用する。なお器種の坏に関しては「坏」の字を使用するが、飛鳥・平城宮編年の器種分類を示す際には原典に従い「杯」とした。
- 11、各遺構の「遺物破片数集計表」では、器種と型式・部位の欄では分類不明のものを表記していないので、その項の合計は一つ上位の分類項の数より少ない。また、各項の%は一つ上位の分類項からのもので、全体からのものではない。
- 12、写真図版の縮尺は統一していない。遺物写真には左下に実測図の図番号を付した。

# 目 次

カラー図版1～4

序文

例言・凡例

目次

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

- 1、調査に至る経過……………1
- 2、調査の方法……………3

## 第Ⅱ章 位置と環境

- 1、自然環境……………5
- 2、歴史的環境……………5

## 第Ⅲ章 調査成果

### 1、基本層序

- (1) 検出状況と基本的地勢……………9
- (2) 基本層序の土色・土質……………9
- (3) 小結……………20

### 2、1・2面

- (1) 概観……………21
- (2) 1面の遺構……………21
- (3) 2面の遺構……………22
- (4) 遺物……………22
- (5) 小結……………24

### 3、3面

- (1) 概観……………24
- (2) 遺構……………24
- (3) 遺物……………28
- (4) 小結……………30

### 4、4面

- (1) 概観……………31
- (2) 中世……………31
- (3) 奈良時代……………40
- (4) 飛鳥時代 建物・柵列・住居……………43

(5) 飛鳥時代 土坑・柱穴・ピット・炉	80
(6) 飛鳥時代 溝	106
(7) 弥生時代	181
(8) 3層・4面出土サヌカイト製石器	215
(9) 小結	220

#### 5、6面・7層縄文時代晩期

(1) 概観	222
(2) 6面	223
(3) 7層出土遺物	226
(4) 小結	229

#### 6、2000年度確認調査の成果

(1) 概観	230
(2) 層序	230
(3) 遺構面と遺構	233
(4) 遺物	237
(5) 小結	243

### 第IV章 まとめ

#### 1、船橋遺跡の地形環境の復元

(1) 砂層（7層）の構造	244
(2) 旧流路の推定	244
(3) 微高地の推定	246

#### 2、縄文時代晩期

#### 3、弥生時代後期～古墳時代初頭

(1) 居住域と墓域の構造	247
(2) 井戸	248
(3) 土器の構成	248
(4) 遺跡内での位置付け	249

#### 4、飛鳥時代

(1) 溝群	249
(2) 建物群と附随する遺構	250
(3) 土器	253
(4) 遺跡内での位置付け	256

#### 5、奈良時代

#### 6、中世以降

#### 参考文献



## 挿 図 目 次

- |     |                                    |     |                           |
|-----|------------------------------------|-----|---------------------------|
| 図 1 | 遺跡範囲と調査地点                          | 図34 | 建物柱穴出土遺物                  |
| 図 2 | 調査地位置図                             | 図35 | 4 - 柵列 1・2                |
| 図 3 | 調査区配置及び地区割り図                       | 図36 | 3 - 376住居上層上面出土状況         |
| 図 4 | 遺跡分布図                              | 図37 | 3 - 376住居上層下半出土状況         |
| 図 5 | 断面模式図及びトレンチ断面位置図                   | 図38 | 3 - 376住居底面               |
| 図 6 | 02 - 1 tr. 東壁断面                    | 図39 | 3 - 376住居出土状況エレベーション・土層断面 |
| 図 7 | 02 - 1 tr. 東西セクション・02 - 2 tr. 南壁断面 | 図40 | 3 - 376住居出土遺物 (その 1)      |
| 図 8 | 02 - 2 tr. 西壁・中央セクション断面            | 図41 | 3 - 376住居出土遺物 (その 2)      |
| 図 9 | 1・2 面全体図                           | 図42 | 3 - 376住居出土遺物 (その 3)      |
| 図10 | 中～近世遺構・包含層出土遺物                     | 図43 | 3 - 376住居出土遺物 (その 4)      |
| 図11 | 3 面全体図                             | 図44 | 3 - 182炭化植物遺体集積出土遺物       |
| 図12 | 3 面 [4 - 105島畠・108堀田] 断面           | 図45 | 3 - 483土坑出土状況・断面          |
| 図13 | 4 面全体図                             | 図46 | 3 - 483土坑出土遺物             |
| 図14 | 3 - 139堀田出土遺物                      | 図47 | 3 - 687土坑平面・断面、出土遺物       |
| 図15 | 3 - 345堀田出土遺物                      | 図48 | 3 - 707土坑出土状況・底面遺構        |
| 図16 | 3 - 403堀田出土遺物                      | 図49 | 3 - 707土坑断面               |
| 図17 | 3 - 449堀田出土遺物                      | 図50 | 3 - 707土坑出土遺物             |
| 図18 | 4 - 298土坑・324柱穴・377ピット・381ピット出土状況  | 図51 | 3 - 708土坑出土状況             |
| 図19 | 4 - 377ピット・381ピット出土遺物              | 図52 | 3 - 708土坑断面               |
| 図20 | 3 - 建物 1                           | 図53 | 3 - 708土坑出土遺物 (その 1)      |
| 図21 | 3 - 建物 2                           | 図54 | 3 - 708土坑出土遺物 (その 2)      |
| 図22 | 3 - 建物 3                           | 図55 | 4 - 150炉出土状況・断面           |
| 図23 | 3 - 建物 4                           | 図56 | 4 - 134ピット・150炉出土遺物       |
| 図24 | 3 - 建物 5                           | 図57 | 4 - 161ピット・162土坑出土状況・断面   |
| 図25 | 3 - 建物 6                           | 図58 | 4 - 161ピット・162土坑出土遺物      |
| 図26 | 3 - 建物 7                           | 図59 | 4 - 305柱穴出土状況及び出土遺物       |
| 図27 | 3 - 建物 8                           | 図60 | 4 - 324柱穴出土遺物             |
| 図28 | 3 - 建物 9                           | 図61 | 3 - 154溝全体図・出土状況          |
| 図29 | 3 - 建物10                           | 図62 | 3 - 154溝出土遺物              |
| 図30 | 3 - 建物11                           | 図63 | 3 - 139堀田・158溝平面・断面       |
| 図31 | 3 - 建物12                           | 図64 | 3 - 158溝出土遺物              |
| 図32 | 4 - 建物 1                           | 図65 | 3 - 165・180・183溝出土遺物      |
| 図33 | 4 - 建物 2                           | 図66 | 3 - 412溝出土状況              |
|     |                                    | 図67 | 3 - 412溝出土遺物 (その 1)       |

- 図68 3-412溝出土遺物 (その2)
- 図69 3-446溝出土状況 (その1)
- 図70 3-446溝出土状況 (その2)
- 図71 4-285溝北西側出土状況
- 図72 4-285溝南東側出土状況
- 図73 3-445溝・446溝、4-285溝出土遺物
- 図74 3-447溝出土状況 (その1・土器群1)
- 図75 3-447溝出土状況 (その2・土器群2)
- 図76 3-447溝全体図・断面・出土状況  
(その3・土器群3)
- 図77 4-286溝北西側・南東側出土状況
- 図78 3-447・4-286溝 (同一遺構)  
出土遺物 (その1)
- 図79 3-447・4-286溝 (同一遺構)  
出土遺物 (その2)
- 図80 3-450溝全体図・断面・出土状況  
(その1・土器群1)
- 図81 3-450溝出土状況  
(その2・土器群2~4)
- 図82 3-450溝出土状況 (その3・土器群5)
- 図83 3-450溝出土状況 (その4・土器群6)
- 図84 3-450溝出土遺物 (その1)
- 図85 3-450溝出土遺物 (その2)
- 図86 3-450溝出土遺物 (その3)
- 図87 3-497溝・572溝出土遺物
- 図88 3-515溝出土状況
- 図89 3-515溝出土遺物
- 図90 3-736溝全体・断面・出土状況 (その1)
- 図91 3-736溝出土状況 (その2)
- 図92 3-736溝出土状況 (その3)
- 図93 4-205溝出土状況
- 図94 4-287溝出土状況
- 図95 3-736溝・4-205溝・4-287溝  
(同一遺構) 出土遺物 (その1)
- 図96 3-736溝・4-205溝・4-287溝  
(同一遺構) 出土遺物 (その2)
- 図97 3-736溝・4-205溝・4-287溝  
(同一遺構) 出土遺物 (その3)
- 図98 3-736溝・4-205溝・4-287溝  
(同一遺構) 出土遺物 (その4)
- 図99 4-125溝・126溝出土状況・断面
- 図100 4-125溝・126溝出土遺物
- 図101 4-185溝出土遺物
- 図102 4-205・285~288溝
- 図103 4-286溝・288溝交点附近出土状況
- 図104 4-286溝・288溝交点附近出土遺物
- 図105 4-288溝出土状況
- 図106 4-288溝出土遺物
- 図107 4-361溝・373溝出土状況
- 図108 4-361溝出土遺物
- 図109 3-387井戸断面・出土状況
- 図110 3-387井戸出土遺物
- 図111 3-413井戸断面・出土状況  
(その1・上面)
- 図112 3-413井戸出土状況 (その2・埋土内)
- 図113 3-413井戸出土遺物
- 図114 3-496井戸 (その1) 上面出土状況・  
断面
- 図115 3-496井戸 (その2) 上層・  
下層出土状況
- 図116 3-496井戸出土遺物
- 図117 3-510井戸断面・出土状況  
(その1・上面)
- 図118 3-510井戸出土状況 (その2・埋土内)
- 図119 3-510井戸出土遺物
- 図120 3-533土坑出土状況
- 図121 3-533土坑出土遺物
- 図122 4-298土坑出土遺物
- 図123 4-330井戸出土状況・断面
- 図124 4-330井戸出土遺物
- 図125 4-355溝平面・断面
- 図126 4-355溝出土遺物
- 図127 4-方形周溝墓1  
(328土坑・375ピット・327周溝・329溝)  
平面・断面
- 図128 4-方形周溝墓1 (328土坑・375ピット・

329溝) 出土状況

- 図129 4 - 方形周溝墓 1 関連出土遺物
- 図130 4 - 391土器群出土遺物
- 図131 4 - 218土坑・3 - 415溝・  
02 - 2 tr. 中央南北セクション出土遺物
- 図132 3層出土サヌカイト製石器
- 図133 4面遺構出土サヌカイト製石器  
(その1)
- 図134 4面遺構出土サヌカイト製石器  
(その2)
- 図135 6面全体図
- 図136 6面3 - 814土坑・土器1出土状況
- 図137 4 - 243落込み・245ピット・  
246ピット周辺土器出土状況
- 図138 6面及び6・7層出土土器
- 図139 7層出土サヌカイト製石器(その1)
- 図140 7層出土サヌカイト製石器(その2)
- 図141 確認調査トレンチ断面
- 図142 確認調査00 - 3トレンチ平面
- 図143 確認調査遺構断面
- 図144 確認調査出土遺物
- 図145 確認調査023溝・044溝・045溝  
出土遺物
- 図146 確認調査046土坑出土遺物
- 図147 船橋遺跡の地形環境復元案
- 図148 飛鳥時代建物・溝東群・土坑等略図

## 表 目 次

<p>表1 図6の02-1 tr. 東壁断面土色・土質</p> <p>表2 図7の土色・土質 02-1 tr. 東西セクション断面・02-2 tr. 南壁断面</p> <p>表3 図8の土色・土質 02-2 tr. 西壁断面・02-2 tr. 中央セクション断面</p> <p>表4 3-345堀田 遺物破片数集計表</p> <p>表5 3-403堀田 遺物破片数集計表</p> <p>表6 3-449堀田 遺物破片数集計表</p> <p>表7 3-建物2 遺物破片数集計表</p> <p>表8 3-建物3 遺物破片数集計表</p> <p>表9 3-建物4 遺物破片数集計表</p> <p>表10 3-建物5 遺物破片数集計表</p> <p>表11 3-建物6 遺物破片数集計表</p> <p>表12 3-建物7 遺物破片数集計表</p> <p>表13 3-建物8 遺物破片数集計表</p> <p>表14 3-建物9 遺物破片数集計表</p> <p>表15 3-建物11 遺物破片数集計表</p> <p>表16 3-建物12 遺物破片数集計表</p> <p>表17 4-建物1 遺物破片数集計表</p> <p>表18 4-建物2 遺物破片数集計表</p> <p>表19 建物柱穴土色・土質一覧</p> <p>表20 4-柵列1 遺物破片数集計表</p> <p>表21 4-柵列2 遺物破片数集計表</p> <p>表22 3-376住居 遺物破片数集計表</p> <p>表23 3-182炭化植物遺体集積 遺物破片数集計表</p> <p>表24 3-483土坑 遺物破片数集計表</p> <p>表25 3-687土坑 遺物破片数集計表</p> <p>表26 3-707土坑 遺物破片数集計表</p> <p>表27 3-708土坑 遺物破片数集計表</p> <p>表28 4-150炉 遺物破片数集計表</p> <p>表29 4-161ピット 遺物破片数集計表</p> <p>表30 4-162土坑 遺物破片数集計表</p> <p>表31 4-324柱穴 遺物破片数集計表</p> <p>表32 3-154溝 遺物破片数集計表</p> <p>表33 3-158溝 遺物破片数集計表</p>	<p>表34 3-412溝 遺物破片数集計表</p> <p>表35 3-446溝 遺物破片数集計表</p> <p>表36 4-285溝 遺物破片数集計表</p> <p>表37 3-447溝 遺物破片数集計表</p> <p>表38 4-286溝 遺物破片数集計表</p> <p>表39 3-450溝 遺物破片数集計表</p> <p>表40 3-497溝 遺物破片数集計表</p> <p>表41 3-515溝 遺物破片数集計表</p> <p>表42 3-572溝 遺物破片数集計表</p> <p>表43 3-736溝 遺物破片数集計表</p> <p>表44 4-205溝 遺物破片数集計表</p> <p>表45 4-287溝 遺物破片数集計表</p> <p>表46 4-125溝 遺物破片数集計表</p> <p>表47 4-126溝 遺物破片数集計表</p> <p>表48 4-185溝 遺物破片数集計表</p> <p>表49 4-286溝・288溝交点 遺物破片数集計表</p> <p>表50 4-288溝 遺物破片数集計表</p> <p>表51 4-361溝 遺物破片数集計表</p> <p>表52 3-387井戸 遺物破片数集計表</p> <p>表53 3-413井戸 遺物破片数集計表</p> <p>表54 3-496井戸 遺物破片数集計表</p> <p>表55 3-510井戸 遺物破片数集計表</p> <p>表56 3-533井戸 遺物破片数集計表</p> <p>表57 4-298土坑 遺物破片数集計表</p> <p>表58 4-330井戸 遺物破片数集計表</p> <p>表59 4-355溝 遺物破片数集計表</p> <p>表60 4-方形周溝墓1 遺物破片数集計表</p> <p>表61 4-329溝 遺物破片数集計表</p> <p>表62 4-375ピット 遺物破片数集計表</p> <p>表63 4-391土器群 遺物破片数集計表</p> <p>表64 掲載遺構 遺物破片数集計表</p> <p>表65 2000年度確認調査トレンチ断面(図141) 土色・土質</p> <p>表66 遺物法量一覧 土師器坏・高坏・皿</p> <p>表67 土師器坏法量分布</p>
--	--

## 写真図版目次

### 図版 1

1、02-1 tr. 南半 2 面 (北から)

2、02-2 tr. 東半 1・2 面 (東から)

### 図版 2

1、02-2 tr. 西半 1・2 面 (南西から)

2、02-3-1 tr. 1・2 面 (南から)

### 図版 3

1、02-3-2 tr. 1・2 面 (南東から)

2、02-3-3 tr. 1・2 面 (東から)

### 図版 4

1、02-1 tr. 3 面 (南から)

2、02-1 tr. 北東部 3 面 2-2 層 (洪水砂除去後 (西から))

### 図版 5

1、02-2 tr. 東半 3 面 (西から)

2、02-3-1 tr. 3 面 (南から)

### 図版 6

1、3 面 108 掘田 (西から)

2、02-3-3 tr. 3 面 (東から)

### 図版 7

1、02-1 tr. 4 面 (南東から)

2、02-1 tr. 北東部 4 面 (西から)

### 図版 8

1、02-3-1 tr. 4 面 (南西から)

2、02-3-2 tr. 東側 4 面 (北西から)

### 図版 9

1、02-3-2 tr. 西側 4 面 (東から)

2、02-3-3 tr. 東側 4 面 (東から)

### 図版 10 4 面

1、3-建物 1 (南西から)

2、3-建物 2 (北から)

3、202 柱穴 (南東から)

4、3-建物 3 (南東から)

### 図版 11 4 面

1、3-建物 7 (南西から)

2、3-建物 11 (東から)

3、3-建物 6 (西から)

4、3-建物 12 (北東から)

### 図版 12 4 面

1、3-建物 4・5 (北西から)

2、奥、3-建物 9 左、3-建物 8 手前、3-376 住居 (南西から)

### 図版 13 4 面

1、3-建物 6・11 (西から)

2、3-建物 10・11 (南東から)

### 図版 14 4 面

1、4-建物 1 (東から)

2、4-建物 2 (北東から)

3、3-376 住居床面検出 (東から)

### 図版 15 4 面

1、02-2 tr. 3-376 住居周辺 (西から)

2、3-376 住居最上層除去後 (南西から)

図版16 4面

- 1、3-376住居最上層除去後北側部分（東から） 2、3-376住居ガラス小玉鋳型出土状況（東から）

図版17 4面

- 1、3-376住居完掘状況 2、02-2 tr.707・708土坑周辺（南東から）

図版18 4面

- 1、3-707土坑（南から） 2、3-708土坑（南から）  
3、3-708土坑甕出土状況（東から）

図版19 4面

- 1、4-377ピット（南から） 2、4-381ピット（北西から）  
3、3-483土坑（南から） 4、4-134ピット（西から）

図版20 4面

- 1、4-150炉検出状況（西から） 2、同上炭層半掘状況（西から）

図版21 4面

- 1、4-150炉炭層断面（南から） 2、同上炭層除去後（北西から）

図版22 4面

- 1、4-150炉下部埋土断面（南から） 2、同上炭層除去後（西から）  
3、同上完掘状況（西から）

図版23 4面

- 1、4-162土坑（北東から） 2、同上南部分（西から）  
3、同上上層除去後（北西から）

図版24 4面

- 1、3-446溝（北西から） 2、3-447溝（北西から）  
3、3-450溝（南から）

図版25 4面

- 1、3-450溝北東部（南西から） 2、3-450溝土器群2（北西から）  
3、3-412溝（南から） 4、4-125・126溝（南西から）

図版26 4面

- 1、3-736溝（北から） 2、4-205溝（南西から）  
3、4-287溝（南西から） 4、4-361溝（南から）

図版27 4面

- 1、4-286・288溝交点附近（東から） 2、4-285溝南東側（東から）

図版28 4面

- 1、4-285溝南東側（北東から） 2、4-286溝南東側（北東から）  
3、4-288溝（南東から）

図版29 4面

- 1、3-496井戸北半遺物出土状況（北東から） 2、同上南半遺物出土状況（西から）

図版30 4面

- 1、3-387井戸南西半上面、  
北東半埋土内遺物出土状況（北東から）
- 3、3-413井戸上面遺物出土状況（北東から）

- 2、同上南西半埋土内遺物出土状況（北東から）
- 4、同上北半埋土内遺物出土状況（北から）

図版31 4面

- 1、3-496井戸上面遺物出土状況（西から）
- 3、同上断面（北から）

- 2、3-510井戸上面遺物出土状況（東から）
- 4、同上埋土内遺物出土状況（北から）

図版32 4面

- 1、4-330井戸上層遺物出土状況（西から）
- 3、3-533土坑（西から）

- 2、同上下層遺物出土状況（南から）
- 4、4-方形周溝墓1（北から）

図版33

- 1、3-496井戸南半遺物出土状況（北から）

- 2、6面3-814土坑土器1出土状況（南から）

図版34 6面

- 1、02-3-2 tr.北西部6面（南東から）

- 2、同上土器出土状況（東から）

図版35

- 4-003溝、4-110溝、3層

図版36

- 3-141堀田、3-233溝、4-110溝、  
4-209ピット、1層、2層、3層

図版37

- 3-139堀田、3-345堀田

図版38

- 3-139堀田、3-403堀田

図版39

- 3-424柱穴、3-422柱穴、3-449堀田、  
3-499柱穴、4-377ピット、4-381ピット

図版40~46

- 3-376住居

図版47

- 3-182炭化植物遺体集積、3-483土坑、  
3-687土坑、3-707土坑、3-818土坑

図版48

- 3-707土坑、3-708土坑

図版49

- 3-708土坑

図版50

- 3-708土坑、4-134ピット、4-150炉

図版51

- 3-708土坑

図版52

- 3-708土坑、4-161ピット、4-162土坑

図版53

- 4-162土坑

図版54

- 3-154溝、3-158溝、4-305柱穴

図版55

- 3-158溝、3-165溝、3-180溝、3-183溝、  
側溝

図版56

- 3-183溝、3-412溝、側溝

図版57

- 3-412溝

図版58

- 3-412溝、4-285溝

図版59

3 - 445溝、3 - 446溝、3 - 447溝、4 - 285溝、  
4 - 286溝

図版61

3 - 447溝、3 - 450溝

図版63~66

3 - 450溝

図版68

3 - 515溝、3 - 572溝

図版70~71

3 - 736溝

図版73

4 - 125溝、4 - 287溝

図版75

4 - 125溝、4 - 126溝、4 - 185溝

図版77

3 - 387井戸、4 - 288溝、4 - 361溝

図版79

3 - 413井戸、3 - 496井戸

図版81

3 - 510井戸

図版83

3 - 533土坑、4 - 330井戸、4 - 355溝、  
4 - 方形周溝墓関連

図版85

3 - 415溝、6面出土土器、7層出土土器

図版87

4 - 330井戸、4 - 方形周溝墓関連、  
7層出土サヌカイト

図版89

3層出土サヌカイト

図版60

3 - 447溝

図版62

3 - 449堀田、3 - 450溝

図版67

3 - 450溝、3 - 497溝

図版69

3 - 515溝、3 - 736溝

図版72

4 - 205溝、4 - 287溝

図版74

4 - 125溝

図版76

4 - 286・288溝交点附近

図版78

3 - 387井戸、3 - 413井戸

図版80

3 - 496井戸

図版82

3 - 533土坑、4 - 298土坑

図版84

4 - 方形周溝墓関連、4 - 391土器群、  
02 - 2 tr. 中央南北セクション

図版86

3 - 403堀田、4面遺構出土サヌカイト、  
7層出土土器

図版88

7層出土サヌカイト

図版90

3層出土サヌカイト、4面遺構出土サヌカイト



# 第 I 章 調査に至る経緯と経過

## 1、調査に至る経過

船橋遺跡は大和川と石川の合流点の西に広がる遺跡である。かつて合流点から北流していた大和川は、長瀬川や玉串川などに分流していたが、1704（宝永元）年に付け替えられ、西流して堺市で大阪湾に注ぐ現在の形になった。そのために大和川は船橋遺跡のほぼ中央を東西に横切るようになった。

1954（昭和29）年に河内橋の上流側に堰が作られると、下流側の河床浸蝕に伴い大量の遺物が出土し、広く知られる遺跡となった。縄文時代晩期の船橋式土器の標識遺跡としても知られる。

今回の調査は、国土交通省近畿地方整備局大和川工事事務所（現大和川河川事務所 以下同じ）が進めている大和川改修（高規格堤防）事業に伴うものである。高規格堤防の敷地となる部分の調査であり、大和川右岸北側で、藤井寺市川北地区から柏原市大正地区にまたがる地点である。

上記事業に伴う調査は、1996年より、大阪府教育委員会の指導の下、（財）大阪府文化財調査研究センター（現大阪府文化財センター）が進めている。



図1 遺跡範囲と調査地点（S=1/10000）（地図：昭和36年版）

1996年度の96-1・2の調査で、砂層が埋積した流路が各所で検出され、その砂層にも遺物の多寡がある事が判明した。その成果を受け、右岸側の実態を事前に把握する必要性が認識され、2000年度の船橋遺跡00-1の調査に伴い、藤井寺市川北地区において、確認調査が実施された。00-2・00-3の二つのトレンチを設定した。現地調査は2000年12月4日に開始し、2000年12月27日に終了した。

その後、東に隣接する柏原市大正地区で2001年度に船橋遺跡01-2の調査が行われた。この調査の成果は同じ敷地内の残りの調査が行われた後、報告する予定である。

今回報告するのは、先の確認調査と船橋遺跡（高堤その3）、船橋遺跡（高堤その4）の調査であり、同じ敷地内で実施された。（財）大阪府文化財センターが大阪府教育委員会の指導の下、国土交通省近畿地方整備局大和川工事事務所の委託を受け実施した。

船橋遺跡（高堤その3）は、2002年3月に受託契約を交わし、同年5月より地元との協議などを行い、8月からフェンス撤去、万能塀設置、基礎撤去などを経て、10月より02-1トレンチから機械掘削を開始、2003年3月に現地調査を終了した。

船橋遺跡（高堤その4）はマニュアルの改訂により調査名としては「船橋遺跡02-3」となっている。2003年3月に受託契約を交わし、同年5月より地元との協議、フェンス撤去、万能塀の設置などを行い、8月より02-3-1トレンチから機械掘削を開始、11月に現地調査終了。そのまま2004年3月まで整理作業を行った。なお、大阪府教育委員会の指導により、4面建物1・2を保存する事となった。柱穴完掘後、建物址周囲1mを含めた範囲、計106.95㎡を4面までの調査に留め、真砂土により遺構面より20cmの厚さまで覆い養生し、調査後、埋め戻し保存した。保存範囲は調査成果の図13・32・33を参照されたい。



図2 調査地位置図 (S=1/5000) (地図：平成6年版)

## 2、調査の方法

調査区は東西と北を正方位に走る道路で区切られ、南側は大和川右岸の堤防裾により斜めに区切られた範囲である。東側で条里制地割の坪境に当たる水路が南北に走る。

(高堤その3)の調査では、その水路より西側で北寄りの部分を東西二つのトレンチに分割し、着手順に東を02-1トレンチ、西を02-2トレンチとした。02-1トレンチは北半・南半に、02-2トレンチは東半・西半に分割し、交互に調査を進めた。

ただしトレンチ内に、鉄筋コンクリート製で深さ2m近い建物基礎がいくつか残存しており、当初撤去を試みたが、振動により周辺住宅に影響が出る危険があり、かつ基礎の下端が最終遺構面より深いところまで達している事が確認できたので、それらを残して調査をすすめた。そのため、トレンチの形状は複雑なものとなっている。

(高堤その4)の調査では、水路より東の部分を02-3-1トレンチとし、西の(高堤その3)のトレンチより南側を二分割し、東を02-3-2トレンチ、西を02-3-3トレンチとした。隣接し、調査年度の連続する調査でトレンチ名の付け方が統一を欠くが、改定されたマニュアルにのっとりためであるので了承頂きたい。

確認調査は二つのトレンチが設定されたが、00-2トレンチは02-1トレンチ南半内の南東寄りに位置する。00-3トレンチは02-3-3トレンチの東側の南に隣接する形となり、確認調査と(高堤その3)の間の期間に設置された、大和川堤防上から下る工事中仮設道路の下に位置する。

調査面積は確認調査が200㎡、(高堤その3)が2405㎡、(高堤その4)が1422㎡である。

確認調査では調査深度1m毎に幅1mの段を設けて掘削し、現地表から1.7mほど下の最終遺構面よ

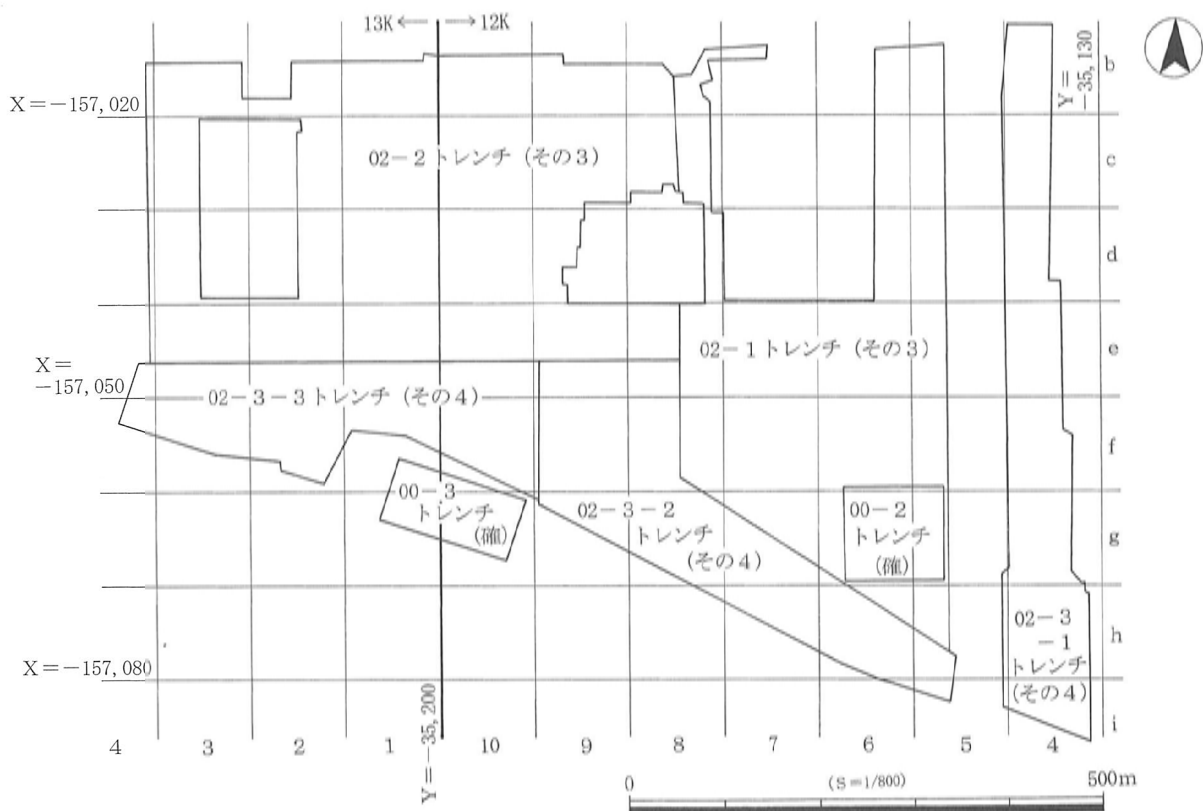


図3 調査区配置及び地区割り図

り下は、下部砂層の包含遺物と下底部の確認のため勾配を付けた法面をもって下げた。最下部は現地表より4mほど下になる。

(高堤その3)の調査では、02-1トレンチでは現地表から50cmほどの現代盛土とその直下の現代耕土を機械掘削により除去し、調査を開始した。その結果1層が近世後半以降の耕土である事が判明したので、02-2トレンチではそれも機械掘削に含めた。最終的遺構面である6面より下は、砂層の上部が縄文時代晩期の遺物包含層である事が判明したのでその部分のみ掘削し、遺物を採集した。平均的な掘削深度は1.8mほどになる。

(高堤その4)の調査は、現代盛土から近世後半の旧耕土までを機械掘削により除去し、その下面から調査を開始した。6面の調査は(高堤その3)の調査により、遺構・遺物が希薄で限られた範囲で検出される事が判明したので、02-3-2トレンチ北西部と02-3-3トレンチ東半のみとした。掘削深度は(高堤その3)と同じである。

遺構の平面実測はクレーンによる航空写真測量図化と平板測量を行った。また、必要に応じて遺構平面図・断面図・遺物出土状況図を作成した。

地区割りの方法については、(財)大阪府文化財センター「遺跡調査基本マニュアル(暫定版)」2003に準拠し、遺構図作成や遺物の取り上げの基準とした。これは国土座標軸(世界測地系)第VI座標系を使用したものである。地区割りは大から小へ4段階で行った。

第I区画は、大阪府の南西端 $X = -192,000$ ・ $Y = -88,000$ を基準とし、縦6km、横8kmで区画する。表示は縦軸A~O、横軸0~8で表示、表示方法は縦・横の順。

第II区画は、第I区画を縦1.5km、横2.0kmでそれぞれ分割し、計16区画を設定。南西端を1とし、東へ4まで、あとは西端を5、9、13北東端を16とする平行式の地区名表示。

第III区画は、第II区画を100m単位で区画。縦15、横20。表示は北東端を基点に縦A~O、横1~20。表示方法は横・縦の順。

第IV区画は、第III区画を10m単位で区画。縦、横各10。表示は北東端を基点に縦a~j、横1~10。表示方法は横・縦の順。

今回の調査区は第III区画のF 6-15-12K~13Kの中に収まる。

ただし、確認調査で使用している国土座標は旧測地系によるので留意されたい。

遺構面は(高堤その3)と(高堤その4)が共通している。基本層序にのっとり1層の上を1面というように層上面に層と同じ番号をふるが、全てを面的に調査したわけではない。確認調査では独自の遺構面を設定しているが、その対応関係は後述する。

遺構番号は遺構の種別に関わらず確認した順に通し番号をふりその末尾に遺構種別を附加する。ただし、種別に関しては土坑としたものを調査途中で井戸に変更するなどある。報告書においては統一したが、原図などに遡る場合留意されたい。また、柱穴の集合として検出される掘立柱建物や柵列、周溝と土坑の組み合わせによる方形周溝墓などは、個々の遺構番号の他に遺構種別の後に番号を付ける形で表記している。出土状況図の土器番号等は原図のままである。

また、(高堤その3)と(高堤その4)はマニュアルの改訂をはさむため、通し番号にできなかった。そのため報告書では遺構名の頭に各々「3-」・「4-」を附加して表記した。煩雑ではあるが容赦願いたい。確認調査も独自の遺構番号をふり、他の調査の遺構と併記する場合は頭に「確認調査」と付ける。

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 1、自然環境

船橋遺跡は石川と大和川の合流地点の西側に位置しており、付け替えられた現在の和和川が遺跡のほぼ中央を東西に横切っている。

大和川は河内平野を形成してきた主要な河川であり、かつては恩智川・玉串川・長瀬川・楠根川などに分流しながら北流していた。各河川は河道の固定化が進むにつれ天井川化し、その自然堤防を形成していったが、それ以前はもっと幅広い氾濫原を持っており、遺跡の北東側には長瀬川の氾濫原の痕跡が土地区画として残る。遺跡は沖積平野の扇状地帯に立地しており、こういった河川の氾濫原は完新世段丘を形成していたと思われる。

石川は和泉山脈に源流を持ち、羽曳野丘陵と金剛山地の間を、谷底平野を形成しながら北流するが、大和川との合流点へは玉手山丘陵と国府台地の間を抜けて達する。

国府台地は中位段丘であり、遺跡の南側でかなりの比高差を持った段丘崖を形成し沖積平野と接する。その北端裾部の遺跡内には河道の痕跡らしき土地区画が残り、完新世段丘が存在していた可能性がある。

国府台地の西側には、羽曳野丘陵に連なる中位段丘との間に開析谷があるが、これは、現在ほとんど人工河川と化している大水川の本래の流域であろう。

遺跡内では本래の自然地形を留めている部分は少ないが、大和川と石川の合流点で形成される自然堤防の存在が予想され、大井や北条の集落の形態から西側にも自然堤防が散在している事が考えられる。

主に石川からの分流が流路を変えながら、埋没流路・微高地・後背湿地を網の目状に形成していった可能性がある。また、西端部分では大水川水系の埋没流路の存在も推測される。

独特の胎土を持つ土器の産地として知られる生駒西麓地域は、その南端で船橋遺跡に隣接していると言って良いほどの距離しかなく、石器石材のサヌカイトや石造品石材の凝灰岩の中心的な産地である二上山は、山頂を基点としても遺跡から7 kmほどの距離である。地勢的には船橋遺跡は中河内と南河内の境界に位置していると言える。

### 2、歴史的環境

後期旧石器時代の遺跡は、国府型ナイフの標識遺跡である国府遺跡が南に隣接している他、西に隣接する西大井遺跡など周辺に多い。住居が検出されたはざみ山遺跡や、規模の大きな石器製作址が確認された翠鳥園遺跡など居住や生産活動を示す遺跡もある。

おそらくは、良好な石材を得るのに二上山に近く、かつ平坦な段丘に開析谷が切り込む地形が、生活に適した環境であったのであろう。

縄文時代では、国府遺跡で前期の土器に伴い多くの埋葬人骨が検出されているのが有名であろう。晩期のももあり、この台地が安定した立地としてたびたび拠点的な遺跡になっていると思われる。

縄文時代後期には土師の里遺跡や林遺跡でも墓地や集落の存在が確認され、主に谷底平野や沖積平野を望む台地上に集落が営まれている。沖積平野は不安定な状況であったと思われるが、それでも平野部を活動範囲の中に取り込んでいく傾向があるようだ。

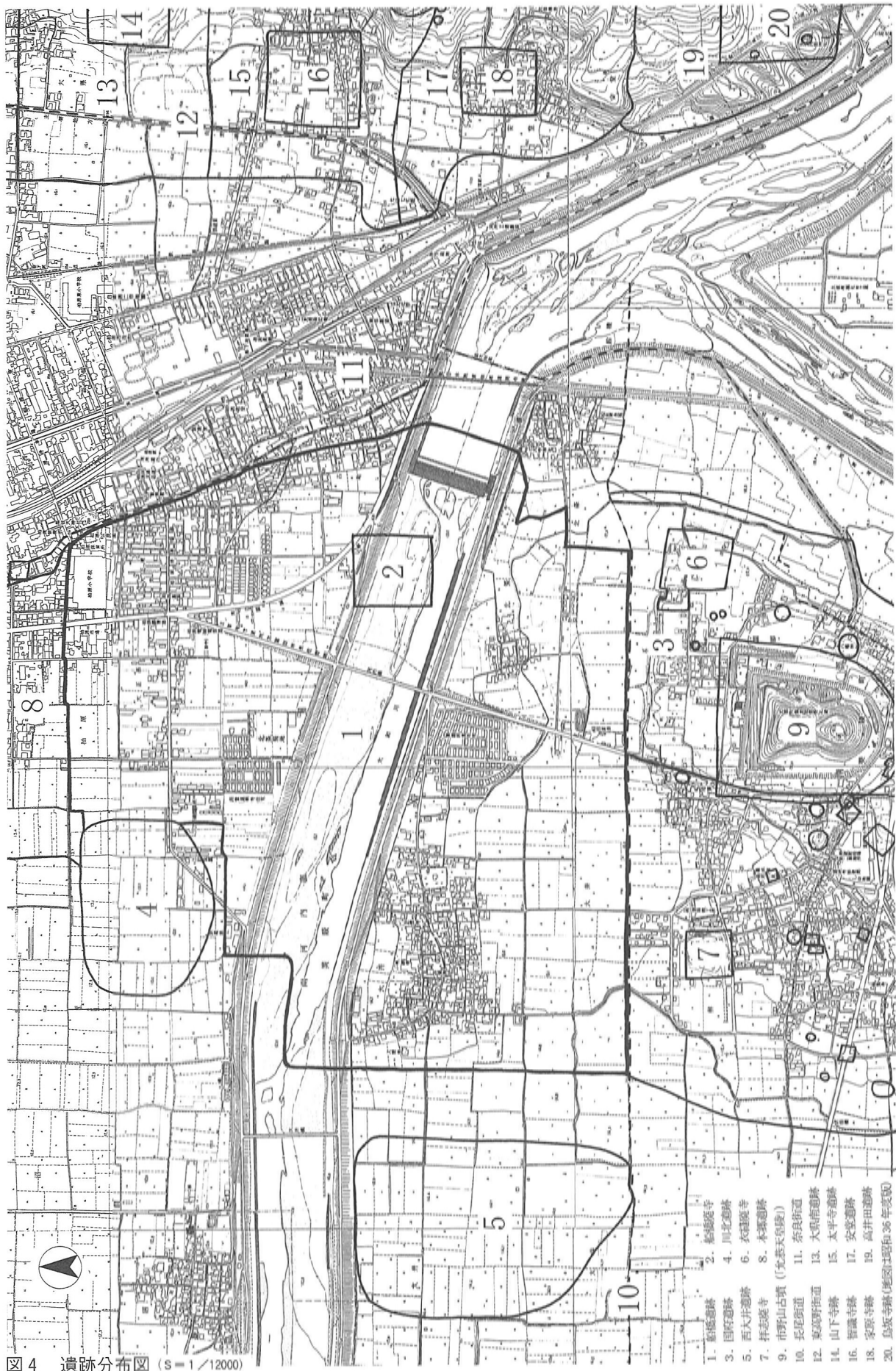


图4 遺跡分布図 (S=1/12000)

- 1. 新橋遺跡
- 2. 藤橋遺跡
- 3. 国府遺跡
- 4. 川北遺跡
- 5. 西大井遺跡
- 6. 衣錦遺跡
- 7. 井志遺跡
- 8. 本郷遺跡
- 9. 市野山古墳 (穴蓋天石塚)
- 10. 長花街道
- 11. 奈良街道
- 12. 東成野街道
- 13. 大森街道
- 14. 山下寺跡
- 15. 太平寺遺跡
- 16. 智識寺跡
- 17. 安堂遺跡
- 18. 家原寺跡
- 19. 高井田遺跡
- 20. 鳥坂寺跡 (地圖上昭和36年或前)

縄文時代晩期の船橋遺跡は、船橋式土器の標識遺跡として知られ、沖積平野の遺跡として評価できる。しかし国府遺跡の埋葬例などを見ても、拠点的な生活の場は台地上にあったようである。この時期には沖積平野に次第に自然堤防の形成が進行していた。

縄文時代晩期末の長原式の時期にも船橋遺跡には遺物が見られるが、この頃に沖積平野扇状地帯には河床の低下による完新世段丘の形成があったようで、形成された微高地が安定し、その間に後背湿地が存在する環境になったと思われる。

長原式期は多くの部分で弥生時代と平行するようで、この時期には若江北・山賀・亀井と言った三角州帯Ⅰbに立地する遺跡には弥生文化が到達していたと思われ、長原式土器を使用する集団と接触があった事は、長原式土器の底部に靨痕が残る例がある事に示されている。そんな時に船橋遺跡では、まだ弥生文化の集落が進出していないとはいえ、水田稲作に適した環境が整っていた。

船橋遺跡周辺で弥生時代遺跡の最古例は、前期中段階で田井中遺跡に集落が想定されているのと、国府遺跡にわずかに土器が出土している事である。田井中遺跡は船橋遺跡の北西1kmほどの位置にある。

船橋遺跡で遺物が見られるのは前期新段階からで、国府遺跡で遺構が確認されるのもこの時期である。同じ時期にさらに南の土師の里遺跡にも集落が成立する。

弥生時代中期には国府遺跡は最盛期を迎えるが、船橋遺跡では土器は出土するものの遺構は少なく当センター(01-2)の調査で水田が検出されたのが始めて具体的様相が明確にされた例であろう。おそらく国府遺跡に集落があり、船橋遺跡はその生産域と考えられる。

この時期、石川流域でも多量のサヌカイト製石器の製作を行った拠点集落である喜志遺跡や、サヌカイト採掘坑が確認された奥山遺跡などが見られ、サヌカイト製石器生産を核とした地域社会が展開しているようである。

弥生時代後期には状況が大きく変わる。国府遺跡では遺構・遺物が減少し、それに変わるように船橋遺跡で遺構が増加する。石川流域でも段丘平坦面に立地していた中核的集落が衰退し、丘陵上に高地性集落が成立する。

弥生時代中期の集落が廃絶し、新たな集落が成立する点では同じ変化であるが、船橋遺跡の場合は国府遺跡から沖積平野に集落が下りて来たかのような状況であり、石川流域とは反対の変化とも言える。一番近い高地性集落は、石川右岸の玉手山丘陵上にあり、船橋遺跡とは1kmほどしか離れていない。

船橋遺跡では弥生時代後期の遺構・遺物は各所で出土しており、かなり広い範囲に分布している。その中核は現大和川の河内橋周辺にあると思われるが、遺構の分布範囲が一体の集落とは考えられない。複数の集落が近接して併存するか、さらに小さな遺構群の単位が散在しているような状況であろう。

古墳時代初頭庄内式期には、八尾市の久宝寺遺跡から木の本遺跡周辺に庄内式土器の中心地が成立する。この地域と奈良県纏向遺跡のみが庄内式土器が集落の土器の半数以上を占める地域であり、在地の土器として主体的に消費している地域と言える。木の本遺跡は船橋遺跡の北西1km足らずの位置にある。

石川流域では弥生時代後期の集落の多くが廃絶し、残ったものも庄内式期のうちに廃絶する。尺度遺跡に新たな集落が成立し、その後、布留式期に入って再び集落が増加していく。

船橋遺跡でも庄内式期の遺構はあり、方形周溝墓や住居址もあるが、弥生時代後期から庄内式期の遺構がまとまる部分と、庄内式期から布留式期の遺構がまとまる部分とに分かれる傾向があるようである。

庄内式期～布留式期の遺構分布の中心は弥生時代のものよりやや東にある。そして河内橋近くの現大和川左岸付近に方形周溝墓群が成立する。

北西隣の川北遺跡では弥生時代後期～庄内式期の方形周溝墓に代わって集落が成立する。西隣の西大井遺跡でも庄内式期の方形周溝墓と集落が確認できる。国府遺跡では段丘崖直下に布留式期の住居が確認されているので船橋遺跡側に集落が広がっているかもしれない。古墳時代前期の様相は、集落と方形周溝墓群のセットが、近隣の遺跡も含めた範囲で近い距離で散在しているような感じである。

古墳時代前期の周辺の古墳としては、大和川が河内平野に出る手前の左岸丘陵上にある松岳山古墳と、玉手山丘陵上に連綿と前方後円墳が築かれる玉手山古墳群が知られる。

古墳時代中期は、古市古墳群が成立する時期であり、その中の大型前方後円墳で一番船橋遺跡に近いものは市野山古墳（伝允恭陵）で国府遺跡の南西に接し、200mほどしか離れておらず、その周囲には多数の古墳が分布している。

また、古墳時代後期には生駒山地や、石川右岸の大黒・飛鳥丘陵に多数の群集墳が成立し、高井田や玉手山丘陵には横穴墓群も見られる。

しかし、船橋遺跡では古墳時代中期～後期の動向は今一つ明らかでない。河内橋より東側で遺構・遺物の見られる地点が若干ある程度である。ただ、遺物量からは集落の存在した可能性が考えられる。

飛鳥時代になると、生駒西麓と大和川・石川流域は寺院が濃密に分布する地域となる。現大和川河床で発見された礎石建物により推定されている船橋廃寺は、瓦などの遺物から、飛鳥時代の早い時期に創建され、平安時代前半頃まで存続していたものと考えられている。おそらくはその寺院に関連する施設も遺跡内に分布しているであろうと推測される。

古代の船橋遺跡には寺院説の他、河内国府説、河内鋤銭司説、志紀郡衙説、餌香市説などが提示されており、河内国府の候補としては他に国府遺跡・はざみ山遺跡が挙げられている。

遺跡の南端、国府遺跡との境界線に古代官道である大津道（長尾街道）が通っており、南北の交通路と交わる地点でもあるので、寺院以外になんらかの公的施設があった可能性は大きい。遺構としてそれを裏付けるものは確認されていない。むしろ、国府遺跡で土馬が多く出土する事や、はざみ山遺跡で大型の掘立柱建物が多く検出される事の方が注目できる。

平安時代に入ると、船橋遺跡もその周辺もさらに動向がつかみにくくなる。ただ、はざみ山遺跡・北岡遺跡を中心として、律令的土器生産の崩壊から瓦器登場までの間、独自の粗製土器生産が行われ、南河内北部から中河内南部に狭い流通圏を持っていた事が知られる。また、11世紀中葉には源頼信が石川郡に拠点をもち、石川右岸の通法寺に頼信・頼義・義家の源家三代墓が遺存するのが注目できる。

古代にからんで言及しておかなければならない事に条里制地割の問題がある。長瀬川周辺や、現大和川左岸沿いなど一部に地割の乱れる部分はあるが、船橋遺跡内の多くの部分とその周辺には条里制地割が今も良好に遺存している。しかし、今までのところ、遺跡内では正方位を示す耕作痕跡は現大和川左岸部分の10～11世紀のものが最古で、他には中世以降のものしか確認されていない。もちろん、地域としての条里制地割の施行は古代でもさらに古く遡るものと思われるが、遺跡内のある部分ではその地割が敷衍されるのが大幅に遅れた可能性が考えられる。

先述の10～11世紀の耕地区画の横には、敷地を持った建物群が検出されており、集落が成立していたと思われる。同じ位置で12世紀後半の建物群も確認されている。中世集落の成立として評価できる。その立地が比較的新しい微高地上にあると考えれば、遺跡南半部の微高地に集落が散在していたと考えられるかもしれない。



## 第Ⅲ章 調査成果

### 1、基本層序（図5～8）

#### （1）検出状況と基本的地勢

今回の調査区は、大和川の堤防の裾でもあり、また、調査区内に幾つか存在した地下タンク兼用の建物基礎が滞水し、多くの部分が現代耕土の直下から強く還元を受けていた。廃油によると思われる汚れが見られる部分もあり、層の連続性を追いくい状態であった。

また、最初に着手した02-1トレンチ付近が、古土壌の有機物の溶脱が激しく、暗色の度合いが弱かった事もあり、調査時の基本層序の把握に若干の混乱があった。

ただし、最終的には整合性のある基本層序を把握でき、遺構面との対応にも矛盾はないと思われる。

調査区の基盤を成すのは、厚さ2mにも及ぶ砂層である7層である。今回の調査はその上部までとなった。その砂層の上面は調査区西端で北北西から南南東に長軸を持つ微高地を成しており、それが後の時期まで全体の微地形に影響している。

4面までその地勢は比高差を縮めながら維持されるが、4面の最終段階で、東西に長い堀田が南北に並んで造成され、その地形と錯綜するようになる。堀田の間には島島が形成されていたと思われるが、後世の削平が強く、わずかに残る盛り土程度しかその存在を確認する術はない

しかし、堀田と島島は、形を変えながらも、2面時点まで存続していた可能性がある。

そして、ほぼ平坦な耕地が成立するのは1面での事である。

それでは以下、基本層序の各層について述べていきたい。なお、本報告では、土質に関して、擾乱の見られる層に関しては「粘質土・砂質土」の名称を使い、その後主體的粒子と副次的粒子を記載するが、例えば、「シルト～細砂主体、粗砂あり」は、地質学的記載法の「粗砂混じり細砂質シルト」に読み替えられるようになっている。

また、面に関しては、「遺構面」の名称は使用せず、1層の上面を1面というように、基本層序の層の上面を、同一番号の面としている。面的調査は1面・2面・3面・4面・6面で行った。

#### （2）基本層序の土色・土質

0層 盛土がなされ、市街化する直前までの現代耕土である。土色は暗灰N3/0が基本だが、還元の強い部分では暗青灰5B3/1を呈し、酸化が強く、有機分の溶脱の進んだ部分では灰オリーブ5Y5/2～褐灰10YR5/1を呈する。砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、有機分多し。

層厚10～18cmで調査区内にはほぼ水平に残存する。

1層 多くの部分では還元を受け、オリーブ灰10Y5/2～緑灰10G5/1を呈するが、酸化した部分では灰オリーブ5Y5/2、上面付近はにぶい黄褐10YR5/4を呈する。

粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～極粗砂あり、小礫若干あり、管状Fe多し、Mn粒若干あり。

旧耕土であるが、有機分はかなり溶脱している。層厚10～11cmで水平に堆積する。その上面のレベルは調査区全体でほぼT.P.+14mである。なお、調査区東壁南半付近に、この層の上面に洪水砂が遺存しており、0層の起源を示唆する。包含遺物に近世～近代の陶磁器を含み、こんにやく印判の染付けも見られるところから、おおよそ18世紀以降の耕土と考えられる。

2層 基本的には灰7.5Y 5 / 1～灰オリーブ5 Y 5 / 2を呈するが、還元の強い部分では青灰～暗青灰10B G 5 / 1～4 / 1、酸化の強い部分ではいぶい黄褐10Y R 5 / 3を呈する。

粘質土、シルト主体、細砂～粗砂若干あり、炭化物わずかにあり、管状 Fe あり。

有機分の溶脱が進行した旧耕土である。層厚8～14cm。北東部では厚く、上下2層に分かれる部分もある。上面は、比較的平坦だが、西壁付近では層自体が3面の堀田部分にしか遺存しておらず、島畠部分では削平されているため、この層が耕土として機能していた時点で、島畠と堀田が存続していた可能性がある。東側ではほぼ全面に遺存しているが、島畠と堀田の切り合いが、1面からの東西方向溝群に切られていると思われる。ただし土質に、島畠盛土と堀田耕土の区別がつくような顕著な変化はない。

包含遺物は弥生土器・土師器・須恵器が圧倒的に多いが、瓦器・瓦質の羽釜・播り鉢を少量含み、染付けもわずかに見られる事と、3層との関連から、16～18世紀頃の耕土と考えられる。

2-2層 灰N 5 / 0～5 Y 5 / 1を呈する、ラミナのある中砂～粗砂層。その上に青灰10B G 5 / 1～オリーブ灰2.5G Y 5 / 1の細砂～中砂とシルトの互層状ラミナの残る部分もある。

北東部分の3面堀田部分にのみ遺存する洪水堆積層である。植物遺体を含む。2層の原材であると思われる。この層に被覆された3面堀田耕土上面は細かい凹凸があり、直径10～15cmの土塊が散乱してその下の隙間にも砂層が入り込んでいるような状況であった。

包含遺物には少数ながら瓦器椀片が見られる。ミガキが比較的密で、外側にもある事から12世紀頃のものと思われ、磨滅のほとんどない破片もあるが、3層の包含遺物から考えれば、洪水の時期は早くとも15世紀を遡るものではないと考えられる。

3層 便宜上、3-2・3層と比較して述べる時には3-1層とも記述する。

基本的には灰5 Y 4 / 1を呈するが、酸化の強い個所では褐灰10Y R 4 / 1、還元の強いところでは灰N 4 / 0を呈する。粘質土、シルト主体、中砂～極粗砂若干あり、管状 Fe あり、有機分多し。

有機分が多く残り、暗色を呈する旧耕土である。東西方向で見れば、東側はほぼ全面に広がるが、02-2トレンチ東半の半ばで、下面が西へ一段上がり、そこより西側は2層形成時に削平され、4面に掘り込まれた堀田部分にしか残存していない。

東では上面が高い部分と低い部分があり、低い部分は4面の堀田を踏襲する部分が多いので、高い部分は島畠になっていたと思われる。ただし、島畠と堀田の境の多くは1面からの溝によって切られており、02-3-2トレンチの一部でしか、両者の段差は確認されていない。

両者の高低差は10cm前後で、島畠部分の削平はあると思われるが、島畠のほとんどが、耕土と思われる良く攪拌された土壌で構成されており、ブロック土のような盛土のままの層が確認されない事から見て、本来それほど高低差のあるものではなかったであろう。また、両者の土質は、島畠部分に若干砂粒が多い傾向があるものの、さほど差はない。

層厚は10～20cmの部分が多く、削平の少ないと思われる堀田部分の層厚が20cmほどの事が多いので、元々の層厚がそのぐらいであったろうと推測できる。ただ、島畠部分で層厚30cmほどの部分があり、その部分でも中に層境が見られないのがやや疑問に思える。下部にコンポリュートラミナが残る部分もあるが、そこでは下層に3-2層が認められないので、実質は3-2層が、薄く、層境が不明確な状態で残存しているものと考えられる。

層の原材としては、2層より粘性が高い事から、3-2層を中心としていると思われるが、包含遺物や、有機分の多さから、古土壌である4-1層も多く含まれていると思われる。

西

東

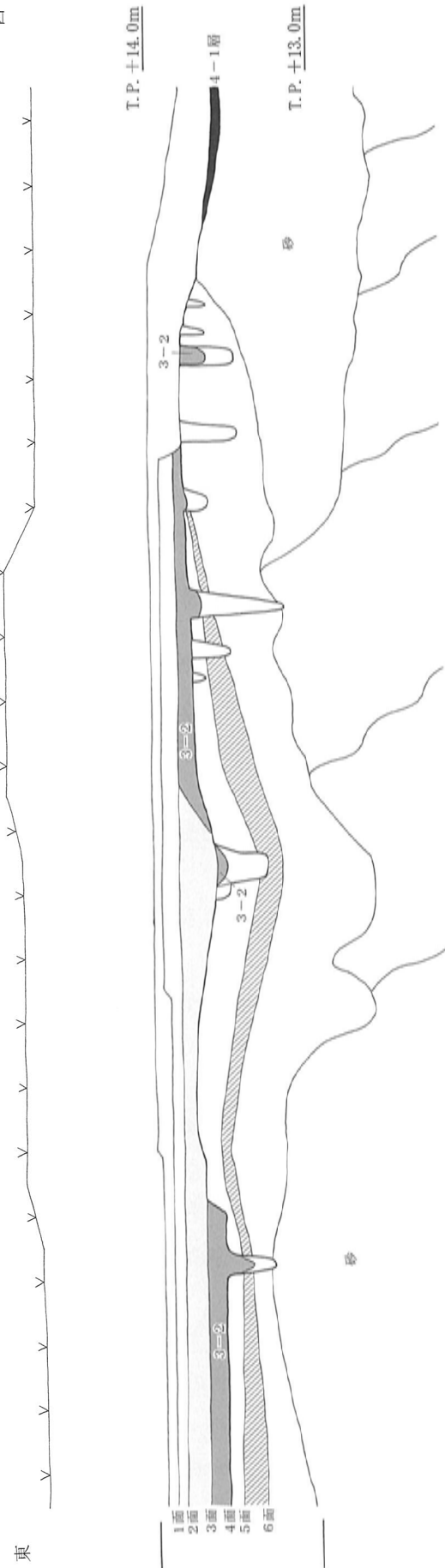
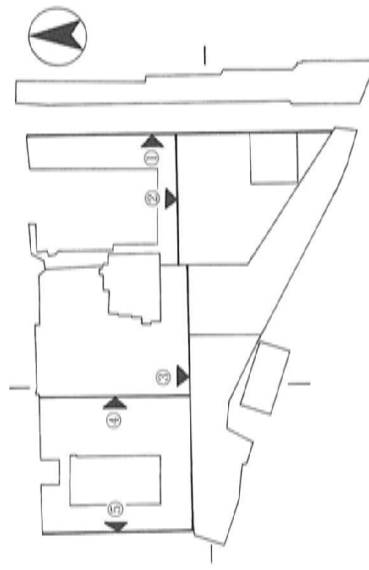
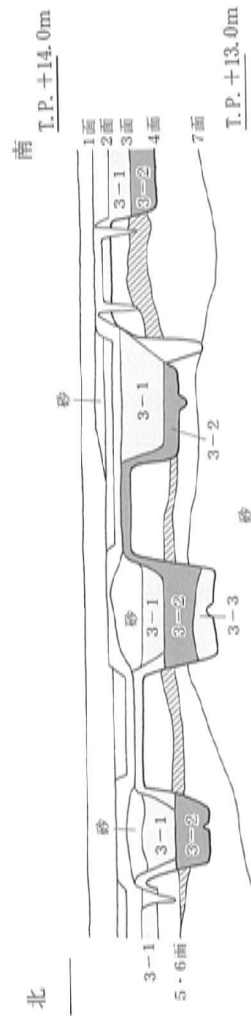


図5 断面様式図及びトレンチ断面位置図 (S=1/1600) (およそS=縦1/40 横1/400)



トレンチ断面位置図

- ①02-1 トレンチ東壁断面 (図6)
- ②02-1 トレンチ東西セクション断面 (図7)
- ③02-2 トレンチ南壁断面 (図7)
- ④02-2 トレンチ中央セクション断面 (図8)
- ⑤02-2 トレンチ西壁断面 (図8)



注、南北断面は調査区内でみられた、島畷・堀田のパターンを一  
図面に合成している



包含遺物には飛鳥時代前期の須恵器・土師器が多く、弥生時代後期の土器も見られる。奈良時代の土器も若干ある。しかし、わずかながら瓦器の椀・甕・羽釜・鉢と燻し瓦が認められる事から、この層が耕土として機能していた時期は13～15世紀頃の事と思われる。

3-2層 灰N4/0を呈するが、やや酸化した部分では灰5Y5/1を呈する。シルト～粘土主体、粗砂わずかにあり、炭化物わずかにあり、コンポリュートラミナが顕著に見られ、その中に下層をフレア状に巻き上げる。

コンポリュートラミナが目立ち、判別しやすい層である。その中に下層を巻き上げているため、下層との層境は細かく激しい凹凸をなす。堀田の部分を中心に広がるが、島島部分にもある程度広がっているため、削平以前はほぼ全面に見られたものと思われる。

7層からの噴砂の亀裂が層の下面に達しているものがあるため、この層のコンポリュートラミナは地震痕跡の可能性が高い。おそらく耕土が滞水状態の時に地震によって揺さぶられたものと考えられる。

しかし、それには疑問な点もある。まず、島島の上にも層の広がりがあり、そこにもコンポリュートラミナが見られる事である。そのような状態になるには島島が冠水するほどの水位であったと考えられ、それは人為的な給水とは考えにくい。洪水による冠水であるとすれば、洪水と地震が立て続けに起こったような珍しい例であるのだろうか。

また、噴砂の亀裂が下面まで達しているのに、噴出した砂の層が見られない事である。この層は現在でも上下の層より締りが悪く、かなり締りの良い4層を割って上昇してきた噴砂がたまたまこの層に突き当たって止まったとは考えにくい。吹き上がった砂が、引き続き揺れ続ける地震によってこの層の中に混ぜられ、霧散していくなどといった状況はありえるのだろうか。

層厚は30cm以上から5cm程度と安定していない。包含遺物はかなり少ないが、おおよそ3層の状況と変わらない。

3-3層 層位的には3-2層の直下に位置し、ブロックを含む盛土と考えられるものと、均質な粘質土の旧耕土らしきものの2種がある。

盛土のものは灰5Y5/1～4/1を呈し、粘質土、シルト～極細砂主体、粗砂多し、炭化物わずかにあり、管状Feあり、4～6層のブロック若干あり。

耕土のものは灰10Y5/1を呈し、シルト主体、粗砂～細砂あり、Fe若干あり。

盛土のものは島島の盛土として存在するものもあり、その部分では4-1層に直接乗っている状態で、調査区で最古段階の島島盛土の可能性が高い。ただ、堀田の最下底部に一定の厚さをもって残存するものもあり、耕作によって攪拌された耕土とは異なるものなので、それが堀田下底部を水平にするための整地土であるのか、それとも他の意味があるのかは確定できない。分布としては調査区西端付近のみである。

耕土のものは堀田部分にのみ残存しており、その場合すべて堀田最下底部に位置する。3-2層と直接上下関係が確認できる部分もあり、堀田と島島が造成された以降、調査区内最古の耕土の可能性が高い。分布するのは調査区西半の堀田部分のみである。

相対的に低い東側に残存しない理由は明らかではないが、3-2層が直接4層を巻き上げているのが見られるので、3-2層成立時に東側には土砂の供給が至らず、引き続き耕土となっており、3-2層と一体化したと思われる。高い西側の方が土砂の供給が多かったわけで、その場合、土砂の供給は調査区より西側からの洪水による可能性が高い。西側に流路が存在した可能性は、下の砂層である7層の状

況とも符合する。

包含遺物はこの層単独で取り上げたものがないので明らかにできないが、おおよそ3層の遺物と同じく、飛鳥時代と弥生時代後期の土器が多かった。

4-1層 暗灰N3/0～黒褐2.5Y3/1を呈する。粘質土、シルト～極細砂主体、粗砂若干あり、炭化物あり、下層の小ブロック下半に若干あり。

現状では調査区西端付近と北辺の02-1トレンチと02-2トレンチの境付近にのみ認められるが、4面遺構のほとんどの埋土にこの層を起源とすると思われる黒色土がある事から、かつては調査区のほぼ全面に広がっていたと推測される。

4-2層上面に形成された古土壌と考えられるが、北辺付近のものは、その部分が低い事と、粗砂が少なく、淘汰の良い層である事から、微高地の土壌が流入した再堆積の可能性もある。

また、下半の小ブロックの多寡に部分的な差があり、土壌化の下方への進行に取り残された下層のブロックと考えるのが自然な箇所もあるが、人為的な擾乱や移動を否定できない箇所もある。

4面の遺構は、断面ではこの層の上面まで切り込みが追えるものもあるが、平面的には上面で明確に検出できるものは少ない。その事もこの層が古土壌である事を傍証していると考えられる。また、層の存在するレベルの差が大きく、一部では堀田部分の底部に残存しているものもある。これは、堀田が掘削される以前にもその部分が微地形での凹部であった事を示唆すると共に、そういった微地形に沿ってこの層が形成されていた事を示し、それもこの層が古土壌である事を傍証する。

包含遺物は、層の残りが悪い事もあって、この層のみに特定できるものはないが、4面で検出された遺構から考えれば、弥生時代後期より以前から、飛鳥時代前半以降にかけて形成され続けたものと考えられる。

4-2層 オリーブ黄5Y6/4～浅黄5Y7/4を呈し、還元の強い部分では緑灰10GY6/1～5/1を呈する。粘質土、シルト主体、細砂多し、中砂～粗砂わずかにあり、管状Feあり。

4面として遺構を検出しているのはこの層の上面である。また、単に4層と言う場合はこの層を指す。

古土壌である4-1層がのる基盤となっている層である。上面で弥生時代後期と飛鳥時代前期の遺構が多数検出される。上部は土壌化が進行し、上層からの粒子の降下が激しく、それに加え、上に3-2層が直接のる部分が多いため、そのコンボリュートラミナに巻き上げられ、その部分の上面は激しい凹凸を成す。

層厚は10～20cm程度の部分が多いが、最大30cmを超える部分もある。また、地形的に最も高い、調査区南西側では後世の削平のためか残存していない。もともとは洪水堆積物と考えられるが、その痕跡は残っていない。

包含遺物は非常に少ないが、若干のサヌカイトの他に、わずかながら弥生時代中期の土器片が見られるのが注目できる。おそらく堆積時期もその頃なのであろう。

5層 場所によって土色の変化が激しいが、基本的には灰7.5Y5/1で、酸化の強い部分にはぶい黄5Y6/4、還元の強い部分は暗緑灰10G4/1を呈する。しかし、東側では灰N4/0と、黒味の強い部分もある。粘質土、シルト主体、細砂～粗砂わずかにあり、炭化物わずかにあり。

かなり有機分が溶脱しているが、古土壌と思われる層である。ただし、東側の低い部分では層内にわずかにラミナの見られる部分もあり、粒子の淘汰も良いので、低湿地的な堆積の可能性が強い。

層厚は10～20cmほどの部分が多いが安定していない。北東が低く、高い南西側では後世の削平で消滅

図6 02-1 tr. 東壁断面 (およそY=35.146~7ライン) (S=縦1/40 横1/200)



表1 図6の02-1tr.東壁断面土色・土質

- 1、暗青灰5B3/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫あり、有機分多し、上面植物遺体あり。0層、盛土直下現代耕土。
- 2、緑灰5G5/1～オリーブ灰10Y6/2粘質土、シルト主体、極粗砂若干あり、粗砂あり、斑状Feあり。1層。
- 3、青灰～暗青灰10BG5/1～4/1粘質土、シルト～粘土主体、細砂あり。2層。
- 4、暗青灰10BG4/1～暗オリーブ灰2.5GY4/1細砂～中砂とシルトの互層、炭化物若干あり。2～2層、砂層堆積直後沈殿か。
- 5、青灰10BG5/1粘質土、シルト主体、細砂若干あり、粗砂わずかにあり。
- 6、灰N5/0～灰白10Y7/1中砂～粗砂、ラミナ・植物遺体あり。2～2層。
- 7、灰5Y4/1年度～シルト、細砂若干あり、炭化物わずかにあり。3層。
- 8、オリーブ灰10Y6/2～青灰10BG5/1粘質土、シルト～細砂主体、粗砂多し、Fe若干あり。0層より古い1面遺構埋土。
- 9、青灰5B5/1～10BG5/1粘質土、シルト主体、極粗砂・炭化物若干あり。
- 10、灰7.5Y5/1砂質土、細砂主体、シルトあり、粗砂・7の小ブロックあり。
- 11、灰5Y5/1～4/1シルト～粘土、極粗砂若干あり、しまり悪し。2～2層。
- 12、灰5Y5/1シルト～粘土、7の不明瞭なブロックあり。
- 13、「灰5Y6/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり。」と「10BG4/1粘質土、シルト～細砂主体、粗砂あり。」のブロックと粗砂。0層耕土時畦畔。
- 14、1のブロックに粗砂多し。0層耕土時坪境畦畔。
- 15、灰～オリーブ灰7.5Y5/1～5/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂若干あり、2・3のブロックあり。坪境溝埋土。
- 16、オリーブ灰5Y6/3中砂～細砂内に、灰5Y5/1シルト、ラミナあり。
- 17、オリーブ灰5GY5/1～灰オリーブ5Y5/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂多し、小礫若干あり、管状Feあり。1層。
- 18、灰10Y4/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫・管状Feあり。1層。
- 19、17と、オリーブ灰2.5GY6/1シルトのブロック。井戸裏込め。
- 20、17・18・7と粗砂のブロック。
- 21、灰5Y4/1粘質土、シルト～極細砂主体、粘土・細砂～中砂若干あり。2層。
- 22、オリーブ灰2.5GY6/1シルト～極細砂あり、斑状Feあり。
- 23、灰5Y4/1シルト～細砂、ラミナあり。21起源の洪水堆積？2～2層。
- 24、20に7のブロック多く入る。
- 25、灰7.5Y6/1砂質土、細砂主体、粗砂～中砂多し、小礫若干あり。シルト若干あり、Feあり。落ち込み埋土（洪水砂転用?）。
- 26、にぶい黄～灰黄2.5Y6/4～6/2粗砂～細砂、ラミナあり、Feあり。
- 27、灰オリーブ5Y5/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～極粗砂多し、小礫若干

- あり、Fe若干あり。0層系。
- 28、オリーブ灰5GY5/1シルト～極細シルト、細砂若干、炭化物わずかにあり。
- 29、3と7のブロック。
- 30、灰N4/0粘質土、シルト～粘土主体、粗砂・炭化物あり。3面遺構埋土。
- 31、灰オリーブ5Y5/2粘質土、シルト～細砂主体、中砂～小礫わずかにあり、炭化物わずかにあり、斑状Feあり。2面時点遺構埋土。
- 32、灰N4/0粘質土、シルト～粘土主体、細砂若干あり。2層。
- 33、灰オリーブ5Y6/2砂質土、細砂～シルト主体、粗砂・管状Feあり。
- 34、灰N4/0～5/0粘土～シルト内に、緑灰10GY6/1シルト～細砂のコンポリュートラミナ、粗砂・炭化物わずかにあり。3～2層。
- 35、緑灰10GY6/1シルト～細砂、部分的にFeあり、34の降下、コンポリュートラミナ状の入り込み多し。4～2層。
- 36、灰N4/0粘土～シルト、上部35（4～1層）の降下・下部37（5層）の巻き上げ・小ブロック多し、有機分多し、炭化物若干あり。5層の二次堆積。
- 37、青灰5BG5/1シルト～粘土、わずかに極細砂あり、土壌化痕跡あり、36の降下若干あり。6層。
- 38、緑灰7.5GY5/1シルト～細砂、ラミナ残る、土壌化痕跡あり。6層。
- 39、緑灰7.5GY5/1～オリーブ灰2.5GY6/1細砂～シルト、一部中砂～粗砂あり、ラミナあり、7層。
- 40、灰白～黄褐10YR7/1～5/6粗砂～極粗砂、小礫あり、ラミナあり、部分的にシルト～細砂あり。砂層上部の水平堆積、7層。
- 41、灰N4/0粘土～シルトに35のブロックあり。
- 42、灰N5/0粘土～シルトに35のぼやけた小ブロックあり。
- 43、「暗灰黄2.5Y5/2粘土～シルト、植物遺体あり。」内に36のブロック多し。
- 44、「黄灰2.5Y4/1（細粒化した植物遺体）」と灰10Y5/1シルト～粘土のラミナ。
- 45、「灰7.5Y5/1シルト～極細シルト、植物遺体あり。」内に、35・36・37のブロック多し。
- 46、36内に、37の小ブロックあり。
- 47、20内に、34のブロックあり。
- 48、18内に、21・7のブロックあり。
- 49、7・34・35のブロック。
- 50、7・34のブロック。
- 51、灰10Y4/1シルト～粘土、有機分多し、34・37のブロックと粗砂若干あり。
- 52、31・34・37のブロック。

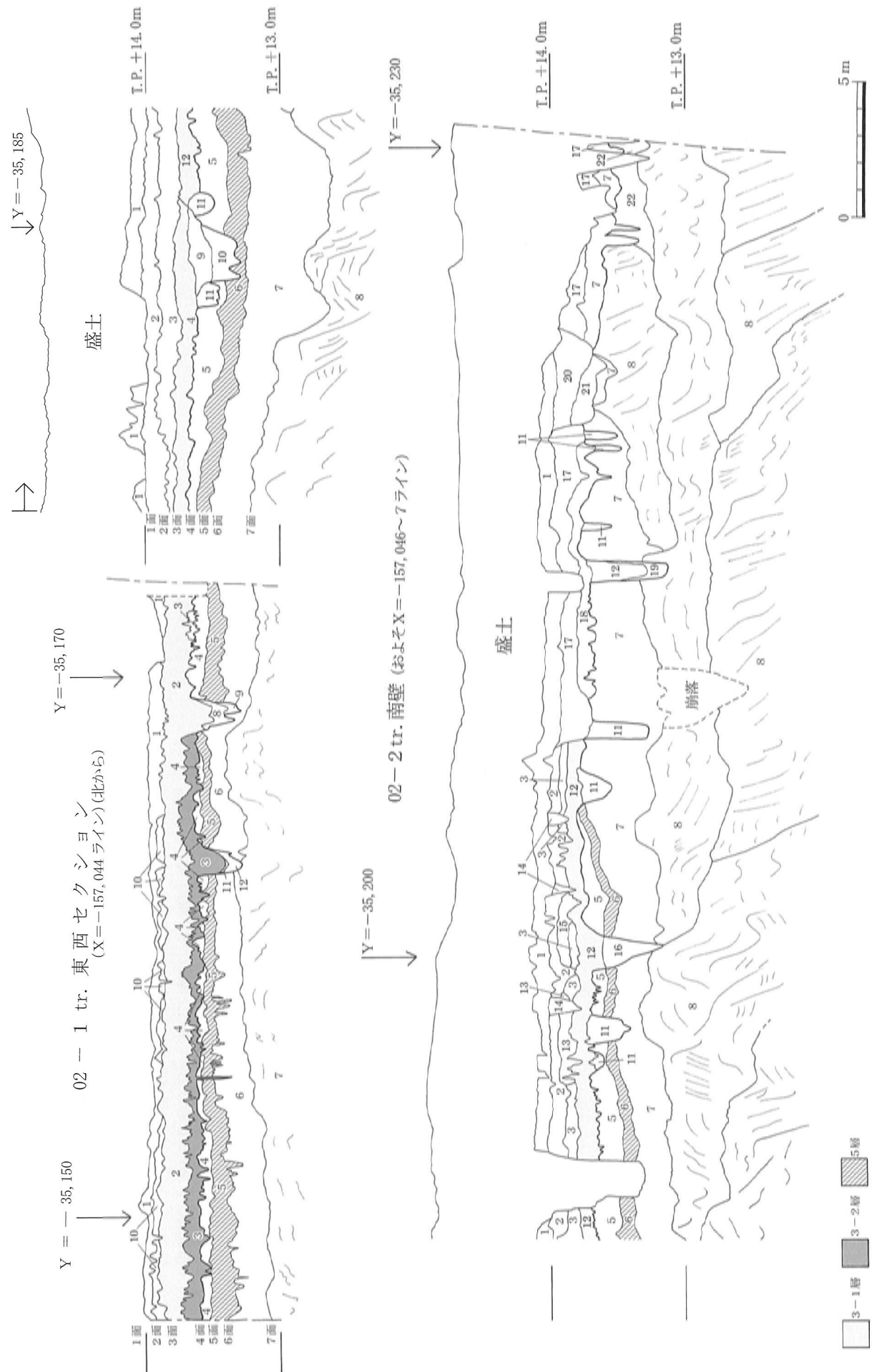


図7 02-1 tr. 東西セクション・02-2 tr. 南壁断面 (S=縦1/40 横1/200)



表2 図7の土色・土質

- 02-1 tr. 東西セクシオン断面土色・土質
- 1、緑灰10G 5 / 1 ~ 灰10Y 6 / 1 (Fe多い部分にはばい黄褐10Y R 5 / 4) 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～小礫多し、管状・斑状Feあり。1層。
  - 2、黄灰2.5Y 5 / 1 (西側酸化強く、褐灰10Y R 4 / 1を呈す) 粘質土、シルト主体、粗砂若干あり、炭化物わずかにあり、有機分多し。古土壌、3層。注、この断面位置では3面の畦畔を縦に切っている、3層は平均的厚さの2倍以上ある。
  - 3、灰5Y 5 / 1 ~ 10Y 5 / 1シルト～粘土、わずかに炭化物あり、管状Feあり。3・4層間の水成層、3-2層。
  - 4、暗青灰～青灰10BG 4 / 1 ~ 5 / 1シルト、上からのコンポリュートラミナによる巻き上げあり。
  - 5、暗緑灰10G 4 / 1 ~ 灰7.5Y 5 / 1シルト～極細砂、炭化物わずかにあり、部分的にラミナ残る。低湿地水成層的な5層。
  - 6、青灰10BG 5 / 1シルト、上層からの粘土の降下・下層からの細砂の巻き上げあり。6層。
  - 7、青灰5BG 5 / 1 ~ 10BG 5 / 1シルト～細砂、ラミナあり、部分的にFeあり、上面粘土の降下と、わずかにFeの沈着あり、土壌化痕跡あり。7層上部。
  - 8、灰N 4 / 0シルト内に、4・5のぼやけたブロックあり、炭化物わずかにあり。4面溝埋土。
  - 9、灰N 4 / 0極細シルト～シルト内に、5・6のブロックあり、カルシウムの結核あり。溝埋土。
  - 10、灰7.5Y 5 / 1粘質土、シルト主体、細砂あり、部分的に粗砂若干あり。2層。
  - 11、オリーブ灰2.5GY 5 / 1シルト～極細シルト内に、分解した植物遺体ラミナ状に入る。
  - 12、灰10Y 5 / 1 ~ 4 / 1シルト、6の小ブロック・分解した植物遺体あり。
- 02-2 tr. 南壁断面土色・土質
- 1、暗灰N 3 / 0 ~ 灰オリーブ5Y 5 / 2砂質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり。現代耕土、0層。
  - 2、オリーブ灰10Y 5 / 2 ~ 緑灰10G 5 / 1粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～極粗砂あり。1層。
  - 3、灰オリーブ5Y 5 / 2 ~ 灰N 4 / 0粘質土、シルト主体、粗砂あり、わずかに炭化物あり。2層。
  - 4、灰N 4 / 0粘質土、シルト主体、粗砂わずかにあり、5をコンポリュートラミナ状に巻き上げる。3層(3-2層?)。

- 5、緑灰7.5GY 6 / 1 ~ 浅黄5Y 7 / 3粘質土、シルト主体、極細砂～細砂多し、中砂わずかにあり、上部4のコンポリュートラミナ状の降下多し。4-2層。
- 6、オリーブ灰10Y 5 / 2 ~ 灰7.5Y 5 / 1粘質土、シルト主体、極細砂あり、中砂若干あり、Mn斑多し。古土壌、5層。
- 7、オリーブ灰10Y 5 / 2 ~ 緑灰5G 5 / 1粘質土、シルト主体、下部細砂～中砂多し、上部Mn斑多く土壌化激しい、ラミナなし。6層。
- 8、オリーブ灰5Y 6 / 3 ~ 暗緑灰5B 4 / 1粗砂～中砂、部分的に細砂～シルトあり、Fe若干あり、ラミナあり。7層。
- 9、灰5Y 4 / 1シルト内に、5のぼやけた小ブロックあり、粗砂若干あり、炭化物若干あり。人為的埋土、3-736溝埋土。
- 10、灰7.5Y 4 / 1シルト内に、5のぼやけた小ブロック若干あり、炭化物若干あり、粗砂わずかにあり。3-736溝埋土。
- 11、灰5Y 5 / 1シルト、5のぼやけた小ブロック若干あり。4面溝埋土。
- 12、灰N 4 / 0シルト、中砂～粗砂わずかにあり、下部に5のコンポリュートラミナ状の巻き上げ若干あり。3層(下部に薄く3-2層残るか)。
- 13、2内に3のブロック。1層系か。
- 14、2内に、3・12のブロック若干あり。
- 15、灰5Y 4 / 1 ~ N 4 / 0粘質土、シルト主体、細砂～極粗砂あり、小礫若干あり、炭化物若干あり。1層系?
- 16、暗オリーブ灰2.5GY 4 / 1 ~ 緑灰10GY 5 / 1粘質土、シルト主体、細砂若干あり、粗砂・炭化物わずかにあり。3-447溝埋土。
- 17、黄灰2.5Y 4 / 1粘質土、シルト～細砂主体、粗砂あり、有機分多し、2のブロックあり。0層系。
- 18、17に7のブロックあり。0層系。
- 19、暗灰N 3 / 0シルト～極細シルト、ラミナあり。
- 20、17に粗砂多し。
- 21、18に粗砂多し。
- 22、緑灰10G 6 / 1細砂、粗砂わずかに降下、シルト若干あり、ラミナなし。7層系。



図8 02-2 tr. 西壁・中央セクション断面 (S=縦1/40 横1/200)

表3 図8の土色・土質

- 02-2 tr. 西壁断面土色・土質  
 1、黄灰2.5Y 4/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～極粗砂あり。0層。  
 2、灰N 4/0シルト～細砂と、灰オリーブ7.5Y 5/2中砂の互層状ラミナ、Feあり。  
 3、中～大礫間に粗砂～小礫あり。暗渠埋土。  
 4、1内に7・8のプロック若干あり。  
 5、灰N 4/0粘質土、シルト主体、粗砂あり内に、8のプロックあり。  
 6、灰10Y 5/1～4/1砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂多し。1層。  
 7、暗灰N 3/0～黒褐2.5Y 3/1粘質土、シルト～極細砂主体、粗砂若干あり、炭化物あり、8の小プロック若干あり。耕土か？4-1層。  
 8、緑灰10GY 6/1～5/1シルト～極細砂、粗砂・黒色粘土の降下あり。6層。  
 9、緑灰5G 6/1細砂～シルト、部分的に斑状Feあり、ラミナ残存。6層。  
 10、オリーブ黄5Y 6/4粗砂～極粗砂、ラミナあり、Fe若干あり。7層。  
 11、8のプロック間に7あり。4面遺構埋土。  
 12、灰10Y 4/1シルト内に、粗砂・15のプロックあり、炭化物わずかにあり。  
 13、灰7.5Y 5/1粘質土、シルト～極細砂主体、粗砂・炭化物若干あり。2層。  
 14、灰5Y 5/1～4/1粘質土、シルト～極細砂主体、粗砂～中砂わずかにあり、炭化物わずかにあり、管状Feあり、13に良く似る。3層。  
 15、14内に8のプロック若干あり、14より粗砂多し。3-3層。  
 16、粗砂～小礫、1の降下あり。暗渠埋土。  
 17、1・6・13のプロック間に粗砂～極粗砂ラミナ状に入る。  
 18、灰オリーブ7.5Y 5/2砂質土、細砂～シルト主体、極粗砂～中砂多し。  
 19、浅黄5Y 7/4シルト、上層の降下若干あり、管状Feあり。4-2層。  
 20、灰5Y 5/1シルト～粘土、8の小プロックあり、炭化物わずかにあり。5層。  
 21、6とほぼ同じ、やや粗砂多し。  
 22、灰7.5Y 5/1シルト、粗砂わずかにあり、下半7の小プロック。3-3層。  
 23、1内に6・12・22のプロック。  
 24、7内に19・8のプロック。4面遺構埋土。  
 25、オリーブ黒5Y 3/1粘質土、シルト～粘土主体、極粗砂若干・炭化物わずかにあり、斑状Fe・Mn粒あり、コンポリエートラミナ残る。3-2層。  
 26、7・22・25のプロック。3-3層。  
 27、7・8・15のプロック。24に似るが3面相当遺構埋土か。  
 28、12に14・15の混濁。  
 29、緑灰7.5GY 6/1シルト～細砂内に粗砂非常に多し。5層。  
 30、灰5Y 4/1粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干・管状Feあり。4面遺構。

02-2 tr. 中央セクション断面土色・土質

- 1、褐灰10Y R 5/1 砂質土、シルト～細砂主体、粗砂あり、Feあり。現代耕土、0層。  
 2、灰7.5Y 5/1粘質土、シルト～極細砂主体、粗砂～極粗砂あり、小礫若干あり、管状Fe多し。1層。  
 3、灰5Y 5/1粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、管状Feあり。2層。  
 4、灰5Y 4/1粘質土、シルト主体、粗砂～極粗砂あり、感情Fe若干あり。3層。  
 5、オリーブ黄5Y 6/4粘質土、シルト主体、細砂あり、粗砂わずかにあり、Feあり、管状Fe若干あり。4-2層。  
 6、灰オリーブ7.5Y 5/2粘質土、シルト主体、細砂～粗砂若干あり。古土壌？5層。  
 7、灰7.5Y 5/1粘質土、シルト～細砂主体、下部中砂～粗砂多し、Fe若干あり。6層。  
 8、灰オリーブ7.5Y 6/2～黄褐2.5Y 5/6粗砂～中砂、小礫あり、ラミナあり、部分的にFeあり。7層。  
 9、灰5Y 5/1粘質土、シルト主体、粗砂若干あり、5のコンポリエートラミナわずかに入る。3-2層。  
 10、灰10Y 5/1粘質土、シルト主体、細砂あり、粗砂若干あり、Feわずかにあり。3-3層。  
 11、5に同じ、但し色は緑灰10GY 5/1。4-2層。  
 12、6に同じ、但し色は暗オリーブ灰5GY 4/1。5層。  
 13、7に同じ、但し色は緑灰7.5GY 5/1。6層。  
 14、2内に、灰7.5Y 6/1シルトと灰5Y 4/1～5/1シルト～細砂のプロックあり。  
 15、灰5Y 5/1粘質土、シルト主体、炭化物あり、粗砂若干あり。1面遺構埋土。  
 16、灰7.5Y 6/1粘質土、シルト主体、中砂～粗砂若干あり、炭化物わずかにあり。  
 17、灰オリーブ7.5Y 5/2粘質土、シルト主体、中砂～粗砂若干あり、炭化物わずかにあり。4面3-447溝埋土。  
 18、灰10Y 4/1シルト、炭化物わずかにあり。4面3-447溝埋土。  
 19、2内に明黄褐2.5Y 6/6粗砂～中砂のプロックあり。  
 20、黄灰2.5Y 6/1粗砂～極粗砂。  
 21、2に同じ、ただし土色は灰黄褐10Y R 6/2。  
 22、オリーブ灰2.5GY 5/1粘質土、粗砂～小礫あり。3層系。  
 24、灰オリーブ7.5Y 5/2シルトのプロック間に25。4面遺構埋土。  
 25、灰N 4/0シルト内に5のコンポリエートラミナ。3-2層

している部分がある。

6面で検出された、縄文時代晩期壺形土器出土の土坑などは本来この層の上面から切りこんでいたと思われる。また、同じ時期の浅鉢も出土しており、この層は縄文時代晩期頃に形成されたと考えられる。

6層 青灰10BG5/1～緑灰7.5GY5/1を呈し、一部酸化したところでは、上部がオリーブ黄5Y6/4を呈する。上から下へ、シルト～細砂と、級化構造が良く残る。上から土壌化が進行し、粘土・粗砂の降下が激しい。下部は部分的にラミナが残る。

断面で上下2層に別れる部分もある事を確認しているが、その間の面の連続性は不明である。ただ、下層の上面にもわずかに土壌化の痕跡があるので、一定期間地表であったと思われる。

洪水堆積層であるが、層厚は平均30cm強、部分的には60cmを超える。下面に数カ所凹部がみられるのは、堆積時に7層上面を浸蝕したものであろう。

包含遺物は少なく、数点のサヌカイトと、磨滅した土器片が見られるのみである。

7層 粗砂を中心とした砂層の集合体で、全ての層にラミナが見られる。全体の構造を見ると、調査区内で一番古い堆積単位は、東側にあり、西に急激に落ちていく自然堤防状の砂層で、その西側に次々と西側に落ちる砂層が形成されていく。これは、流路が西へ移動していく過程を示していると考えられる。

その後、やや低い西側の上に、水平な堆積が最低でも2回重なり、最終的には西が東より高くなる。これは、西へ移動した流路からの洪水堆積と考えられる。そして、低くなった東側に細砂～シルト層が堆積する。ラミナがあり、洪水堆積と思われる。

こうして形成された西高東低の微地形は後世まで引き継がれる。調査区外西側へ移動したと推測される流路の影響は、先述したとおり、3-2層の堆積にもあった可能性がある。

遺物は、上方の水平堆積の砂層から出土し、下層からは確認されない。少数のサヌカイトと縄文晩期の土器片である。土器は磨滅の激しいものが多いが、磨滅していないものもあるのが注目できる。

この砂層は以前の調査で厚さが2mほどあるのが確認されているが、下部と下面が無遺物であったので、今回は遺物を包含しているこの層の上半までで調査を留めた。

### (3) 小結

船橋遺跡は、大阪平野の中で、沖積平野面扇状地帯に位置する。今回の調査地点で地形の基盤を成していた7層とした砂層群は、上面が縄文時代晩期であり、遺物をほとんど含まない事から、高橋学の言う(2003)ステージ3の砂層である可能性が強い。ならば、その下面は縄文時代後期相当の面であると考えられる。沖積上部砂層の上部である。

また、大和川と石川の合流点に近い位置にあるのにもかかわらず、4面以降の堆積が少ないのは、ステージ5の「扇状地帯を中心とする、河床低下による段丘化」と符合する、となれば、船橋遺跡は完新世段丘面Iに立地している事となる。それによる、給水の困難さが、段差が小さく洪水堆積物の処理とは考えにくい島畠と堀田の並立、という耕地区画に反映している可能性はある(3面小結参照)。

やや小さい視点から見ると、調査地点は、大和川と石川の合流点北西側に形成され船橋廃寺などがのる大きな微高地の西端に、縄文時代晩期に新たに附加されたシュートバーに位置すると考えられる。

調査区東側の低地は、旧来の微高地との接点に形成された後背湿地、西側の高まりはシュートバーの稜線と思われる。その意味で今回の調査で検出された弥生時代後期の遺構・遺物は微高地上各所で検出されている同時代の遺構と、飛鳥時代のものは、微高地上で最適地を占めているであろう船橋廃寺との関係が考えられる。

## 2、1・2面（図9）

### （1）概観

調査開始時の02-1トレンチにおいては、現代耕土（0層）の直下である1面から調査を行ったが、その結果、1面は江戸時代に遡る可能性は少なく、2面も江戸時代後半を中心とした時期であり、どちらも耕作関連の遺構しかない事が判明した。

そのため、それ以降、他のトレンチでは、2面まで機械掘削し、そこで検出された1・2面の遺構を、下層と遺物を分別する目的も含めて人力掘削し調査する事とした。

1面は全体に極めて平坦で、検出された段差などはない。市街化以前の地図を見れば、02-3-1トレンチの西に現在も残る水路が付近に遺存している条里制地割の坪境にあたり、それより西の調査区はほぼ一坪の中に納まっている。西部分では東西に長い耕地区画が2枚あり、その区画境が調査区のほぼ中央を東西に貫いているはずであるが、1面でもその痕跡は認められない。

2面では南辺付近、大和川堤防裾に近い部分で段差が検出され、断面から、鳥畠と堀田が存在した可能性が指摘できるが、1層耕土時の削平と1面からの遺構のため、堀田らしき段差が部分的に検出されたのみで、平面的な全体像は不明である。ただ、1面よりは細かい耕地区画があったと思われる。

### （2）1面の遺構

1面の遺構で主なものは平行して走る直線的な溝群と暗渠である。

溝群は幅1.2～0.8m、深さ0.3～0.5mほどの溝が、大体2～4mほどの間隔で並ぶ。条里制地割の坪境をはさんで東の02-3-1トレンチでは南北方向に走るが、西の他のトレンチでは東西方向である。

断面は逆台形、埋土は単一で、1層より粘質で暗色を示すが0層とは異なる。

一坪幅を通して伸びるものが多く、暗渠で、これらの溝を切るものが多い事から、0層を耕土とした耕地の造成時の溝かと推測される。

暗渠は、調査区南西付近、北辺中央付近などに多く、中～大礫を入れた石詰暗渠や真砂と思われる砂を詰めたものなどが見られる。幅は20～15cmほど、深いものは30cmほどの深さのものもある。

石詰暗渠には、木製の板や、瓦片などで蓋をしたものや、底部に竹を入れたものなどがあつた。砂詰めものは相対的に浅く、石詰暗渠を切るものが多い。また、方向性は、切り合いで見ると、正方位を向くものが古く、それ以外の方向のものが新しい傾向がある。

おそらくは、耕地の中で水はけの悪い部分に、何回かにわたって暗渠を追加していったのであろう。

02-3-1トレンチと同じ坪で、調査区の東に位置する（高堤2-2）の調査では、同じ面で桶に竹筒をつないだ埋設水利施設が検出されたが、今回の調査では検出されなかった。ただ、02-2トレンチ東半の北側で、1辺1mほどの方形の土坑で、中に円形の筒の痕跡のあるものがあつた。上面に桶材の可能性のある板を敷いて蓋をしており、底部から鉄製の籠が出土した。深さは60cmほど。

02-3-1トレンチ南端では南北19m、東西8mほどの長方形の溜め池を検出した。地元の人の話によれば、昭和30年代まで残っていたとの事である。二段にテラスを作り、その肩は杭を打ち、板材の横木を渡して土留めしている。

上半は長さ1m前後の礫が多数充填されていたため機械掘削を行ったが、埋土下半は築造時に近い時期の堆積層がないか見るため一部人力で掘り下げた。結果としては地表から2m強掘り下げても底面が確認できず、湧水が激しくなったため掘削を中止した。その時点の最下部でも近代以降の遺物を含む。

7層を深く掘り込み、現在の地下水位以下まで達している。

なお、02-1トレンチ南半東壁付近でのみ、0層と1層の間に砂層の広がりを確認している。調査区内での最新の洪水堆積物であり、0層成立の契機となる洪水があった可能性を示唆する。

### (3) 2面の遺構

2面の遺構の主なものは堀田と鋤溝である。

島島は1層が耕土である時点で削平されているため、堀田との段差が検出されたのはわずかにすぎない。また、堀田の肩部で堀田耕土の切り込みのみが検出されたものも若干ある。

また、3-104堀田・4-261堀田のように、坪の東西幅の3分の1に満たない長さで終わる堀田もあるため、調査区全体での景観を復元するのは困難である。

しかし、02-1トレンチ東壁断面(図6)では島島と堀田が交互に並んでいた事が考えられ、島島が削平されている事から、鋤溝の残る部分は堀田であった可能性が高いと考えられる。

それらの要素をふまえ、堀田の部分で復元しても、西側の坪でもその面積は全体の半分よりかなり狭く、島島と堀田が全体でほぼ同じ面積となる3面までの景観からは変化がある。また、3面の堀田と位置が大きくずれるものもあり、02-1トレンチ北東部では、3面で堀田であった部分が、そこに流入した洪水砂(図6の6)を基部として残して、2面時点では島島になった可能性が断面から考えられる。

また、02-3-1トレンチで唯一検出された4-021堀田が、1面も3面も区画や溝の主な方向性が南北であるにもかかわらず、東西に伸びるのが異質な感じを受ける。

2面では、断面や平面で、7層から地割れの中を上昇した噴砂の痕が幾つか確認されている。その中で一番大きなものは3-056井戸を破壊していた。その噴砂の中で、4面より下の部分で染め付けを含む陶磁器片が出土している。7層内に達する3-056井戸に近い位置ではあるが、基本層序の包含遺物としては2層より上のものであるはずで、噴砂から遺物が出土するのまれな事である。

### (4) 遺物

1・2面の遺構、および1・2層は合わせて10コンテナを超える遺物が出土しているが、そのほとんどは4面の遺構を削平した際に遊離したと思われる土師器・須恵器・弥生土器の細片である。また、1面の遺構内には近現代の遺物も多い。ここでは各面・層の帰属時期を示すものや注目される遺物を取り上げたい。(図10-1~5・20・23~24)

1・2は1面4-003溝出土。1は染め付け碗。本業瀬戸端反碗で、高台端部から底部の半径1.4cmの範囲で釉を剥ぎ取る。本業瀬戸が近畿地方に広く流通するのは19世紀後半からと考えられている。

2は焼き焼きの軒丸瓦の瓦當片である。胎土は灰白5Y7/1を呈し、石英・長石を含む。表面にキラコと思われる白雲母が多く附着する。巴文の尾は長く頭は丸い、周囲の珠文は16個に復元できる。

巴文の頭の形などから、室町時代後半16世紀後葉以降のものと思われる。

20は2面3-233溝から出土した砂岩製砥石である。図右側の端面は平坦に作るがややざらつく。左の端面は割れ面か、凹凸があり、面取りはない。他の4面は滑らかだが、幅広の表裏2面が磨滅が激しい、片面には幅1mm強の条痕が残る。

3~5は2層から出土した。3は白磁の紅猪口である。外面は上半部のみ釉がかかる。

4は瀬戸美濃の瓶子口縁である。胎土は浅黄橙10YR8/3で砂粒は見えない。灰白2.5Y8/1の釉が外面と、内面は口縁から1.5cm下までかかる。

5は染め付け鉢片である。中国漳州窯のものと思われる。高台端部のみ釉剥ぎ取り。

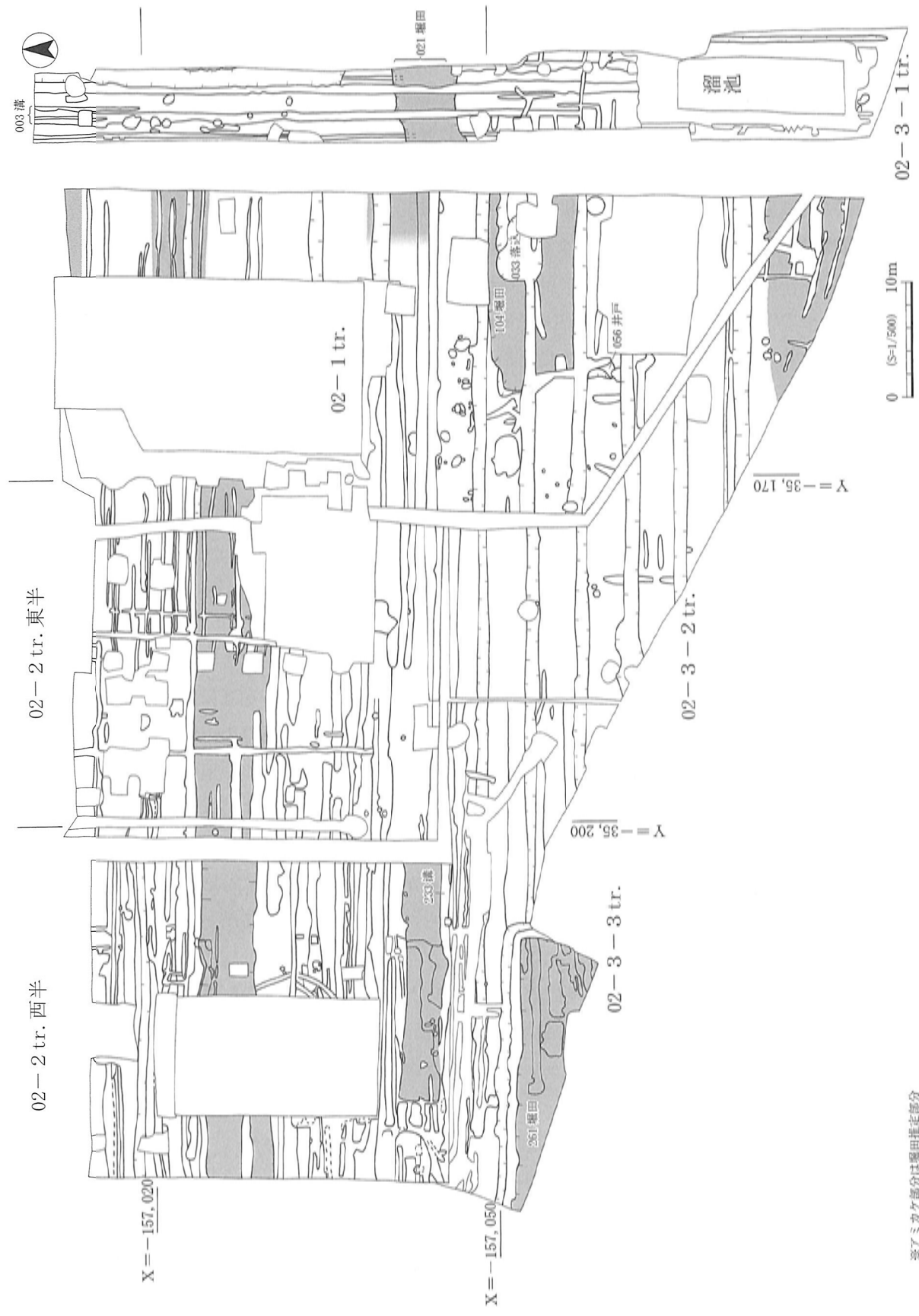


図9 1・2面全体図

※アミカケ部分は墨田推定部分

23は1層から出土した元祐通寶である。径2.4cm、厚さ0.8～9mm。文字が鮮明で流麗であるので偽銭である可能性は低いと思われる。「元祐」は北宋の年号でA, D, 1086～93年。

24は2層から出土した寛永通寶である。径2.4cm、厚さ0.8～9mm。

### (5) 小結

1・2面は各々旧耕土の床面でもあり上面でもある事から、その時期を示す事が難しいが、1面を床面として0層が耕土として成立するのが19世紀後半以降であり、2層が17世紀寛永年間以降の時期まで耕土として機能していたというのが一つの定点であろう。

とすれば、2面を床面として1層が耕土であったのは18世紀頃と言える。しかし、2面で検出された島島・堀田は2層を耕土とする時のものであるため、それ以前の遺構である。つまり、島島と堀田の併存という景観がなくなり、耕地が非常に平坦な形態になるのは、18世紀初頭前後の頃と推測できる。

ならば、その遠因となったものは、1704(宝永元)年の大和川付け替えであった可能性が高い。

大和川付け替えにより、その新河道の堤防沿いの土地は「悪水溜まり」、排水不良の土地になったと言われる。船橋遺跡01-2の調査で検出された埋設水利施設や、今回の調査で検出された暗渠は、そういった排水不良による障害を改善しようとする努力と思われる。

2面の島島・堀田は、後述する3面の景観を継承するとはいえ、その配置をかなりの部分で変えているところに特徴がある。それは2-2層(図6の6)の洪水砂が示すように洪水を契機としたためと考えられる。その時期と背景に関しては、次節において考えたい。

## 3、3面(図11)

### (1) 概観

3面は02-3-1トレンチ以外は東西方向に長い島島と堀田が、坪内に交互に並ぶ景観を呈す。ただし、調査区北端の堀田である3-092堀田の幅が不安定なのと、4-187島島のみが東端まで伸びず、その並びの東側は3-104堀田となるのが例外的である。3-104堀田は隣接する堀田より一段低い。

02-3-1トレンチは南北方向の溝・鋤溝が見られ、その耕作方向を示すのみで顕著な段差はない。

### (2) 遺構

島島 島島の肩部での幅は部分的には4.7～7.4mを測るが、おおよそ5～6mほどが平均的な幅である。1・2面からの溝に切られる事や、削平で不明な部分もあるが、全ての島島が上面の南北両肩に溝が走っていたと思われる。

比較的削平が少なく、島島耕土らしき層が残存していた4-105島島・108堀田の断面(図12)で見ると、両側の溝の幅は0.6～1mほど、深さは20cm前後である。断面形は皿型か、逆三角形が多い。

溝から島島の肩までは若干の距離があき、ここに島島耕土と同じ土で畦畔が築かれていた可能性が高い。盛土は4面が高い部分はそのまま残し、それを補うように4層のブロックを含む土を盛る。その基部に洪水砂などの砂層は皆無であり、盛土自体も砂粒は少ない(図6・8)。

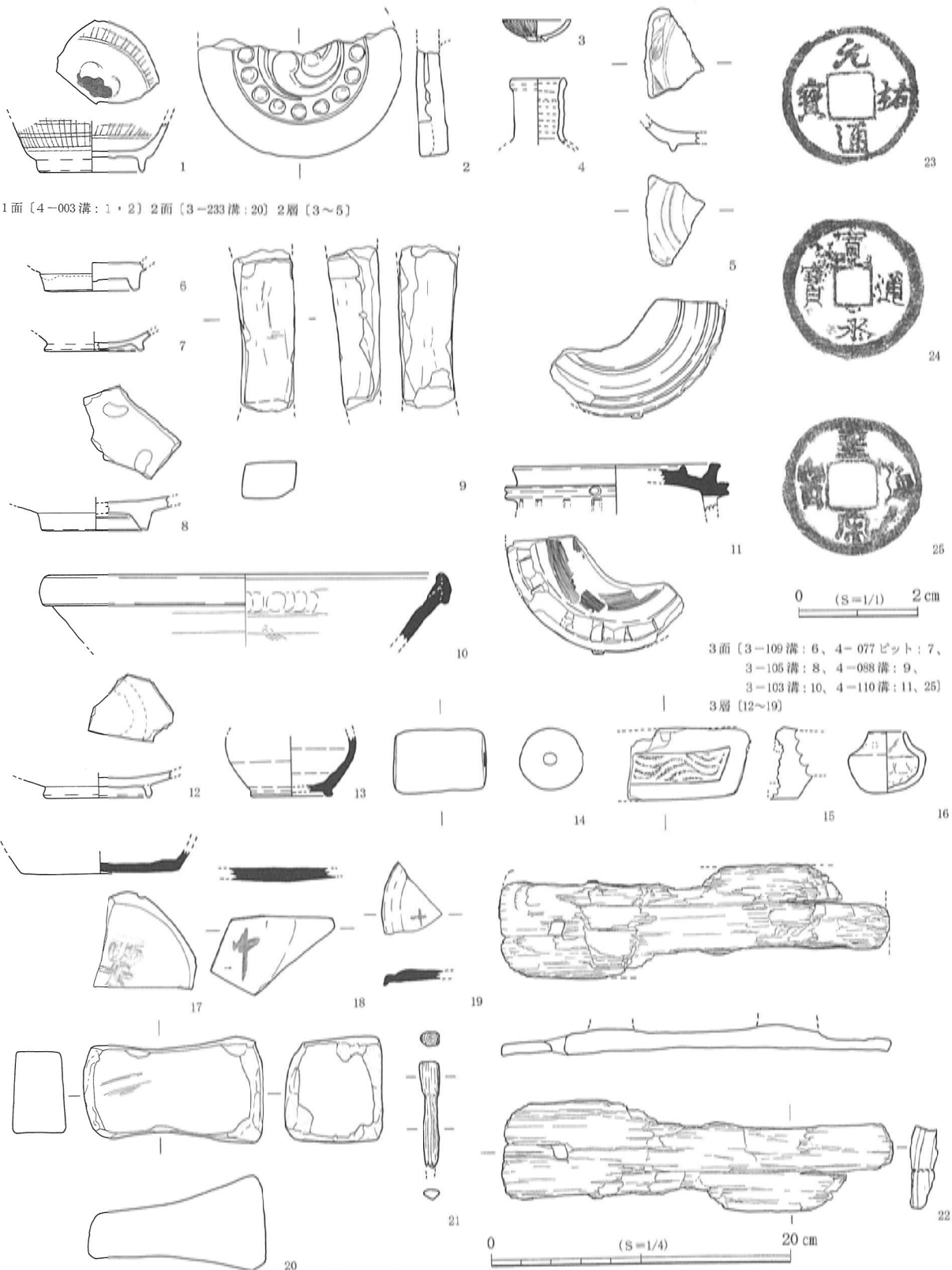
耕土は堀田の耕土より粗砂が若干多く、酸化も強いが、有機分に富む。

調査区の北側では両側の溝の間に平行する溝があり、畑の畝立てがあった可能性があらう。

坪境とのつながり方は不明であるが、島島両側の溝が、一方の溝底のレベルが東に低くなっている場合、もう一方は反対に西が低い場合が多い。

この事は、東西どちらかの坪境に水路が通り、それに島島の溝がつながり、一方が給水、一方が排水





1面〔4-003溝: 1・2〕2面〔3-233溝: 20〕2層〔3~5〕

3面〔3-109溝: 6、4-077ビット: 7、  
3-105溝: 8、4-098溝: 9、  
3-103溝: 10、4-110溝: 11、25〕  
3層〔12~19〕

4面〔3-141堀田: 21、4-209ビット: 22〕銭貨〔1層: 23、2層: 24〕

図10 中～近世遺構・包含層出土遺物

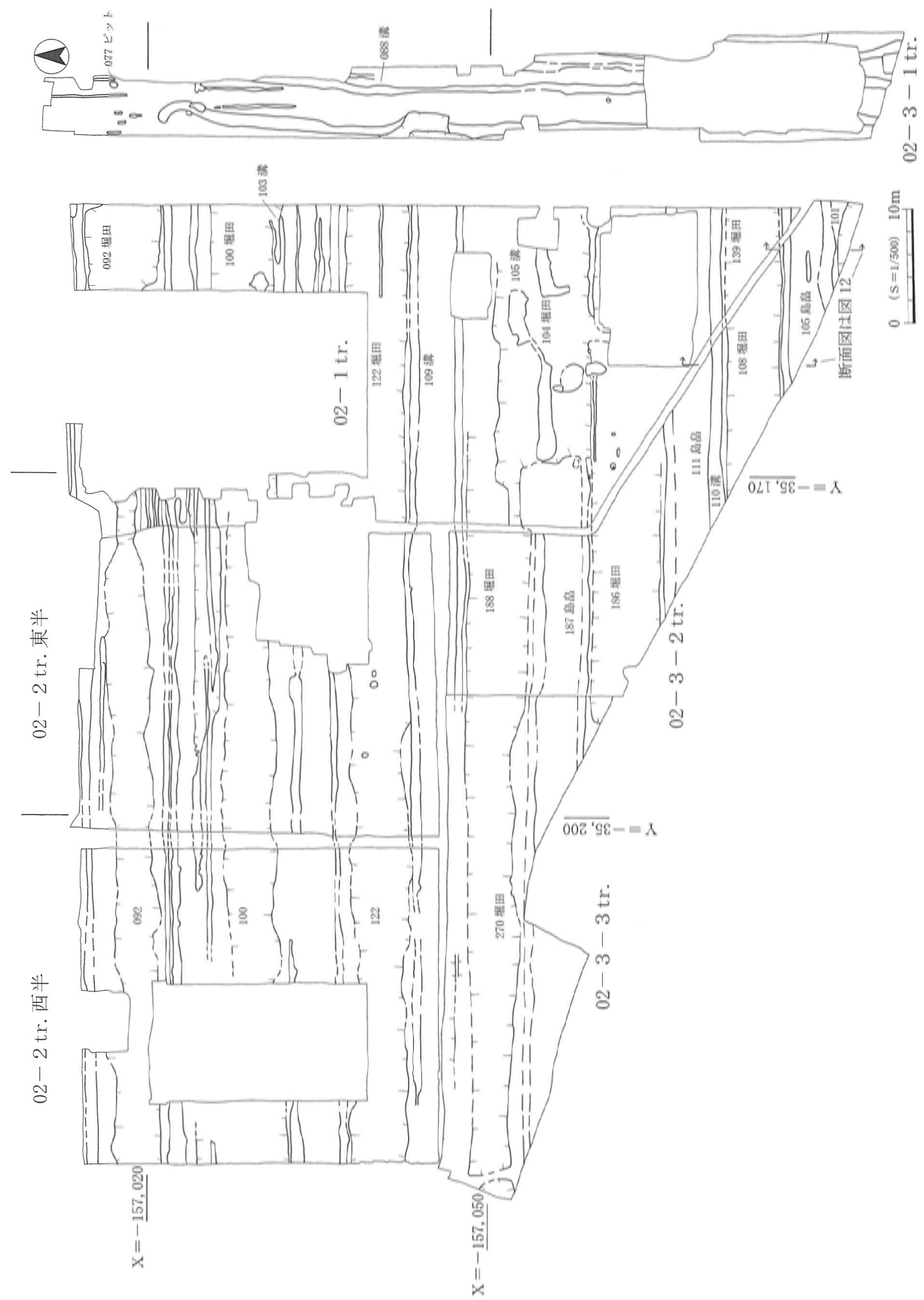
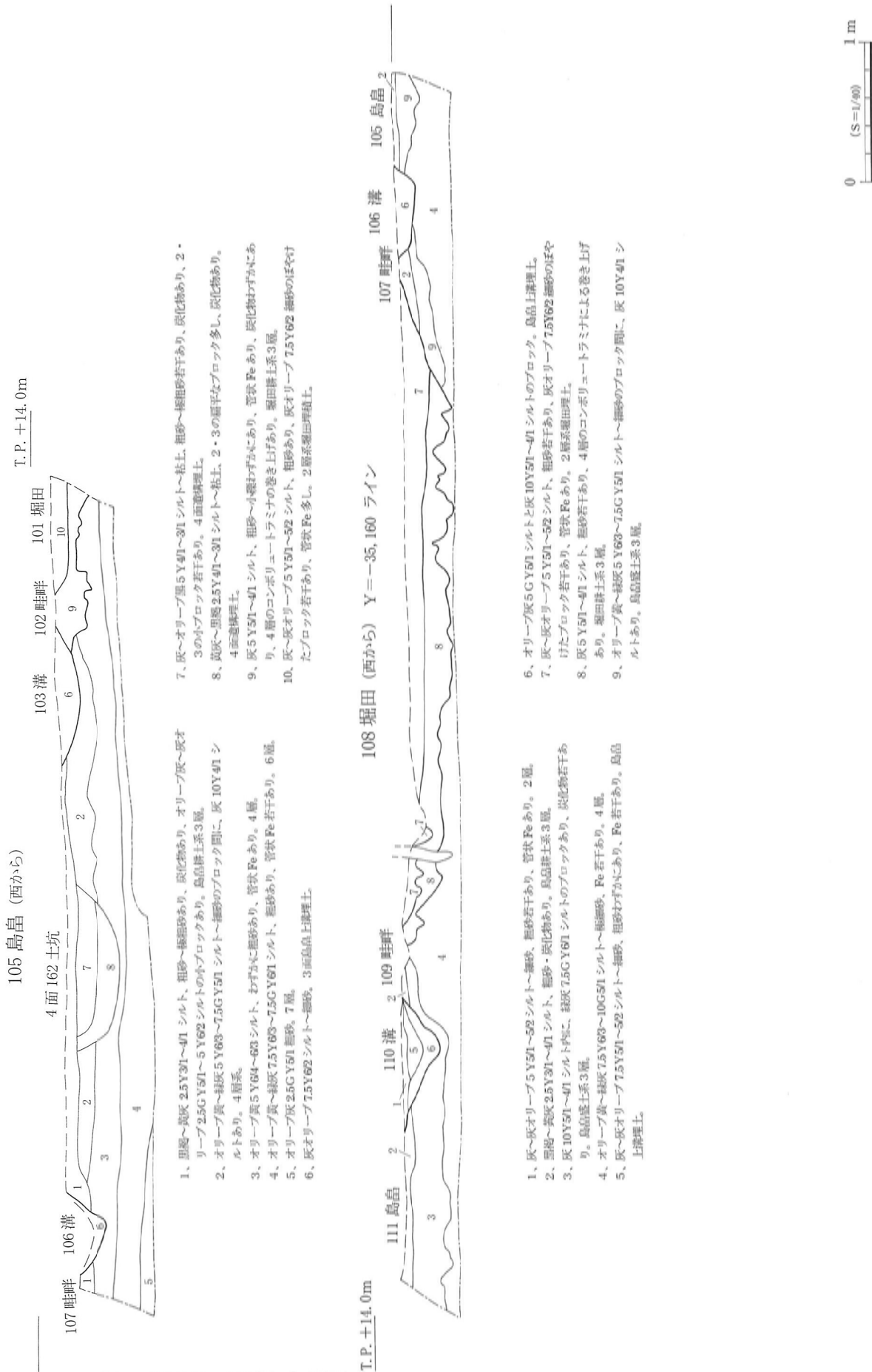


図11 3面全体図

図12 3面 [4-105島倉・108堀田] 断面



- 1、黒泥～黄灰 2.5Y3/1～4/1 シルト、粗砂～極細砂あり、炭化物あり、オリープ灰～灰オ  
 リープ 2.5GY5/1～5 Y6/2 シルトの小ブロックあり、島倉盛土系 3 層。
- 2、オリープ黄～緑灰 5 Y6/3～7.5GY5/1 シルト～細砂のブロック間に、灰 10Y4/1 シ  
 ルトあり、4 層系。
- 3、オリープ黄 5 Y6/4～6/3 シルト、わずかに細砂あり、管状 Fe あり、4 層。
- 4、オリープ黄～緑灰 7.5Y6/3～7.5GY6/1 シルト、細砂あり、管状 Fe 若干あり、6 層。
- 5、オリープ灰 2.5GY5/1 細砂、7 層。
- 6、灰オリーブ 7.5Y6/2 シルト～細砂、3 面島倉上層埋土。
- 7、灰～オリープ 5 Y4/1～3/1 シルト～粘土、粗砂～極細砂若干あり、炭化物あり、2・  
 3の小ブロック若干あり、4 面黒埋土。
- 8、黄灰～黒泥 2.5Y4/1～3/1 シルト～粘土、2・3の扁平なブロック多し、炭化物あり。  
 4 面黒埋土。
- 9、灰 5 Y5/1～4/1 シルト、粗砂～小礫わずかにあり、管状 Fe あり、炭化物わずかにあ  
 り、4 層のコンボリニューラトミナの巻き上げあり、堀田盛土系 3 層。
- 10、灰～灰オリーブ 5 Y5/1～5/2 シルト、粗砂あり、灰オリーブ 7.5Y6/2 細砂のほやけ  
 たブロック若干あり、管状 Fe 多し、2 層系堀田埋土。

- 1、灰～灰オリーブ 5 Y5/1～5/2 シルト～細砂、粗砂若干あり、管状 Fe あり、2 層。
- 2、黒泥～黄灰 2.5Y3/1～4/1 シルト、粗砂・炭化物あり、島倉盛土系 3 層。
- 3、灰 10Y5/1～4/1 シルト内に、緑灰 7.5GY6/1 シルトのブロックあり、炭化物若干あ  
 り、島倉盛土系 3 層。
- 4、オリープ黄～緑灰 7.5Y6/3～10G5/1 シルト～極細砂、Fe 若干あり、4 層。
- 5、灰～灰オリーブ 7.5Y5/1～5/2 シルト～細砂、粗砂わずかにあり、Fe 若干あり、島倉  
 上層埋土。
- 6、オリープ灰 5 GY5/1 シルトと灰 10Y5/1～4/1 シルトのブロック、島倉上層埋土。
- 7、灰～灰オリーブ 5 Y5/1～5/2 シルト、粗砂若干あり、灰オリーブ 7.5Y6/2 細砂のほや  
 けたブロック若干あり、管状 Fe あり、2 層系堀田埋土。
- 8、灰 5 Y5/1～4/1 シルト、粗砂若干あり、4 層のコンボリニューラトミナによる巻き上げ  
 あり、堀田盛土系 3 層。
- 9、オリープ黄～緑灰 5 Y6/3～7.5GY5/1 シルト～細砂のブロック間に、灰 10Y4/1 シ  
 ルトあり、島倉盛土系 3 層。

の機能を持っていたと考えられる。島島の肩部の畦畔に水口を切れば、堀田への給水も可能である。

島島上面と堀田耕土上面の高低差は最大20cmで、平均的には10cm前後である。島島上部が削平を受けているとはいえ、本来の比高差も30cmを超えるものとは思われない。

堀田 幅は、島島の肩で測れば、溝状に狭い部分もあるが、4.5～6.5m、平均的には5m前後である。

埋土は複雑で、下からブロック土の3-3層・旧耕土の3-3層・コンポリュートラミナの見られる3-2層・3-1層となるが、3-3層は西側のみ、3-1層は東側に多く、3-2層がほぼ全体に広がる。埋土が複数層ある堀田では、下の層は島島の盛土の下にもぐる場合がある(図8下段の9と10等)。その事と、4面に残る掘り込みから、数段階の変遷を経て、3面での形となったと考えられる。

最終的に残る上面は平坦で、島島とのわずかな高低差を2層の埋土が埋める場合が多い。

しかし、3-092・100堀田の東端部分のみは、上面を洪水砂が覆い(図6の6)、その下には土塊が散乱したような凹凸が残されていた(写真図版4の2)。

これは堀田が粗起こしされたような状態の時、その部分を流芯とするような破堤的洪水が来た様子を示すと思われるが、他の部分には砂層も耕土上面の凹凸も見られない。

また、3-2層のコンポリュートラミナは、基本層序の部分でも述べたように、3面堀田の変遷の中ほどに起こった地震の痕跡と思われるが、02-2トレンチ中央付近で、島島の上にまで見られる(図8下段の9)。最終的にはその基部として残され、削平も免れたため残ったと思われるが、なぜ高いレベルまで上がっているかは疑問のままである。

3-104堀田は4-187島島の東への延長上にあり、隣接する堀田より低い。他の堀田との間には畦畔がないと成立しえない形態だが、畦畔の痕跡は残されていない。埋土は他の堀田と異なり、2層に似たものであり、2面でも堀田が踏襲され、最終的には縮小して、杭で留めた板による土留めが成されている。調査区東端では上述の3面や1面で洪水砂が見られるように、中世以降の洪水の痕跡が多い。この堀田は、元々は洪水による浸蝕地形として周囲より低い部分だった事が考えられる。また、中に明確な3層系の耕土が認められない事から、小規模な溜め池であった可能性も考えられる。

### (3) 遺物 (図10-6~19・25)

3面の遺構や3層に包含される遺物も弥生土器・須恵器・土師器が多い。ただし、1・2層より破片の大きさは大きい傾向がある。最新の遺物としては、瓦器の椀・甕・鉢・羽釜や白磁碗を少数含む。ここでは、図化できるもので時期を示す主要な遺物や特異なものについてふれる。

6は3面3-109溝から出土した、青磁碗底部片である。外面は釉が高台上端で止まる。高台は回転ケズリ。内面は半径3.2~2.3cmの間で釉の剥ぎ取りが見られる。龍泉窯産か。

7は3面4-077ピットから出土した、瓦器椀底部片である。内面見込みには1方向の直線的なヘラミガキが残る。外面は残存範囲ではヘラミガキは見られない。器表は暗灰N3/0、胎土は灰白5Y8/1を呈する。器形に比して高台径が大きく、その断面形は三角ではないので、12世紀前半頃のものか。

8は3面3-105溝から出土した、白磁碗底部片である。高台端面のみ釉剥ぎ取るが一部残る。内面にはトチン痕が2個残り、その配置から本来は3個あったと推測される。長く、逆台形を成す高台からすれば、南宋のもの、12~13世紀頃のものか。

9は3面4-088溝から出土した、砥石である。両端を欠く。残る4面中3面に細い擦痕が見られる。

10は3面3-103溝から出土した、東播磨住窯産の須恵器こね鉢口縁部片である。内面下部に右下がりのハケがわずかに残る。カキ目ではない。口縁外面粘土帯部分のみオリーブ黒7.5Y3/1、他の胎

土は灰7.5Y 6 / 1で石英・長石を含み、粗いチャートもわずかに見られる。14世紀頃のものか。

11は3面4 - 110溝から出土した、須恵器圈足円面硯片である。上半部の周の30%ほどが残る破片であるが、突帯につく円形附文は1個のみ残り、もう1個剥がれた可能性のある欠けがある。脚部の透かしは割り付けがやや不均等であるが、周の4分の1に4個あるのを見れば、全周16個に復元できる。ほとんどの調整は回転ナデであるが、天井部下面のみハケを入れ、さらに不定方向のナデでそれを消す。脚部との接合部の屈曲付近にハケが良く残る。

天井部上面は陸部の端に突帯が巡るがその内側に沿ってナデによる凹面が巡る。それより内側はやや高いが、研磨されたように滑らかで、使用痕と思われる。胎土は灰N 6 / 0を呈し、細かい黒色粒がわずかに見られる。微細粒には石英・長石がある。

陸部端に明確な突帯が巡るものは7世紀初頭の大坂府陶邑T G 64号窯を最古として、長岡京期に入る奈良県興福寺一乗院出土例まで、少数ながら見られるようで、法量・脚部上端の突帯の形・そこに付く円形附文なども時期を限定する要素にはならない。

12～19は3層から出土した遺物である。

12は灰釉陶器椀底部片である。全体に回転ナデが施され、釉は内面のみ。円圈状に無釉の部分があるが、剥ぎ取りではなく、刷毛塗りか。胎土は灰白2.5～5 Y 8 / 1を呈する。

やや内湾ぎみで、端部が丸く収まる高台は9世紀末頃から10世紀中葉頃に見られるようである。貼付け高台で外面に施釉がない事から、東海系のものであると思われる。ならば、内面施釉は漬掛けではなく、刷毛塗りを保ちながら、トチンは使用されず、釉も薄く、高台も所謂「断面三日月形」になる、過渡期的なものとして、上述の時期と齟齬はない。今回の調査では数少ない平安時代中期の遺物である。

13は須恵器瓶子片である。内外面とも回転ナデ。胎土は表面灰白N 7 / 0を呈すが、破断面にはにぶい褐7.5 Y R 6 / 3。結晶片岩の粗粒をわずかに含む。

平城宮Ⅲ期に出現する壺Lであるが、小型のものは9世紀前葉までで、後は高台が見られなくなる。胎土に結晶片岩を含むので、河内産とは考えにくい。

14は土師器土鍾である。調整は不明。器表は灰黄2.5 Y 7 / 2を呈し、破断面にはにぶい橙7.5 Y R 7 / 3が見える。混和した砂粒は認められず。微細粒子には石英・長石・黒雲母が見られる。

このような大型のものは、本来海での漁の網に使われるものと思われる。

15は燻し軒平瓦片。水波文は型押し、他の面はケズリ後ナデだが、上面はケズリのみ。灰N 6 / 0を呈し、胎土にやや細かい石英・長石・黒色粒が認められる。器表にはキラコ（白雲母）が附着する。

水波文軒平瓦は、大阪府内では阪南市金剛寺遺跡や、近くでは、太子町叡福寺西方寺院址などから出土例がある。15世紀後葉～16世紀前葉頃のものか。

16は土師器ミニチュア壺である。外面は上半ヨコナデ、下半不定方向ナデ。胎土はにぶい黄橙10 Y R 7 / 2を呈し、わずかに細かい石英・長石を含む精良な胎土。飛鳥時代のものか。

17～19は墨書土器である。奈良時代のものと思われる。

17は須恵器坏身片である。底部外面は回転ヘラ切り後不定方向に粗くナデ。胎土は明青灰5 B 7 / 1を呈し、長石をわずかに含む。底部外面の墨書はかなり薄い「粟」と思われる。

18は須恵器片で、皿か盤の底部と思われる。内面は回転ナデで、一部、それに切られる中央の一定方向ナデが残る。外面は回転ヘラ切り後、中心部以外に回転ナデ。胎土は灰白N 7 / 0を呈し、細かい長石・黒色粒をわずかに含む。底部外面の墨書は「中」である。

19は須恵器坏蓋片。天井部上面の平坦部に回転ヘラケズリが残る他は回転ナデである。胎土は灰白N7/0を呈し、微細粒に長石・黒色粒・石英がある他、混和された砂粒はない。墨書は「十」である。復元径は14cm前後になると思われる、平城宮編年でも後半頃の杯B蓋であろう。8世紀中葉～後葉か。

25は3面4-110溝出土の銭貨。径2.4cm、厚さ0.8～9mm。字はかなり錆びで覆われるが、「(聖もしくは皇)宋通寶」と読める。しかし、該当する年号等なく不明。宋代の貨幣か、もしくは偽銭か。

#### (4) 小結

3面および3層の時期とは、4面に残る堀田の掘り込みが掘られてから、島畠と堀田の並列という形が、3-3層から3-1層まで最低2回の変遷を経ていく時期と言える。

遺物から考えると、3面の遺構に同時期的な遺物はあまりないと思われる。3層の遺物には、飛鳥時代以後のものでは奈良時代後半、平安時代中葉、12～13世紀頃、15世紀後半頃のまとまりが見られる。

最後の15世紀後半頃は3面が埋没し、2層の床面となる時期を示すと言えよう。すると残りの3時期が島畠と堀田が造成される時期の候補となる。しかし、奈良時代、平安時代に関しては、船橋遺跡全体では瓦もかなり出土しており、船橋廃寺の存在も考えられるため、その関係でここに遺物が残された可能性が高い。とすれば、12～13世紀頃を造成の時期とするのが妥当であろう。

同じ大阪平野でも三角州帯に位置する池島・福万寺遺跡では平安時代後期に洪水砂の処理として島畠が成立するが、ここではそれよりもかなり遅いと言える。それだけではなく、ここでは島畠の基部に洪水砂などは認められず、4層とその上に形成された土壌を掘り込んで堀田を作り、その排土を盛って島畠を形成しているようである。そのため、高低差の少ない島畠と堀田が整然と並ぶ景観が形成された。同じ島畠と言っても両遺跡のものは成立契機に違いがあると言えよう。

高橋学は、10世紀末～12世紀初頭に、沖積平野扇状地帯に再び段丘化が起こり、地下水位の低下、土地の高燥化が生じ、その下流の三角州帯では洪水が集中し、堆積が急速に進行したとする。

まさにその時期の初めに池島・福万寺遺跡で島畠の形成が始まり、その終わりに船橋遺跡で島畠と堀田が並立する耕地が形成されたと言える。

河内に現在でも残る堀田は、給水の十分な時には養殖池や蓮田として使い、給水が不十分な年は堀田部分のみで水田耕作をしたという。つまり、船橋遺跡の場合は、高燥化による旱魃に対応できる耕地の造成ではなかったかと推測できるのである。

そうすれば、3-2層が島畠の上にも及び、地震により揺り動かされたのも、給水が充分確保できる年に全面に水を張った状態であったと考えれば納得がいく。20cmほどの高低差なら、田植えの時期を少しずらし、堀田部分の稲がやや伸びてから水位を上げ、島畠部分に田植えすれば全面水田にするのも可能ではないだろうか。

そして、耕地が久しぶりに大きな洪水を受け、区画の変更を余儀なくされて2面が成立するのが、沖積平野での築堤による流路の固定が本格化し、天井川化が進行した15世紀の事である。

## 4、4面（図13）

### （1）概観

本来は、一部にわずかに残っていた有機分を濃く含む4-1層が古土壌として覆っていたと考えられる面だが、4-1層自体は耕作地の成立とともにほとんど失われている。

4面まで下がると、それより上ではあまり判然としなかった西が高く東が低いという地勢がはっきりしてくる。遺構密度も西のほうが高い。

この面で検出される遺構は4時期に分別できる。古い時期から見ていくと、先ず弥生時代後期の遺構である。井戸が多く、土坑・溝・方形周溝墓などがある。しかし、飛鳥時代の遺構にもこの時期の遺物が大量に含まれており、元々はもっと多様で多くの遺構が存在し、飛鳥時代に削平されたために、深いもののみ残ったと考えられる。その遺物量は、集落か墓域が存在していた可能性を示唆する。

次に古いのは飛鳥時代前半の遺構である。主な遺構として溝・掘立柱建物・柵列・土坑・竪穴式住居などがあり、建物に属さない柱穴・ピットも多い。

段階的には、南東～北西方向の溝群と南西～北東方向の溝群が一斉に掘られ、すぐに埋められた後、建物群が成立するようで、溝と重複する柱穴は全て溝を切る。ただし、溝群の東半は柱穴との切り合いは確認されていず、西半の溝群ともやや方向性が異なる。東西2群に大別できるようである。

奈良時代の遺構と特定できるものは少なく、確実なのは2個のピットのみである。しかし、どちらも隅丸方形の平面形が正方位を向いているのが飛鳥時代のものと異なる。

一番新しいのは中世の遺構である。主なものは東西方向に伸びる堀田の跡である。本来は3-2～3層上面でも各々検出し、その最後として4面で完掘状態で検出すべきものだが、便宜上、3面で堀田の3-1層を掘削した状況で検出した後、4面で3-2～3層を埋土として掘削し、検出したものである。その他、少数の溝やピットも残る。

以下は、新しい時期から順に各遺構について述べていく。

### （2）中世

**遺構** 主要なものは堀田の跡で、だいたい3-3層成立時に掘り込まれた形を留めているようである。埋土も最下層が3-2層か3-3層である。おおむね東西方向に直線的に伸びる。

しかし、3-141堀田の肩が中を通る飛鳥時代の溝と平行するような方向性を持つのは特異である。これは元々、溝を通ってきた洪水などによって溝周辺が浸蝕されていたのを3層に似た盛土で整形していたものと思われる。調査で掘削する際、盛土と堀田耕土の区別がつかず4層上面まで掘ったため、このような形に検出してしまったのであろう。他にも、弥生時代の井戸である3-387井戸が、403堀田を4層上面まで掘削すると、検出した肩部が浮いてしまった例もある。

これらは、4面上に、4-1層以外にも様々な時期の部分堆積層が存在したために生じた混乱と思われる。それと同時に、堀田を掘削する際に、ある程度元々の地形で低い部分を選んでいた事を示すものと思われる。検出された堀田の肩が部分的に不整形なものも多くはそういった部分堆積層や整形するための盛土を同時に掘削してしまったためと考えられる。

乱れの少ない部分で堀田の幅を測ると、ほとんどは4.6mほどを基本としているようである。ただし、3-345堀田はその東端で溝状に狭くなり、3面で検出された形に踏襲されている。

深さは原地形に高低があるため部分により差があるが、平均して30cmほど、その掘削土の半分を耕土

として残し、残りを島崙に盛ったとすると、造成当時の堀田耕土上面と島崙の比高差は30cmほどかと推測される。堀田底面のレベルを見ると、一つの堀田で東西の明確な高低差はない。だが、北の堀田の底面レベルが南より低くなっていく傾向があり、南端の3-139堀田の底面がT.P. +13.6mほどであるのに対し、北端の3-141堀田はT.P. +13.2mほどである。

また、平面的には検出できなかったが、02-2トレンチ中央セクションの断面で(図8下段)、堀田底面に削り出しの畦畔状の高まりや溝状の凹部があるのが確認された。堀田内を分割する耕地区画があった可能性もある。

02-3-1トレンチでは坪が異なるため大きく状況が違う。注目されるのは西寄りにやや高い部分が南北に長くあり、そこに畦畔の痕跡らしい濃い鉄分の沈着が見られた事である(図13、02-3-1トレンチ部分の点線)。

痕跡は太い部分では幅1.4mもあり、畦畔とすると坪境の大畦畔である可能性がある。するとトレンチ西隣の現代水路が通る坪境より、当初の坪境は3mほど東にずれていた事になる。

またその東側に、東へ5cmほど落ちる不整形な段差を検出した。畦畔痕跡と重なる部分で見ると、痕跡のできる前に埋土上部が削平され平坦化している。埋土は基本層序とは異なる旧耕土と思われる砂質土で、上面には北北西～南南東の方向の鋤溝が見られる。底面は平坦であり、南側で東北東～西南西の方向の畦畔が検出された。水田跡と考えられる。

これが重要なのは、条里制地割に先行すると思われる、畦畔や耕作の方向性が正方位を指向していない事である。方向性が周囲の飛鳥時代の溝群と似ているので、今回の調査で唯一検出された飛鳥時代の耕地である可能性がある。出土土器は少数の小片のみなので確定的な事は言えないが、飛鳥時代より下の時期のものは見当たらない。

以上の他、中世の遺構と考えられるのは4-209ピットのみである。これは下駄が出土した事による。堀田の底で、それ以前の遺構は残りの悪い部分での検出でもあり堀田造成後の遺構と思われる。

#### 出土遺物

4-209ピット 図10-22は下駄である。鼻緒の孔がやや右によるので左脚用と思われる。歯は欠けるが、若干高まりとして残っている。木取りは板目である。長さ26.1cm、幅7.4cm。出土遺物はこれのみである。

3-141堀田 埋土が3-1層であったため、遺物を分別しなかったが、ここでは木製品を1点紹介しておく。図10-21は題箋の頭部である。芯材を使用。身は断面形が隅丸の偏平な三角形に作る。

3-139堀田(図14) 1・2面でも同じ位置に段差があり、基本層序とは異なる埋土があったため、遺構の検出、掘削に混乱があり、出土遺物の全容が分からなくなってしまった。ここでは確実に本遺構の埋土から出土したと把握できるもののみから実測可能な遺物を示す。

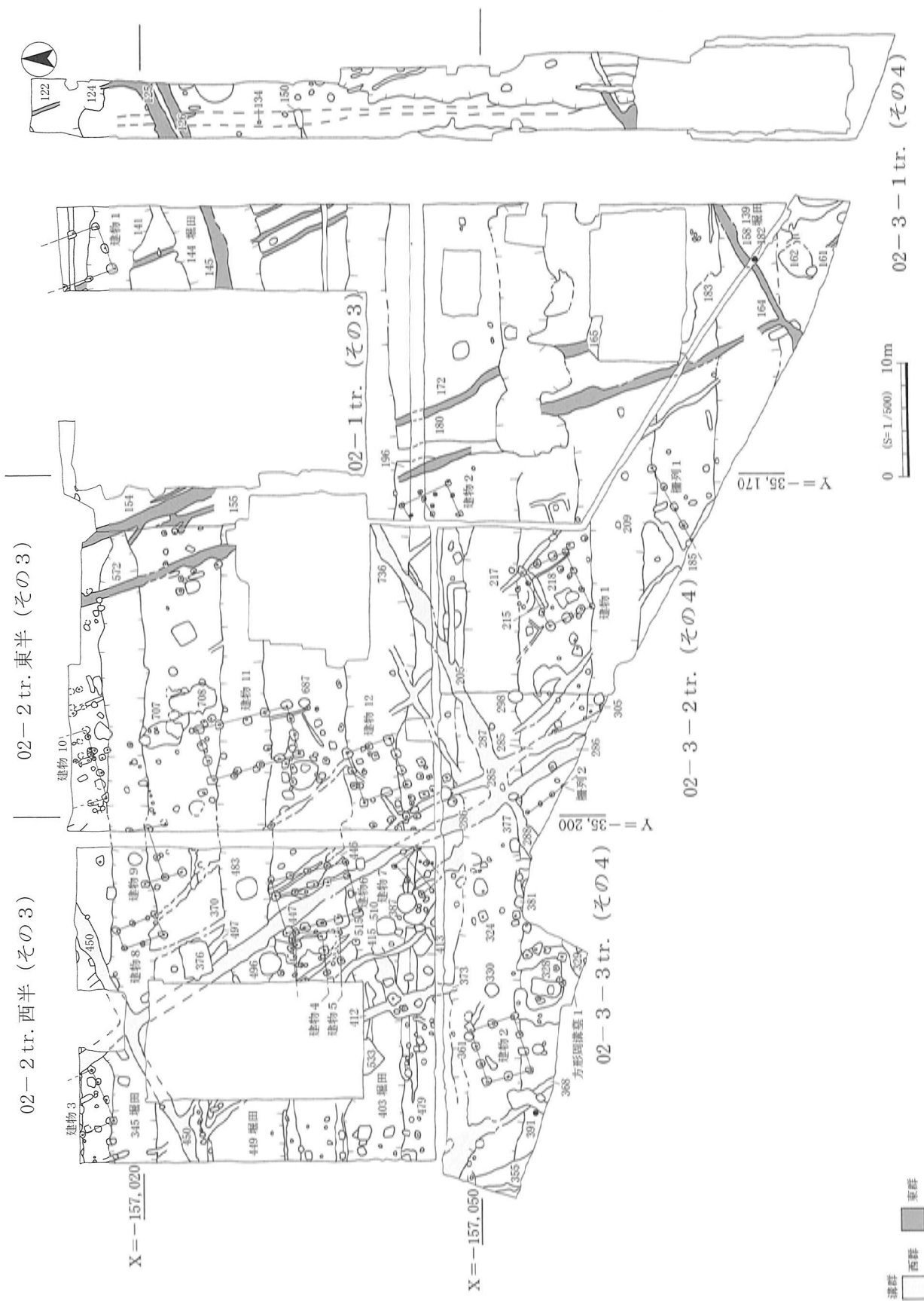
1は土師器坏である。外面は上半ヨコナデ、下半不定方向のナデ。内面はヨコナデが確認されるが底面は磨滅激しく調整不明。胎土はにぶい黄橙10YR 7/2を呈し、混和砂粒は見られず、微細粒に石英・長石・赤色粒・黒雲母あり。精良な胎土である。

2も土師器坏である。口縁のナデ上げは内外面同位置。外面下半もゆるくナデられているようである。胎土は浅黄2.5Y 7/3～にぶい橙7.5YR 6/4を呈し、白い粘土粒が若干ある精良な胎土である。

3も土師器坏。外面底部はケズリ後軽くナデ。内面底部付近は器表剥落し、暗文の有無は不明。胎土は浅黄2.5Y 7/3を呈し、長石をわずかに含む精良な胎土である。



図13 4面全体図



4も土師器坏。外面のヨコナデは3段。底面はケズリ後、最下段のヨコナデと方向不明の軽いナデが入る。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、赤色粒がわずかにある精良な胎土。

5も土師器坏。外面は口縁のヨコナデ以下はやや右下がりのナデが見られる。内面の口縁ヨコナデは一周で止まって終わる。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、長石をわずかに含む精良な胎土。

6は土師器皿。底部外面は口縁からの屈曲付近のみケズリが入り、その上から底部全面に板状工具によるナデが入る。中心付近は使用痕か、やや磨滅。内面の二段放射状暗文は下段のものが上段を切る。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石・赤色粒・石英をわずかに含む精良な胎土である。

7は土師器高坏である。外面は身部はヨコナデ、接合部の段の下はユビオサエ後軽くナデ、脚柱部のタテユビナデの途中に棒状工具によるヨコナデが1条入る。脚裾部は板状工具による右下がりナデ。身部内面はヨコナデ後暗文。脚柱部内面は指の入る所まで軽くユビヨコナデ、脚裾に屈曲する部分にユビオサエが入る。胎土は浅黄2.5Y 7 / 3を呈し、白色粘土粒が若干見られる。微細粒には長石・石英ありの精良な胎土。

8も土師器高坏。外面は、身部はヨコナデ、段より下は左上がりのユビナデ。脚柱部はタテナデに粘土接合痕が一つ縦に残る。その下の屈曲部にヨコユビナデが1条入り、その下はヨコナデ。身部内面は底部に不定方向のナデが入った後、それより上は口縁までヨコナデ、最後に暗文。

脚柱部内面は絞り痕を残しながら指の入る範囲でユビヨコナデ。胎土は浅黄2.5Y 7 / 3を呈し、白

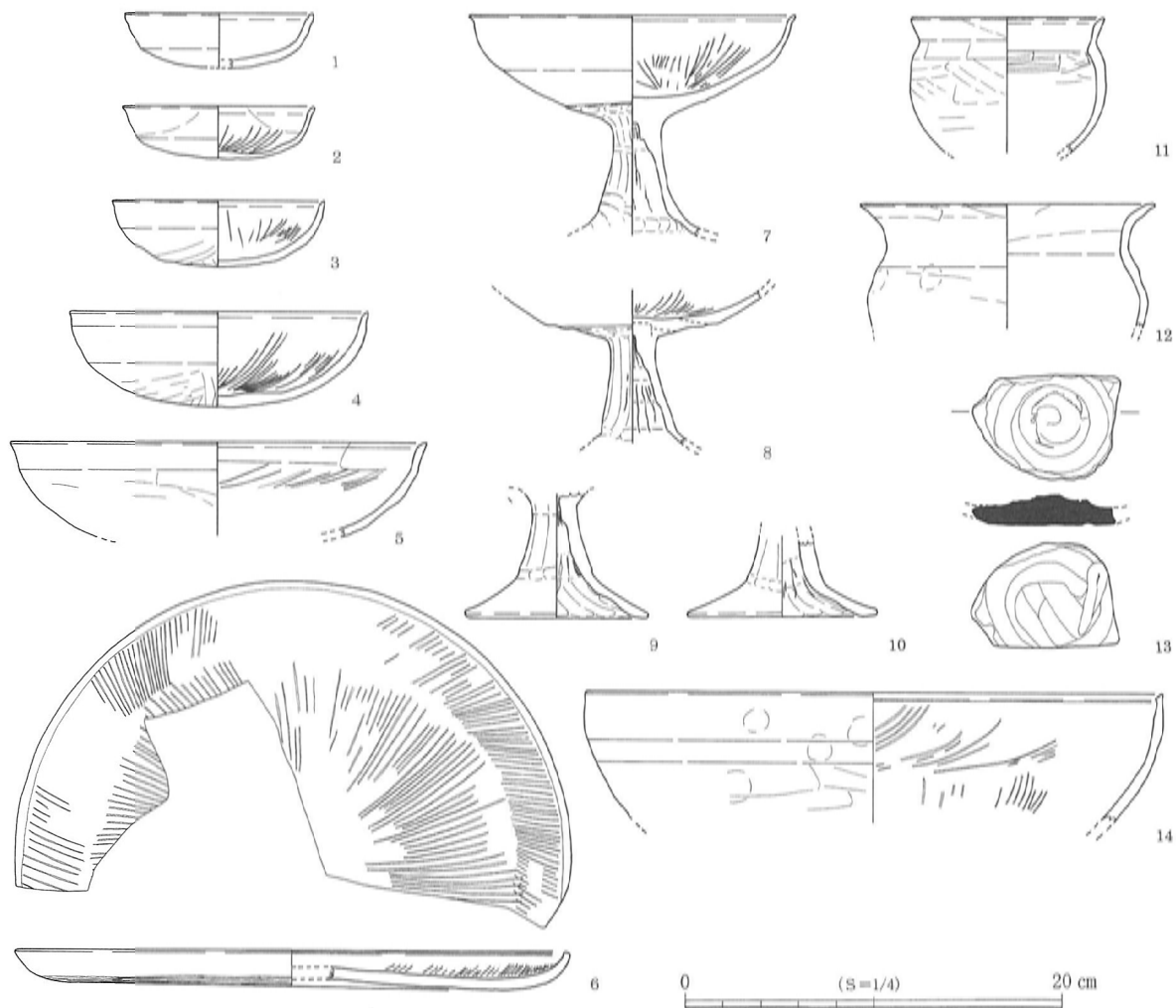


図14 3-139堀田出土遺物

色粘土粒がわずかにある精良な胎土。

9は土師器高坏脚部片である。外面は、脚柱部をタテナデ。上端はそれを軽いヨコナデが切る。下の屈曲部分はヨコユビナデ。脚裾部はヨコナデ。脚柱部内面はヨコユビナデ。脚裾部内面はタテユビナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、混和砂粒の見られない精良な胎土。

10も土師器高坏脚部片。外面は、脚柱部タテナデ。その下に短い単位のヨコユビナデ1条。脚裾部はヨコナデ。内面は脚柱部左下がりヨコナデ、脚裾部タテユビナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し白色粘土粒が若干入る精良な胎土。

11は平城京分類などでは小型壺とされるが、南河内地域で見ると小型の甕のようにも見える。外面はナデで、口縁のヨコナデは左上にナデ上げる。内面は頸部直下にヨコハケが残るが他はナデ。胎土はにぶい黄10Y R 7 / 2を呈し、長石・赤色粒をわずかに含む精良な胎土である。

12は土師器甕である。外面肩部にユビオサエが残るが、内外面とも最終的にナデ。口縁のナデ上げは内外同位置である。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、長石・石英をわずかに含む。

13は須恵器の底部片。壺の底部か。内面は回転ユビナデ。外面はナデ。外面の図の右側で他のナデを切る直線的なナデのみユビナデでかなり深くくぼむ。胎土は灰白N 7 / 0を呈し、長石・石英を若干、チャート・黒色粒をわずかに含む。陶邑産ではなさそうである。

14は土師器鉢である。外面はユビオサエが散在するが最終にはナデ。内面もナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、混和砂粒はない。精良な胎土。

遺構埋土といっても3-1層に相当する層であり、小片の中には灰釉陶器の鉢・壺、瓦器の椀・甕なども見られ、奈良時代の須恵器坏類も存在する。なお、牛か馬の歯（写真図版38-1）も出土している。345堀田（表4・図15）3面検出時に3-1層を掘削したので、4面で埋土として遺物を取り上げたのは3-3層である。断面で3-2層より下である事も確認できている（図8下段左端の9と10）。ブロック土のものは西端にしかなく、ほとんどは耕土らしき粘質土である。

遺物の全容は表4のとおりである。土師器・須恵器で90%を超え、そのほとんどは飛鳥時代のもので組成も飛鳥時代の遺構と同じ傾向にあるが、白磁碗、瓦器の鉢・羽釜・椀、いぶし瓦などが少数ある。

表4 3-345堀田 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別									
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%								
土器・陶磁器	399	弥生 (生駒西麓)	18	4.5	甕	5	27.8		生駒西麓	2	40.0						
			3	16.7	壺	6	33.3		生駒西麓	1	16.7						
							底部	1	16.7								
		土師器	280	70.2			甕	15	5.4								
							羽釜	8	2.9			非生駒	3	37.5			
							甕	3	1.1								
							鉢	9	3.2								
							高坏	2	0.7								
							坏皿類	36	12.9								
							椀	1	0.4								
					須恵器	95	23.8			甕	51	53.7	口縁	2	3.9		
										壺	24	25.3					
										鉢	2	2.1					
				高坏				2	2.1								
				坏				15	15.8	II形式	6	40.0	身	1	16.7		
									III形式	5	33.3	身	5	83.3			
											身	3	60.0				
									蓋	1	20.0						
白磁碗	1	0.3															
瓦器	5	1.3			鉢	1	20.0										
					羽釜	2	40.0										
					椀	2	40.0										
その他	5				平	3		土師質	1								
							いぶし	1									
					丸	1		須恵質	1								

瓦質羽釜は河内地域では14世紀以降のもので、それが3-2層成立時期の上限を示すものとなる。

図15は実測可能なものの中から特徴的なものを抜粋した。

1は須恵器坏蓋である。外面はつまみ周辺と口縁側が回転ナデ、その間に2条の回転ケズリ。内面は天井部中心に一定方向のナデがあり、周囲の回転ナデに切られる。受け部端は口縁よりわずかに上。胎土は外面緑灰5B6/1、内面灰白N7/0、断面紫灰5RP5/1を呈し、1mm弱の石英を若干含む。微細粒にも長石・石英しか見られず。陶邑産か。

2は須恵器器台脚裾部片である。全体に回転ナデ後、外面に施文。上段の波状文2帯も下段の斜行カキメも左から右へ施文する。胎土は灰N7/0を呈し、石英若干に細かい黒色粒がわずかに見られる。

中村編年のII型式後半に限定できるか。今回調査の飛鳥II期の遺構に共伴する可能性がないとは言えないが、それよりやや遊離して古い時期の遺物であろう。

3は土師器坏である。口縁外面のヨコナデ以外は器表剥離のため判然としないがナデはなされているようである。暗文は不明。胎土は灰白10YR8/2を呈し、細かい長石をわずかに含み、微細粒は石英も見られる精良な胎土。

4は土師器小型壺である。内外面とも最終調整はヨコナデ。胎土はにぶい橙7.5Y7/4を呈し、赤色粒・長石をわずかに含む精良な胎土。

5は白磁碗片である。全面釉あり。玉縁下端には沈線が入る。玉縁も大きく、器壁も厚めなので北宋後半代以降であるが、玉縁上半がややつまみ上げられるように細身となるので、南宋まで下らないと思われる。11世紀後葉~12世紀前半頃のものか。

6は土師器の鈕部分の破片である。調整はナデ、内面はその前に鈕を付けるためのユビオサエが残る。鈕はやや上に反り、その上に横位の沈線が1条見られる。鈕の孔は径5mm。胎土は浅黄橙10YR8/3を呈し、長石をわずかに含む精良な胎土。この部分が胴部最大径とすると、25cmほどの径になると思われる。胎土は飛鳥時代の土器と共通するが、器種は分からない。

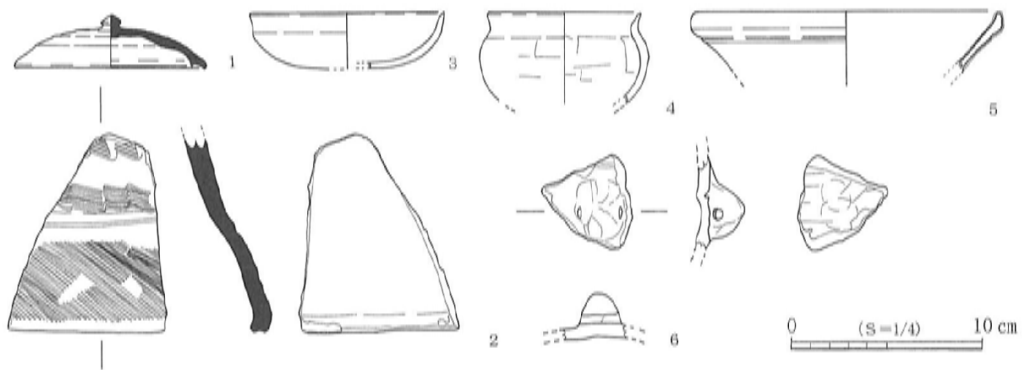
3-403堀田(表5・図16) 3面検出時に3-1層を掘削しているのに、4面で埋土として遺物を取り上げたのは3-3層である。3-2層とも直接上下関係が確認されている(図8下段右側の4・9・10)。調査区西端付近ではブロック土が見られるが、ほとんどは耕土らしき粘質土である。

出土遺物の全容は表5の通り。弥生時代後期の遺構密度の高い部分にあるためか、弥生土器が50%を越える。土師器と須恵器の構成は3-345堀田とほぼ変わらないが、須恵器の比率はこちらがやや高い。

1片ずつだが瓦器の椀・鉢・羽釜があり、これが耕土として機能していた時期を示す。須恵器播り鉢も東播系で14世紀前半頃のもの。

図16のものは  
実測可能なもの  
から選抜した遺  
物である。

1は石製硯。  
板状に剥離する  
節理を持ち、色  
調は暗灰N3/



0。粘板岩か。 図15 3-345堀田出土遺物

残存する三つの端面には擦痕。陸部は使用痕か、やや凹面を成す。硯ではかなり小型のものと言える。

2は椀型鍛冶鉄滓である。上面は気孔が見られ、一部炭の薄片をかむ。下面はあまり椀型を成さないが、気孔は見られない。

3は土師質ガラス小玉鑄型片である。1個の玉の鑄型となる半球系の穴（以後、鑄型穴とする）は径平均6mm弱、深さ2～3mm。玉の糸通しの孔を作るための芯を立てた孔（以後、芯持ち孔とする）は径0.5mmほどで、ほとんどが貫通する。鑄型穴の配置は一見直線的にも見えるがわずかに弧を描く。

表5 3-403堀田 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別										
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%									
土器・陶磁器	1208	弥生 (生駒西麓)	613	50.7	甕	109	17.8											
			3	0.5	壺	76	12.4	長頸壺	31	40.8								
								短頸壺	4	5.3								
								広口壺	18	23.7								
								底部	30	39.5								
		土師器	417	34.5			甕	31	7.4									
							羽釜	20	4.8									
							甕	11	2.6									
							鉢	75	18.0									
							高坏	33	7.9	脚部	6	18.2						
							坏血類	53	12.7	皿	1	1.9						
							鑄型	1	0.2									
					須恵器	175	14.5			甕	56	32.0	口縁	2	3.6			
										壺	33	18.9	はそう	1	3.0			
										蓋	1	3.0						
		鉢	1	0.6				播り鉢	1	100.0								
		高坏	3	1.7														
瓦器	3	0.2			坏	68	38.9	II形式	24	35.3	身	10	41.7					
											蓋	11	45.8					
									III形式	2	2.9	身	1	50.0				
その他					鉢	1	33.3				蓋	1	50.0					
					羽釜	1	33.3											
					椀	1	33.3											
					瓦	8		平	8		須恵質	6						
		鉄滓	2		サヌカイト	3		土師質	2									
		石	18					木製品	1		石製品	1						

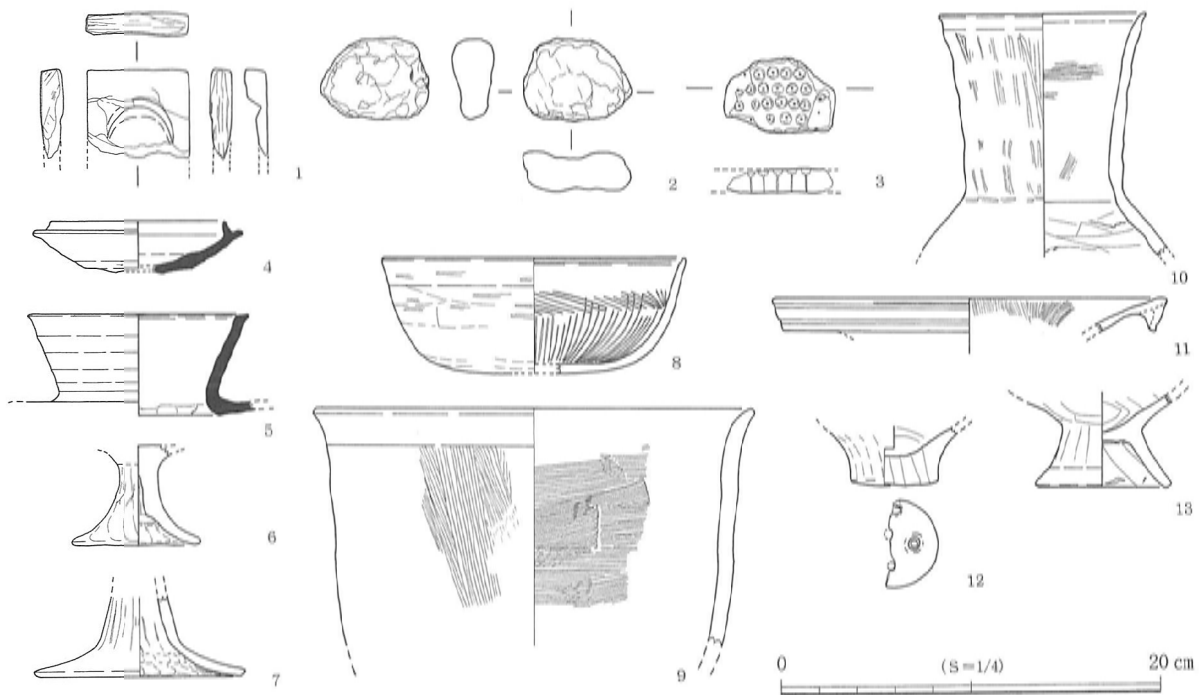


図16 3-403堀田出土遺物

今回の調査で出土した鋳型片は全て、円弧を描く渦巻き状の配置を基本としているので、これもかなり大きな鋳型の周縁近くの破片と見て良いであろう。胎土は明褐7.5Y R 5 / 6～灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、長石・石英を含む。器壁は荒れ、二次的被火の痕跡と思われる。

4は須恵器蓋坏身である。内面は回転ナデの後、中心を直線的にひとナデする。外面は、回転ケズリは底部側面の1条のみ、底部はやや下に弯曲した無調整の面に軽いナデが入る。胎土は灰白N 7 / 0を呈し、長石・石英をわずかに含む。

5は須恵器直口壺口縁片である。調整のほとんどは回転ナデだが、内面の頸部屈曲のやや上は、ナデ前にヨコケズリを入れる。また、屈曲部から肩部はユビナデである。外面肩部と口縁端面から内面上半に自然釉の発泡が見られる。胎土は器表が灰N 7 / 0、断面が明褐灰5 Y R 7 / 1を呈し、長石・石英を若干含む。

6は土師器ミニチュア高坏脚部片である。内外面に絞り痕が残る。外面は身部との接合部ヨコナデ、以下はタテユビナデ。内面は上部無調整で、屈曲部に1条ヨコユビナデが入り、以下はタテユビナデ。胎土は灰白10Y R 8 / 1を呈し、細かい石英・赤色粒をわずかに含む精良な胎土である。

7は土師器高坏脚部片である。内外面に絞り痕が残る。外面は、脚柱部タテナデで不明確な面があり、脚裾部はヨコナデ。内面は、脚柱部軽くヨコナデするのみ、屈曲部にユビオサエ列が1列、以下はタテユビナデ。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、混和砂粒の見られない精良な胎土。

8は土師器坏である。全体にヨコナデ。外面上半に散在するヨコミガキは内面の暗文が幅1mm以下であるのに対し、幅1.5mmほどある。底部にはケズリがあるようだが、磨滅で判然としない。内面の暗文は上段が下段を切る。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、混和砂粒の見られない精良な胎土。

9は土師器甔片である。外面は強くタテハケ、口縁のヨコナデがそれを切る。内面はヨコハケ、口縁のヨコナデがそれを消すが、境目は不明確である。ヨコハケの残るあたりから下に炭化物附着。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 3を呈し、石英が多く、長石が若干、赤色粒がわずかに含まれる。

今回の調査で出土した土師器甔では、他は全て精良な胎土で、ハケも細かいものが軽く当たるか、ナデのみのものであるのに、これだけは異質である。色調や砂粒に差はないが、胎土の素地も粗い。他地域産の可能性はあるか。また、内面の炭化物附着も不可解である。

10は弥生土器長頸壺である。口縁部はヨコナデ、外面頸部のヨコミガキより下は、磨滅のため調整不明。内面は、頸部ハケ後ナデ。胴部は接合痕を残し、ナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 6 / 4を呈し、石英・長石を若干含む。微細粒に角閃石・黒雲母が見られるので、河内産と思われる。

11は弥生土器器台口縁片である。外面ヨコナデ、内面タテミガキ。垂下口縁に凹線2条。胎土は明黄褐10Y R 6 / 6～橙7.5Y R 6 / 6を呈し、石英を若干含む。微細粒に長石・黒雲母・角閃石あり。

12は弥生土器甔底部片である。外面は、底部ナデか。底部側面はタテユビナデ。内面は左上がりのナメナデ。底部の孔は残存部分だけでも4孔見とめられ、本来は5孔以上あったと思われる。胎土はにぶい黄2.5Y 6 / 3を呈し、角閃石を多く、石英を若干、長石をわずかに含み、微細粒には黒雲母もある。生駒西麓産である。

今回の調査では、孔が複数ある弥生土器甔は、多くはないが一定数認められた。特に生駒西麓産のものに多いようである。

13は弥生土器脚部である。台付き鉢か。調整はナデのみ。脚部内面に接合痕残る。胎土は黄褐2.5Y 3 / 5を呈し、角閃石多し、長石あり、石英若干あり。微細粒には黒雲母も見られる。生駒西麓産。

3-449堀田（表6・図17） 3面で検出した時点で3-1層を掘削した。4面で埋土として掘削したものは大部分3-2層で、東側では一部3-3層も一緒に掘削した。なお、西端付近では堀田底面に一部4-1層が残存し、堀田掘削以前の原地形でも凹部であった事を示していた。

出土遺物は表6の通り。3-345堀田と良く似た組成といえる。図17は実測可能な中から選択した遺物である。

1は燻し平瓦片である。上面はケズリだがその下にわずかに布目残る。縁にはナデ、しかしその端から端面にかけてはケズリ。下面はナデ。胎土は灰N6/0を呈し、若干の長石とわずかの石英を含む。微細粒に黒雲母が見えるので在地のものと思われる。

表6 3-449堀田 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位		細別			
			破片数	%		破片数	%	破片数	%	破片数	%		
土器・陶磁器	760	弥生	238	31.3	甕	47	19.7	底部	4	8.5			
					壺	74	31.1	長頸壺	2	2.7			
								広口壺	3	4.1	生駒西麓	1	33.3
								底部	1	1.4			
								鉢	1	0.4			
								高坏	4	1.7			
					土師器	369	48.6	甕	53	14.4			
								羽釜	16	4.3			
								甕	1	0.3			
								壺	5	1.4			
		鉢	70	19.0									
		高坏	38	10.3									
		坏血類	72	19.5									
		須恵器	142	18.7	甕	66	46.5						
					壺	35	24.6	横瓶	1	2.9			
								はそう	1	2.9			
					鉢	6	4.2						
高坏	1				0.7								
坏	42				29.6	II形式	16	38.1	身	6	37.5		
白磁碗	1	0.1					蓋	10	62.5				
							III形式	3	7.1	蓋	3	100.0	
瓦器	10	1.3	鉢	2	20.0			奈良	1	2.4	高台坏	1	100.0
			甕	1	10.0								
			羽釜	5	50.0								
			椀	1	10.0								
その他	10	瓦	平	9		土師質	1						
						いぶし	8						
						丸	1		いぶし	1			
						サヌカイト	2		石	1		粘土塊	1

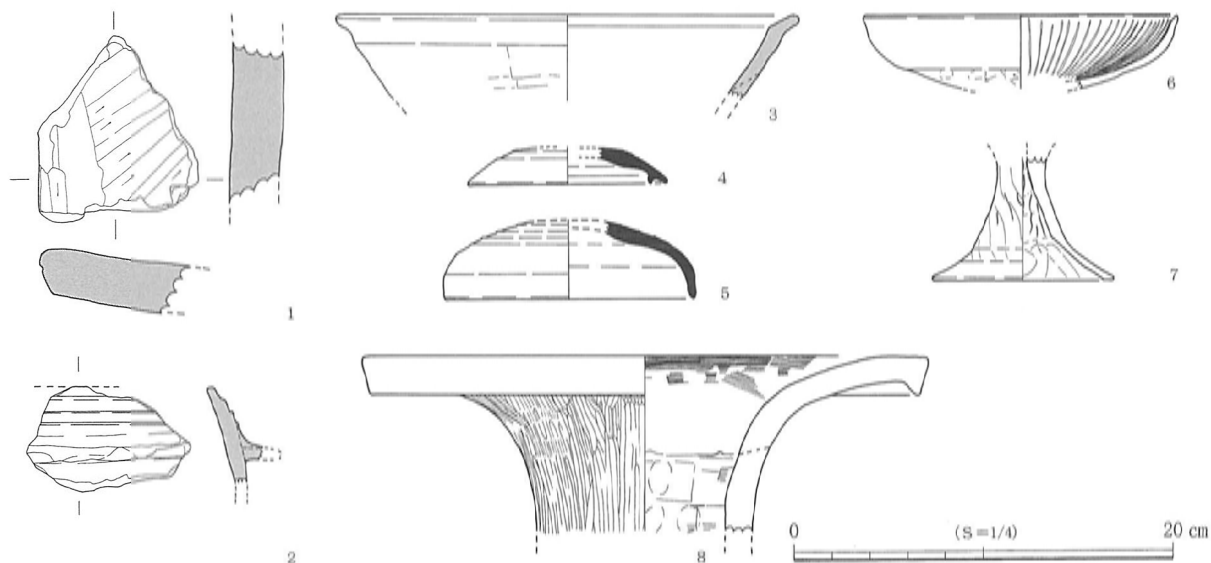


図17 3-449堀田出土遺物（いぶし平瓦：1、瓦質土器：2・3）

2は瓦質羽釜片。全体にヨコナデ。口縁外側の段成形はやや凹線化し内弯は緩い。胎土は器表灰7.5 Y 5 / 1、断面灰白7.5 Y R 8 / 2を呈し、長石・石英を含む。14世紀後半～15世紀前半頃か。

3は瓦質鉢口縁片である。内外面ともヨコナデ。胎土は、器表は灰N 6 / 0、断面は灰白7.5 Y 7 / 1を呈し、長石・石英をわずかに含む。14世紀後半以降にはほとんど見られなくなる型式で、13世紀後半～14世紀前半頃か

4は須恵器坏蓋片。外面天井部の水平部分と屈曲部分の境に1条回転ヘラケズリが入る他は回転ナデ。内面は中心付近に回転ナデを切る一定方向ナデがある。つまみを欠失。受け部は口縁と同じ高さ。胎土は明青灰5 P B 7 / 1を呈し、黒色粒と長石をわずかに含む。

5も須恵器坏蓋である。外面上半に回転ヘラケズリの他は回転ナデ。胎土は、器表青灰5 P B 6 / 1、断面灰赤10 R 6 / 2を呈し、長石・石英をわずかに含む。陶邑産と思われ、飛鳥時代の須恵器よりやや古い。中村編年Ⅱ-2～4頃。

6は土師器高坏身部である。外面身部下半、接合部の段は明確ではなく、その下はユビオサエ後ナデ。ナデは直線的な単位を重ねてまわしていく。上半はヨコナデ。内面はヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙10 Y R 7 / 3を呈し、赤色粒・長石をわずかに含む精良な胎土。

7は土師器高坏脚部である。内外面に絞り痕が残り、外面ナデ、内面ユビナデ。胎土はにぶい黄橙10 Y R 7 / 2を呈し、長石・赤色粒をわずかに含む精良な胎土。

8は弥生土器器台片。垂下口縁はヨコナデ。外面の垂下口縁の裏側には横方向のミガキもある。内面はユビオサエ・ハケ・ナデの順に入る。胎土は褐7.5 Y 4 / 3を呈し、角閃石非常に多し、石英あり、長石若干あり、黒雲母・赤色粒わずかにありの生駒西麓産。

小結 4面で、堀田部分の3-2～3層を埋土として遺物を3-1層と分別したため、3-2層の成立が14世紀頃である可能性を指摘できるようになった。さらに下に3-3層が存在する事から島島・堀田の成立がそれより遡るのは確実とはいえ、いまだ12～13世紀頃であろうと推測されるのみである。

また、それまで、自然環境の変化は考えられるものの、なぜ耕地化が進行しなかったかの結論も出ているわけではない。今後の課題であろう。

### (3) 奈良時代 (図18・19)

確実に奈良時代の遺構と考えられるものは4-377ピットと4-381ピットの二つのみである。他にも若干、奈良時代の遺物を出土した遺構はあったが、いずれも埋土が上下層に分かれ、奈良時代の遺物は上層からのみ小片で出土するので、下層の遺物により時期を判断した。

377ピット 平面形はやや不整形な隅丸方形で、各辺が正方位を向く。東西幅が広い。西側の、底部より50cmほど上の部分に小段がある。それ以外の断面形は壁の立つ逆台形である。埋土は灰5 Y 4 / 1粘質土で、他の時期の遺構と明確な差はない。単層で柱痕なども認められない。ピット底部よりほぼ完形の土師器坏が2個体出土した。土器2の底部が完全に底に付き、土器1はその口縁に少しだけ斜めの状態で出土した。他には埋土に土師器・須恵器・弥生土器の小片がわずかにあった程度である。

規模・形状は柱穴としておかしくないものだが、埋土断面の観察や、土器の出土状況から見て可能性は薄い。所謂、土器埋納土坑として捉えられるものであろう。

図19-1は土器1、土師器坏である。外面は体部は密にミガキ、底部はユビオサエ後ケズリ。内面は底部を中心にやや荒れるが、ヨコナデ。底部にはハケが残っていた可能性もあるが、暗文はない。胎土はにぶい黄橙10 Y R 7 / 4を呈し、白色粘土粒が若干ありの精良な胎土。口縁には2箇所欠損が見られ



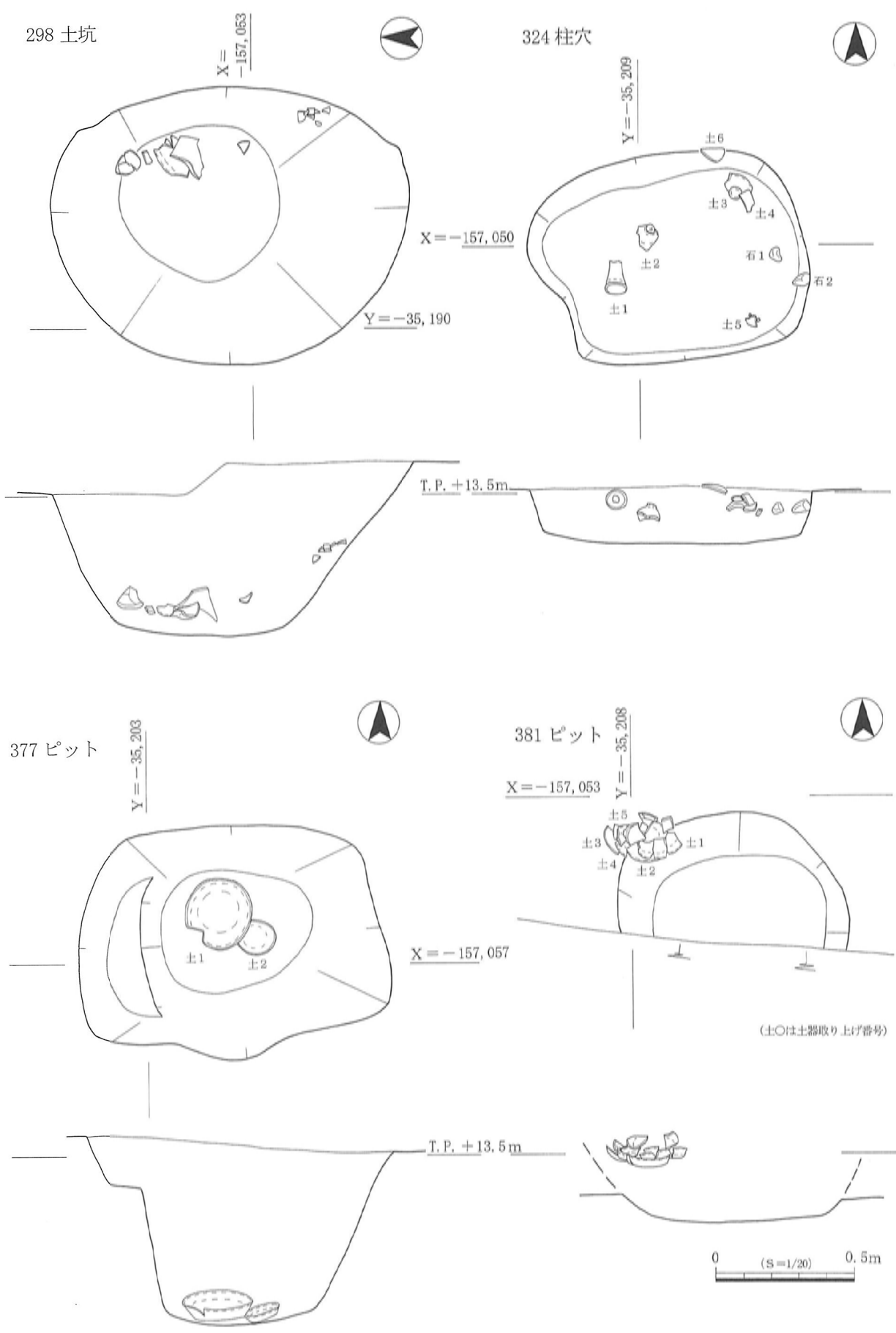


図18 4-298土坑・324柱穴・377ピット・381ピット出土状況

るが、人為的なものかは分からない。飛鳥V～平城宮I期頃の杯A Iである。

図19-2は土器2、土師器坏である。全体的にヨコナデ、体部下半から底部にはユビオサエ。内面の暗文は屈曲部のみ残るが、口縁と底部は判然としない。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 4を呈し黒斑もある。赤色粒と黒雲母がわずかにある精良な胎土。ひびが入り二つに割れていたが、欠失はない。平城宮I頃の杯C IIと位置付けられる。

この二つの土器から遺構の時期は7世紀末葉～8世紀初頭、平城宮I期頃と考えられる。

381ピット 4面上の部分的な堆積土を掘削した際に検出したため、他の遺構との切り合いは不明瞭である。また、土器も検出時は遺構の肩部から浮いたような形となったが、出土状況からピットの切り込み面は本来はもっと上で、土器もピット埋土内にあったと判断した。

トレンチ壁に掛かり、検出したのは半分ほどか、やや不整形だが隅丸方形の平面形と思われる。東西辺は南北を向く。底部は平坦で、残存部分で見れば、埋土は377ピットと共通し、単層である。

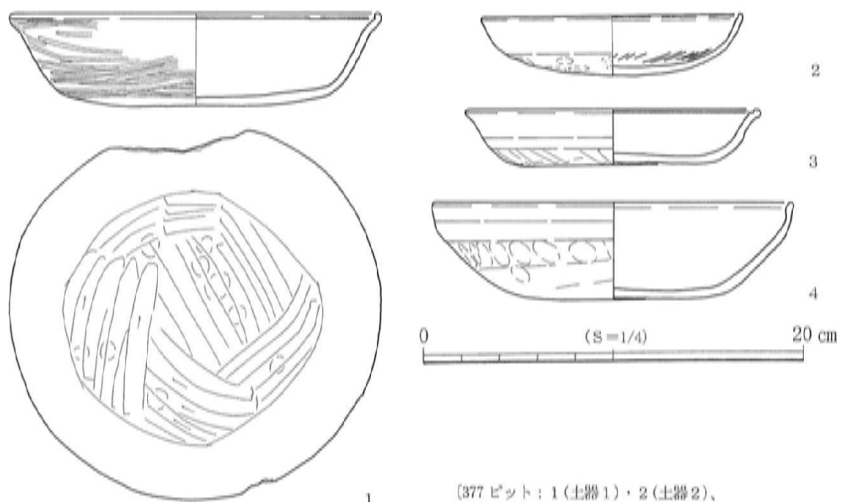
土器はその北西肩部付近で浮いた状態で出土した。出土状況では、半分弱残存した土師器坏が重なったような状況であり、口縁部片が多い部分で5枚重なっていたので5個体と考えたが、接合してみると2個体のみであった。また、一番上の土器1としたものが下の方の土器4・5と接合した。完形には接合しなかったが、部分堆積層掘削中に検出したことから、若干の破片を回収しそこなったと思われ、本来は完形に近い破片がそろっていた可能性もある。2個体の割れた破片を重ねて入れたものか。

図19-3は土器2・3としていたもので、土師器坏である。外面、体部上半はヨコナデ、下半は板状工具による断続的なヨコナデ、底部周辺はヨコナデ、中心はユビナデ。内面は、底部一定方向ナデ、体部はヨコナデ。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 3を呈し、赤色粒・石英・長石・黒雲母をわずかに含む精良な胎土。法量的には平城宮II期の杯A IIIに相当するが、暗文はない。完形率は約90%。

図19-4は土器1・4・5としていた土師器坏である。外面は全面ナデだが、体部中位にユビオサエが残る。内面は磨滅激しく、口縁部にヨコナデがあるとは判明しない。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、石英を若干含む精良な胎土。法量的には平城宮I期の杯A Iに相当するが、器形的には椀Cの系統である。完形率は約60%。

この2個体以外の遺物は出土していない。遺構の時期は平城宮II期頃か。土器埋納土坑と位置付けられるが、土器が埋土中ほどの壁沿いに止まっているらしいのはやや疑問が残る。

小結 奈良時代に位置付けられたこの二つの遺構は、その数の少なさもあり、今回の調査ではやや他と孤立した存在であるように見える。しかし、上の包含層にも一定量この時期の遺物が含まれていたことから考えれば、なんらかの人的営為があったのは間違いない。しかし、飛鳥II期にまとまる遺構群と飛鳥時代



(377ピット: 1(土器1)・2(土器2)、  
381ピット: 3(土器2・3)・4(土器1・4・5))

図19 4-377ピット・381ピット出土遺物

後半の時期を隔てている事と、3層包含遺物で後続の時期のものを探しても、平安時代の遺物がわずかにあるに過ぎず、奈良時代後半が空白である状態は看過できない。

船橋遺跡全体では奈良時代の瓦なども出土しており、それらとの関連で理解すべきものであろう。

#### (4) 飛鳥時代 建物・柵列・住居

飛鳥時代の遺構は、建築物と土坑などの遺構、切り合い的に古い溝群の三つに分けて述べる。

今回の調査では14棟の掘立柱建物、2列の柵列、1棟の竪穴式住居を検出した。それ以外にも確実な柱穴はかなりあり、本来はもっと建築構造物は多かったと考えられる。

掘立柱建物は幾つかの特徴が抽出できる。大体の方位性は共通しながら、若干のズレがある事、建物同士の重複が3-建物4~6以外見られない事、柱穴の大きさにより2群に分別できる事、などである。

また、建物の付帯施設の可能性がある柱穴が周辺にある例はあったが、3-建物6の庇以外は確定できなかった。また、3-建物2のように建物であるか不確定なものもある。なお、柱穴内で、柱痕か柱抜き取り痕かの判定は、埋土がブロック土であるか、上方が開く形のものには抜き取り痕と判断した。

3-建物1 (図20・表19) 02-1 トレンチ北東隅で検出された。梁行2間4.22m、桁行はトレンチ外へ伸びるが2間4.8m以上、185柱穴が浅く、平面プランのラインからややずれるため隅柱の可能性は少なく、おそらく最低3間はある。長軸はN23°Wを指向する。

南東妻の梁行柱芯距離は1.98m・2.24mと棟持柱がやや南西に寄り、隅柱のラインよりやや内側に位置する。桁行柱芯距離は2.35m・2.42m・2.15m。

柱穴は大型で隅丸方形と楕円がある。底のレベルは、T.P.+12.8m前後で揃うものが多いが、185・188柱穴は浅い。188・189柱穴は確実に柱抜き取り、他は柱痕が残る。柱痕の径は10~15cmほど。

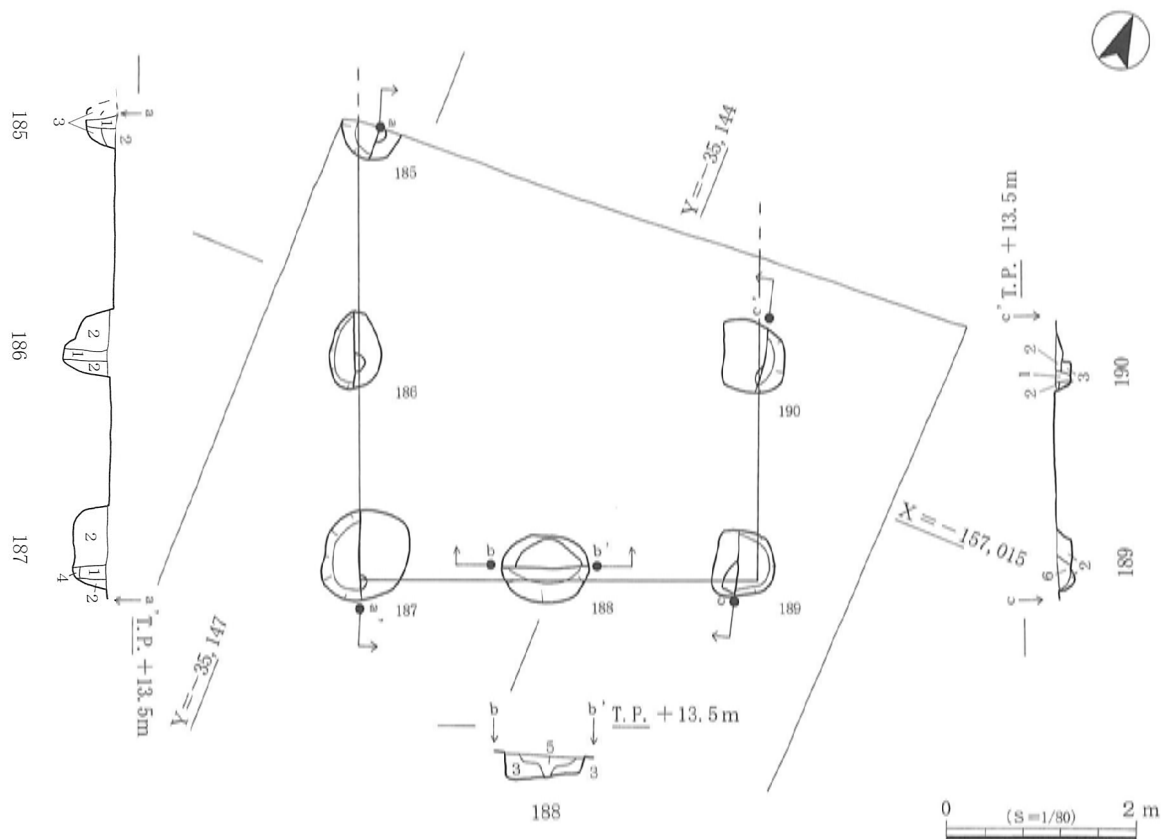


図20 3-建物1

出土遺物は極端に少なく、187柱穴から土師器坏小片が1片出土するのみである。

還元の強い部分で、3層と4層の区別がつきにくく、島田・堀田の耕土を完全に除去した後にようやく検出したので、それらより古い事は確実である。柱穴の大きい部類に入り、その方向性からも飛鳥時代の建物として問題はなからう。

3-建物2 (図21・表7・19) 02-1 トレンチ西壁沿いの南寄りの地点で検出した。遺構密度の低いトレンチで、柱穴が集中していたので建物としたが、納得のいく平面プランは把握できていない。トレンチ境の側溝で柱穴を検出しそこなった可能性と、還元が強いのに加え、廃油らしきもので土が染まっていた部分でもあるので、平面的にも柱穴を見落とした可能性がある。一応、192・199柱穴を隅柱とし、195・201柱穴を結ぶラインを棟として述べる。

梁行2間4.5m、桁行2間以上、3m以上。長軸はE27° Nを指向する。妻のラインと棟のラインは直交するが、妻の棟持柱は194・195柱穴が建物の内外に並立するのが相当するか。棟のラインは南東隅柱から2.5mの位置を通り、北西辺に寄る。桁の方向性は南西側がすぼまる形となり、特に191柱穴はかなり斜めの桁行を成し、疑問が残る。ただし、隅柱からの柱芯距離は1.22mと198柱穴と共通する。

柱穴は小型で隅丸方形と不整形なものがある。底のレベルは191・192・194・195・198・199柱穴がT.P. +13.1mで揃い、201・197柱穴がそれより浅い。191・198柱穴に柱の木質が残り、他の柱穴も柱痕が残る。柱の径は12~14cm、柱痕の径は10~15cmほど。

建物に属するとした柱穴からの遺物の出土はないが、周辺遺構で、近接する3-193柱穴と妻側に隣接して直交する3-196溝から若干出土したものがある。表7の通り。無関係の遺構とは思えないので参考にならう。

表7 3-建物2 遺物破片数集計表

種別	器種	遺構No. 細別	193	196	合計
土師器			1	1	2
	鉢		1		1
須恵器				3	3
	甕			2	2
	壺			1	1
瓦	平	土師質		1	1

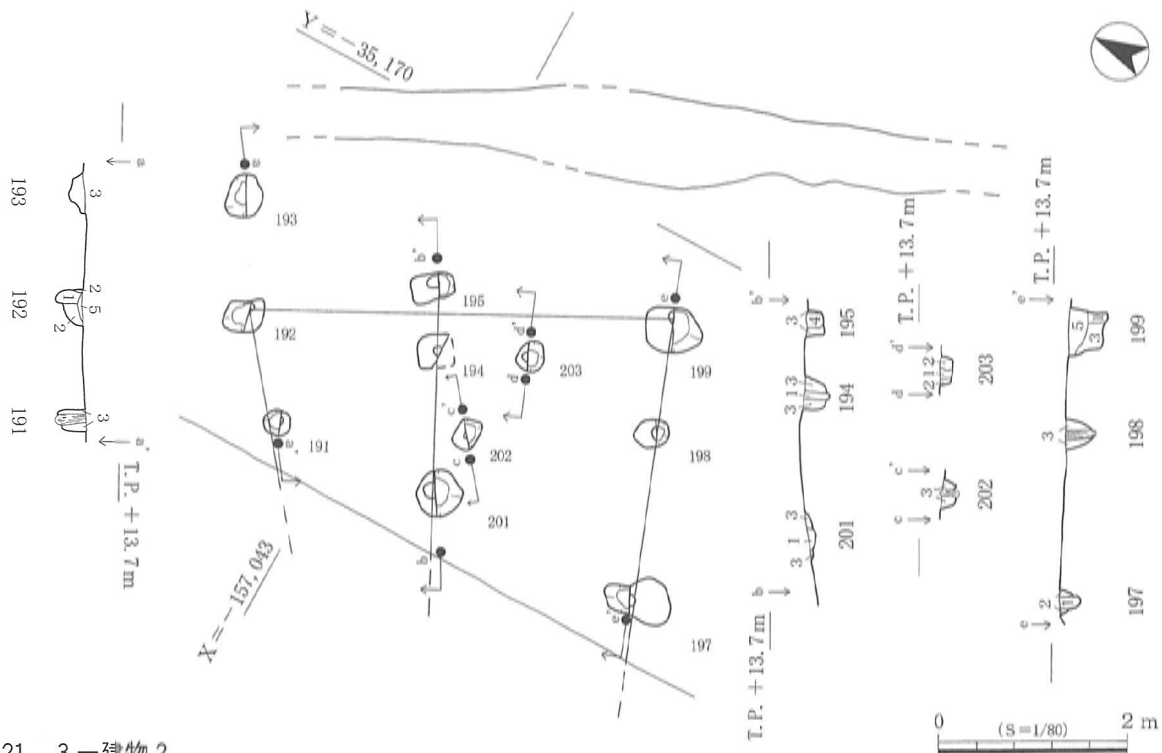


図21 3-建物2

いずれも図化できない小片であるが、飛鳥時代に限定できそうである。

3-建物3 (図22・34・表8・19) 02-2 トレンチ北西隅付近で検出した。遺構の錯綜と部分的な堆積層のため平面プランの確定が遅れ、柱穴断面の検出に統一を欠く結果となった。北側は一部調査区外に伸びる。梁行は2間3.12m、桁行3間4.77m。面積は約14.9㎡。長軸はE23°Nを指向する。

南西妻の柱芯距離は南東から1.54m・1.58mで棟持柱はほぼ中央にある。南東辺の柱芯距離は南西から1.9m・1.9m・0.97mで、北東の1間が他の約2分の1である。

柱穴は大型が多く、方形基調である。底のレベルは545・472・346・502柱穴がT.P.+13.4mほどで揃い、489柱穴がそれより20cmほど深い。499柱穴は10cmほど、347柱穴が20cmほど浅い。隅柱が深い傾向にあると言える。断面で柱痕のように見えるものもブロック土が入った抜き取り痕で、全ての柱は抜き取られたようである。

周辺や建物内に柱穴やピットが多く、他の建物が重複している可能性はあるが、プランは確定できなかった。しかし、その中で3-543柱穴は長方形の掘り方の方向が建物に直交し、建物中心付近に位置している事もあり、この建物に  
関係するかもしれない。ただし、柱位置は棟の通りからはずれる。出土遺物は表8の通りであり、いずれも破片で、完形に復せるものはない。

弥生土器以外は飛鳥時代前半に限定できそうである。

その中で図化できたのは図34

表8 3-建物3 遺物破片数集計表

種別	器種など	遺構No.	346	472	489	499	500	502	545	合計
弥生土器				1	2		1	4	9	17
	タタキ甕								1	1
	高坏			1						
土師器			8	9	1		6	3	7	34
	甕			2					3	5
	鉢		2							2
	高坏			2						2
	坏皿類			1		6	1			8
須恵器				4		1				5
	甕			2						2
	壺			1						1
	鉢					1				1
	坏 II型式			1						1
瓦	平			1						1

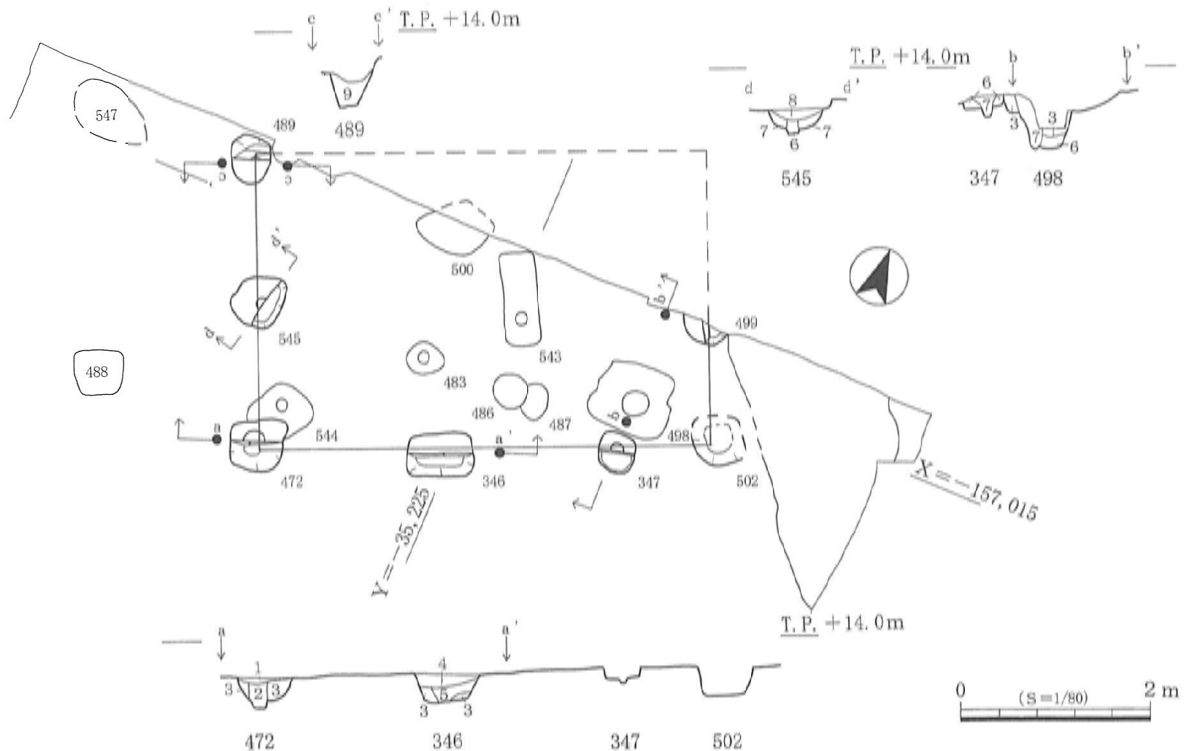


図22 3-建物3

- 1の須恵器鉢のみである。底部外面は回転ケズリ。そこから屈曲部の間は上下の調整に切られる粗いヨコナデ。上半は回転ナデである。内面は上部回転ナデで、底部付近にそれを切る不定方向ナデが見られる。胎土は緑灰10G 5 / 1を呈し、長石・石英をわずかに含む。陶邑産か。狭山池北堤窯上層灰層出土遺物に、これよりやや小ぶりで文様を持つが、似た器形がある。小型で平底や台付きが多い鉢から鉄鉢形への過渡の様相と捉えれば、飛鳥時代前半頃と言えるものである。

3-建物4 (図23・表9・19) 02-2トレンチ西半の中央、現代建物基礎の東側で検出した。3-建物5と重複し、最も遺構密度の高い部分に位置するので、プランの確定に曲折はあったが、最終的に図23のようになった。梁行1間、桁行は2間で止まるか3間以上かは不明。2間なら3.32m。1×2間なら面積は約9.0㎡。長軸はE 6° Nを指向し、正方位から少しずれる程度と言える。

桁行の柱芯距離は北辺が東から1.52m・1.58mとほぼ均等、南辺は1.3m・2.02mと不均等である。

柱穴の形状・規模は多様だが、柱穴底部のレベルはT. P. +13.4~13.5ほどに収まる。その中で431・439・417柱穴がやや深い群、421・434・428柱穴が浅い群でまとまる。柱痕は残らず、柱は全て抜き取られているようである。

出土遺物はいずれも小片で、時期は飛鳥時代以降としか言えない。中世の3-402溝以外は重複する遺構を全て切るのも矛盾はしない。また、正方位に近い方向性から、奈良~平安時代の建物である可能性は残る。だが、建物5と重複し方位も似る事を見れば、飛鳥時代が妥当であろう。

表9 3-建物4 遺物破片数集計表

種別	器種など	遺構No. 細別	417	428	431	434	439	合計
弥生土器	薬		8	5	3	7	23	46
		タタキ				1	4	5
		ハケ					2	2
						2	2	4
		壺				2	5	7
		長頸壺					2	2
	高坏		1			1	2	
土師器			17					17
	薬			2			3	5
	鉢		2					2
	坏皿類							

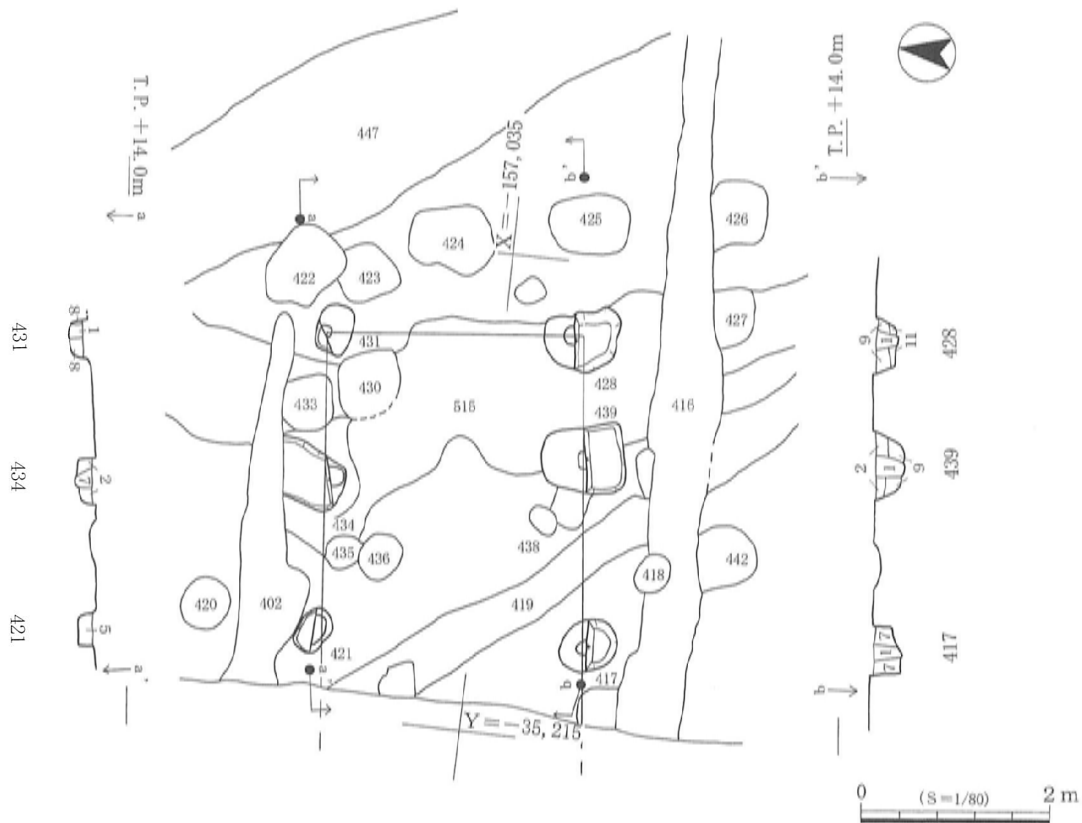


図23 3-建物4

3-建物5 (図24・表10・19) 3-建物4と重複。検出状況は同じ。梁行2間3.94m。桁行は1間しか残っていないが、2間以上伸びると思われ、4.5m以上。長軸はE2°Nを指向し、ほぼ正方位。東側妻の柱芯距離は北が1.8mで棟が北に寄る。桁行の柱芯距離は北辺が約2.9m、南辺が約2.6m。

柱穴は432・435柱穴が小型で丸いが、他は大型で隅丸方形のようだ。423柱穴以外は確実に柱抜き取りである。底部のレベルはT.P.+13.36~13.52mの間に取まるが、わずかに南辺が浅い傾向がある。他に、北辺では3-430柱穴がラインにのり、深さも一致し、この建物の柱穴である可能性が残る。

出土遺物はいずれも図化不能な小片ばかりである事から、飛鳥時代前半以降としか言えない。しかし、423柱穴が3-建物6の422柱穴に切られており、3-建物6は飛鳥時代前半建物群の中心的なものの一つである事から、本建物はそれと先行する溝群との間の時期のものとする事ができる。

3-建物6 (図25・34・表11・19) 02-2トレンチ西半の東側で、3-建物4・5の東に隣接する位置で検出された。当初、南西辺の並びは認識できたが、3-447溝を切っている柱穴やそれより北東の柱穴は、部分的な堆積層を残していたり、その部分が土壌化が強かったせいで認識が遅れ、溝埋土掘削中に検出するなどしたため、埋土断面の実測ができないものもあった。

2間×4間の身舎の北東辺に庇の付く建物である。妻は両側とも3.44mで、庇も含めた幅は北西側が4.92m、南東側が4.54mと少し北西側が開く。長さは南西辺6.78m、北東辺6.72m、庇6.85m。長軸はN18°Wを指向する。面積は

表10 3-建物5 遺物破片数集計表

種別	器種など 細別	遺構No.				合計
		423	427	430	442	
弥生土器		3	1	17	6	27
	甕	1	1	4	1	7
	壺	1				1
	タタキ			5	4	9
土師器				11		11
	甕			1		1
	鉢			2		2
	坏皿類			1		1
サヌカイト		1				1

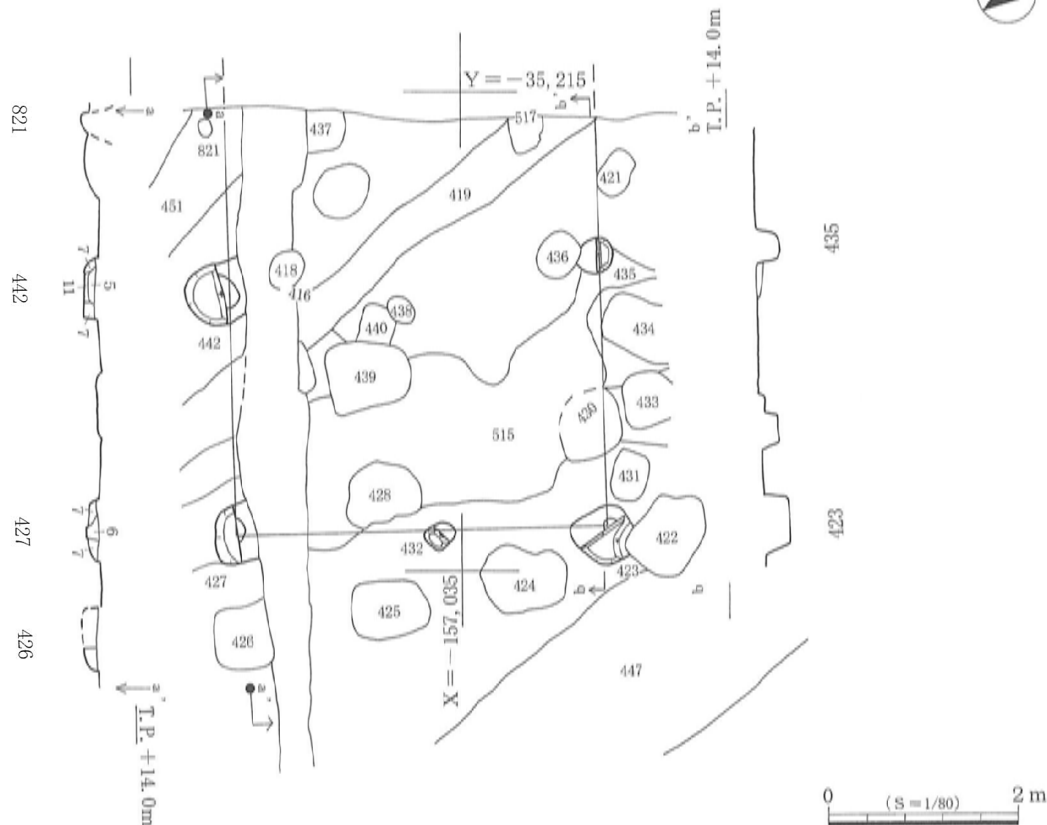


図24 3-建物5

身舎が23.2㎡、底部は8.8㎡、全体で32㎡。

棟持柱柱穴は、北西側は3-447溝埋土上面で検出できず、溝埋土と共に掘削してしまったが、南東側で見れば、南隅柱から1.56mを測り、南西辺に寄っている。この事から、庇のある方を建物正面とすれば、他の建物も棟のラインが離れている辺の方が建物の正面である可能性が高いと考える。

桁行の柱芯距離は意外と均等ではなく、南西辺で2.02~1.46m、北東辺で約2.0~1.54m、庇で1.9~1.6m。庇部分が一番均等に近いのが注目される。

柱穴は南西辺に大型で隅丸方形のものが並び、他は小型の楕円のものが多い。底面のレベルは、ほぼT.P.+13.1m前後に収まるものが多いが、南西辺で426柱穴が、北東辺で634柱穴が、庇で585柱穴が浅い。各列に一つずつ浅い柱穴があり、建物とは関係ない方向性でほぼ直線に並ぶが、何か理由があるのだろうか。断面を確認できたもののうちほとんどは柱抜き取りで、柱痕と確定できるものはない。

3-447溝埋土上面で、この建物の柱穴を三つ検出できなかった理由は、この部分は最も高く、建物廃絶後、部分的な浸蝕と再堆積があったようで、それを溝埋土と一連のものとして誤認し先に掘削したと思われる。本来は溝を建物が切っている証拠に、422柱穴は溝肩部を確実に切っており、516柱穴は溝埋土掘削中に、それを切って掘り込まれているのを確認している。3-445・446溝を建物柱穴が切っている

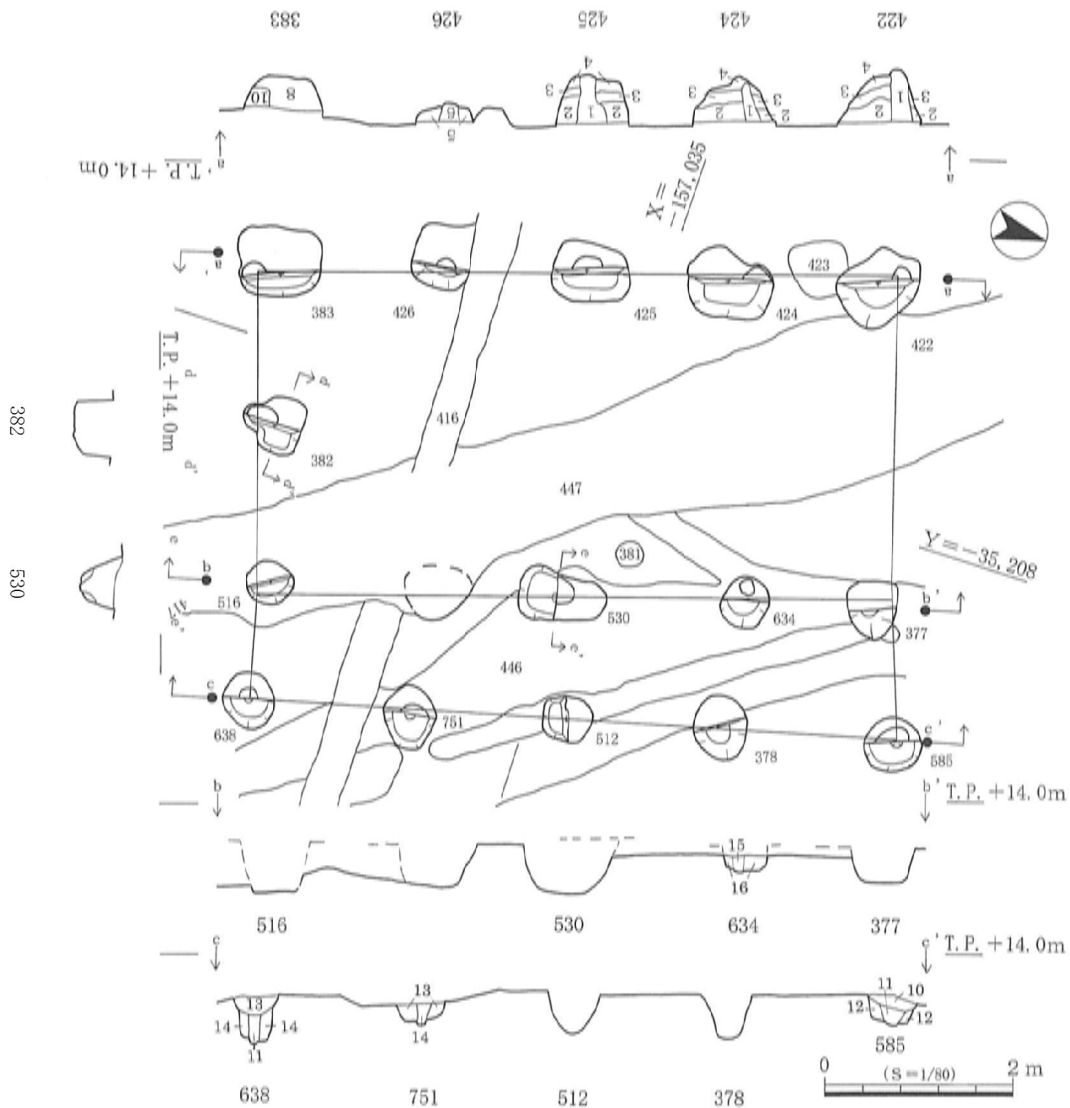


図25 3-建物6



のは確実に検出できており、基本的にこの建物が飛鳥時代溝群に後出するのは間違いない。

出土遺物は表11の通りである。土師器と須恵器に限れば422柱穴が一番多く、次に424柱穴。それに425・383柱穴が続く。これは、3-447溝で須恵器甕をはじめ、須恵器・土師器が一番集中していた土器群に近い事によるものと思われる。対称的に弥生土器を多く出土した3-445・446溝を切る378・512柱穴などでは弥生土器が多く、須恵器・土師器は少ない。

つまり、切り込んだ遺構や周囲の先行する遺構に出土遺物が由来していると考えられ、完形率の低さから見ても、建物柱穴に意識的に入れられたと考えうるものはないと言える。

実測可能なものを図34にあげた。2・3・5～9は422柱穴出土、4は424柱穴出土である。

2は須恵器坏である。外面は底部の中心が無調整な他は回転ナデだが、その前に底部には回転ヘラ切り、屈曲部には回転ヘラケズリ。底部のヘラ沈線は記号にしては煩雑である。内面は回転ナデ後底部中心に一定方向ナデ。胎土は灰N5/0を呈し、長石あり、黒色粒若干あり、石英わずかにあり。完形率約50%。

3は須恵器有脚壺脚部片である。調整は回転ナデ。周の4分の1ほど残存していて透かしが一つ残るので三方か二方透かしか。脚端部には細かい欠けが多く入り、使用痕のように思える。胎土は灰N6/0を呈し、混和砂粒は見られない。

4は土師質ガラス小玉鋳型片である。端部が残る。上面から端面、下面縁部にかけてナデが入るが方向は不明。下面のほとんどは無調整だが平滑。木目なども見えない。芯持ち孔は下面まで貫通し径0.5mmほど。鋳型穴は径5mm、深さ3mm。胎土は明赤褐5YR5/6を呈し、長石・石英を若干含む。微細粒には角閃石もあり。二次的被火の痕跡は判然としない。

5は土師器高坏身部片である。完形率10%以下のため復元径に不安がある。調整はヨコナデ。胎土は明赤褐5YR5/6を呈し、混和砂粒の見られない精良な胎土。外面と破断面の一部に煤附着。

6は土師器高坏片。外面、身部接合の段直下はユビオサエ後ヨコナデ。脚柱部はタテハケ後タテナデ。身部内面の暗文は放射状を螺旋が切る。胎土は浅黄橙10YR8/3を呈し混和砂粒のない精良な胎土。

7は土師器甕片。口縁も周の4分の1以下しか残存せず、復元径に不安あり。調整はヨコナデのみ。胎土は褐灰10YR4/1を呈し、混和砂粒の見られない精良な胎土。内外面部分的に煤附着。

8は弥生土器高坏身部片。内外面ともヨコナデで、外面下部のタテミガキはナデを切る。胎土は灰白10YR8/2を呈し、石英・長石を若干含む。微細粒には黒雲母あり。

表11 3-建物6 遺物破片数集計表

種別	遺構No.	377	378	382	383	422	424	425	426	512	516	530	585	634	638	751	合計	
弥生土器	甕	8	121	1	3	17	23	6	7	18	4	13	14	1	5		241	
	壺	タタキ	6	56	1		4	5	2	1	5	2	1	2	1			86
		長頸壺	6		1		4	5	2	1	5	2	1	1	1			29
	高坏	広口壺	1			1	1	2			2	2		4				13
								2										2
							1											1
			1	24			4		2	1	3			1				36
土師器	甕	13		8	10	52	22	3	2				5	4	1	2	122	
	鉢					4	6										10	
	鉢					10	2	1						2			16	
	高坏				3	1	1		1								7	
	坏皿類	1				1	1										7	
	羽釜	5			2	7	4	1									14	
	鑄型					10											10	
須恵器	甕					6	1	1	1								9	
	壺					4			1								5	
	壺蓋					1	1										2	
	坏蓋 II型式					1											1	

9は弥生土器器台片。残り悪く、復元径に不安。調整不明。3重の同心円文は中の2重の円が単位により位置が異なる。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、混和砂粒は見られない。

3-建物7 (図26・表12・19) 02-2トレンチ西半の南東隅で検出された。394・401柱穴をもって、この建物の独立棟持柱柱穴とするかは、他の柱穴より底のレベルが10cm以上高い事、飛鳥時代の建物とすると独立棟持柱は考えにくい事の2点で否定的ではあるが一応図示した。また、780柱穴は断面図を掲載したが、平面プラン上、この建物の柱穴とは考えにくい。

梁行は1間として2.38m。桁行2間3.39m。面積8.1㎡。まだ、南東調査区外に伸びる可能性もある。長軸はE41°Nを指向する。桁行の柱芯距離は北東妻側からの1間が1.5m・1.64mであるのに対し、742・393柱穴間は1.89mとやや長い。

柱穴は小型の部類に属す。隅丸方形が基本のようである。底のレベルは隅柱である400・788柱穴がT.P. +13.00m・13.16mと深いのに  
対し、ほかはT.P. +13.30~13.40mの間に収まる。393柱穴は掘り方平面形が建物の方向に対し斜めなのが788柱穴と対応し、隅柱的であるが、深さの点では疑問が残る。ちなみに、393柱穴の底はT.P. +13.59m、401柱穴はT.P. +13.52mであ

表12 3-建物7 遺物破片数集計表

種別	遺構No.	393	396	400	401	742	778	合計
弥生土器	器種など							
	タタキ甕	4	1	3	1	2	2	13
	壺	2		2			2	6
	長頸壺	1		1	1	2		5
				1				1
土師器		5		10	18	1	10	44
	甕			1	3		2	6
	高坏				3			3
	坏皿類	1		2	1		2	6
須恵器	坏蓋 II型式	1						1
石					2	4		6

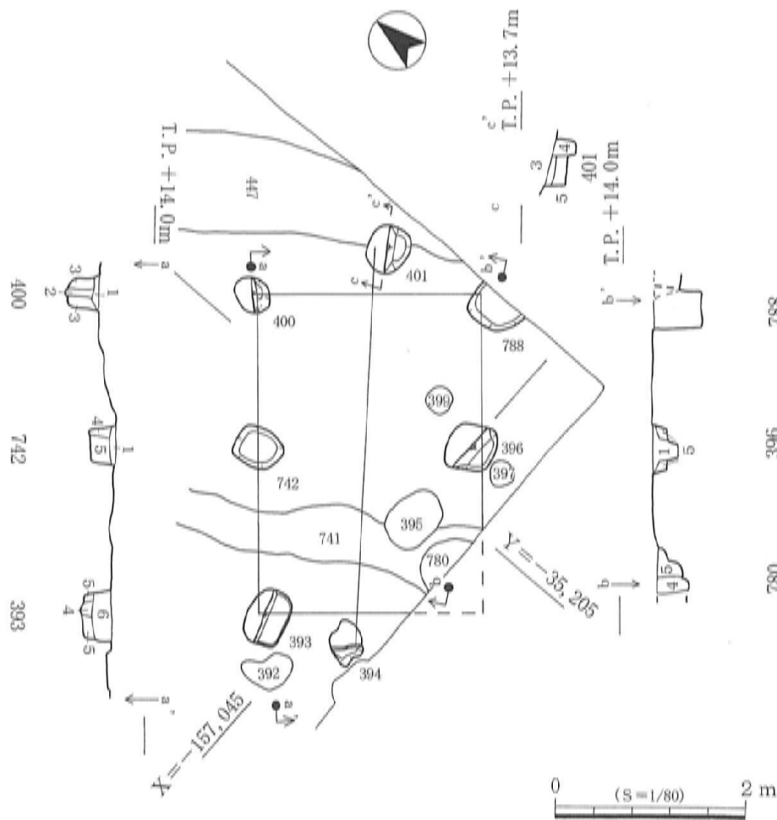


図26 3-建物7

る。396柱穴が確実に柱抜き取りである他は柱痕が残るものが多いようである。柱痕の径は8～18cm。

出土遺物は表12の通り。土器は小片ばかりで、おおよそ周囲の先行する遺構と組成が一致する。石も根石のような出土状況ではない。時期的には飛鳥時代前半以降としか言えない。

3-建物8 (図27・表13・19) 02-2 トレンチ西半北東側で検出された。1間×2間の建物で、梁行1.76m、桁行3.57m、面積8.1㎡。長軸はN21°Wを指向する。柱位置の分かる北東辺の柱芯距離は北西から1.62m・1.95mと南東側の柱間が広い。

柱穴は360柱穴が大型の他は小型。平面形も統一性がない。底のレベルは南東妻側の360・535柱穴が共にT.P. +13.04mと突出して深く。他はT.P. +13.24～13.4m。360・539柱穴以外は柱痕を確認している。柱痕の径は10～17cm。

出土遺物は小片ばかりで、精良な胎土の土師器片から古代以降に建てられたと推測されるのみ。

3-建物9 (図27・表14・19) 3-建物8の東側で02-2 トレンチ東半・西半境で検出された特異な形の建物である。トレンチ東半の4面を検出した時点で確認されたため、調査の先行した西半部分の柱穴の断面は観察していない。

2間×1間で中心に1個柱穴を持つ。妻の幅は南西2.4m、北東2.48m。桁行は北西3.85m、南東3.5m。面積は約9㎡。長軸はE18°Nを指向する。

棟持柱はどちらも南西側から1.1mで棟の通りは若干南西辺に寄る。519・631柱穴間は3.58mを測るが、366柱穴はそのライン上で519柱穴から1.46mとかなり南西に寄る。

柱穴は小型で、隅丸方形を志向するものが多いが、不整形なものもある。底のレベルはT.P. +13.3m

表13 3-建物8 遺物破片数集計表

種別	遺構No.	360	535	537	合計
弥生土器	器種など 細別				
	タタキ壺	1	13	4	18
	壺	1	5		6
土師器		16		2	18
	鉢	1			1
	高坏	2			2

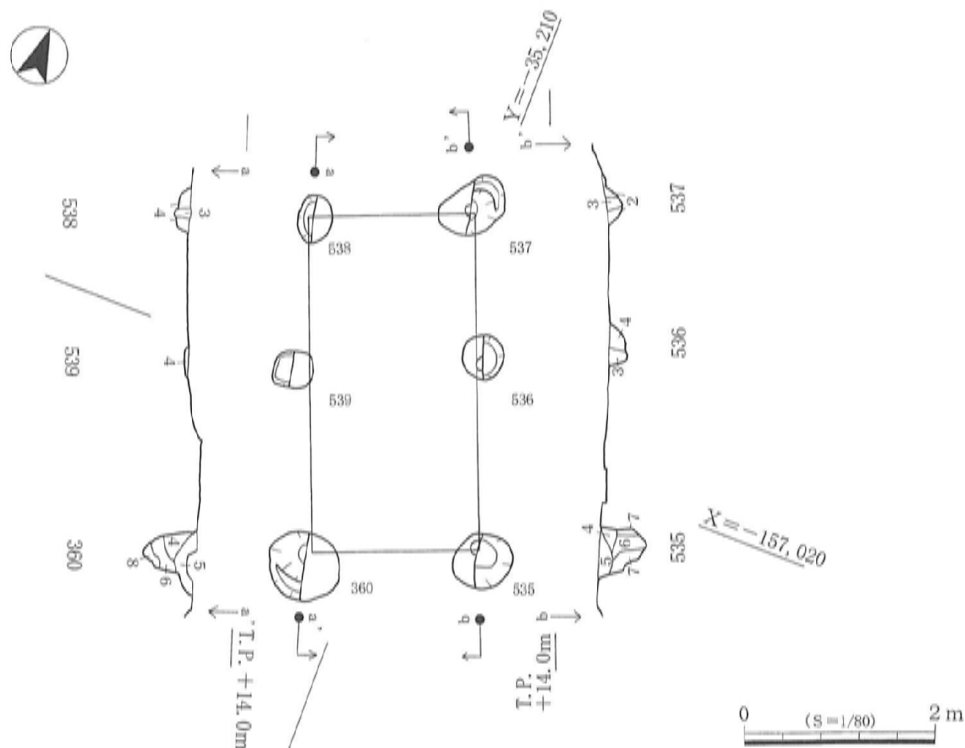


図27 3-建物8

前後のものが多いが、534・519柱穴はそれらより20cm以上深く、368柱穴はかなり浅い。631柱穴は柱の木質が残り、柱穴底部より20cm沈み込んでいる。径は12cm。620・632柱穴も柱痕が確認でき、その径は14cmほど。二つの柱痕に比べ、631柱穴の柱の沈み込みが激しいのは建物の荷重の差か。

出土遺物は少なく、小片のみで、特に時代を特定できない。

3-建物10(図29・表19) 02-2トレンチ東半北西隅で検出した。建物の半分ほどは調査区外に伸びる。初めはこの建物の南東辺と3-622・625柱穴のラインで建物を考えていたが、棟のラインが大ききずれるなど歪な部分が多かったため検討し直し、この形に確定した。しかし、当初案も、増築など、この建物に付帯する構造物とすれば成立可能であると考ええる。また、600・611柱穴は身舎内で南東辺に対し、616柱穴の柱位置とほぼ同じ距離で並び、棟ラインにのる柱穴の可能性はある。

梁行2間以上、2間とすれば細長い建物になるが、2.64m。桁行3間3.5m。ただし、3-596・603柱穴も附随する柱だった可能性がある。2間×3間なら面積は16.9㎡。長軸はE17°Nを指向する。

南西側妻の柱芯距離は1.28m・1.36mで、棟が北西側に寄る。南東辺は北東2間が2.05mと揃うが、もう1間は2.36mとやや広い。611柱穴は側柱の610柱穴と位置が合うが、600柱穴は606柱穴より南西側にずれる。606柱穴は埋土上面で3-604・605柱穴と一体で検出されたが、柱痕検出のため5cmほど下げて三つの柱穴と判明した。605柱穴に切られる事から見ても、掘り方を共有するものではない。

柱穴は大型で隅丸方形を志向する。ただし611・616柱穴は細長い。底のレベルは606柱穴がT.P.+13.12mとやや深い他は、T.P.+13.2~13.3mの間に収まる。

3-612土坑は、位置から見て、この建物に  
関係する可能性がある。3-594土坑もなんら  
かの関連があるように見える。他にも周辺にピ  
ット・柱穴が多く。重複する建物があった可能

表14 3-建物9 遺物破片数集計表

種別	器種など	遺構No.				合計
		366	368	519	534	
弥生土器		1		2	2	5
	広口壺	1				1
土師器		6	1		2	9
	ハケ甕		1			1

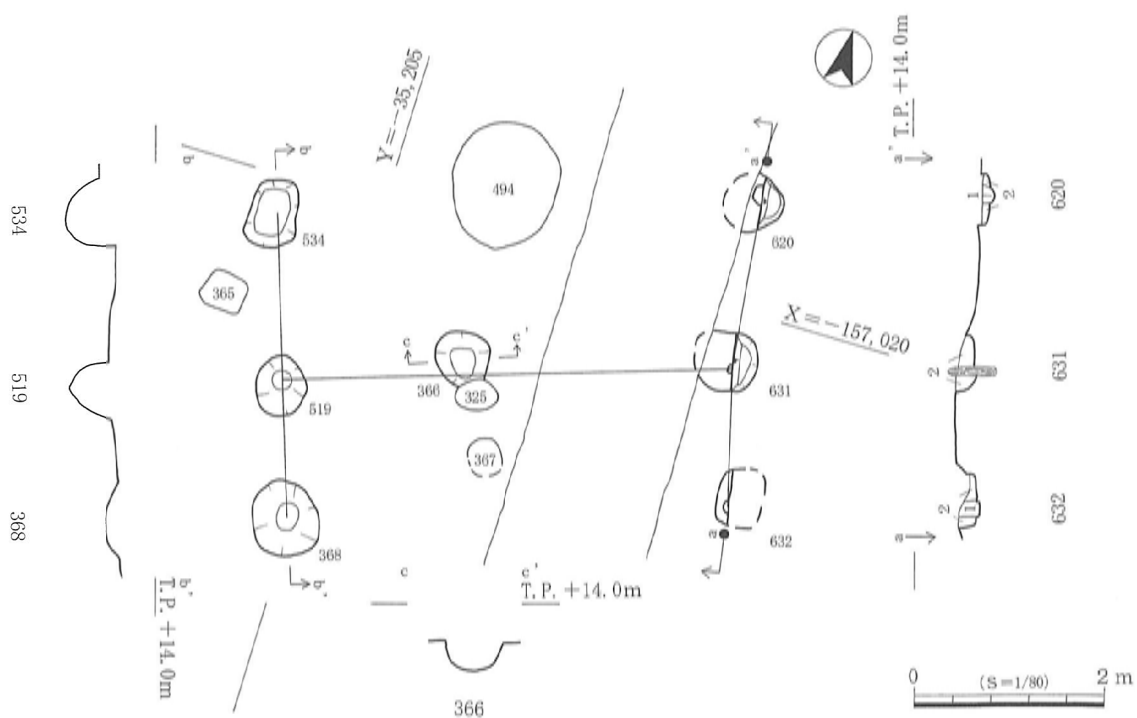


図28 3-建物9

性もあると思われる。出土遺物は皆無であったが、3-建物9と同じ方向性で位置も近いので、同時期と見てよからう。

3-建物11(図30・表15・19) 02-2トレンチ東半の中央よりやや西で検出した。今回の調査で最大の建物である。3間×4間で北西妻幅4.56m、南東妻幅4.58m、北東桁8.26m、南西桁8.18mとかなり整った形である。面積37.6㎡。長軸はN16°Wを指向する。

隅柱を結ぶラインから他の柱は全て内側に寄る。南側2辺はずれがわずかだが、北西辺の641柱穴や北東辺はかなり内側に入る。649柱穴などは柱芯が40cm内側に位置する。柱間は妻では北東側が次第に狭くなり、桁では北西側2間が広く、南東側2間が狭い。特に南東から2間めは、両辺で1.64・1.65mと最狭で、北西側の平均2.26mと60cm以上違う。

柱穴は大型で、ほとんどが隅丸方形志向、ただし正方形に近いものと長方形のものがある。隅柱は長方形。底部のレベルは、隅柱のうち645・651・654柱穴の三つが最も深くT.P.+13.12mで、648・652柱穴が同じ深さ。他はT.P.+13.20m台に収まるが、なぜか残る隅柱の640柱穴は最も浅い部類のT.P.+13.28mである。溝ばかりでなくほかの柱穴やピットなどを切る。

出土遺物は、規模にもかかわらず少数で、いずれも小片である。それによっては時期は特定できない

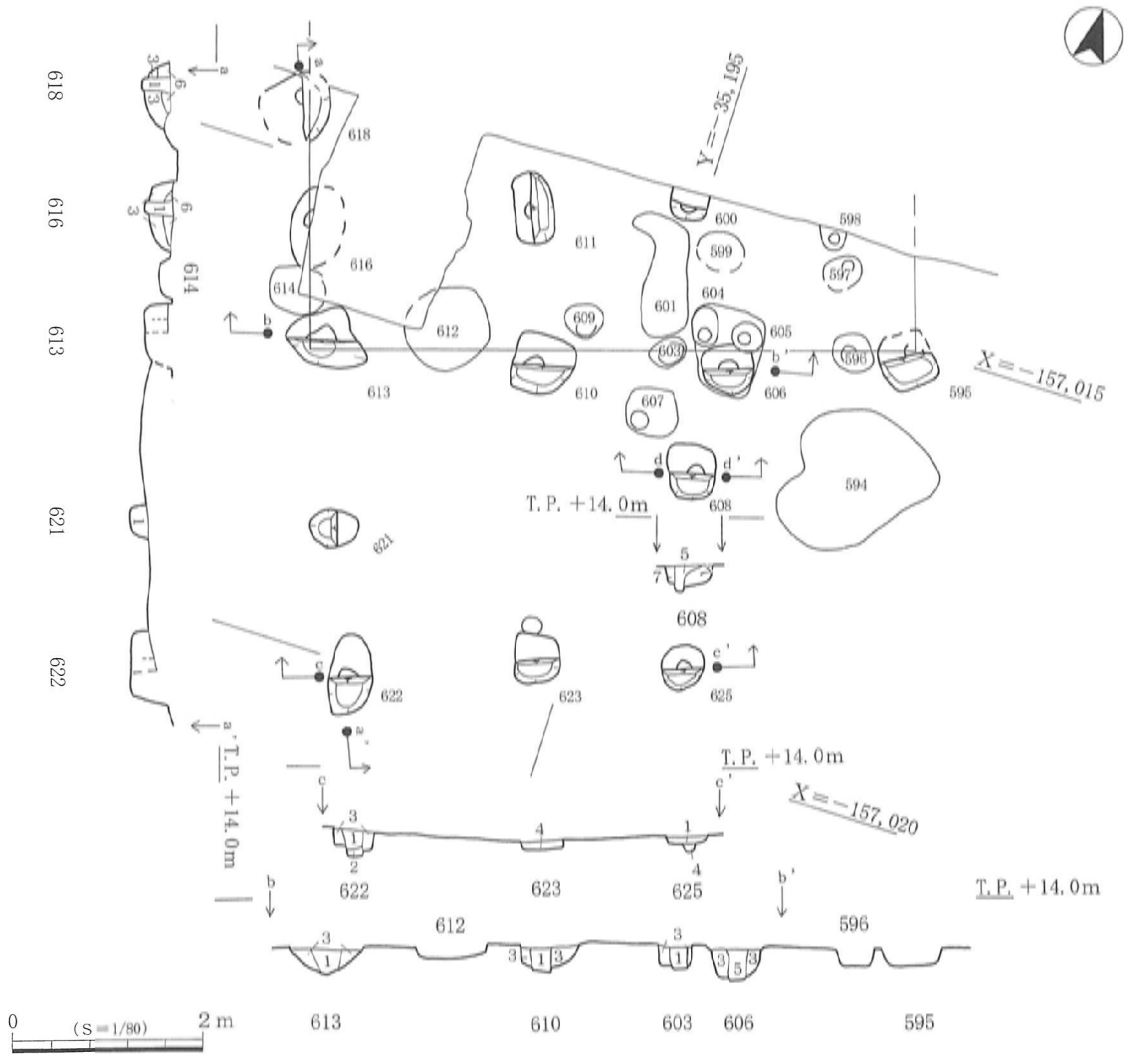


図29 3-建物10

が、飛鳥時代建物群の中心的なものとは言えよう。

3-建物12 (図31・34・表16・19) 02-2トレンチ東半の南西側で検出。2間×3間の身舎の南西妻側に、付帯施設のついた建物。付帯施設の南西端は、720・802柱穴を結ぶラインか。それなら全長6.7mとなるが、726・727柱穴がそれより突出し、721柱穴もあるので、さらに伸びる可能性もある。

梁行3.94m、桁行4.46mでどちらも両辺に差はなく整っている。付帯施設の幅は3.74m。身舎の面積は17.6㎡、付帯施設を合わせると約26㎡ほどか。長軸はE21°Nを指向する。

棟持柱は10cmほど北西側に寄る。

側柱の柱間は北西辺が両側の2間がほぼ同じで中央の1間が狭いのに対し、南東辺は北東側から南西側へ次第に狭くなる。

柱穴は身舎のものは大型でほと

表15 3-建物11 遺物破片数集計表

種別	器種など	遺構No. 細別	643	648	650	653	654	655	合計
弥生土器	高坏				1		1		2
土師器	鉢		1	1	1			1	4
	坏皿類			1				1	1
須恵器			1			1			2
	甕		1						1
	坏蓋 II型式					1			1

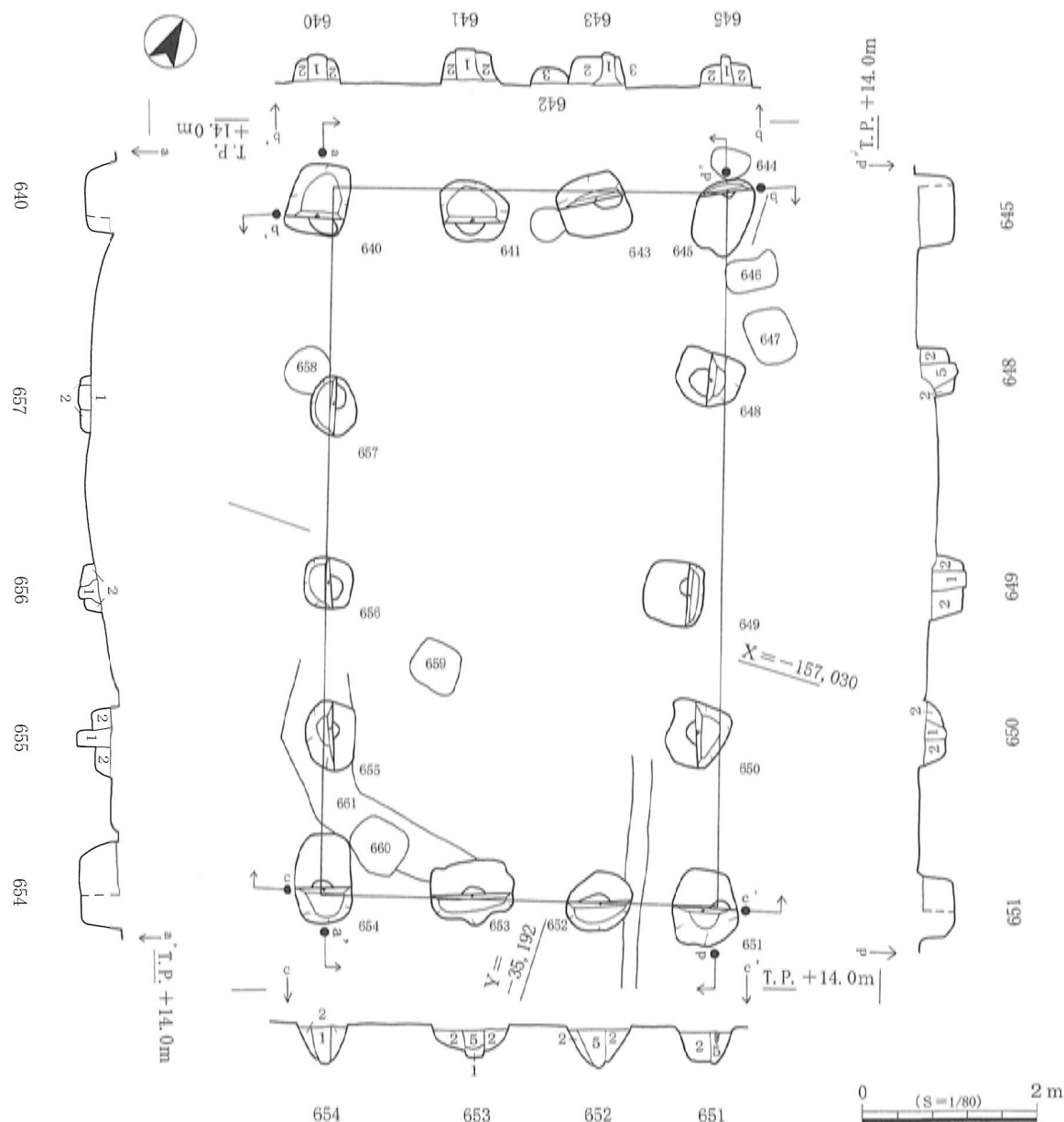


図30 3-建物11

んど隅丸方形、付帯施設では小型の隅丸方形が多い。柱穴底部のレベルは北西辺のものが相対的に南東辺のものより深く、最大40cmの差がある。付帯施設のもの身舎より一段浅い。身舎の柱穴では、T. P. +12.9mのものが733・805柱穴、T. P. +13.0mのものが803・804・729・811柱穴、T. P. +13.25mが699・700柱穴、一番浅いT. P. +13.3mが697・698柱穴となる。柱の痕跡は上がひらくものも多く、ブロック土の入るものもあるので、ほとんどが抜き取り穴と思われる。

出土遺物はほとんど小片で実測できたものは図34-10・11の2点のみである。最新のものが飛鳥時代前半であるとしか言えない。

10は須恵器環蓋片である。回転ナ

表16 3-建物12 遺物破片数集計表

種別	遺構No.	697	699	700	729	731	733	合計
弥生土器	甕		6	4		1	15	26
	タタキ		1	1		1	12	15
土師器	鉢	2		1	2		1	6
	鉢	2			2			4
須恵器	甕			1			2	3
	壺			1				1
	環蓋 III型式						1	1

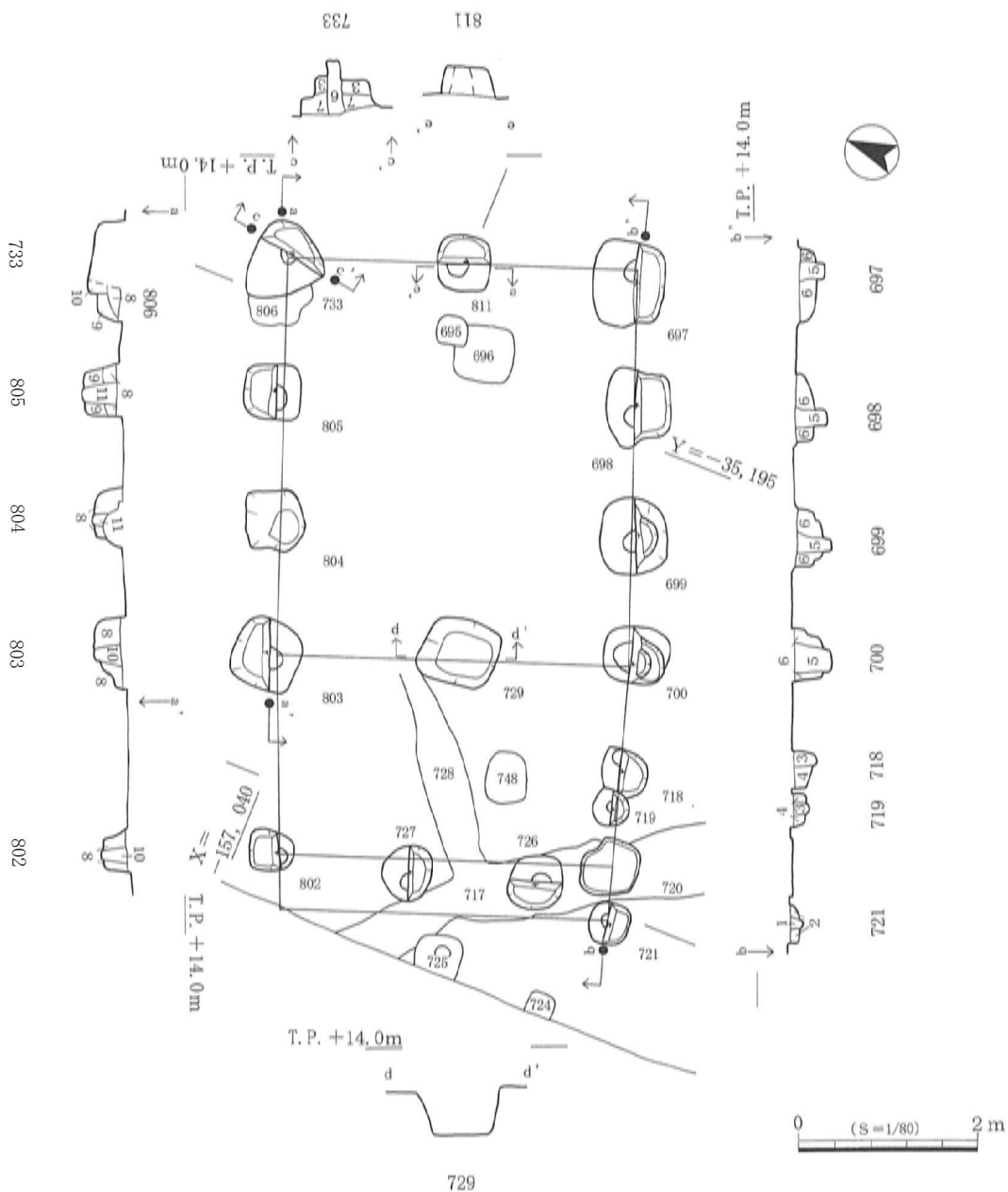


図31 3-建物12

デが基本で、外面上部には回転ヘラケズリ、内面中央付近には一定方向ナデ。胎土は灰白N 8 / 0 を呈し、長石を含む。完形率20%。

11は須恵器甕口縁片である。調整は回転ナデだが、外面に一部カキ目残る。胎土は明青灰 5 P B 7 / 1 を呈し、石英・長石と、黒色粒をわずかに含む。

4-建物1 (図32・表17・19) 02-3-2 トレンチ北西側で検出した3間×3間の建物である。梁行4.2m、桁行は北西辺5.18m、南東辺5.18m。面積21.8㎡。長軸はE 26° Nを指向する。

妻側の柱間は中央の1間が一番広く、南東側が極端に狭い。柱芯距離を各々北西から見ると、南西側1.54m・1.72m・

1.02m、北西側

1.52m・1.74m・

0.96m。いずれ

も中間の2本の

柱は隅柱を結ぶ

ラインにのるか、

わずかに外にず

表17 4-建物1 遺物破片数集計表

種別	器種など 細別	遺構No.	192	194	196	197	198	199	200	201	202	204	合計
弥生土器	甕						2		1	1	2	1	7
	長頭蓋						1				1		2
									1				1
土師器	甕		3	12	1	1		10	6	1			34
	高坏							1	1				2
	坏皿類			2					1				1
	羽釜		1						4	1			7
	甗										1		1
その他	木		1	2									3
	桃核			1									1

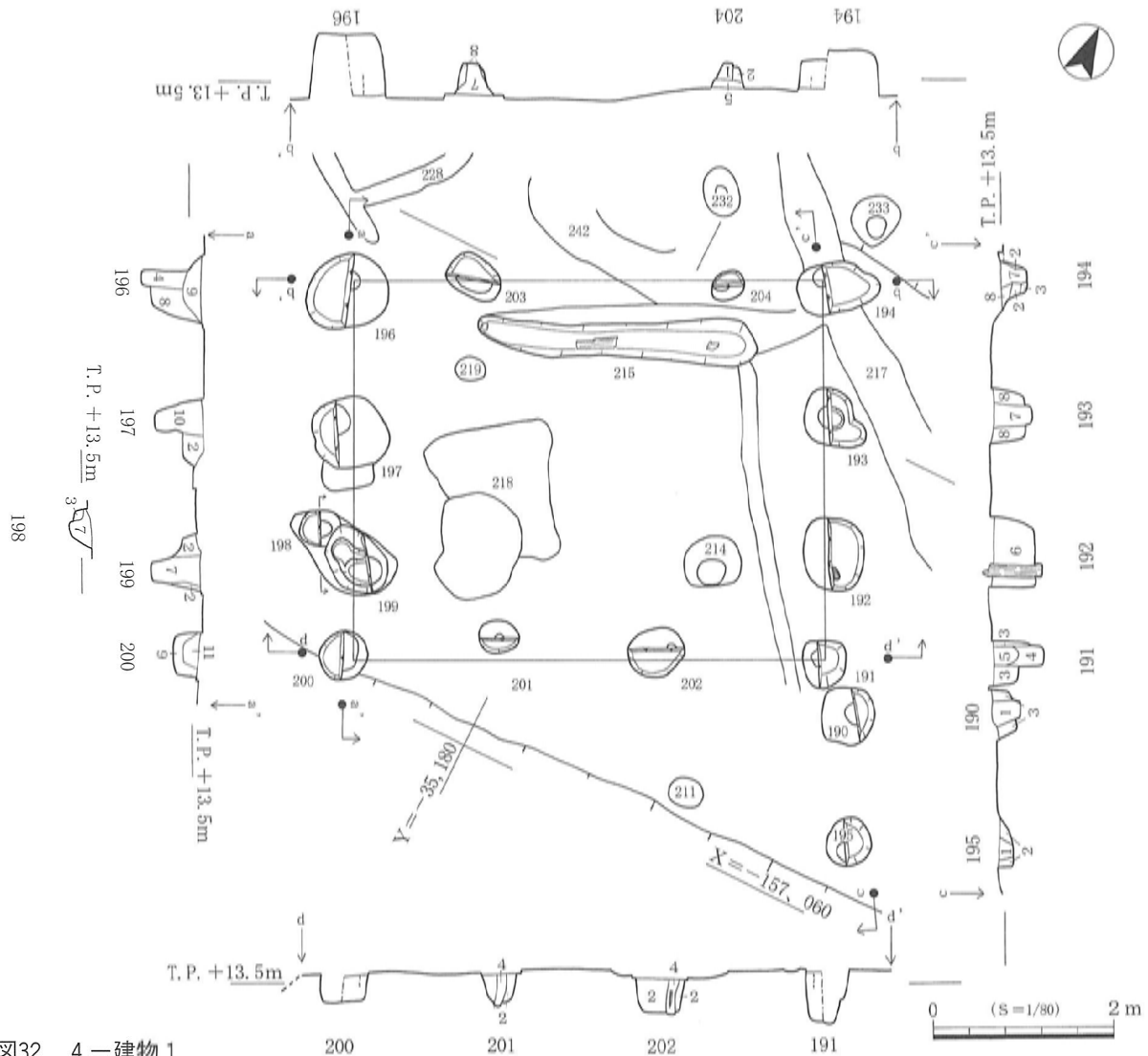


図32 4-建物1



れる。桁行の柱間は中央の1間が一番大きい。南東側は両側との差が30cm以下だが、北西側は柱芯距離を南西側から見ると1.28m・2.82m・1.12mと、その差は50cm以上である。中間の柱2本は南東側では内側にずれ、北西側ではライン上にのる。

北西辺の柱間と関係があると思われる遺構が215溝である。中央の1間と長さを揃え、その内側に平行する。両端に最大長10cm強の礫が置かれ、中央付近から木の板が出土した。間口の広さと考え合わせるとこの1間になんらかの施設があった可能性がある。

柱穴は妻側が大型で、桁行の側柱は小型である。隅丸方形を志向するものはむしろ少ない。柱穴の底のレベルを見ると、隅柱は、196柱穴がT.P. +13.06mと深いが、他の3本はむしろ浅めである。目だって深いのは両妻側の中間の2本で、柱の沈み込みもこれらの柱穴で顕著である。この4本に一番荷重のかかる建物構造であったと思われる。192柱穴は柱の木質の外側がそのまま残っていた。内側は腐朽し、粗砂が詰まっていた。7層からの噴砂と思われる。柱痕が残るのは他に196・201・202柱穴のみで他は確実に抜き取られている。192・196柱穴の柱径は16~18cm、201・202柱穴の柱痕径は10cm弱。

周辺の遺構との関係を見ると、飛鳥時代溝群に含まれる4-217溝を切っている。4-218土坑はその位置から建物の内部施設かと考えたが、弥生土器のみが出土したので違うようである。4-190・195柱穴は北東妻のラインに近い並びかたをするので、南西妻側にそれと対応するような柱穴があったのが後世の堀田によって消滅したと考えれば、南東辺に庇などの付帯施設があった可能性もある。4-214柱穴は建

表18 4-建物2 遺物破片数集計表

種別	遺構No, 器種など 細別	331	332	333	334	338	合計
弥生土器		3	11	22	4	2	42
	甕	1	3	1			5
	タタキ		1	1			2
	壺 底部		1				1
土師器						2	2

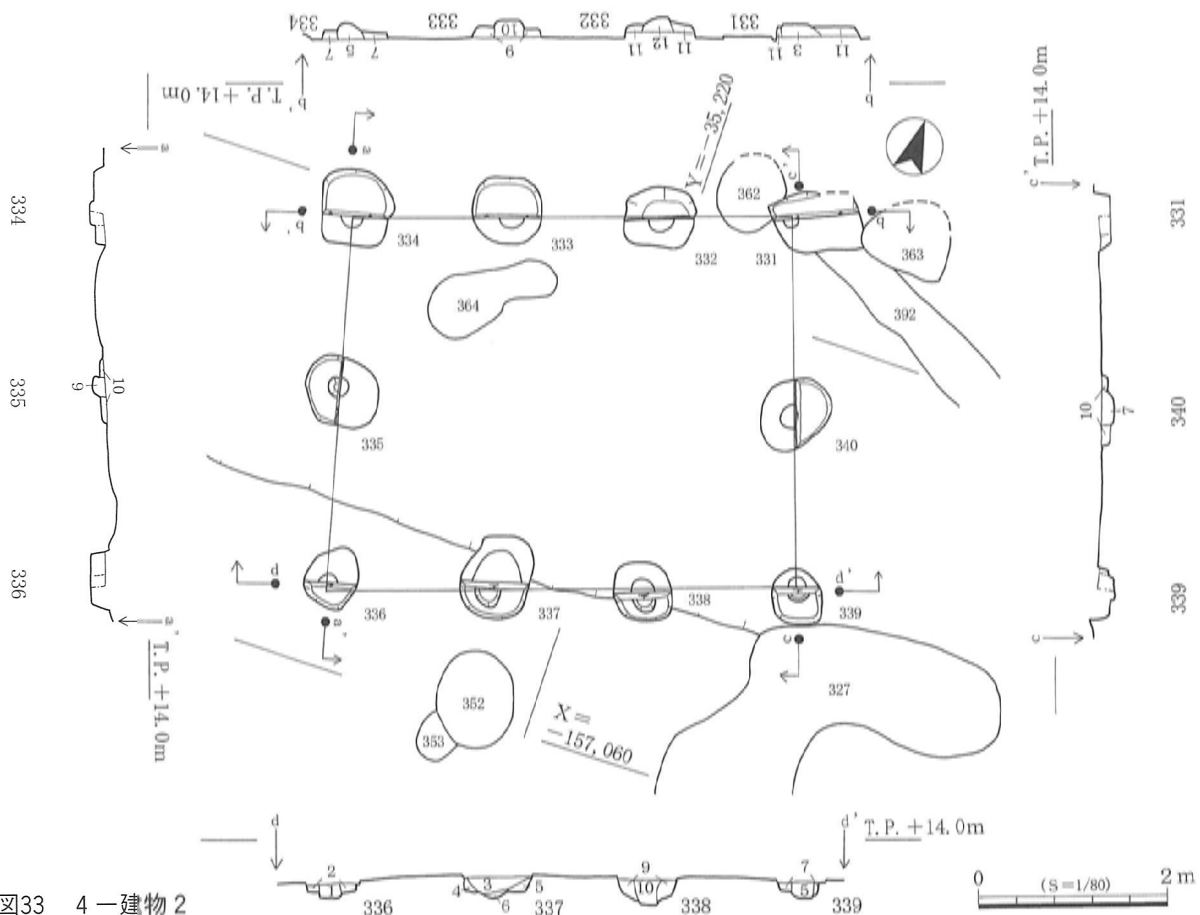


図33 4-建物2

物内側で192・199柱穴を結ぶライン上にあるので、建物に関係する可能性もなくはない。

出土遺物は多くなく、小片のみで、意識的に入れられたと思えるものはない。ただ、隅柱である194柱穴から桃核が出土しているのは注目できる。

4 - 建物 2 (図33・表18・19) 02-3-3 トレンチ西側で検出された2間×3間の建物である。梁行は北東側3.92m、南西側3.98m。桁行は北西側4.65m、南東側4.98m。北東側の二つの隅は正確に直角を成すが、南西辺のみは斜めになる。面積は19.0㎡。長軸はE19° Nを指向する。

桁行の柱間は柱芯距離で、北西側が北東から1.39m・1.58m・1.68m、南東側も同じく1.63m・1.63m・1.72mを測る。南西側が広い傾向がある。妻の棟持柱の柱芯は、南西側が北西から1.8m、北東側が南東から1.8mと、棟のラインが身舎に対して斜めに走る。全ての柱が隅柱を結ぶラインにのる。

柱穴は大型の隅丸方形を基本とする。底のレベルは全てT.P.+13.40m台で揃い、他の規則性は認められない。削平がきついが、断面形状やブロック土の存在から柱は全て抜き取りとみられる。

出土遺物は、周辺に弥生時代の遺構が多い事を反映して弥生土器の割合が高いが小片のみである。

4 - 柵列 1 (図35・表20) 02-3-2 トレンチ中央で検出。検出長7.26m。E28° Nを指向する。

柱位置は正確に直線に並ぶ。北東側は堀田の落ち込みがあるので、一番浅い180柱穴より浅いものがあつたとしたら消滅している可能性がある。平面的な位置では、一番長い180・181柱穴間の長さを延長してもトレンチ内にあるはずである。南西も調査区外に伸びる可能性はある。しかし、現状で両端の179・189柱穴が突出して深いので、これで完結している可能性もある。

柱穴も両端が大型、他は小型で円形と隅丸方形がある。181・189は柱痕が残り、他は抜き取り。

遺物は小片のみで土師器が古代のものと言えないが、方向性が4 - 建物 1と同じである事から同時期併存が考えられる。

4 - 柵列 2 (図35・表21) 02-3-3 トレンチの南東側で検出された。検出長3.84m。検出した3間で、中央の1間がやや曲がるが、他の2間は方向を合わし、それで見ればN34° Wを指向する。

柱穴はかなり小さく、不整な円形である。底部のレベルはほぼT.P.+13.4mで揃う。柱痕が残るか

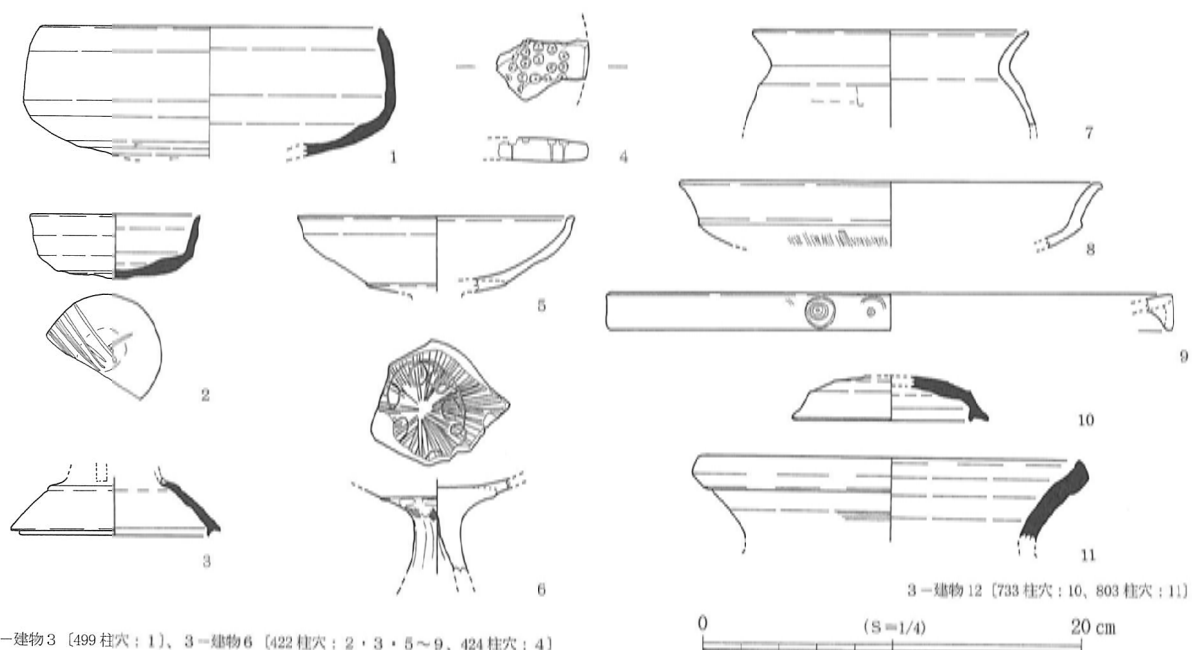


図34 建物柱穴出土遺物

表19 建物柱穴土色・土質一覧

3-建物1

- 1、灰10Y 4 / 1 ~ 5 / 1 シルト~細砂、下部に細砂し、しまり悪い。柱痕。
- 2、灰10Y 4 / 1 ~ 5 / 1 シルト・緑灰10G Y 5 / 1 (6層系)・オリーブ灰2.5Y 6 / 1 細砂のブロック。
- 3、オリーブ灰2.5G Y 5 / 1 細砂~中砂内に、灰10Y 4 / 1 シルトのブロック若干あり。
- 4、オリーブ灰2.5G Y 5 / 1 細砂~中砂。
- 5、緑灰10G Y 5 / 1 シルト・灰10Y 4 / 1 ~ 5 / 1 シルトのブロック、砂粒なし。抜き取り痕。
- 6、灰10Y 4 / 1 シルト、炭化物・植物遺体若干あり。抜き取り痕。

3-建物2

- 1、暗青灰5 B 3 / 1 シルト~粘土内に、青灰10B G 5 / 1 シルトの小ブロックあり。柱痕。
- 2、暗緑灰10G Y 4 / 1 シルトとオリーブ灰5 G Y 5 / 1 シルトのブロック。
- 3、灰5 Y 4 / 1 シルト内に、緑灰7.5G Y 5 / 1 シルトのブロックあり。
- 4、灰5 Y 4 / 1 シルト。柱痕。
- 5、灰10Y 5 / 1 シルト。4層の二次堆積?

3-建物3

- 1、黄灰2.5Y 4 / 1 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂あり、炭化物わずかにあり。4層二次堆積。
- 2、黄灰2.5Y 4 / 1 シルト~細砂、炭化物若干あり。
- 3、オリーブ黄5 Y 6 / 3 シルト (5層系) のぼやけたブロック多し、その間に2。
- 4、黄灰2.5Y 4 / 1 シルト~細砂内に、オリーブ黄5 Y 6 / 3 シルトのブロック多し。
- 5、4 とほぼ同じ、但しブロック少ない、炭化物あり。
- 6、灰5 Y 4 / 1 シルト~細砂、粗砂若干あり。
- 7、灰5 Y 4 / 1 シルト内に、オリーブ黄5 Y 6 / 4 シルトのブロック若干あり。
- 8、灰オリーブ5 Y 5 / 2 粘質土、シルト主体、粗砂若干あり。
- 9、褐灰10Y R 4 / 1 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂若干あり、オリーブ黄5 Y 6 / 3 シルトの小ブロック若干あり。

3-建物4・5

基本土質

- a、オリーブ黄~灰オリーブ5 Y 6 / 4 ~ 5 / 2 シルト~粘土 (5層系)、Fe あり。
- b、黄灰2.5Y 4 / 1 粘質土、シルト主体、細砂~中砂若干あり、粗砂わずかにあり。
- c、黄灰2.5Y 5 / 1 シルト、粗砂若干あり。

- 1、b内aのぼやけたブロックあり、炭化物若干あり。抜き取り痕。
- 2、b内aの扁平なブロックあり、炭化物多し。
- 3、c内aのブロックあり。
- 4、c内aのぼやけたブロック・炭化物わずかにあり。
- 5、bのみ。
- 6、b内aのぼやけたブロックわずかにあり。抜き取り痕。

- 7、b内aのブロック若干あり。
  - 8、b内aのブロック若干あり、炭化物わずかにあり。
  - 9、b内aのブロックあり、炭化物若干あり。
  - 10、b内炭化物わずかにあり。
  - 11、b・aの混濁に粗砂多し。
- 

### 3-建物6

- 1、黄灰2.5Y 4 / 1粘質土、シルト主体、細砂～中砂若干あり、粗砂わずかにあり。内に、オリーブ黄5 Y 6 / 4シルト～粘土のぼやけたブロックあり、炭化物若干あり。抜き取り痕。
  - 2、黄灰2.5Y 4 / 1粘質土、シルト主体、細砂～中砂若干あり、粗砂わずかにあり。内にオリーブ黄5 Y 6 / 4シルト～粘土の扁平なブロックあり、炭化物多し。
  - 3、黄灰2.5Y 5 / 1シルト、粗砂若干あり。内に、オリーブ黄5 Y 6 / 4シルト～粘土のブロックあり。
  - 4、黄灰2.5Y 5 / 1シルト、粗砂若干あり。内に、オリーブ黄5 Y 6 / 4シルト～粘土のぼやけたブロック・炭化物わずかにあり。
  - 5、黄灰2.5Y 4 / 1粘質土、シルト主体、細砂～中砂若干あり、粗砂わずかにあり。
  - 6、5内にオリーブ黄5 Y 6 / 4シルト～粘土のぼやけたブロックわずかにあり。
  - 7、5内に同上のブロック若干あり、炭化物わずかにあり。
  - 8、5内に同上のブロックあり。炭化物若干あり。
  - 9、5内に炭化物わずかにあり。
  - 10、灰5 Y 5 / 1粘質土、シルト主体、粗砂わずかにあり。内に、オリーブ黄5 Y 6 / 4細砂～中砂のブロックあり。
  - 11、灰N 4 / 0シルト。
  - 12、灰7.5Y 4 / 1シルト～細砂。
  - 13、灰5 Y 4 / 1粘質土、シルト主体、粗砂～細砂若干あり、炭化物わずかにあり。
  - 14、13の中に、灰5 Y 5 / 1細砂のブロック若干あり。
  - 15、灰5 Y 4 / 1シルト～極細砂。
  - 16、灰5 Y 5 / 1細砂～シルト間に、灰5 Y 4 / 1シルトのブロック多し。
- 

### 3-建物7

- 1、灰オリーブ5 Y 6 / 2シルト～細砂。
  - 2、灰7.5Y 4 / 1シルト。
  - 3、灰5 Y 4 / 1シルト、下部に粗砂やや混じる。
  - 4、灰オリーブ～灰5 Y 5 / 2～5 / 1シルト～極細砂。
  - 5、灰5 Y 5 / 1シルト内に、オリーブ黄5 Y 6 / 4粘質土、シルト主体、中砂若干あり、のややぼやけたブロックあり。
  - 6、灰5 Y 4 / 1シルト、浅黄5 Y 7 / 3シルトの小ブロックと炭化物わずかにあり。
  - 7、灰5 Y 4 / 1シルト内に、オリーブ黄5 Y 6 / 4～灰7.5Y 6 / 1シルトのブロックあり、炭化物若干あり。
- 

### 3-建物8

- 1、灰オリーブ7.5Y 5 / 2粘質土、シルト主体、粗砂～極粗砂あり。
- 2、灰オリーブ7.5Y 5 / 2シルトの小ブロック間に、粗砂～極粗砂。

- 3、灰5 Y 4 / 1 粘質土、シルト主体、粗砂～細砂あり。
  - 4、灰オリーブ5 Y 5 / 2 粘質土、シルト主体、中砂若干あり。のブロック間に、粗砂～極粗砂。
  - 5、黄灰2.5 Y 5 / 1 粘質土、シルト主体、中砂～粗砂若干あり。
  - 6、灰5 Y 4 / 1 粘質土、シルト主体、粗砂～細砂若干あり、炭化物わずかにあり。
  - 7、6と灰5 Y 6 / 1 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂わずかにあり。のブロック。
  - 8、灰5 Y 4 / 1 粗砂～極粗砂に、シルト含む、灰オリーブ5 Y 5 / 2 シルトのブロック下部にわずかにあり。
- 

### 3 - 建物9

- 1、灰7.5 Y 4 / 1 粘質土、シルト主体、粗砂若干あり。内に、オリーブ黄5 Y 6 / 4～オリーブ灰10 Y 6 / 2 シルトのブロックあり。
  - 2、1より粗砂多く、ブロックも多し。
- 

### 3 - 建物10

- 1、灰N 4 / 0 シルト内に、「灰5 Y 4 / 1 粘質土、シルト主体、粗砂あり。」と「緑灰10 G 5 / 1 シルト」のブロックあり。
  - 2、灰5 Y 4 / 1 粘質土、シルト主体、粗砂多し。
  - 3、「灰5 Y 4 / 1 粘質土、シルト主体、粗砂多し。」と「暗緑灰7.5 G Y 4 / 1 シルト。」のぼやけたブロック。
  - 4、オリーブ灰5 G Y 5 / 1～灰オリーブ5 Y 5 / 3 砂質土、中砂～粗砂にシルト混じる。
  - 5、暗青灰10 B G 4 / 1 シルト、細砂～中砂わずかにあり。
  - 6、灰～灰オリーブ5 Y 4 / 1～5 / 2 粘質土、シルト主体、粗砂多し。
  - 7、灰5 Y 4 / 1 シルト内に、青灰5 B G 5 / 1～オリーブ灰2.5 G Y 6 / 1 シルトのブロック多し。
- 

### 3 - 建物11

- 1、暗青灰5 B 4 / 1～灰5 Y 5 / 1 シルト内に、緑灰10 G Y 5 / 1 シルトの小ブロックと炭化物若干あり。
  - 2、灰N 4 / 0 シルト内に、緑灰10 G Y 5 / 1 シルトのブロックあり、炭化物若干あり。
  - 3、オリーブ灰2.5 G Y 5 / 1 粘質土、シルト主体、細砂若干あり。
  - 4、灰10 Y 4 / 1 シルトのブロック間に暗青灰5 B 4 / 1 シルトあり。
  - 5、暗青灰5 B 4 / 1～灰5 Y 5 / 1 シルト内に、灰10 Y 6 / 1 シルトのブロックあり、炭化物・粗砂わずかにあり。
- 

### 3 - 建物12

- 1、オリーブ黄7.5 Y 6 / 3 シルトと灰N 4 / 0 シルトのぼやけたブロック。
- 2、灰N 4 / 0 シルト内にオリーブ黄7.5 Y 6 / 3 シルトのブロック。
- 3、暗青灰5 B 3 / 1 シルト、細砂若干あり。
- 4、暗青灰5 B 4 / 1 粘質土、シルト主体、粗砂わずかにあり。
- 5、灰N 4 / 0 シルト内に、オリーブ灰2.5 G Y 6 / 1 シルトの小ブロックと炭化物わずかにあり。
- 6、灰N 4 / 0 シルト内に、灰オリーブ5 Y 6 / 2～灰10 Y 6 / 1 シルトの小ブロック若干あり。
- 7、灰オリーブ5 Y 5 / 2 シルト～極細砂と、灰N 4 / 0 シルトのブロック。
- 8、灰N 4 / 0 シルト内に、青灰10 B G 5 / 1 シルトと粗砂のブロック。
- 9、灰N 4 / 0 シルト内に、青灰10 B G 5 / 1 シルトのぼやけたブロック。

10、灰N 4 / 0 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり。

11、暗オリーブ灰 5 G Y 4 / 1 シルト。

---

#### 4 - 建物 1

- 1、暗緑灰10G Y 3 / 1 シルト内に、灰2.5G Y 5 / 1 シルト～極細砂の小ブロック若干あり。特に下部に多し。柱抜き取り痕。
  - 2、暗緑灰10G Y 3 / 1 シルト内に、灰2.5G Y 5 / 1 シルト～極細砂の小ブロックあり。柱穴埋土。
  - 3、暗緑灰10G Y 3 / 1 シルト内に、灰2.5G Y 5 / 1 シルト～極細砂のブロック多し。柱穴埋土。
  - 4、暗青灰10B G 3 / 1 シルト。柱痕？
  - 5、暗緑灰10G Y 4 / 1 シルト、粗砂若干あり、柱痕への二次流入土か。
  - 6、暗緑灰10G Y 3 / 1 シルト内下半に、灰2.5G Y 5 / 1 ～緑灰10G 5 / 1 シルト～極細砂のブロックあり。柱穴埋土。
  - 7、暗オリーブ灰2.5G Y 3 / 1 シルト、わずかに炭化物・粗砂あり、底部付近に暗緑灰 5 G 4 / 1 シルトのブロック多し。柱抜き取り痕。
  - 8、2.5G Y 3 / 1 シルト、わずかに炭化物・粗砂あり、暗緑灰 5 G 5 / 1 ～灰2.5G Y 5 / 1 シルトのブロックあり。柱穴埋土。
  - 9、暗緑灰10G Y 4 / 1 シルト、炭化物わずかにあり、部分的に灰2.5G Y 5 / 1 シルト～極細砂のブロック若干あり。二次流入土か。
  - 10、暗緑灰10G Y 4 / 1 シルト、炭化物わずかにあり、灰2.5G Y 5 / 1 シルト～極細砂の小ブロック若干あり。抜き取り痕。
  - 11、暗オリーブ灰 5 G Y 4 / 1 シルト、炭化物あり。二次流入土？
- 

#### 4 - 建物 2

- a：灰～オリーブ黒7.5Y 4 / 1～3 / 1 粘質土 シルト～細砂主体、粗砂あり。4 - 1 層系。
- b：緑灰7.5G Y 5 / 1 シルト～細砂 4 層。
- c：灰オリーブ 5 Y 5 / 3 シルト～細砂 4 層。
- d：灰オリーブ～暗オリーブ 5 Y 5 / 3～4 / 4 粗砂主体、シルト多し、Fe あり。
- 1、a のブロック多し、間に b。抜き取り。
  - 2、c 内に a の小ブロック若干あり。
  - 3、a と b のブロック。抜き取り。
  - 4、b 内に a のブロックあり。
  - 5、d。
  - 6、d と 3 の混濁。抜き取り。
  - 7、a 内に c のブロック若干あり。
  - 8、b のブロック間に a、下部に d。抜き取り。
  - 9、d 内に a のブロック若干あり。
  - 10、d 内上部に a・b の小ブロックあり。抜き取り。
  - 11、a 内に b のブロックあり。
  - 12、a 内に b の小ブロックわずかにあり。抜き取り。
-

抜き取りかは若干不明確だが、柱痕なら径は8～14cm。

遺物は弥生土器の小片がわずかに出土したのみである。

北西側は堀田があるので続きが失われた可能性がある。南東は確認調査の00-3トレンチに続く可能性のあるピットはあるが、その場合、そこで検出された建物と近接しすぎ、同時期併存は考えにくい。方向性は3-建物7を直角に振ったものに近いが、柱穴の規模など、建物群とは共通性が低いと言える。むしろ、隣接する4-286溝に平行すると見る事もでき、時期的には溝群と併存した可能性もある。

3-376住居(図36～43・表22) 02-2トレンチ西半北東側で検出した。平面プラン隅丸長方形の竪穴式住居である。やや不整形な部分もあるが、平面規模は2.5m×3.2m。面積およそ8㎡の小型の住居である。残りの良い所で底面まで深さ20cmほどある。長軸方向はE14°Nを向く。

大量の遺物が出土したため、床面の詳細な検出ができず、底面の遺構を床面検出時に掘削したり、床面で段階的に掘り分けるべき遺構を底面検出時に掘ったりしたため、若干混乱があったが、床面や断面も参考に、整理してみたい。

竪穴が掘削された時(図38)、北辺沿い西半に北西隅からスロープで下がってくる段が削り出される。検出時に竪穴北西隅が四角く欠けたような形になっていたのはスロープの浅い部分が削平されたためと考えられる。その段の東端付近上面には浅いくぼみがある。この削り出しの段はおそらく竈の基礎と推測されるが、積極的に肯定できる要素はない。

他に、底面の遺構としては南辺中央に位置し外に

表20 4-柵列1 遺物破片数集計表

種別	器種など 細別	遺構No.			合計
		179	180	189	
弥生土器				2	2
土師器		1	1		2
	鉢	1			1

表21 4-柵列2 遺物破片数集計表

種別	器種など 細別	遺構No.			合計
		312	313	314	
弥生土器		4	1	2	7
	タタキ甕			1	1

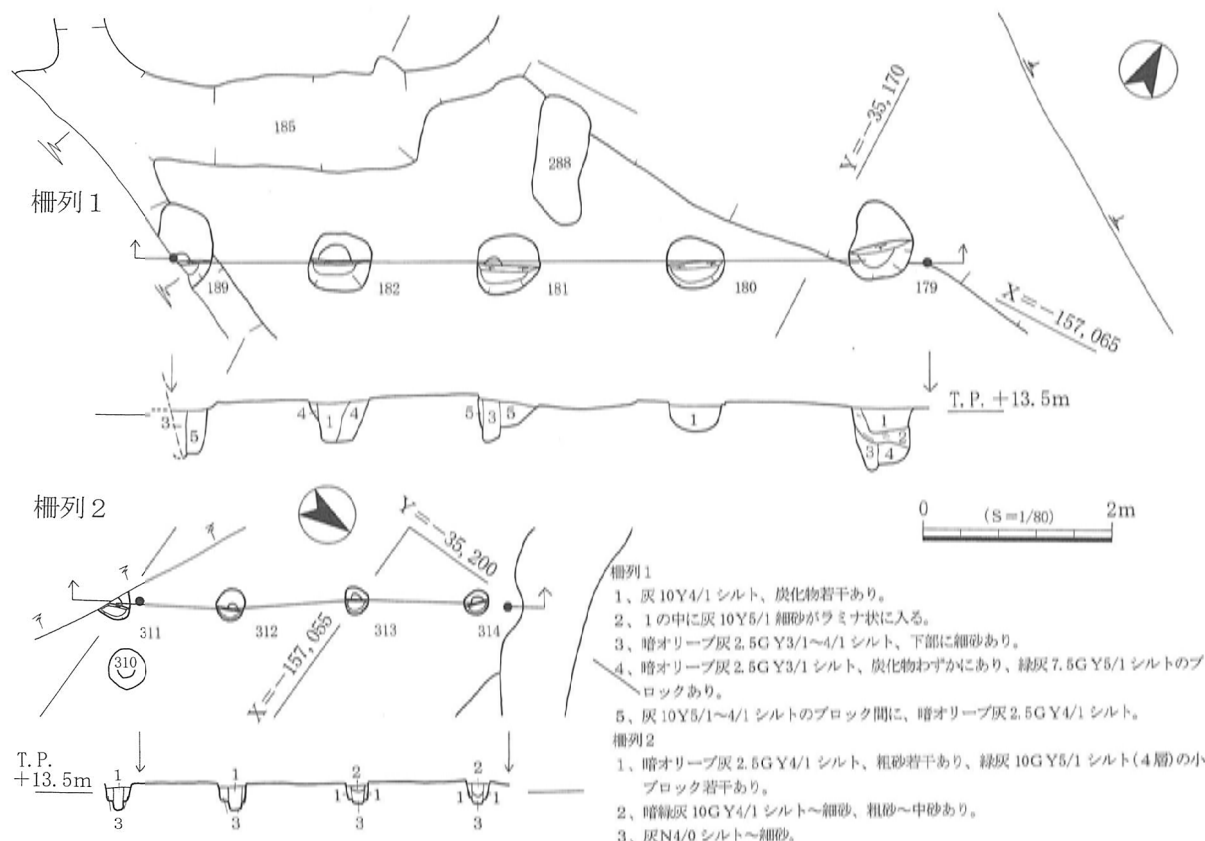


図35 4-柵列1・2



図36 3-376住居上層上面出土状況

(図中の1~2桁の数字は土器取上げ番号)



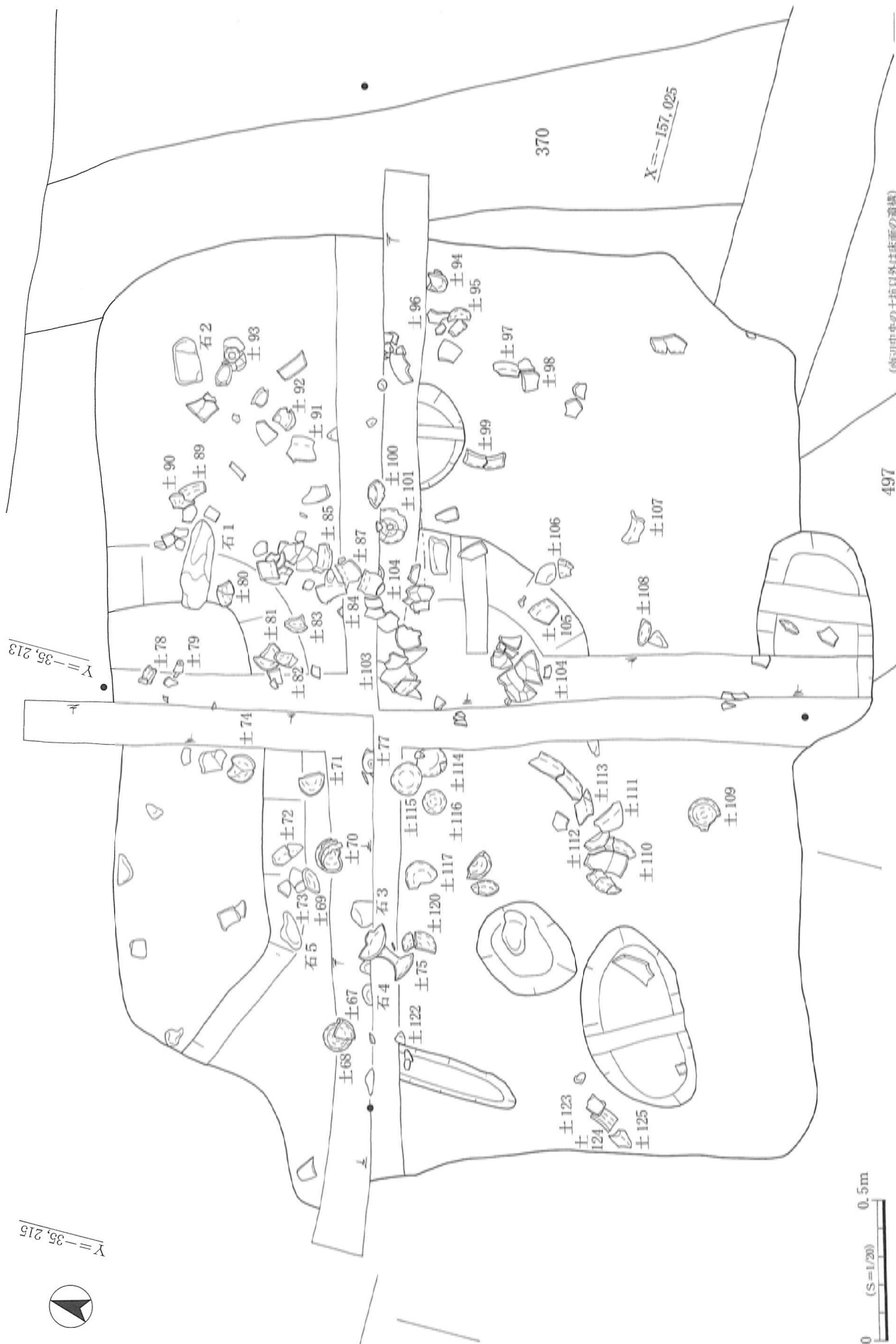


図37 3-376住居上層下半出土状況

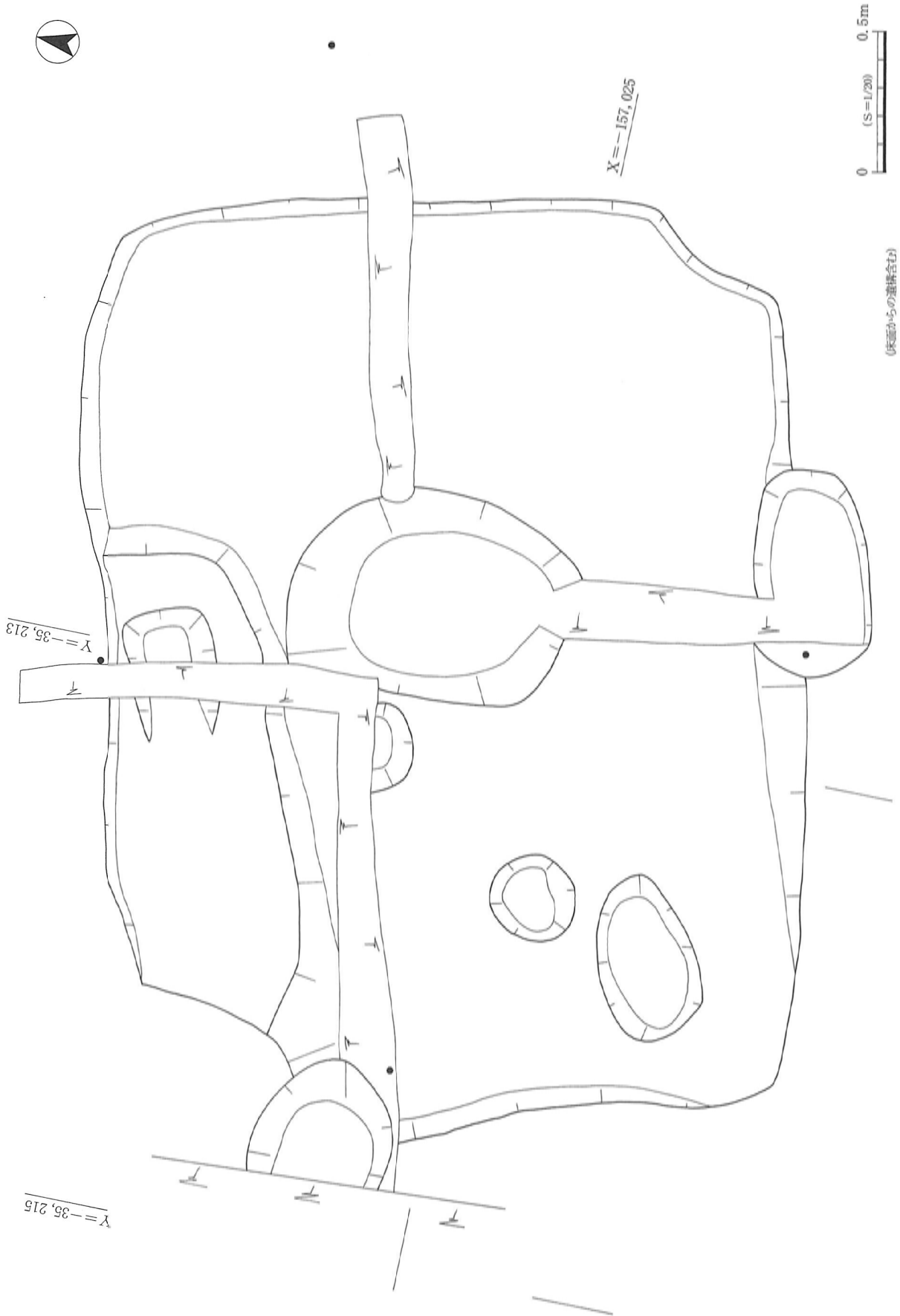


図38 3-376住居底面

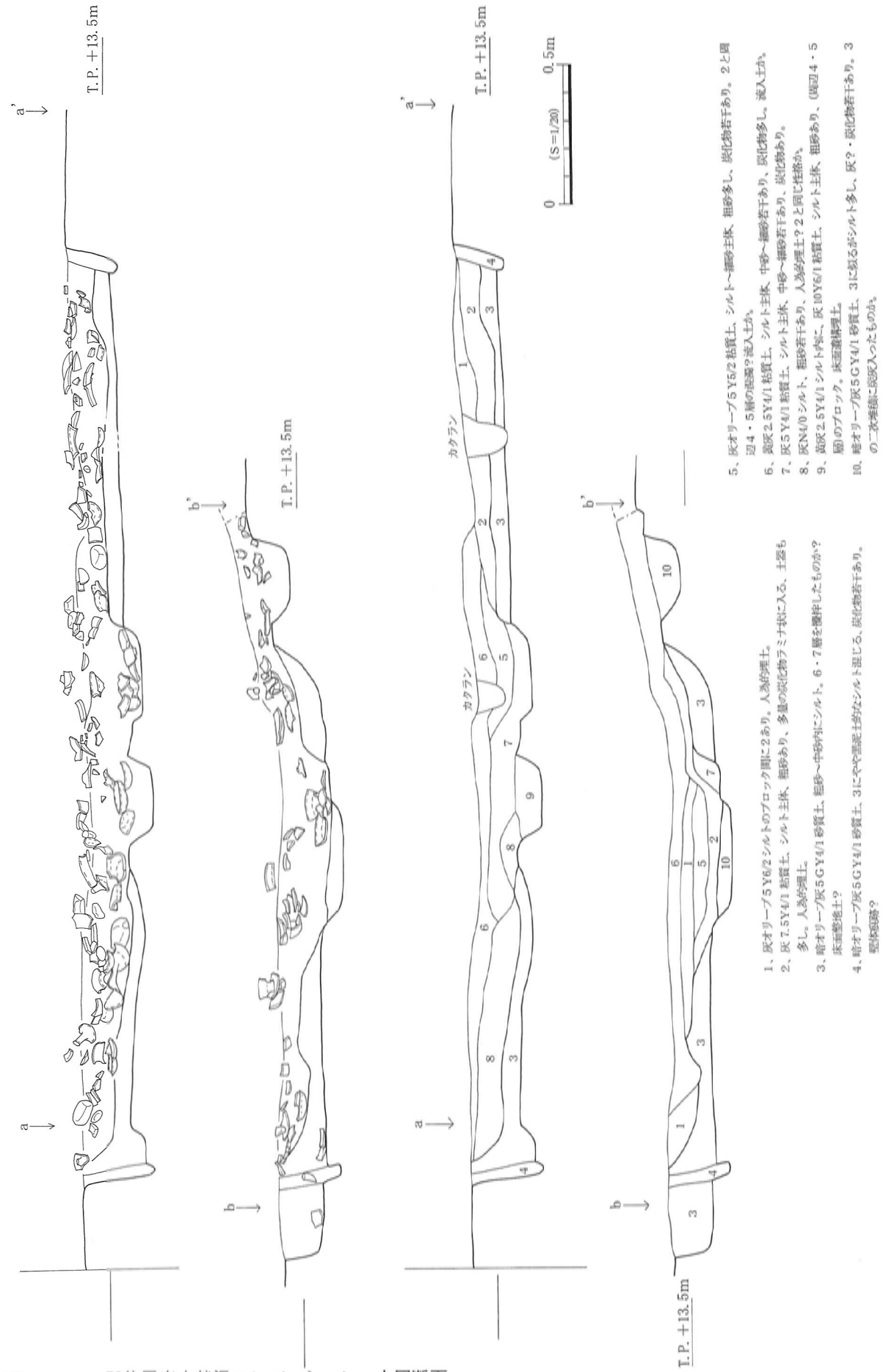


図39 3-376住居出土状況エレベーション・土層断面

- 5、灰オリーブ5Y5/2粘質土、シルト～細砂主体、粗砂多し、炭化物若干あり。2と同辺4・5層の起源?流入土か。
- 6、黄灰2.5Y4/1粘質土、シルト主体、中砂～細砂若干あり、炭化物多し。流入土か。
- 7、灰5Y4/1粘質土、シルト主体、中砂～細砂若干あり、炭化物あり。
- 8、灰N4/0シルト、粗砂若干あり、人為的埋土?2と同じ住跡か。
- 9、黄灰2.5Y4/1シルト砂質土、灰10Y6/1粘質土、シルト主体、粗砂あり、(周辺4・5層)のブロック。床面遺構埋土。
- 10、灰オリーブ灰5GY4/1砂質土、3に似るがシルト多し、灰?・炭化物若干あり。3の二次堆積に灰混入ったものか。

- 1、灰オリーブ5Y6/2シルトのブロック間に2あり。人為的埋土。
- 2、灰7.5Y4/1粘質土、シルト主体、粗砂あり、多量の炭化物フミナ状に入る、土器も多し。人為的埋土。
- 3、灰オリーブ灰5GY4/1砂質土、粗砂～中砂内にシルト。6・7層を覆ったものか?床面遺構土?
- 4、灰オリーブ灰5GY4/1砂質土、3にやや高濃土質なシルト混じる、炭化物若干あり。壁体埋土?

張り出す土坑と西辺で削りだし段の南側に位置する土坑がある。西辺の土坑は埋土も若干違い、住居に先行する遺構であった可能性が高い。南辺の土坑は床面検出時（図37）に下げ過ぎて検出してしまったが、その位置や方向性、また埋土が床面整地土（図39断面の3）である事からも底面の遺構であるのが確実であるが、断面図の位置では浅く、底面と段差をなさない。

また、断面上は壁の土留めの痕跡のような層（断面の4）があり、それが底面より下まで達しているため、平面的には細く浅い壁溝が検出されるはずであるが、底面の検出時点でかなり遺構が荒れており、また、降雨の影響などあったため、検出できなかった。

床面を整地土で整える際、壁もなんらかの造作があったようである。整地土の厚さは10cm弱。南辺の土坑もこの時点で埋められる。北西の削りだし段の上面にも盛土らしき土が部分的にわずかに残っていたのを遺物取り上げ後に確認している。柱穴はないが、この程度の小型の住居ではありうる事である。床面には中央の大きめの土坑の他、3個ほど浅いピットが掘られる。中央の土坑は最下層（断面の10）に炭化物・灰があり、炉の可能性もあるが、焼土はない。しかし、土坑の大きさは、この住居の規模としては大きすぎるように思える。

そして住居が廃絶した後、大量の遺物が投棄され、断面図の1・2の層が堆積する。遺物は床面の遺構の中にも入っており、廃絶と投棄が離れた時期ではない事を示唆する。断面図の2の層は、その時点で住居の周囲に大量の炭化物の集積があった事を示す。

その埋め戻し土の上面にも部分的に薄い炭化物層が広がっていた（図36）。遺物の多寡から見るに、その投棄は住居の北西側からおこなわれたようである。そして、さらに断面図の6の堆積が見られ、その中にも多くの遺物が含まれるが、これは住居内で厚く堆積していた遺物が、流入土と共に全体に二次移動したものかもしれない。

遺物は断面図の6から出土したものを「最上層」とし、それより下、3の上面までで出土したものを

表22 3-376住居 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位	破片数		細別	破片数					
			破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%				
土器・陶磁器	1878	弥生	69	3.7	甕	21	30.4										
					壺	21	30.4	長頸壺	4	19.0							
		土師器	1584	84.3	高坏	2	2.9	広口壺	1	4.8							
					甕	305	19.3	口縁	7	2.3							
					羽釜	15	0.9	ハケ	4	1.3							
					瓢	2	0.1										
					甗	9	0.6										
					鉢	9	0.6										
					高坏	166	10.5	脚部	17	10.2							
					坏皿類	337	21.3	皿	13	3.9							
					棒状製品	1	0.1										
					銚子型	3	0.2										
					須恵器	225	12.0	甕	44	19.6	口縁	1	2.3				
								壺	44	19.6	長頸壺	5	11.4				
											短頸壺	3	6.8				
											小型壺	3	6.8				
								横瓶	6	13.6							
								はそう	3	6.8							
					蓋	1	2.3										
					鉢	2	0.9										
					高坏	1	0.4										
					坏	96	42.7	Ⅱ形式	55	57.3	身	29	52.7				
						Ⅲ形式	22	22.9	蓋	27	49.1						
									身	6	27.3						
									蓋	17	77.3						
その他		サヌカイト	1		木	1		石製品	1		石	1					
		粘土塊	2														

「上層」、3から出土したものを「下層」として取り上げた。床面に接する遺物に留意したが、それも多量にあり、住居廃絶前から残されたと考えられるものはなかった。

結果的には「上層」の遺物が突出して多く、「最上層」の遺物もそれと時期的・器種構成的な差はなかった。「下層」の遺物は弥生土器の小片があるのみである。

出土遺物は表22の通り。弥生土器の混じりが他の飛鳥時代の遺構と比べ少ないのは、掘削から存続期間を経て、同時代の土器の廃棄土坑として意図的に埋められたためと考えられる。土師器・須恵器は時期的には飛鳥Ⅱ期に完全に納まる。器種構成もその頃の集落的なものとして問題ない。ただ、それに加え、ガラス小玉鋳型片をはじめ、鑄造関連のものかと考えられる棒状土製品、粘土塊、砥石に使われた石など、工芸生産関連の遺物があるのが注目できる。

実測可能な遺物も大量にあったため、今回掲載するものはその中からさらに選択した。法量・調整のほぼ同じものは同型式として最低1点掲載するようにしている。

まずは図40から述べる。全て土師器である。

1はミニチュア坏。器表剥落し調整不明であるが、口縁が波打ち、手捏ねによる成形である。法量的にも最小の坏からやや隔絶する。胎土は橙5YR6/6を呈し、赤色粒・長石を若干含む精良な胎土。

2は坏である。今回の調査では最小の部類に入る。外面は上半ヨコナデ、下半粗い不定方向ナデ、内面は左上がりのナデを螺旋状に入れる。胎土は灰白10YR8/1~にぶい橙7.5YR6/4を呈し、赤色粒若干、長石・石英わずかを含む精良な胎土。

3も坏。外面上半ヨコナデ、下半は剥離のため不明。内面はナデ後暗文。胎土はにぶい黄褐10YR7/3を呈し、赤色粒をわずかに含む精良な胎土。

4も坏。5と同口径で浅い型式。外面はヨコナデが2条はあるが、下半は磨滅で調整不明。内面はヨコナデで暗文はない。胎土はにぶい黄橙10YR7/4を呈し、赤色粒・長石をわずかに含む精良な胎土。

5も坏。外面は、口縁のナデは左上になで上げる。その下もヨコナデ。屈曲より下は不定方向の粗いナデ。内面は外面と同じ位置でなで上げるヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙10YR7/2を呈し、石英・長石をわずかに含む精良な胎土。

6も坏。7と同口径で浅いタイプである。外面は上半ヨコナデ、下半不定方向ナデ。内面はヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙10YR8/2を呈し、長石を若干含む精良な胎土。チャートも1粒見える。

7も坏。外面は下半に2条ユビオサエが並ぶが、その後ヨコナデ。底部は一定方向ナデ。内面は上部にヨコナデと暗文残るが、下部は磨滅で不明。胎土は灰オリーブ5Y6/2を呈し、赤色粒あり、長石わずかにありの精良な胎土。

8も坏。外面は下半2条のユビオサエ列後、全体ナデ。内面は右上になで上げるヨコナデ後暗文、底面は磨滅で調整不明。胎土は灰白10YR7/1を呈し、赤色粒・長石をわずかに含む精良な胎土。

9も坏。10と同口径で浅いタイプである。外面体部下半はユビオサエ列2条の後左上がりヨコナデ。口縁のヨコナデがそれを切る。底部はユビオサエ後不定方向ナデ。内面はヨコナデ後暗文だが、底部は磨滅で不明。胎土はにぶい黄橙10YR7/3を呈し、長石・赤色粒をわずかに含む精良な胎土。

10も坏。外面ヨコナデ。底部はユビオサエ後ナデか。内面は磨滅が激しいが、口縁部に左上になで上げるヨコナデが見える。胎土は浅黄橙10YR8/3を呈し、長石・石英・赤色粒を含む精良な胎土。

11も坏。外面は中位にユビオサエが見られ、その後下半をケズリ。最後にヨコナデ。ヨコナデはケズリ部分にも軽く入る。内面はヨコナデ後暗文。暗文は右が左を切る。胎土は橙5YR6/6を呈し、長

石・石英をわずかに含む精良な胎土。

12も坏。13と口径が同じで浅いタイプ。外面は下部がケズリ後ナデ、上半ヨコナデ。内面はヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、長石・赤色粒・石英をわずかに含む精良な胎土。

13も坏。外面は下部ケズリ後ナデ、上部ヨコナデ。内面は磨滅激しいが残存部から見ればヨコナデ、暗文なし。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石・石英を含む精良な胎土。

14も坏。15と口径が同じで浅いタイプ。外面は底部に一定方向のケズリ、屈曲部に直線的なケズリを断続的にまわし、その後上半ヨコナデ。最後にミガキ。ミガキは連続して左右に往復する単位があり、単位同士は左が右を切る。内面は口縁端部に沈線、ヨコナデ後暗文。暗文は上段が下段を切る。胎土は明褐灰5Y R 7 / 2を呈し、赤色粒若干、長石・石英をわずかに含む精良な胎土。

15も坏。下半ケズリ後ヨコナデ。ナデは下半まで至るが、底部はやや磨滅しナデが及ぶか明確ではない。内面は磨滅するが、暗文残る。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石を若干含む精良な胎土。

16も坏。外面は下部ケズリ後ナデ、上部ヨコナデ。内面は磨滅調整不明だが一部暗文残る。胎土は灰黄褐10Y R 6 / 2を呈し、赤色粒・長石・石英をわずかに含む精良な胎土。

17は台付き坏。外面はヨコナデ後身部ミガキ。脚端部ヨコナデは右下にナデ下げ。身部内面は底部一定方向ナデ後上部ヨコナデ。脚内面はヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、長石・石英をわずかに含む精良な胎土。

18はミニチュア高坏。調整はユビナデ。脚端部内面にはユビオサエ。脚部は内外面に絞り痕。口縁端部は一部しか残存していなかったため直線的に復元したが、調整から、波状に凹凸があったと思われる。脚部は調整と形状から成形手順が判明する。先ず、筒状の粘土をひねって中央を絞り、上下を広げ、上を身部にナデつけた後、下部は指を差し入れてまわしナデて、裾部下面に当たった親指を支点として人差し指で外面をナデ下ろす。胎土は灰白2.5Y R 8 / 2を呈し、赤色粒を若干含む精良な胎土。

19もミニチュア高坏。調整はユビナデ・ユビオサエ。口縁・脚裾は内面のユビオサエ毎に波打つ。脚柱部内面はヨコナデ。身部と脚部の接合部分には外面に粘土を附加してナデ付けた接合痕が残る。胎土は橙7.5Y R 7 / 6を呈し、白色粘土粒若干、赤色粒・石英・長石をわずかに含む精良な胎土。

20は高坏脚部片。外面は絞り痕残り、調整はナデ。内面も絞り痕残り、調整はユビナデ・ユビオサエ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、赤色粒・長石・石英をわずかに含む精良な胎土。

21も高坏脚部片。調整は、外面ナデ。内面ユビナデ・ユビオサエ。上部は身部との接合面で剥離し、身底部に挿入した後、周囲に粘土を附加し、ナデ付けているのが分かる。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石をわずかに含む精良な胎土。

22は高坏身部片。外面はナデ、接合部の段から脚部までの間はユビオサエ後放射状にナデる。内面はヨコナデ後暗文。胎土は灰黄褐10Y R 6 / 2を呈し、石英をわずかに含む精良な胎土。

23も高坏身部片。外面はヨコナデ。接合部の段より下はその前にユビオサエ。残存する脚部はタテナデ。内面はヨコナデ後暗文。脚部内面は絞り痕残り、下部にヨコユビナデ。胎土は灰白2.5Y 8 / 2を呈し、長石・赤色粒・石英をわずかに含む精良な胎土。

24は高坏。外面は、身部下半にはユビオサエ後ミガキ、ただし上半は磨滅し、ミガキがどこまで上がるか不明。接合部の段から脚部の間は粗いヨコナデ。脚部はユビナデ。身部内面は一部斜めのハケが残るが、それを消すヨコナデ。底面は磨滅で不明。脚柱部内面は、上半は絞り痕のみ、下半はそれを残しながらヨコナデ。脚裾部内面は上半にユビオサエが1列、下半タテユビナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R

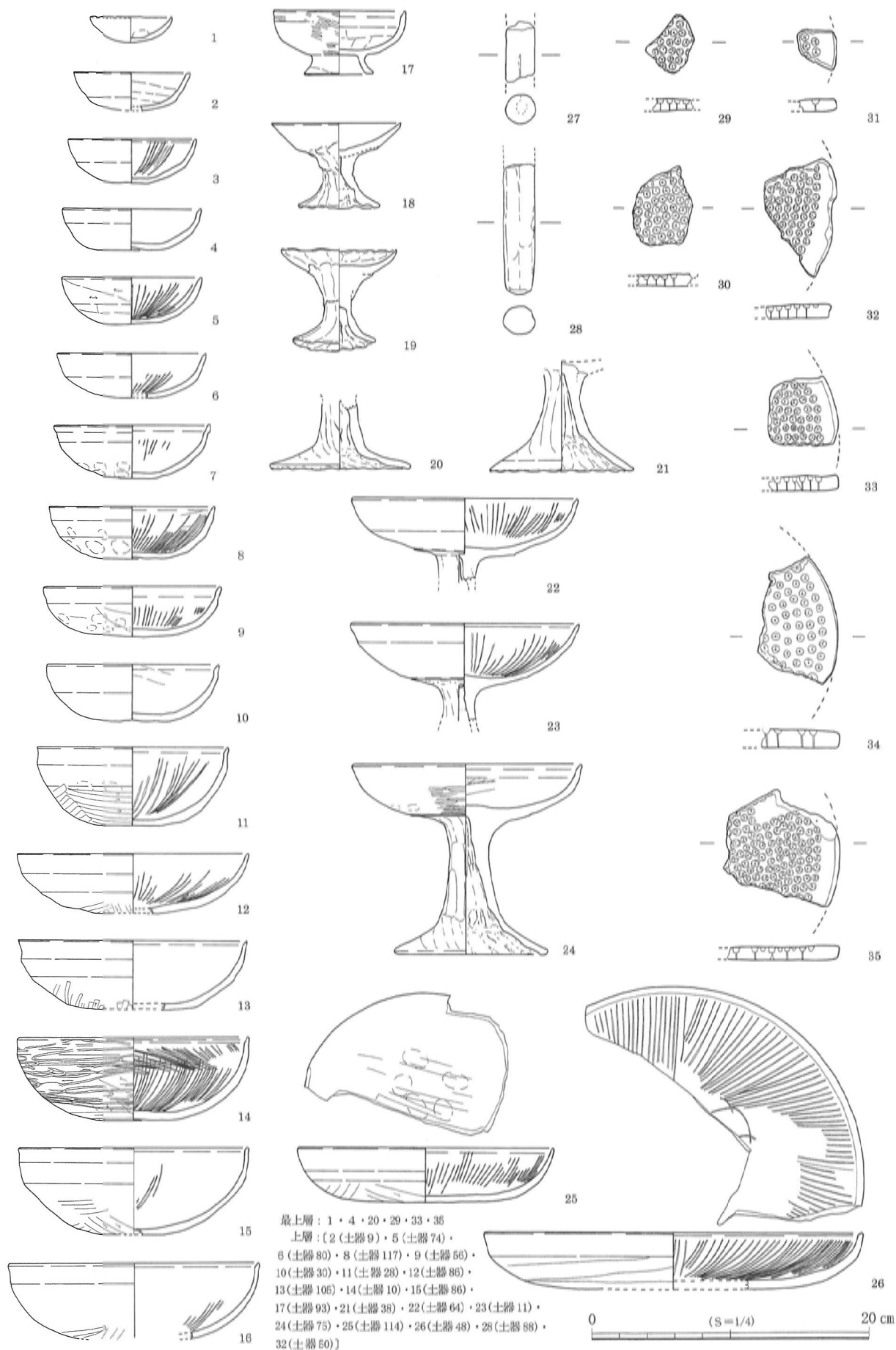


図40 3-376住居出土遺物(その1)

7 / 2 を呈し、長石を含む精良な胎土。

25は皿である。外面下半はケズリ後ナデ、底部も同じだが砂粒の圧痕多い。上半はヨコナデ。内面は、体部ヨコナデ後暗文、底部はユビオサエ後一定方向ナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3 を呈し、石英・長石・赤色粒をわずかに含む精良な胎土。

26も皿。外面は、底部不定方向ナデ、体部ヨコナデ。内面はナデ後暗文。見込みには螺旋状暗文、放射状暗文がそれを切る。放射状暗文は平行した線でまとまる単位があり、単位同士では左が右を切る。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2 を呈し、長石をわずかに含む精良な胎土。

27は棒状土製品片。両端を欠く。縦に粘土接合痕が残り、それと破断面から板状の粘土を巻いて作ったのが分かる。表面は荒れ、二次的の被火の痕跡か。胎土は橙5 Y R 6 / 6 を呈し、石英・長石多く、角閃石も含む。今回の調査ではいくつか出土しているが、用途不明である。ただ、全て器表が荒れ、二次的の被火を受けていると見られる事から、鑄造などに使用するものではないかと推測している。

28も棒状土製品。縦にナデ。図下端は丸く収まるので端部と思われる。上端は折れ。器表は荒れ、二次的の被火の痕跡か。胎土は橙5 Y R 6 / 6 を呈し、長石・石英非常に多く、角閃石・黒雲母あり。

29はガラス小玉鑄型片である。芯持ち孔は貫通し、径約0.5mm。鑄型穴は径5 mm深さ3 mm。下面には不定方向の板状工具によるナデが残る。胎土は橙7.5 Y R 6 / 6 を呈し、長石を若干含む。

30もガラス小玉鑄型片。芯持ち孔は貫通、径約0.5mm。鑄型穴は径5 mm深さ3 mmで同心円状配置。器表は荒れ、二次的の被火か。胎土は7.5 Y R 5 / 6 を呈し、石英・長石を含む。微細粒には他に黒雲母もあり。

31もガラス小玉鑄型片。鑄型の端の部分である。端の円弧から推測される鑄型の径は14cmほどか。芯持ち孔は貫通し、径約0.5mm。鑄型穴は径5 mm深さ3 mm。器表は荒れ、二次的の被火か。胎土は明赤褐5 Y R 5 / 6 を呈し、石英・長石を含む。微細粒には黒雲母もあり。

32もガラス小玉鑄型片。鑄型の端の部分である。端面にはユビオサエが残り、一部くぼむ。その円弧から推測される鑄型の径は17cmほどか。芯持ち孔は貫通し、径約0.5mm。鑄型穴は径5 mm深さ3 mmで、同心円状配置。二次的の被火は不明。胎土は橙7.5 Y R 6 / 6 を呈し、石英・長石を含む。

33もガラス小玉鑄型片。端の部分。端の円弧から推定径は約20cm。端面は横方向に板状工具によるナデ。上面は同心円状にユビナデ。下面は無調整で平滑。下面から断面長三角形の孔が一つあく。芯持ち孔は貫通、径約0.5mm。鑄型穴は径5 mm深さ4 ~ 3 mmで同心円状配置。二次的の被火はないか。胎土はにぶい橙7.5 Y R 6 / 4 を呈し、長石をわずかに含む。微細粒には黒雲母もあり。

34もガラス小玉鑄型端部片。端部円弧からの復元径は20cm弱。端面はヨコナデ。下面はケズリ後ナデ。上面は磨滅し調整不明。芯持ち孔は貫通、径約0.5mm。鑄型穴は径5 mm深さ3 mmで同心円状配置。二次的の被火はないか。胎土は7.5 Y R 4 / 6 を呈し、石英・長石を多く、角閃石をわずかに含む。

35もガラス小玉鑄型片。端の部分。端部円弧からの復元径約20cm。調整は不明。芯持ち孔は貫通、径約0.5mm。一つだけ、下に向かってラッパ状に開き、下面では径3 mmになっているものがある。穿孔具は弾力性があるのか。鑄型穴は径5 mm深さ4 ~ 3 mm。同心円状配置が基本だが、長方形の空白部分があり、その周囲の鑄型穴の配置は独立したものになっている。この空白部分は、鑄型を鉄鉗ではさむためのものと推測している。二次的の被火の有無は不明。胎土はにぶい橙7.5 Y R 6 / 4 を呈し、長石・石英を若干含む。

図41は1が埴輪、2が弥生土器、3が石製品の他は土師器である。



1は埴輪片。円筒形の部分と思われ、径は40cm程度と推測される。外面タテハケ、内面ヨコハケ。土師質ではあるが、硬質である。胎土は橙5Y R 6 / 6を呈し、長石あり、石英・赤色粒若干あり、角閃石・黒雲母わずかにあり。今回の調査では稀少である。

2は甕片。口縁はヨコナデ。外面口縁下半にはタタキが残る。胴部内面は頸部直下にユビオサエ残り、ヨコナデ。胎土は黄褐2.5Y 5 / 3を呈し、角閃石多量、石英・長石若干を含む生駒西麓産胎土である。

3は用途不明の石製品である。材質は良く分からないが、灰色大理石かもしれない。全体に平坦な面で構成されるが、頭部上半の面は筋状の工具痕が多く残り、頭部中位の面は研磨されている。他の面はややざらつく。何かの栓のようにも思える。

4は直口甕形の製塩土器と考えられる。外面は二次的被火のためか荒れて調整不明。下半は赤変する。底部は明確でなく、やや重むが平底である。内面は、口縁ヨコナデ、胴部上半左上がり斜めナデ、下半右上がり斜めナデ、底部はユビオサエ。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 3を呈し、石英を多く含む。微細粒にはチャートも見られる。

5は小型壺片。調整はヨコナデ。胎土は5Y R 4 / 1を呈し、石英をわずかに含む。微細粒には黒雲母もあり。南河内地域で見ると、小型の甕のようにも見える。

6は小型壺片。頸部があまりしまらず、鉢のようにも見える。外面はヨコナデ。内面は頸部下にユビナデが残るが、最終調整はヨコナデ。胎土は黄灰2.5Y 6 / 1を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

7は直口壺口縁片。外面はヨコナデ後暗文。暗文は連続して往復するものもある。内面はヨコナデ。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 4を呈し、赤色粒をわずかに含む精良な胎土。

8も直口壺口縁～肩部片。口縁部は擦過痕の多いヨコナデが入り、いずれもなで上げる。外面はその上に暗文。暗文は連続して波状に往復する。頸部に1条の横方向の暗文がわずかに残るが、肩部はヨコナデ。内面は頸部にヨコナデが1条入るがその下はタテユビナデ。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 4～橙2.5Y R 6 / 6を呈し、石英あり、赤色粒・長石若干ありの精良な胎土。

9は短頸壺口縁片である。外面は粘土接合痕を残しながらヨコナデ、その上に暗文。内面は磨滅し調整不明。胎土は橙7.5Y R 7 / 6を呈し、赤色粒を含む精良な胎土。

10は羽釜鈔部片である。外面はヨコナデ。内面はタテユビナデ後ヨコナデ。胎土はにぶい褐7.5Y R 5 / 4を呈し、角閃石・長石・石英を含む生駒西麓産胎土である。今回の調査で出土した土師器羽釜は、98%生駒西麓産胎土である。

11は甕把手部片。把手はユビナデ。その周囲もユビナデだが、一部それをハケが切る。内面はケズリ。胎土は橙5Y R 7 / 6を呈し、赤色粒・石英あり、長石若干ありの精良な胎土。

12は移動式竈焚口下端部である。外面ハケ、内面ナデ。下方に突出する縦方向のタガは内面にヨコハケをした後に貼られ、巻き込むように外面に達し、タテハケを覆う。その内面下端付近に棒状工具を押し当てたような痕がある。胎土は褐7.5Y R 4 / 3を呈し、石英多く、角閃石・長石あり、黒雲母・赤色粒わずかにありの生駒西麓産胎土。今回の調査で出土した移動式竈は100%生駒西麓産胎土である。

13は甕片。口縁の残りが悪く、復元径に不安あり。調整はヨコナデのみ。外面に薄く煤附着。胎土は灰白10Y R 8 / 2を呈し、赤色粒をわずかに含む。

14も甕。外面は肩部にユビオサエ1列、その後下部にハケ、最後に上部にヨコナデ。内面は、口縁ヨコナデ、胴部はユビオサエ後右上がりナデ。外面は肩部以下煤附着。内面は口縁部のみ煤附着。底部の割れ方は焼けハゼのようである。胎土は褐灰7.5Y R 5 / 1を呈し、長石若干、赤色粒わずかにあり。

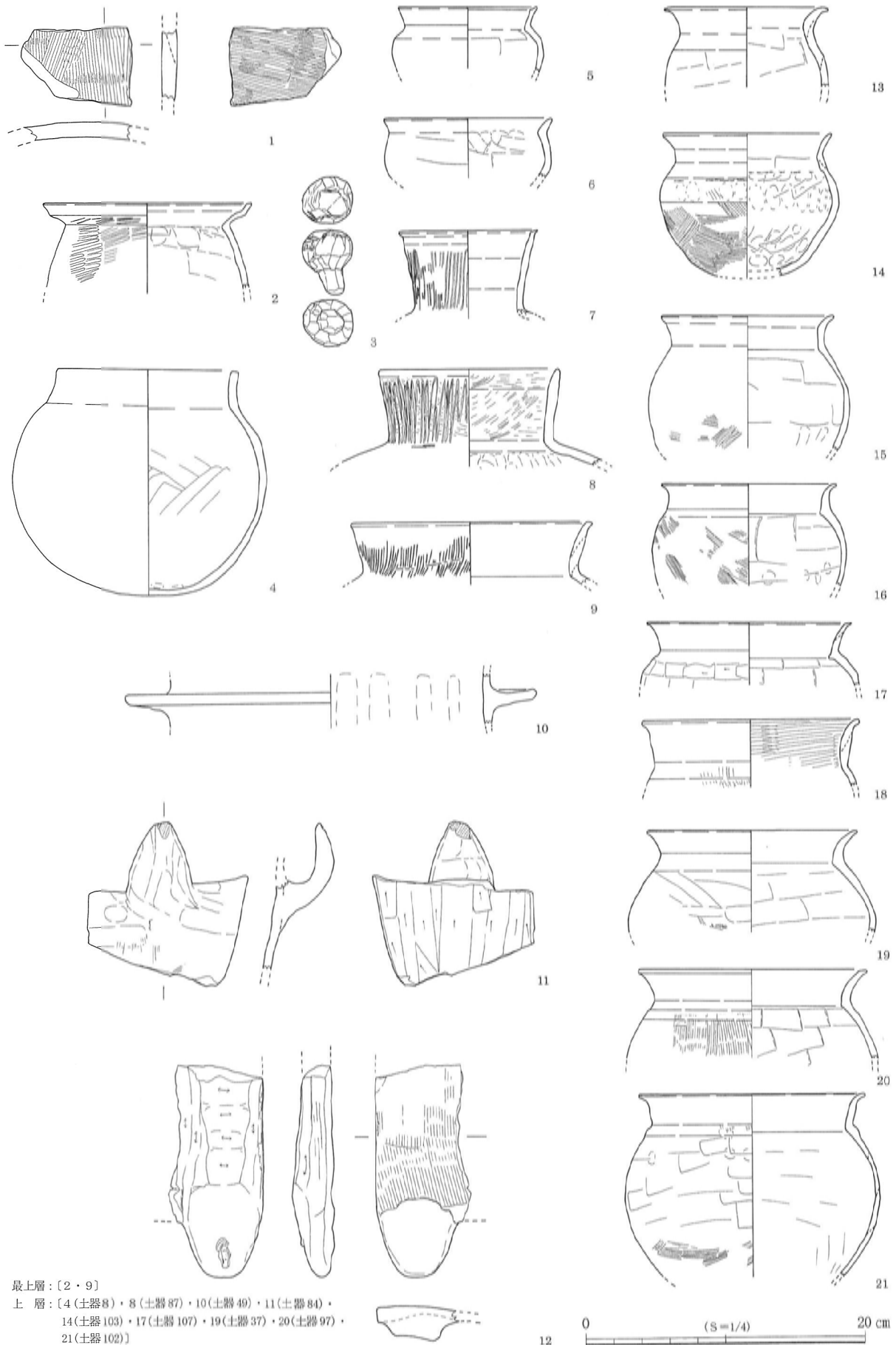


図41 3-376住居出土遺物（その2）

15も甕片。外面は、口縁ヨコナデ、胴部上半は磨滅するがハケ後ヨコナデか、下部はハケ。内面は大部分ヨコナデで、下部にタテユビナデ。二次的被火の赤変あり、内外面の一部のみか、破断面に煤の附着する部分もある。胎土はにぶい黄橙10Y R 6 / 3を呈し、長石若干、石英わずかを含む。

16も甕片。外面は、口縁ヨコナデ、胴部ハケ。内面はヨコナデだが、胴部下半にはユビオサエが残る。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 3を呈し、長石をわずかに含む。

17も甕片。外面は肩部にヨコケズリが入り、上のヨコナデがそれを切る。内面はヨコナデ。内外面とも煤附着。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、長石をわずかに含む。

18も甕片。外面は頸部以下にタテハケ、口縁から頸部直下のヨコナデがそれを切る。内面は口縁ヨコハケ、肩部ヨコナデ。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、角閃石多く、石英・赤色粒・長石若干ありの生駒西麓産胎土。

19も甕片。外面はほとんどナデだが、残存部下端にそれに切られるハケがあり、胴部下半はハケか。内面はヨコナデ。胎土は灰黄褐10Y R 6 / 2を呈し、長石を若干含む。

20も甕片。外面は胴部ハケ、口縁から肩部のヨコナデがそれを切る。内面はヨコナデ。外面から内面口縁まで煤附着。胎土はにぶい黄橙10Y R 5 / 3を呈し、長石・石英をわずかに含む。

21も甕片。外面は、胴部上半にユビオサエ、頸部にはそれを切るタテハケも残存するが最終的にヨコナデ。胴部下半はハケのみ。内面は器表剥落激しいが、大部分はヨコナデ、下部はタテナデ。胎土は灰白10Y R 8 / 2を呈し、長石を若干含む精良な胎土。

図42掲載の遺物は、11～13の石以外は土師器である。

1は鍋把手部片。外面は、頸部より上はヨコナデ、把手とその周辺はユビナデだが、胴部はタテハケ。内面は把手の裏側にユビオサエが残るが最終はナデ。胎土は浅黄橙を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

2の器形は今回の調査では調整が共通するものが多かったので鉢とした。外面は胴部タテハケ後口縁ヨコナデ。内面ナデ。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、赤色粒・石英をわずかに含む精良な胎土。

3も鉢片である。外面は胴部のナメナデが頸部のヨコナデに切られ、口縁部のヨコナデの下に残るユビオサエは本来頸部に1列に並んでいたようである。内面はヨコナデ。胎土はにぶい橙5Y R 7 / 4を呈し、赤色粒若干、長石わずかを含む精良な胎土。

4も鉢片。鉄鉢形で片口。三つの大きな破片をつないだと思われる補修孔が合計6個遺存していた。破片の接する部分で両片に相對してあけられている。調整は外面にユビオサエが散在するが最終は内外面ともナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、長石・石英・赤色粒を若干含む精良な胎土。

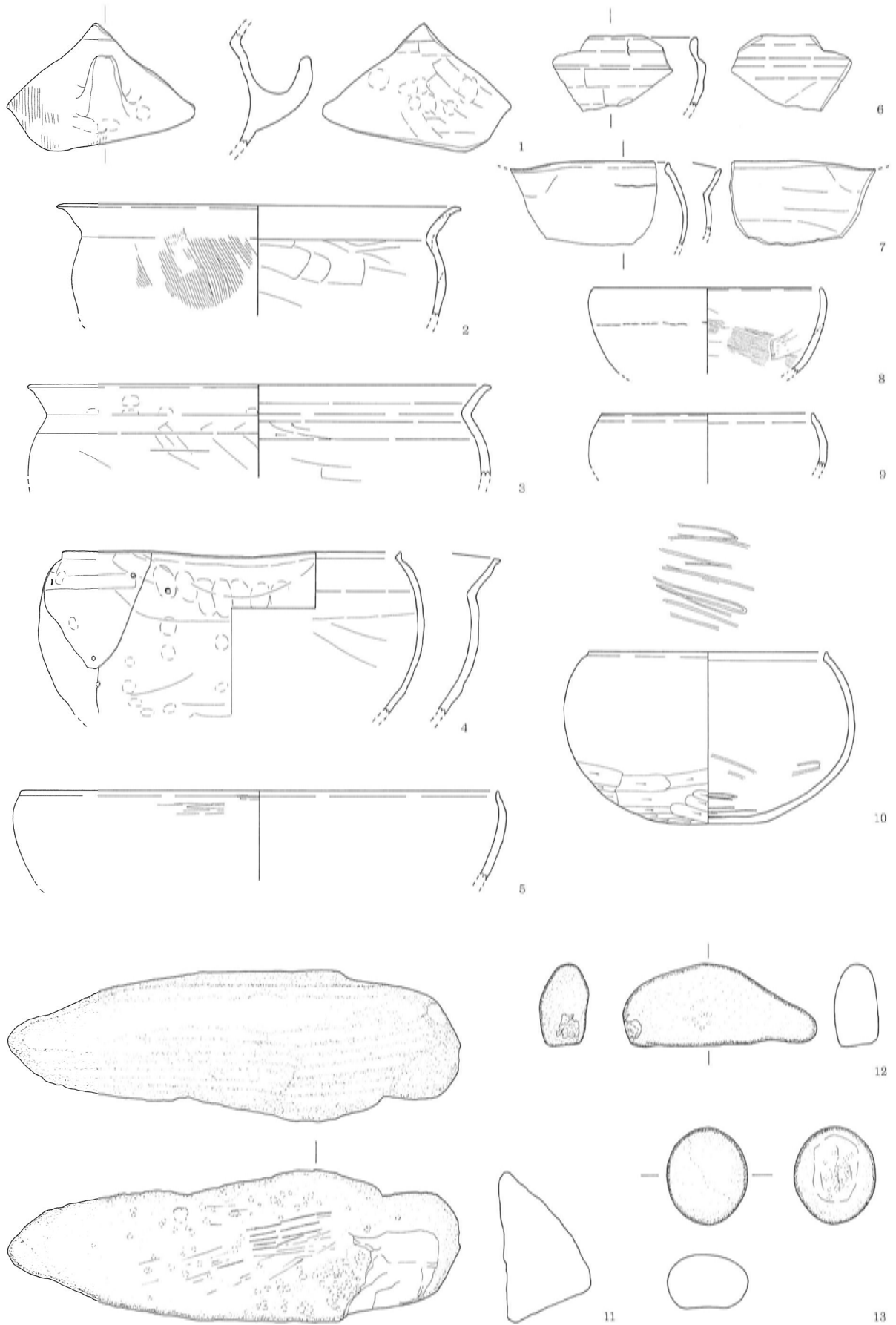
5も鉢片。内外面とも磨滅激しくほとんど調整不明だが、口縁外面の一部にミガキが残る。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、長石・石英をわずかに含む精良な胎土。

6は特異な口縁片であるが鉢と思われる。調整はナデ。胎土は明褐灰7.5Y R 7 / 2を呈し、赤色粒・長石を若干、石英をわずかに含む精良な胎土。

7も片口の鉄鉢形鉢片である。内外面ともヨコナデ。胎土は灰褐5Y R 6 / 2を呈し、石英を含む。精良な胎土ではない。

8も鉢片。外面は磨滅するが粘土接合痕を残す。内面は上半ナデ、下半ハケ。胎土は灰白7.5Y R 8 / 1を呈し、石英若干と長石・チャートをわずかに含む。器形・調整ともに異質である。類例を求めれば和歌山県鳴神IV遺跡土坑1出土例のような底の尖る粗製鉢かもしれない。

9も鉢片。内外面ともヨコナデ。かなり小型である。胎土は浅黄2.5Y 7 / 3を呈し、長石をわずか



最上層：(8)、上層：〔2(土器111)・3(土器113)・4(土器121)・6(土器2)・  
10(土器104)・11(石1)・12(石5)・13(石4)〕

図42 3-376住居出土遺物(その3)

に含む精良な胎土。

10も鉢。外面下部がケズリの他はナデ。内面下半に暗文。胎土は浅黄2.5Y 7 / 3を呈し、長石あり、石英若干あり、チャート・赤色粒わずかにありの精良な胎土。

11は砥石として使用されたと思われる凝灰岩である。断面三角の柱状であるが、一番大きな平坦面に敲打痕と擦痕が残る。擦痕は細く鋭く、金属器によるものと思われる。竈の可能性のある削り出しの段上から出土したが、被火の痕跡はない。

12は敲打痕のある砂岩である。図中央と左端部に敲打痕。右側の細い部分は手に握るのに合う。

13はタタキ石と思われる砂岩である。楕円球状を呈するがヶ所凹面があり、そこに敲打痕がある。また、図左の点線より左下は煤が附着する。

図43掲載の遺物は、29・30の石以外は須恵器である。

1は坏蓋。外面は天井部回転ヘラ切りで粘土塊附着。その外側に回転ヘラケズリ1条入るが口縁からの回転ナデがケズリにまで及ぶ。内面は回転ナデ後天井部中心に一定方向ナデ。胎土は灰白N 7 / 0を呈し、黒色粒・石英若干含む。

2も坏蓋。外面は、天井部は中心無調整、その周囲は回転ヘラ切り後、部分的に棒状工具による不定方向の強いナデ。天井部周囲回転ヘラケズリ、下部は回転ナデ。内面は回転ナデ後中心に一定方向ナデ。外面口縁の一部に自然釉かかり、その中心が発泡。その部分を上にして焼成か。胎土は灰白N 7 / 0を呈し、石英・長石若干あり。

3も坏蓋か、ただし、土師器坏形の坏身の可能性もある。外面は、天井部回転ヘラ切り、体部は回転ナデ。内面は回転ナデ。体部は灰白N 7 / 0を呈し、石英・長石を含む。他のものと比べ、やや器壁が薄く、蓋か身か判断しにくいこの型式は少数ながら存在している。

4も坏蓋。外面は、天井部回転ヘラ切り後軽くナデ。体部は回転ナデ。体部一部分にのみ降灰痕あり。内面は回転ナデ後天井部一定方向ナデ。胎土は灰N 5 / 0を呈し、黒色粒・石英あり、長石わずかにあり。石英粒は比較的大きい。

5も坏蓋。外面は天井部回転ヘラ切り後粗いナデ。体部は上半回転ヘラケズリ後回転ナデ、下半は回転ナデ。内面は回転ナデ後天井部に一定方向ナデ。口縁の一部、内外面に煤附着するが、外面の方が範囲広い。胎土は黄灰2.5Y 6 / 1を呈し、石英・長石・白雲母あり。

6は蓋坏身。外面は底部回転ヘラ切り、他は回転ナデ。内面は回転ナデ後底部に一定方向ナデ。底部外面にヘラ記号あり。受け部外面に一部自然釉かかり、そこから受け部沿いに左右に釉だれが走るため、底部を上にして、傾斜した状態で焼成した事が分かる。胎土はN 6 / 1を呈し、黒色粒若干、長石わずかにあり。

7も蓋坏身。外面は、自然釉厚くかかり発泡するため不明確だが、底部回転ヘラ切り、粘土塊附着、他は回転ナデ。内面は回転ナデ後底部に一定方向ナデ。胎土は青灰5 P B 6 / 1を呈し、黒色粒多し、石英・長石わずかにあり。

8も蓋坏身。外面は自然釉厚くかかり発泡し調整不明。内面は回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は灰N 5 / 1を呈し、黒色粒あり、石英・長石若干あり。

9も蓋坏身。外面は底部回転ヘラ切り後粗くナデ、粘土塊附着、植物茎痕あり。内面は回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土はオリープ灰5 G Y 5 / 1を呈し、黒色粒あり、石英・長石若干あり。

10も蓋坏身。外面は底部回転ヘラ切り後粗いナデ、他は回転ナデ。内面は回転ナデ後底部に一定方向

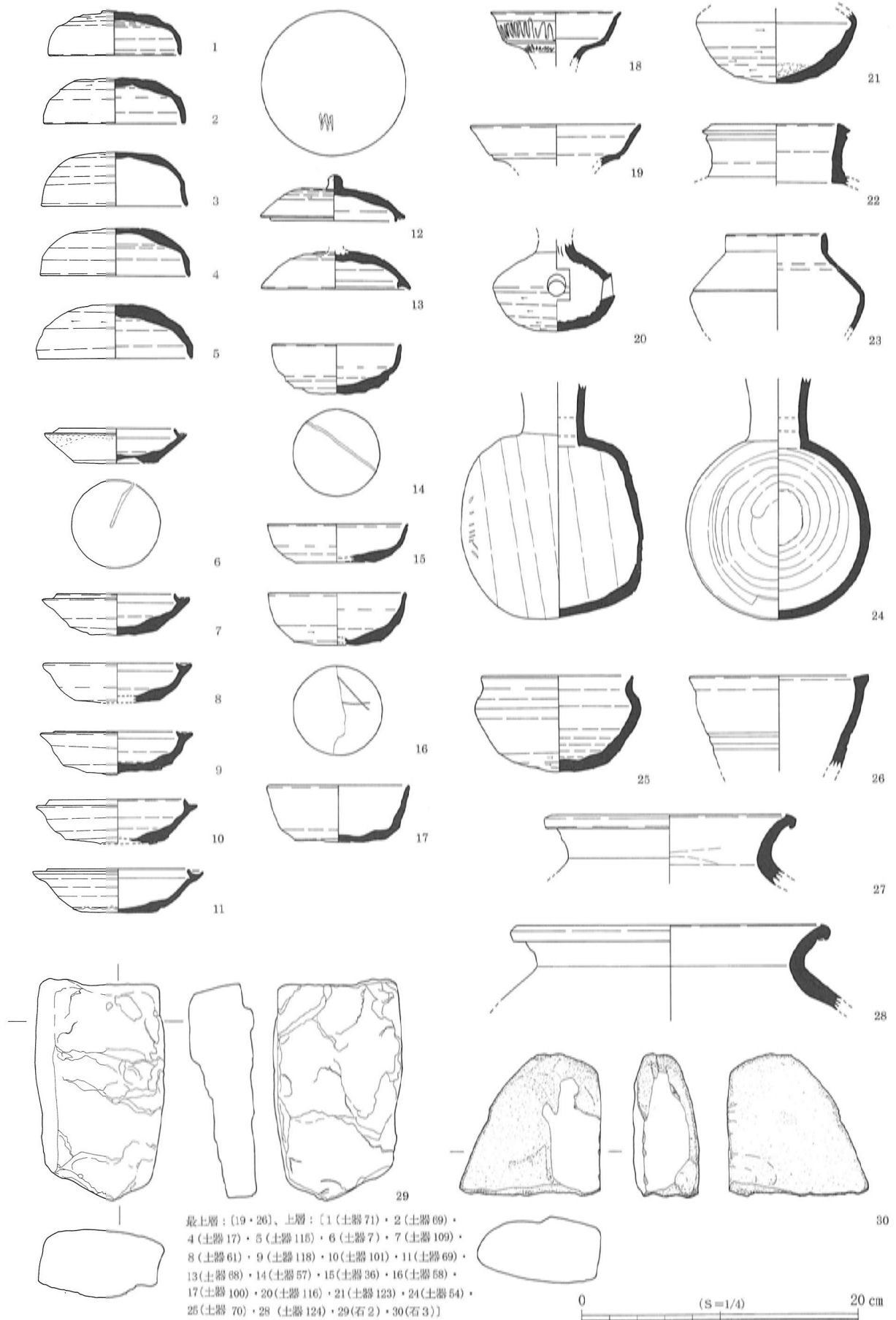


図43 3-376住居出土遺物（その4）

ナデ。底部に内面からの打撃による焼成後穿孔がある。胎土は灰N 6 / 1を呈し、石英・長石若干あり、黒色粒わずかにあり。

11も蓋坏身。外面は、底部回転ヘラ切り後粗いナデ、体部は回転ナデだが受け部外側を細くヘラケズリ。内面は回転ナデ後底部に一定方向ナデ。胎土は灰N 5 / 0を呈し、長石若干、石英わずかにあり。

12は坏蓋。外面は口縁と、つまみとその周辺に回転ナデ、その間に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ後天井部に一定方向ナデ。外面には小さく「m」字形のヘラ記号あり。胎土は灰N 5 / 0を呈し、粗い石英と長石あり、黒色粒若干、チャートわずかにあり。

13も坏蓋。外面はつまみを欠くがその周辺と口縁はヨコナデ、その間に回転ヘラケズリ後回転ナデ。内面は回転ナデ後、天井部に不定方向ナデ。胎土は器表灰N 6 / 0、破断面赤灰10R 5 / 1を呈し、黒色粒あり、石英・長石わずかにあり。

14は坏身。外面は、底部回転ヘラ切り後、中心を一定方向の粗いナデ、周囲を粗いヨコナデ、粘土塊附着、屈曲部は回転ヘラケズリ後回転ナデ、体部は回転ナデ。内面は回転ナデ後、底部に一定方向ナデ。外面底部にヘラ記号あり。胎土は青灰5 B 6 / 1を呈し、石英若干、長石・黒色粒わずかにあり。陶邑産か。

15も坏身。外面は、底部回転ヘラ切り後粗いナデ、屈曲部は回転ヘラケズリ後回転ナデ、体部は回転ナデ。内面は、回転ナデ。胎土は灰白N 7 / 0を呈し、黒色粒・石英わずかにあり。

16も坏身。外面は、底部回転ヘラ切り後粗いナデ。体部下半回転ヘラケズリ後軽いナデ、体部上半回転ナデ。内面は回転ナデ後、底部一定方向ナデ。底部外面にヘラ記号あり。外面全面に薄く降灰痕あり。胎土は器表灰N 6 / 0、破断面灰赤2.5Y R 5 / 2を呈し、石英・長石若干、黒色粒わずかにあり。

17も坏身。外面は、底部回転ヘラ切り、屈曲部回転ヘラケズリ後回転ナデ、体部回転ナデ。内面は、回転ナデ後、底部に一定方向ナデ。胎土は灰N 6 / 0を呈し、長石・黒色粒若干、石英わずかにあり、その粒は比較的大きい。

18は瞭口縁片。内外面とも回転ナデ。波状文は単条。内面に降灰痕あり。胎土は、器表灰N 6 / 0、破断面赤灰2.5Y R 4 / 1を呈し、石英若干、長石・角閃石わずかにあり。

19も瞭口縁片か。内外面とも回転ナデ。胎土は灰白2.5Y 7 / 1を呈し、石英若干、長石・黒色粒・石英片岩わずかにあり。

20は瞭胴部片。外面胴部下半が回転ヘラケズリの他は回転ナデ。頸部内面絞り痕残る。外面肩部降灰痕あり。胎土は器表青灰5 P B 5 / 1、破断面灰赤10R 6 / 2を呈し、石英多し、長石若干あり。

21は壺胴部片。外面は、底部回転糸切り、そこから肩部下まで回転ヘラケズリ入った後上から胴部中位まで回転ナデ。内面は回転ナデ、底部に棒状工具によるツブシ入る。胎土は明青灰5 P B 7 / 1を呈し、黒色粒・石英・長石を若干含む。

22は短頸壺口縁片。内外面とも回転ナデ。胎土は灰N 5 / 0を呈し、黒色粒あり、石英・長石若干あり。あまり類例のない口縁形態である。

23は短頸壺片。内外面とも回転ナデ。外面肩部下端に沈線1条。胎土は青灰5 B 6 / 1を呈し、長石をわずかに含む。

24は横瓶。外面は、大部分回転ナデ。側面図の左側にはナデ前にタタキとヘラケズリ。右の粘土板で閉塞した方は、粘土板の接合部周辺に回転ケズリ、その内側はナデ。内面は回転ナデ。頸部も回転方向は異なるが内外面とも回転ナデである。右の正面図の左半がまだらに黒変しており、頸部も縦半分は黒

変。寝かした状態で焼成か。胎土は灰N 7 / 0を呈し、黒色粒あり、石英・長石若干あり。

25は鉢。外面底部が回転ヘラケズリの他は回転ナデ。外面下半一部に煤附着。胎土は灰10Y 6 / 1を呈し、黒色粒・石英・長石あり。

26はこね鉢片。調整は回転ナデ。口縁端部上面から外面に自然釉粒状にかかる。胎土は灰N 6 / 0を呈し、黒色粒・石英・長石あり。

27は甕片。調整はほとんど回転ナデだが、頸部内面にヨコナデ残る。外面に自然釉、内面口縁上半に降灰痕。胎土は器表灰5 Y 6 / 1、破断面赤灰2.5 Y R 4 / 1を呈し、長石若干と、黒色粒をわずかに含む。

28も甕口縁片。内外面とも回転ナデ。外面に降灰痕。胎土は青灰5 B G 6 / 1を呈し、黒色粒あり、長石若干あり。

29は凝灰岩の一種か。半透明の灰色で、肉眼では結晶は見えない。原礫面にはまばらな気孔と板状の節理が見られる。ガラス・石英からなる礫を捕獲している。もともと煉瓦状の形を一部剥離して整えているようにも見える。

30は和泉砂岩か。図下辺は折れ。図中央の面と、図左の面の右半が研磨されている。図右の左下の凹部も人工の可能性ありか。

小結 建物群は、切り合い上、溝群に後出すると見て間違いなかろう。また、建物同士の重複が少ないのも特徴である。わずかに3-建物5が切り合いから3-建物6より前である事が分かり、方向性から3-建物4と共に他の建物と溝群の間の時期にある可能性が強いと、4-柵列2が溝群に併行する可能性があるのみである。

3-376住居も、廃絶後、廃棄土坑に転用されている事からすれば、建物群存続期間の前半期に位置付けられるかもしれない。

ならば、その存続期間はと考えると、3-376住居の遺物が飛鳥Ⅱ期にまとめられ、切り合う溝群と時期差が見られない事と、数少ない柱穴出土土器がそれと矛盾しない事のみならず、上部包含層で飛鳥Ⅱ期以後、飛鳥後半に確定できる遺物がなく、この面の奈良時代の遺構が、平城宮Ⅰ期頃に位置付けられる事からすれば、建物群は先行する溝群と土器形式上は差のない飛鳥Ⅱ期の中に収まる短期間のものであると考えられる。

#### (5) 飛鳥時代 土坑・柱穴・ピット・炉

4面飛鳥時代の遺構のうち、溝と建築物関連以外の遺構をここで述べる。その多くは遺構の性格を特定する事は難しく、また、切り合いも乏しい。しかし、ガラス小玉鋳型・甕の羽口などを出土するものや、埋土に炭化物層を持つものなどは、工芸生産施設の痕跡である可能性が考えられ、調査地をそういった生産のエリアであるとするならば、建物群と時的にも関係が深いと推測できる。

3-182炭化植物遺体集積 02-1 トレンチ南壁沿いで、4層掘削中に3-158溝の下付近から検出されたものである(図13)。細片化し、やや炭化した植物遺体の集積が皿状に検出され、その中から遺物が出土した。本来は4面のなんらかの遺構であったと思われるが、平面形などは確認できず検出地点を記録したのみである。3-158溝との切り合い関係も不明である。

遺物の組成も(表23)、他の飛鳥時代の遺構と比べ、特に特徴はないと言える。図44には実測可能な遺物から時期を示すのに必要なものを選んで図示した。

1は土師器坏である。外面は、上半ヨコナデ、下半はユビオサエ後、左下がりの粗く弱いナデ。内面



はヨコナデ後暗文。外面は図点線部分に薄く煤附着、内面は点線部分に焦げたような炭化物が附着しその上にも薄く煤附着。内外面の煤附着位置は同じである。灯明皿として使用されていたか。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英若干を含む精良な胎土。

2は須恵器坏である。土師器坏形と言える。外面は、底部不定方向の粗いナデ、植物茎の圧痕あり、粘土塊附着。体部は回転ナデ。内面は回転ナデ後、底部一定方向ナデ。胎土は灰N 6 / 0を呈し、長石・石英若干、黒色粒わずかにあり。

3は土師器甕片。外面はヨコナデで、残存部下端はタテハケ後ヨコナデ。また、接合しないが同一個体と思われる破片にハケが残るので、基本的にはハケ甕かと推測される。内面はヨコナデ。胎土は灰褐5 Y R 5 / 2を呈し、長石わずかにあり。内外面だけでなく、破断面にも煤附着。

4は土師器移動式竈の把手から焚口にかけての破片。外面は基本的にタテハケ、把手と焚口口縁のみナデ。内面はタテの突帯が付く。ヨコハケ後ナデ。しかし、突帯はヨコハケ後貼り付けだが、突帯の上にもハケ残る。また、剥離した突帯の裏面にはタテハケが見える。胎土は灰褐7.5Y R 5 / 2を呈し、石英多し、長石・角閃石ありの生駒西麓産胎土。

5は土師器把手付き鉢片である。この口縁で把手が付くのが判明した数少ない例である。外面は、上半ヨコナデ、下半ヨコハケ後まばらにヨコナデ。内面ヨコナデ。内面の下半には薄く煤附着。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、赤色粒・長石わずかにありの精良な胎土。

以上のものを見ても、大体飛鳥時代前半の時期と思われる。

### 3-483土坑

(図45・46・表24) 02-2トレンチ西半の東側、3-建物6の北隅の北側に位置する。後世の堀田の底部にあり、かなり削平を受けていると考えられ、図45の断面図の1を井筒の抜き取り痕のようなものと見れば井戸の可能性もあるが、弥生時代の

表23 3-182炭化植物遺体集積 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種			
		破片数	%	破片数	%		
土器・陶磁器	90	弥生	0	0.0			
		土師器	甕	19	25.7		
			甗	5	6.8		
			鉢	13	17.6		
			高坏	1	1.4		
			坏血類	10	13.5		
		須恵器	16	17.8	甕	3	18.8
			甗	5	31.3		
			坏	2	12.5		
その他		瓦	1	平	1	土師質	1.0
		木(炭化)	1				

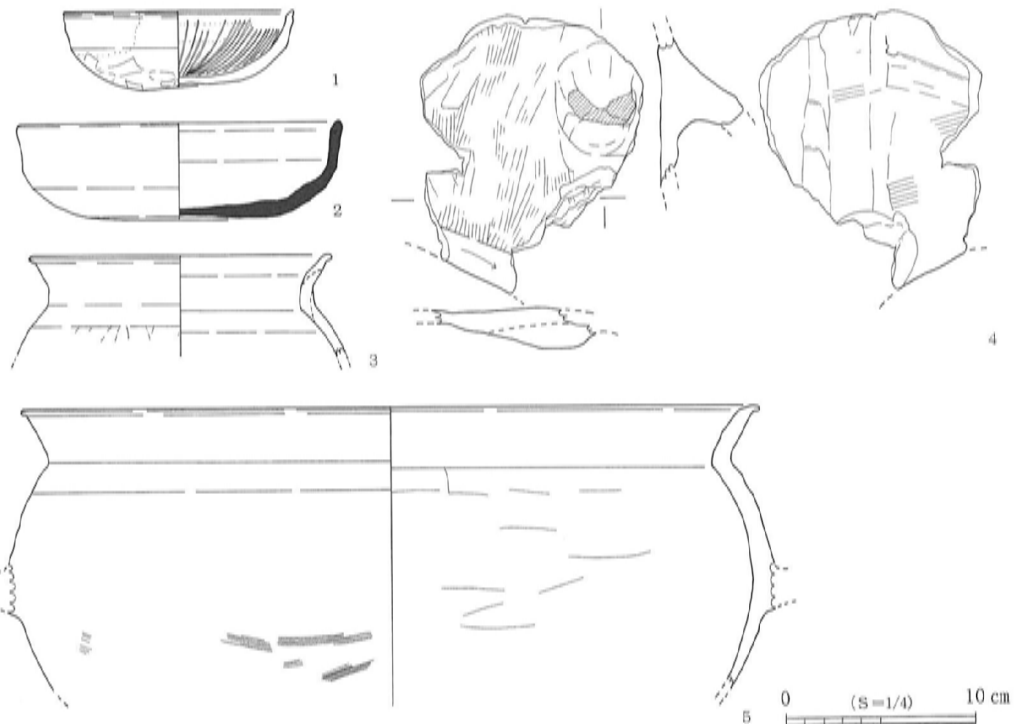


図44 3-182炭化植物遺体集積出土遺物

確実な井戸が、浅いものでも底がT. P. +12.8mに達しているのに比べ40cmは浅く。裏込め埋土となるべき断面図の2もブロック土がなく、炭化物の多い層で、井戸とするには疑問が残る。

平面形はやや形の不整な隅丸方形のようで、西側に小さい突出がある。埋土上面で断面図の1の切り込みが見えなかったが、これは3-2層の巻き上げによる上面の乱れのためである。

遺物の出土状況は散漫で、土坑底に付くものも多いが、浮くものもある。大きな破片も多いが、接合後の完形率は悪く、削平を考えてもこの場で割れたものが多いとは思えない。

出土遺物の構成を見ても、弥生土器は比較的少なく小片で、3-376住居と同じような廃棄土坑の特徴が出ているようである。土師器の羽釜がかなり多いのと須恵器坏がやや少ないのが目立つ。瓦以外は、時期的には飛鳥時代前半に限定でき、飛鳥Ⅱ期と見るのが妥当か。

実測可能な遺物を図46に図示した。

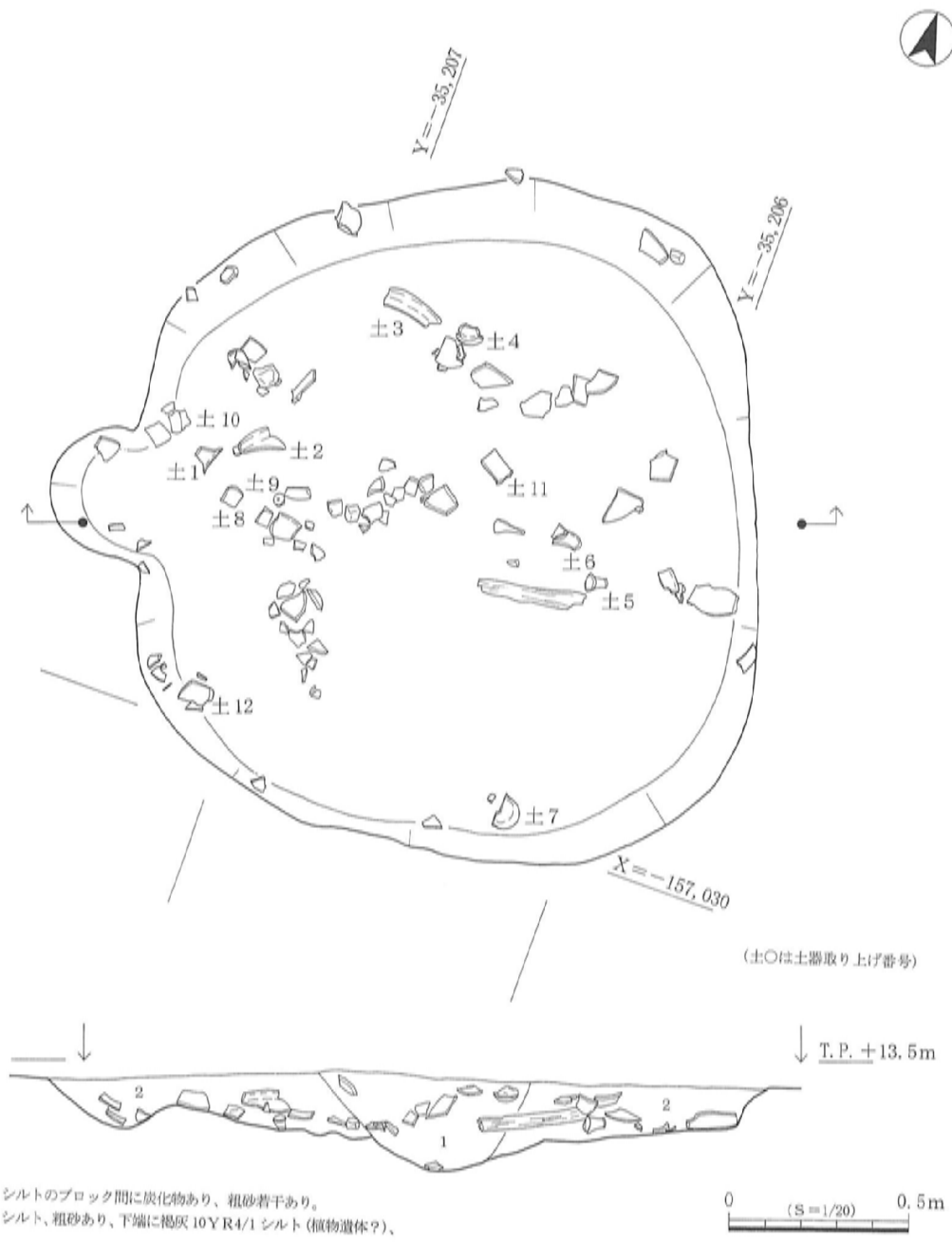


図45 3-483土坑出土状況・断面

1は須恵器坏蓋片。つまみを欠失する。天井部の外面が回転ケズリ、内面が一定方向ナデの他は回転ナデ。上面は薄く降灰痕あるが、一部口縁と同じ径の弧を成して降灰のない部分があり、重ね焼きの痕と思われる。胎土は灰N6/0を呈し、石英・長石若干あり。陶邑産か。

2は須恵器坏。外面は、底部回転ヘラ切り、その周囲回転ヘラケズリ、体部は回転ナデ。内面は回転ナデ後、底部一定方向ナデ。胎土は灰N6/0を呈し、長石・石英若干、黒色粒わずかに含む。石英粒は極粗砂大。

3は須恵器壺胴部片。長頸壺か。内外面ヨコナデ。外面上半には降灰痕。胎土は青灰5B5/1を呈し、長石あり、石英若干あり、黒色粒わずかにあり。微細粒には角閃石もあり、石川流域産か。

4は須恵質丸瓦片。上面はミガキ。下面は布目で端から端面にかけケズリ。胎土は灰10Y6/1を呈し、石英多し、長石わずかにあり。薄い瓦であり、飛鳥時代前半とするには無理があるかもしれない。ただ出土位置が断面図の1の範囲であり、これが後世の遺構とすると混入の可能性もある。

表24 3-483土坑 遺物破片数集計表

大別	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位		細別							
		破片数	%		破片数	%	破片数	%	破片数	%						
土器・陶磁器	弥生	20	4.3	壺	5	25.0	タタキ	2	40.0							
				壺	12	60.0	広口壺	1	8.3							
	土師器	372	79.8	鉢	1	5.0										
				壺	38	10.2										
				羽釜	84	22.6			非生駒	1	1.1905					
				鉢	38	10.2										
				高坏	27	7.3	脚部	3	11.1							
				坏皿類	89	23.9	皿	2	2.2							
	須恵器	74	15.9	壺	48	64.9										
				壺	14	18.9	はそう	4	28.6							
				坏	14	18.9	II形式	4	28.6	身	1	25.0				
	その他	瓦	2	丸	2	須恵質	2	III形式	3	21.4	蓋	3	75.0			
木											21	木製品	2	炭化	21	
桃核											1	石	23			

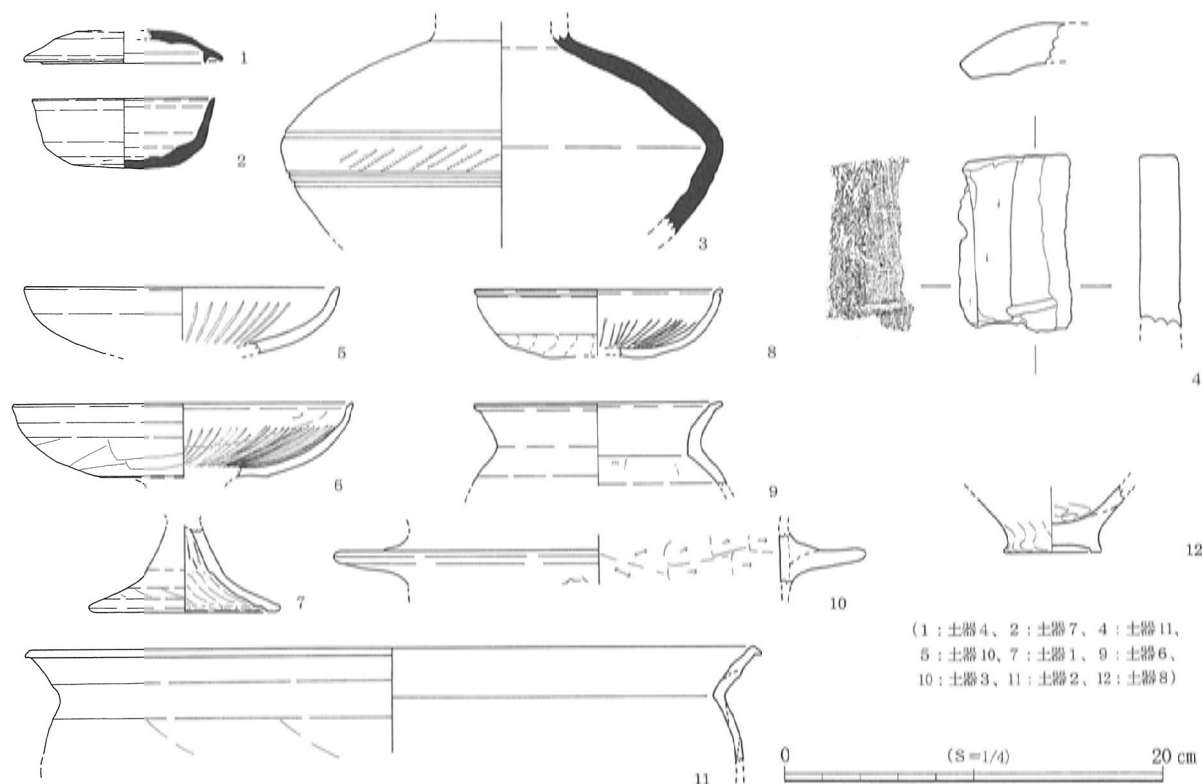


図46 3-483土坑出土遺物

5は土師器高坏身部片。口縁の残存は悪く、復元径に不安がある。内外面ともヨコナデ、内面は後暗文。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、石英若干ありの精良な胎土。

6も土師器高坏身部片。外面はヨコナデ、接合部の段より下のナデは粗い。内面は右上になで上げるヨコナデ後暗文。見込みに放射状暗文を切る円弧の暗文が1本のみ残存。胎土は灰白10Y R 8 / 2を呈し、長石・石英をわずかに含む精良な胎土。

7は土師器高坏脚部片。外面はナデ。内面は、脚柱部は絞り痕残り、裾部タテユビナデ、裾端部ユビオサエ。ユビオサエ部分に布目状圧痕が明確に残るが、本来糸の圧痕となるものが反対に凸である。理解不能である。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、長石わずかにありの精良な胎土。

8は土師器坏。外面は、底部不定方向ユビナデ、体部下半斜めユビナデ、上半ヨコナデ。内面はヨコナデ後暗文。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 3を呈し、石英を若干含む精良な胎土。

9は土師器甕片。内外面ともヨコナデだが、内面頸部より下にわずかにタテハケ残る。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 4を呈し、長石・石英若干、角閃石・チャートわずかに含む。

10は土師器羽釜鈔片。内外面ともヨコナデ。胎土はにぶい黄褐10Y R 4 / 3を呈し、角閃石多し、長石・石英若干ありの生駒西麓産胎土。

11は土師器鉢片。外面は口縁ヨコナデ、胴部斜めナデ。内面ヨコナデ。胎土は橙5Y R 6 / 6を呈し、石英・長石・赤色粒を若干、チャートをわずかに含む精良な胎土。

12は弥生土器片。鉢底部か。外面底部の凹面はユビナデ、その周囲は台に接していたか平坦である。底部側面はユビナデ、それより上部は調整不明。内面は底部にユビオサエが散在し、それを切って斜めナデ。胎土は黄褐2.5Y 5 / 3を呈し、角閃石多し、長石ありの生駒西麓産胎土。

3-687土坑(図47・表25) 02-2トレンチ東半の中央付近、3-建物11東隅の南側で検出。3層掘削中、この部分は3-2層の影響で4面が激しく凹凸していたため、深めに掘削していると、図47-1のガラス小玉鋳型片が出土した。ひび割れていたが、分離はしていない状態で、水平な状態で出土し、周囲に炭化物層が検出されたので、遺構内の可能性が強いと考え、4面を精査したところ、この土坑を検出した。鋳型が出土したのは遺構断面図の二つに分かれた1の層の間、2の上面である。

遺構の切り合い的には、3-建物11の柱穴が切る3-689溝を切っている3-686ピットを切っているため、建物と共に3-689溝より新しいとは言える。遺物の出土状況からも本来はもっと深さがあったのは確実で、断面図の1の炭化物層も厚くあった可能性が強い。炭化物層内から鋳型片が出土するのは、4-150炉の炭化物層から甕の羽口片が出土しているのと共通性があり、この土坑も鋳造などの工芸生産関連の炉下部構造である可能性があると考えられる。

出土遺物は、鋳型以外は小片が多く、少数だが、粘土塊と礫の出土が目に見える。粘土塊は軽く火を受けた、径3cmほどの不整形なもので、スサは認められず平坦面などもない。礫はみな中礫サイズの自然礫だが、被火痕跡のあるものや、石英片岩がある。

実測可能で図47に掲載できた遺物は2点のみである。

1は最初に出土した土師質ガラス小玉鋳型片である。今回の調査で出土した最大の破片で、全国で見ても、ガラス小玉鋳型の破片としては有数の大きさと思われる。芯持ち孔は貫通し、径約0.5mm。鋳型穴は径5mm、深さ3~4mm。ナデがあるように思われるが、二次的被火か器表は荒れる。胎土は橙7.5Y R 6 / 6を呈し、石英・長石あり。微細粒には黒雲母もある。

鋳型穴の配置から見れば、鋳型の中心が残り、端部近くまで残存していると思われる。その配置から、

他の破片で同心円状配置とした鑄型穴の配置が、本来は螺旋状の配置であると推測できる。ただ、本品の配置は中心付近でやや乱れがあり、外側でも部分的にずれる鑄型穴がある事から、正確な割付がなかったようである。また、図の左側にある方形の空白部分は、3-376住居出土例（図40-35）にも見られた、鑄型端部の長方形の空白部分と考えられる。その周辺の鑄型穴の配置が独立している事も共通している。そこから推測される鑄型の径は21~24cm程度か。ただし、鑄型穴の配置がやや楕円を示しているため、この径は長径である。

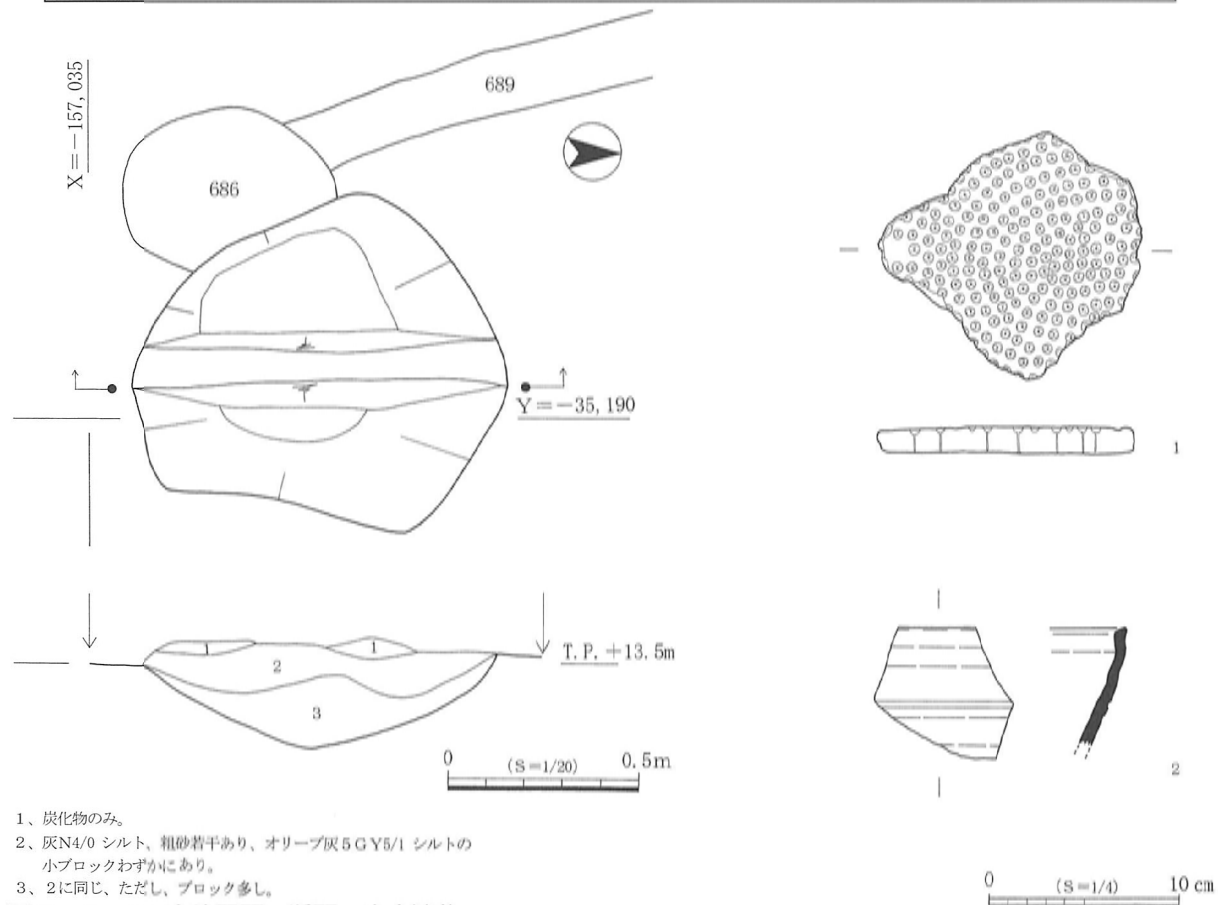
2は須恵器甌片と思われる。内外面とも回転ナデ。胎土は灰N6/0を呈し、長石・石英若干あり。石英粒は粗く極粗砂大。

3-707土坑（図48~50・表26） 02-2トレンチ東半で、3-建物11の北隅北側に位置する。南東には3-708土坑が隣接する。平面形は、南東側が溝状に伸びるが、それ以外は北西側が三角形に突出する、細長い五角形に近い形と言える。長軸方向はおおむね3-建物11と同じと見て良からう。

土坑底にピットなどがある可能性を考慮して底で検出した凹部にも遺構番号を振って掘削したが、い

表25 3-687土坑 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位	破片数		細別	破片数				
			破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%			
土器・陶磁器	25	弥生土師器	2	8.0	甕	2	10.5									
			19	76.0	甌	1	5.3									
						鉢	4	21.1								
						高坏	1	5.3								
						坏血類	1	5.3								
						鑄型	1	5.3								
		須恵器	4	16.0			甕	1	25.0							
							甌	1	25.0							
							坏	2	50.0							
		その他		石	9		粘土塊	1								



- 1、炭化物のみ。
- 2、灰N4/0 シルト、粗砂若干あり、オリーブ灰5GY5/1 シルトの小ブロックわずかにあり。
- 3、2に同じ、ただし、ブロック多し。

図47 3-687土坑平面・断面、出土遺物

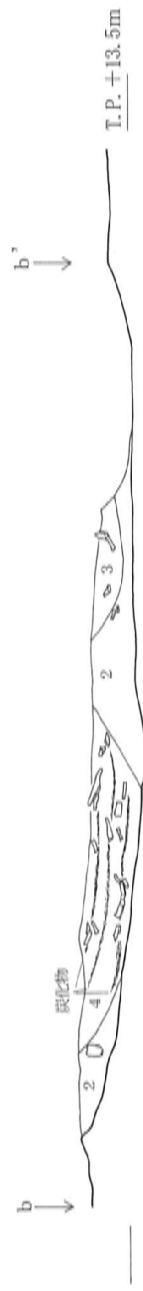


図48 3-707土坑出土状況・底面遺構

南北(西から)



東西(北から)



1. 灰 10Y4/1 シルトに、灰 10Y6/1 シルトのブロック・炭化物若干あり。
2. オリーブ灰 2.5G Y5/1 シルトに、灰 10Y6/1 シルトの小ブロックわずかにあり。
3. 灰 7.5Y4/1 粘質土、シルトへ細砂主体、粗砂・炭化物あり。
4. 3'内に3条の炭化物層はさまる。

(断面位置は図 48 にあり)



図49 3-707土坑断面

ずれも極めて浅く、埋土も独立せず、単なる底部の凹凸と見て良いものである。

図49の断面図で見ると、2の上面の凹部に3・4が堆積している。1はブロック土で人為的埋土の可能性が高い。2は遺物をあまり含まず、上面に遺構状の凹部がある事から整地土の可能性もある。2の上面の状態を復元的に推測すると、底面で検出した626・818土坑の中心あたりに二つの浅い凹部があり、それが3で埋まり、南の凹部ではその東に溝状の凹部があり、それが4で埋まったと思われる。遺物は3・4の層に集中し、4には三つの薄い炭化物層がはさまるのが注目される。

二つの凹部の上になんらかの構築物があったと考え、竈と炉がセットになった施設の下部構造である可能性もあると思われる。

出土遺物の組成を見ると、土師器で羽釜・鉢が坏・高坏とほぼ同じ破片数と高率で、須恵器では壺の比率が高いのが目立つ。弥生土器が少なく、土器全般の完形率がやや低いのは、廃棄土坑に転用された特徴を示すと思われるが、調理具の比率が高いのは炊事場所が近い事を示唆しているのだろうか。他にはガラス小玉鋳型片の出土が見逃せない。時期的には飛鳥時代前半に限定でき、飛鳥Ⅱ期としてもおかしくない。

図50には実測可能な遺物を掲載した。1～4は須恵器、5～11は土師器である。

1は坏蓋片。溶着する破片はほぼ同じ大きさの坏蓋の破片と思われる。内外面とも回転ナデ。胎土は灰白N7/0を呈し、黒色粒あり、長石わずかにあり。

2は蓋坏身片。外面は自然釉かかり、底部では発泡するため調整不明、体部は回転ナデ。内面は回転ナデ後、底部一定方向ナデ。胎土は灰N5/0を呈し、長石・石英若干あり。

3は坏身片。外面は、底部回転ヘラ切り後粘土塊附着、屈曲部に回転ヘラケズリ、体部は回転ナデ。内面は回転ナデ。胎土は灰白N7/0を呈し、長石あり、石英・黒色粒若干あり。石英粒は粗く極粗砂大である。

4は甕胴部片。胴部上半か。外面は、カキメの下に残るタタキは全てカキメと直交。内面のタタキは上にゆるくナデ入る。胎土は明青灰5PB7/1を呈し、石英・長石わずかにあり。陶邑産か。

5は高坏身部片。内外面ナデだが、内面はやや磨滅し、暗文の有無は不明。胎土はにぶい黄橙10YR7/3を呈し、長石・赤色粒わずかにありの精良な胎土。

6は鉢片。外面は口縁～頸部はヨコナデ。体部はハケ後ナデ。内面は口縁ヨコナデ、胴部ハケ後ナデ。胎土は黄橙7.5YR8/8を呈し、長石・赤色粒をわずかに含む精良な胎土。

7はガラス小玉鋳型の縁辺部片。芯持ち孔は貫通し、径約0.5mm。鋳型穴は径5mm、深さ2mmで、同心円状配置というには乱れがあり、図の下端あたりに空白部分がある可能性がある。二次的被火で器面荒れ、色調も下面から上面の端部沿いまでにぶい褐7.5YR6/3で、上面の大部分は明赤褐5YR5/6を呈する。上面が酸素の供給が良い環境か。胎土は石英・赤色粒・角閃石あり。端部の円弧から、径19cm弱ほどに復元できる。

8もガラス小玉鋳型片。鋳型の縁辺部の破片である。芯持ち孔は貫通し、径約0.5mm。鋳型穴は径5mm、深さ2mmで同心円状配置。二次的被火で器面荒れる。色調も下面から端面はにぶい黄橙10YR7/3、上面は浅黄橙7.5YR8/4を呈する。胎土は長石・石英若干あり、端部の円弧から推測される径は約20cm。

9もガラス小玉鋳型片。芯持ち孔は貫通し、径約0.5mm。鋳型穴は径5mm、深さ2mmで同心円状配置。二次的被火で器面荒れ、色調も下面から上面端部沿いまでにぶい橙7.5YR7/3、上面の大部分は明



赤褐5YR5/6を呈する。胎土は角閃石・石英・赤色粒あり。端部の残存少なく、径復元不能。

10もガラス小玉鑄型片。芯持ち孔貫通し、径約0.5mm。鑄型穴は径5mm、深さ4～3mmで同心円状配置。二次的被火の有無は不明。上面の一部にハケ残存、他はナデ。胎土は、明褐7.5YR5/6～暗灰黄2.5Y4/2を呈し、石英・長石あり。

11もガラス小玉鑄型片。芯持ち孔は貫通し、径約0.5mm。鑄型穴は径5mm、深さ2mm。下面に焼きハゼあり二次的被火か。胎土はにぶい褐7.5Y5/4を呈し、混和砂粒は認められない。

3-708土坑(図51～54・表27) 3-707土坑の南東に隣接し、平面規模や長軸方向もほぼ同じと言って良い。埋土も、下に遺物のあまり入らないブロック土(図52断面図の4・5)、上に炭化物を含む層

表26 3-707土坑(818土坑含む) 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別								
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%							
土器・陶磁器	232	弥生	18	7.8	壺	1	5.6	タタキ	1	100.0	生駒西麓	1	100.0			
					壺	1	5.6									
					高坏	1	5.6									
		土師器	193	83.2	壺	17	8.8									
					羽釜	27	14.0									
					壺	2	1.0									
					鉢	38	19.7									
					高坏	25	13.0									
					坏皿類	34	17.6									
					鑄型	6	3.1									
		須恵器	21	9.1	壺	5	23.8									
					壺	11	52.4	提瓶	1	9.1						
					坏	5	23.8	II形式	2	40.0	蓋	2	100.0			
									III形式	2	40.0	身	1	50.0		
										蓋	1	50.0				
その他		石	8													

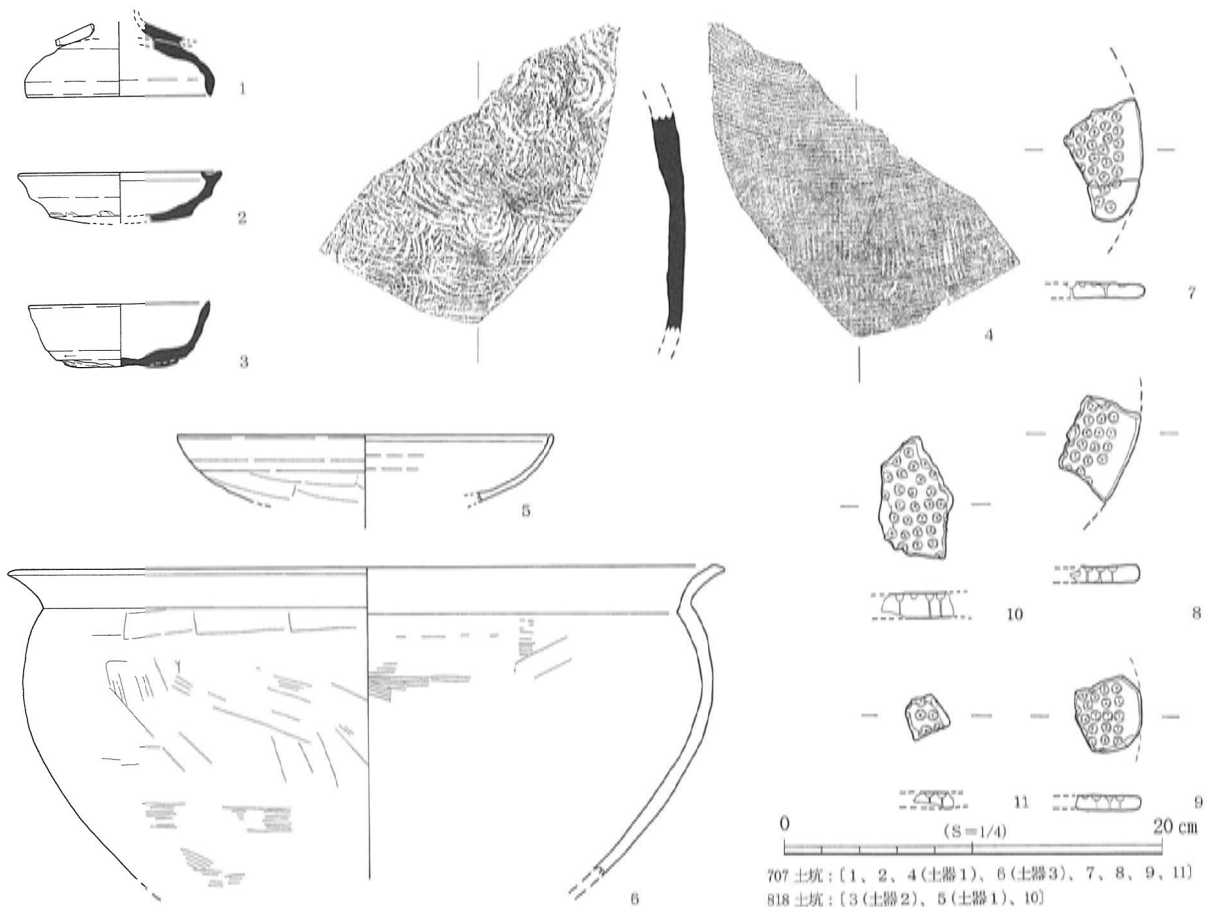


図50 3-707土坑出土遺物(土坑底の818土坑出土も含む)

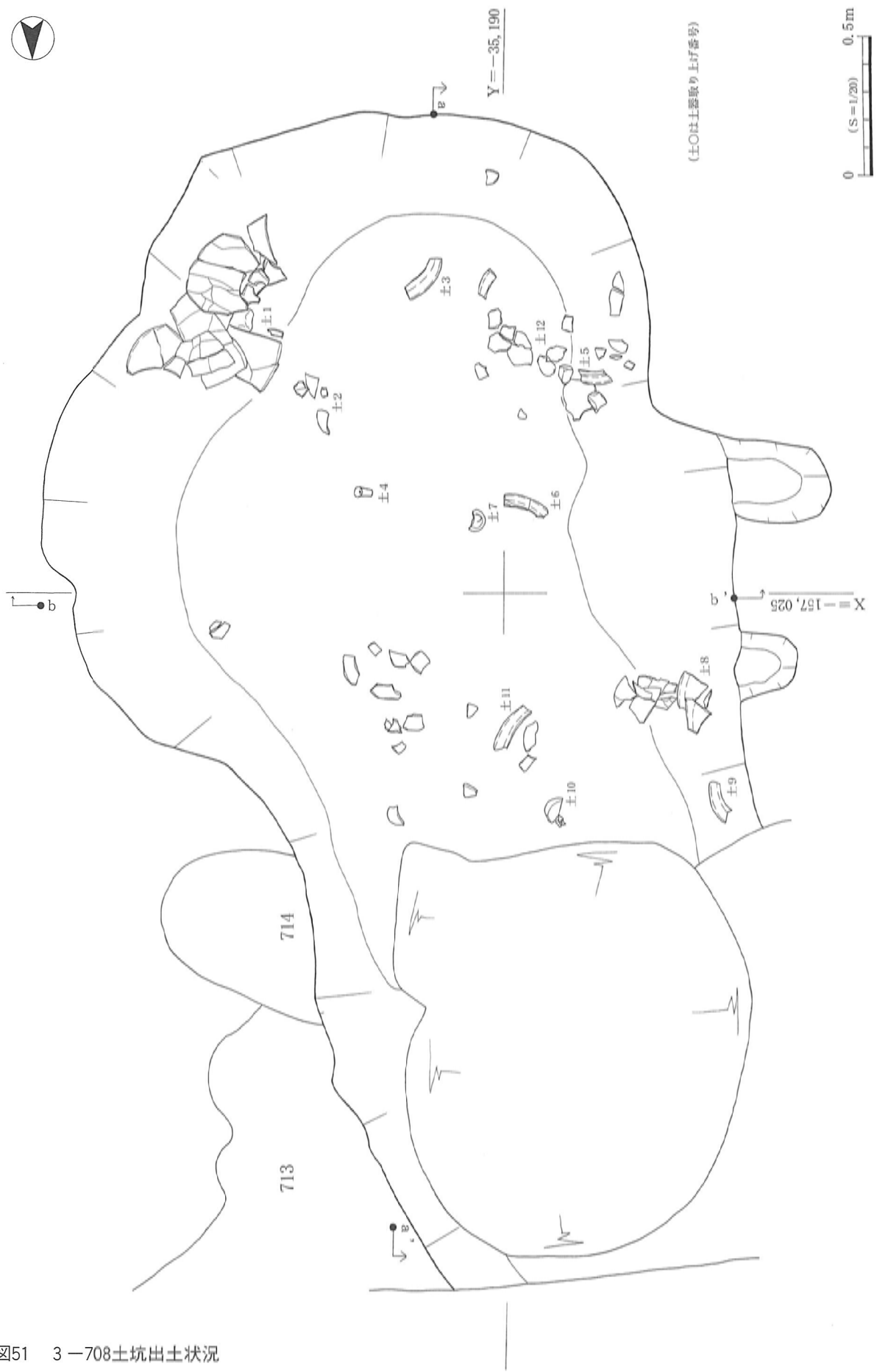
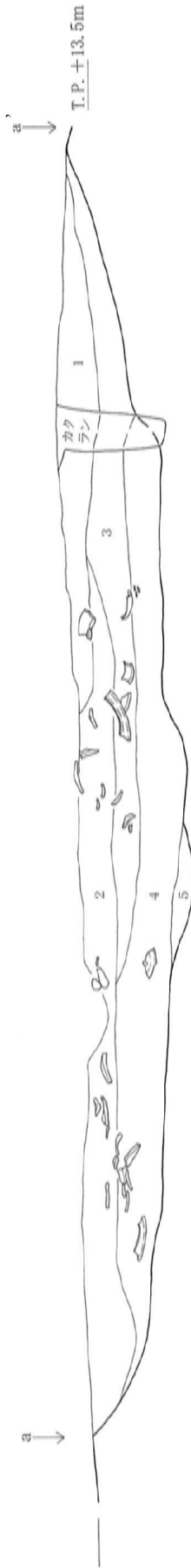


图51 3—708土坑出土状况

南北 (東から)



東西 (北から)



- 1、青灰5BG5/1～灰オリーブ5Y5/3粘質土、シルト～細砂主体、中砂若干あり、炭化  
物わずかにあり。
- 2、灰5Y4/1粘質土、シルト主体、細砂～中砂若干あり、炭化物多し。
- 3、灰5Y5/1シルト、炭化物あり、薄い層状になる炭化物もあり。
- 4、灰オリーブ5Y4/2シルトと、分解した有機物、青灰5Y5/1シルトの小ブロックあ  
り。
- 5、青灰5B5/1シルト、青灰5BG5/1シルトのややばやけた小ブロックわずかにあり。



図52 3-708土坑断面 (断面位置は図51にあり)

(断面図の2・3)があるのも似る。両者の切り合いは、攪乱のため必ずしも明確ではないが、3-707土坑の南東溝状に突出する部分が3-708土坑を切るようである。

断面図の4の上面は、南北方向では北側が、東西方向は西側が一段下がるのは分かるが、独立した凹部は確認できない。また、この層はシルトに有機物が多く混じる層だが、その有機物は細かく分解した植物遺体のようながまったく炭化していない。層内下半にある小ブロック以外は極めて淘汰が良い水成堆積で、いかなる条件で形成されたものか疑問なところが多い。

3-707土坑より、その性格を考えうる条件に乏しいと言える。

出土遺物では、ほぼ完形に近い土師器甕が南東隅で、その場で割れたような状況で出土したのが注目できる。土師器甕は調査区全体でも量が少ないので、この1個体は特異である。その他、土師器では鉢の破片数が坏皿類の破片数を凌駕するなど調理具の比率が高いのが注目される。この状況を見れば、土坑自体は廃棄土坑に転用されているのであろうが、ほとんどこの周辺に炊事場所があったと考えても良いと思われる。しかしまた、ガラス小玉鋳型片だけでなく、棒状土製品や焼土塊等、工芸生産関係の遺物もあり、遺構の性格を考えるにこれも無視できないものである。

図53・54では、実測可能なものを挙げた。図53-1～7は須恵器、8・9は焼土塊、10～24と図54-1・2は土師器である。

1は坏蓋である。外面は、口縁と、つまみとその周囲は回転ナデ、その間は回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ後天井部を一定方向ナデ。上面は降灰痕があるが、2ヶ所(図の点線内部)降灰のない部分があり、同じ法量のもを重ね焼きした痕跡と考えられる。胎土は灰7.5Y6/1を呈し、黒色粒をわずかに含む。

2は坏身。外面は、底部無調整、屈曲部に回転ヘラケズリ、体部は回転ナデ。内面は回転ナデ後、底部一定方向ナデ。底部外面のヘラ記号は残存部分だけで見ると魚の絵のようにも見える。胎土は灰N4/0を呈し、石英あり、長石若干あり。石英粒は粗く極粗砂大。

3は坏蓋片。外面は天井部回転ヘラ切り、その周囲回転ヘラケズリの後、全面回転ナデ。内面は回転ナデ。胎土は灰N6/0を呈し、黒色粒・石英・長石あり。

4も坏蓋片。外面は、天井部回転ヘラ切り、屈曲部回転ヘラケズリ後回転ナデ、体部回転ナデ。内面は回転ナデ後天井部不定方向ユビナデ。胎土は灰N6/0を呈し、石英わずかにあり。

5も坏蓋片である。3・4より口径小さい。外面は、残存部上端回転ヘラケズリ、体部は回転ナデ。内面は回転ナデ後天井部一定方向ナデ。胎土は灰N6/0を呈し、黒色粒あり、石英・長石わずかにあり。石英粒は粗く極粗砂大。

6は甕片。外面は頸部より上もタタキ残存、後回転ナデ。内面は肩部にユビオサエや接合痕残るが、回転ナデ。口縁端部から内面頸部まで降灰痕あり。胎土は灰N5/0を呈し、粗い石英あり。微細粒に黒雲母もあり。

7も甕片。外面に残るタタキはカキメに直交。内面のタタキは軽くナデ。内外面、破断面に煤附着。胎土は灰N6/0を呈し、石英・長石若干あり。

8は炉壁片の可能性高い焼土塊。図左の面は表面が剥落している。スサの痕跡あり。右の面は凸気味に弯曲した面でハケ残る。色調は右面から厚さの3分の2ほどが灰黄褐10YR6/2、左側がにぶい黄橙10YR7/4を呈し、左が内面でより高熱を受けたと思われる。胎土は、6mmほどの凝灰岩らしき粒子あり、石英・長石あり。スサの痕跡あり。微細粒には黒雲母もあり。

表27 3-708土坑 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種	破片数		型式・部位		細別							
		破片数	%		破片数	%	破片数	%	破片数	%						
土器・陶磁器	340	弥生 土師器		高坏	1	2.9										
				甕	36	14.6										
				羽釜	27	10.9										
				甌	41	16.6										
				甗	2	0.8										
				壺	1	0.4										
				鉢	64	25.9										
				高坏	12	4.9	脚部	1	8.3							
				坏血類	52	21.1	小皿	8	15.4							
				棒状製品	1	0.4										
				銚型	7	2.8										
				須恵器			甕	27	46.6	口縁	7	25.9				
							壺	6	10.3							
							坏	25	43.1	Ⅱ形式	9	36.0	蓋	9	100.0	
										Ⅲ形式	4	16.0	身	1	25.0	
											蓋	2	50.0			
				木製品	11		石	3		粘土塊	5					

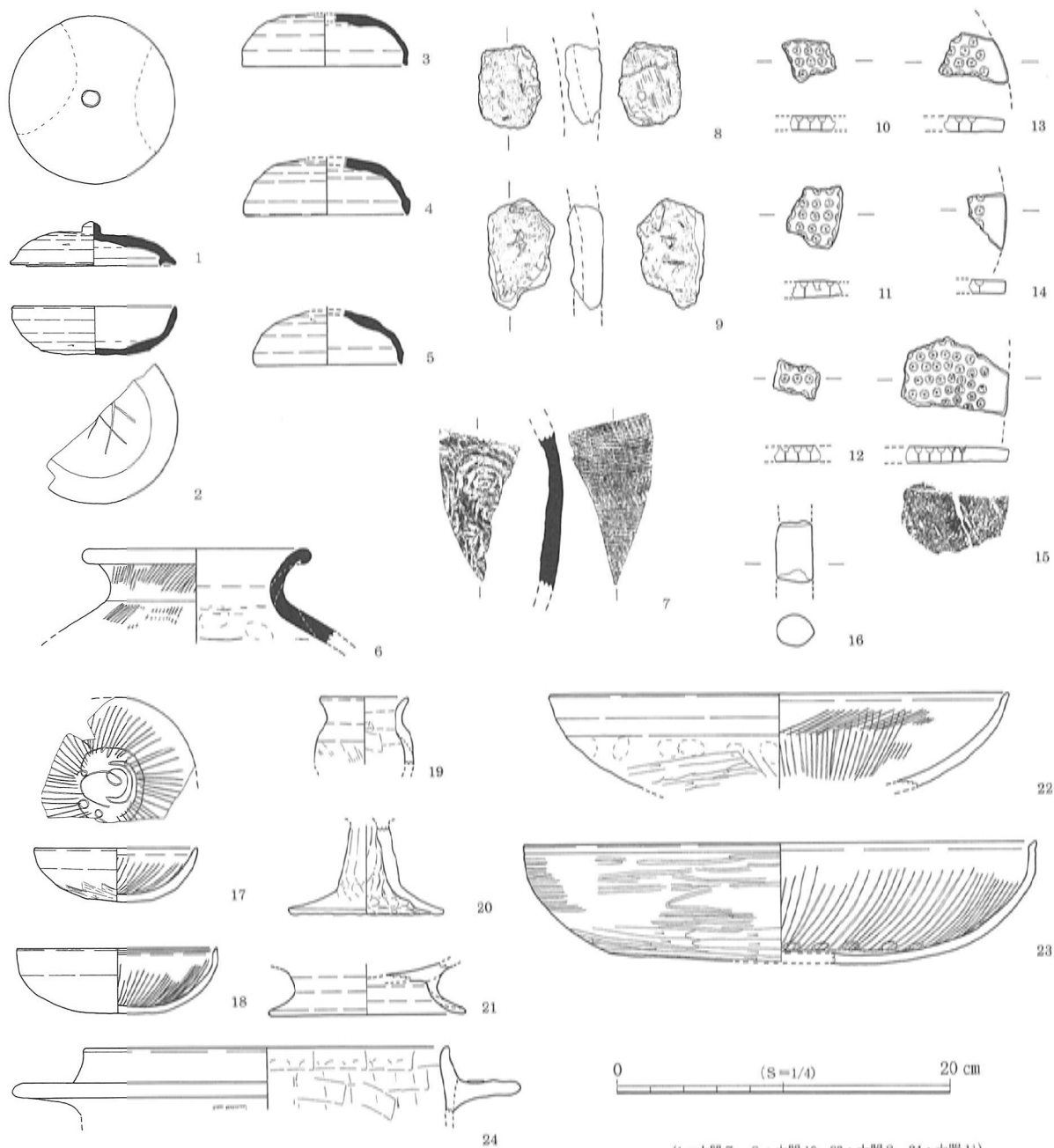


図53 3-708土坑出土遺物（その1）

(1:土器7, 2:土器10, 23:土器8, 24:土器11)

9は埴埴内型片の可能性のある焼土塊。全体的に図左側が凹気味に弯曲する。左の面は全体が発泡、被熱によるハゼか細かい凹凸あり、2ヶ所金属滓らしきもの附着。それ自体も発泡し、周辺は灰白7.5 Y R 8 / 1で、真珠状光沢あり、中心は灰10 Y 4 / 1で光沢なし。右の面は細かい凹凸やしわがあり、ナデなどの調整は見られないのに平滑なため、型に押し付けられたようである。スサの痕跡あり。

断面では、右から厚さの3分の2程度までは灰N 4 / 0を呈し、スサ痕残るが、左は灰白N 7 / 0を呈し、スサ痕は確認できない。胎土には石英わずかにあり、微細粒は黒雲母もあり。

10～15はガラス小玉鑄型片。芯持ち孔は貫通し、径約0.5mm、鑄型穴は径5mm、深さ3mmなのが共通する。

10はナデ調整のようである。被火痕跡は不明。胎土は明褐7.5 Y R 5 / 6を呈し、混和砂粒は認められない。微細粒には黒雲母などあり。

11もナデ調整か。芯持ち孔が膨らみ、未貫通なものが1個ある。その中は下が広く、横に細く伸びる穴があり、針のような穿孔具が途中で折れた状態で回転し、横に刺さった痕跡と推測できる。被火痕跡不明。胎土はにぶい褐7.5 Y R 5 / 4を呈し、長石・石英あり。

12は調整・被火痕跡不明。胎土はにぶい橙7.5 Y R 6 / 4を呈し、石英・長石若干あり。

13は、被火痕跡か器表荒れる。鑄型穴は同心円状配置。その一つの中に発泡した灰白10 Y R 8 / 1の附着物あり。ガラス滓か。胎土は明褐7.5 Y R 5 / 6を呈し、微細粒に黒雲母などあり。端部の円弧から復元される径は20cmほどか。

14の胎土は褐7.5 Y R 4 / 4を呈し、石英わずかにあり。被火痕跡・調整不明。推測される径は20cmほどか。

15には12個ほどの鑄型穴の中に白濁したガラス小玉の破片が附着している。径の分かるものは4mmほど。鑄型穴は同心円状配置。上面は一定方向ナデ、端面はヘラケズリ、下面は植物茎の圧痕と、何らかの圧痕と思われる凹凸がある。被火は確実なもので、胎土はにぶい褐7.5 Y R 5 / 4を呈し、長石・石英若干あり。微細粒には黒雲母もある。

ガラス小玉自体が残存しているのは稀有な例と思われるが、白濁しているのが、温度が上がり過ぎて発泡したためか。一つの鑄型穴内ではわずかに青緑色のガラスが附着しているのが認められた。

16は棒状土製品。両端を欠失。被火痕跡か器表荒れ、調整不明。胎土は浅黄橙7.5 Y R 8 / 6を呈し、石英・長石多し。鑄造関係の部品か。

17は坏。外面は、底部不定方向の粗いナデ、屈曲部は斜めハケ、その前にユビオサエか、ハケの上端を上ヨコナデが消す。内面はヨコナデ後暗文。見込みの暗文を放射状暗文が切る。放射状暗文には1往復連続するものがある。胎土は灰黄褐10 Y R 5 / 2を呈し、長石をわずかに含む精良な胎土。

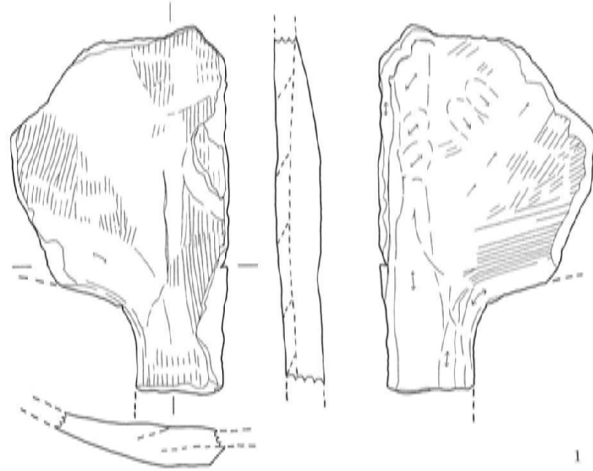
18も坏。外面は、下半やや荒れるが全体にヨコナデか。ただし、底部に一部ハケ残る。内面はヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙10 Y R 7 / 1を呈し、石英・長石・赤色粒わずかにある精良な胎土。

19はミニチュアの壺か甕か。外面は口縁から肩部はヨコナデ、胴部はユビオサエ後ハケ、さらに軽くナデ。内面はヨコナデ。胎土は灰白10 Y R 8 / 1を呈し、長石・石英わずかにありの精良な胎土。

20は高坏脚部片。外面はナデ、内面はナデとユビオサエ。胎土はにぶい橙5 Y R 7 / 4を呈し、赤色粒わずかにありの精良な胎土。

21は台付き鉢の脚部片か。内外面ともヨコナデだが、身部内面はその前にタテハケか。胎土はにぶい黄橙10 Y R 7 / 2を呈し、石英・長石・赤色粒を若干含む。精良な胎土と言えるか疑問。

22は坏形鉢片。外面は中位にユビオサエ1列、下部はケズリがそれを切る。上部はヨコナデ。内面ヨコナデ後暗文。上段の暗文が下段を切る。外面ほぼ全面に光沢ある黒い附着物あり、漆か。内面は器表近くの砂粒を核とした細かい焼きハゼのような割れが多数ある。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 3を呈し、長石をわずかに含む精良な胎土。



23も坏形鉢。外面は、体部ヨコナデ後横ミガキ、屈曲部から底部はケズリ、底部のケズリは平行する直線的なケズリを単位として、3単位で1周する。内面はヨコナデ後暗文、見込みの螺旋暗文は体部の放射状暗文に切られる。



24は羽釜片である。外面は口縁から鐏の下までヨコナデ、それより下にはタテハケ。内面は口縁よりやや下からタテユビナデが残るが最終調整はヨコナデ。内面全面から口縁端部外面までと鐏の下面に煤附着。胎土は灰黄褐10Y R 6 / 2を呈し、石英・長石・角閃石わずかにあり。

調査区では極めて少ないタイプであるが、口縁端部が丸く、胎土が、生駒西麓に近い河内の胎土のようである。

図54-1は移動式竈の焚口周辺片である。外面はタテハケ、焚口縁辺にナデ、把手の剥離痕あり。内面は縦の突帯が貼りつけられ、ハケ・ケズリ・ナデが錯綜している。胎土はにぶい褐7.5Y R 5 / 4を呈し、石英・長石・角閃石あり、赤色粒わずかにありの生駒西麓産胎土。

2は甌である。外面は、口縁端部ヨコユビナデ後、ヨコナデ、その下はヨコナデに切られる細かいタテハケ、下部はヨコケズリ後ヨコナデ、底部はケズリ後ナデ。内面は、底部はユビオサエ・ユビナデ後ナデ、体部の大部分はタテケズリ、

(1:土器5, 2:土器1)

0 (S=1/4) 10 cm

図54 3-708土坑出土遺物(その2)

その上にヨコユピナデ後ナデ、口縁はヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石・石英・赤色粒をわずかに含む精良な胎土。

4-134ピット（図56） 02-3-1トレンチで、4-150炉の北側3mほどで検出され、轡の羽口が出土したので、4-150炉との関連で取り上げる。

4-150炉周辺にはいくつかピットが散在していたが、柱穴らしきものはなく、埋土に炭化物が見られるものもなく、このピットのみが出土遺物から、関連性が考えられるものであった。平面形は径30cm弱の不整な円形で、深さは17cm。埋土は灰7.5Y 5 / 1の粘質土で、周辺のピットと変わりはない。

轡の羽口片は埋土内北東側で、ピット底からやや浮いた状態で出土した。他は土師器小片が3片出土しているのみである。

図56-1は土師器轡の羽口片。図左側の先端は溶融し、黒～黄灰2.5Y 2 / 1～6 / 1を呈し、垂れ下がる部分があり、使用時の方向が推定できる。その周辺は発泡し、灰白～にぶい黄橙10Y R 8 / 2～7 / 2を呈する。その右は炉壁に埋め込まれていた部分なのか器壁の荒れが少なくなり、ナデが残り、灰黄褐10Y R 5 / 2を呈する。胎土には石英多く、長石あり。

4-150炉（図55・56・表28） 02-3-1トレンチの中央よりやや北側に位置する。3層掘削中に炭化物層に当たり、残りの部分もその高さに合わせて検出した。周囲は、3-2層による4面の攪乱を除去して遺構検出に支障ない深さまで下げているため、この遺構自体は台状に浮いた状態になった。

平面形は長さ2.4m以上ある不整形な溝状であり、検出状況はあたかも造り付けの竈のように見えるが、実際の構造は複雑である。長軸方向はE18° N。付近の建物や溝とはやや異なり、むしろ離れた西側の建物に方向性が似る。

埋土は大別すると、炭化物を含みながら上面で段などを形成する、底面の成形盛土らしき層（図55断面図の6・8）と、上部のほとんど炭化物と焼土からなる層（断面図の1～4）に分かれる。

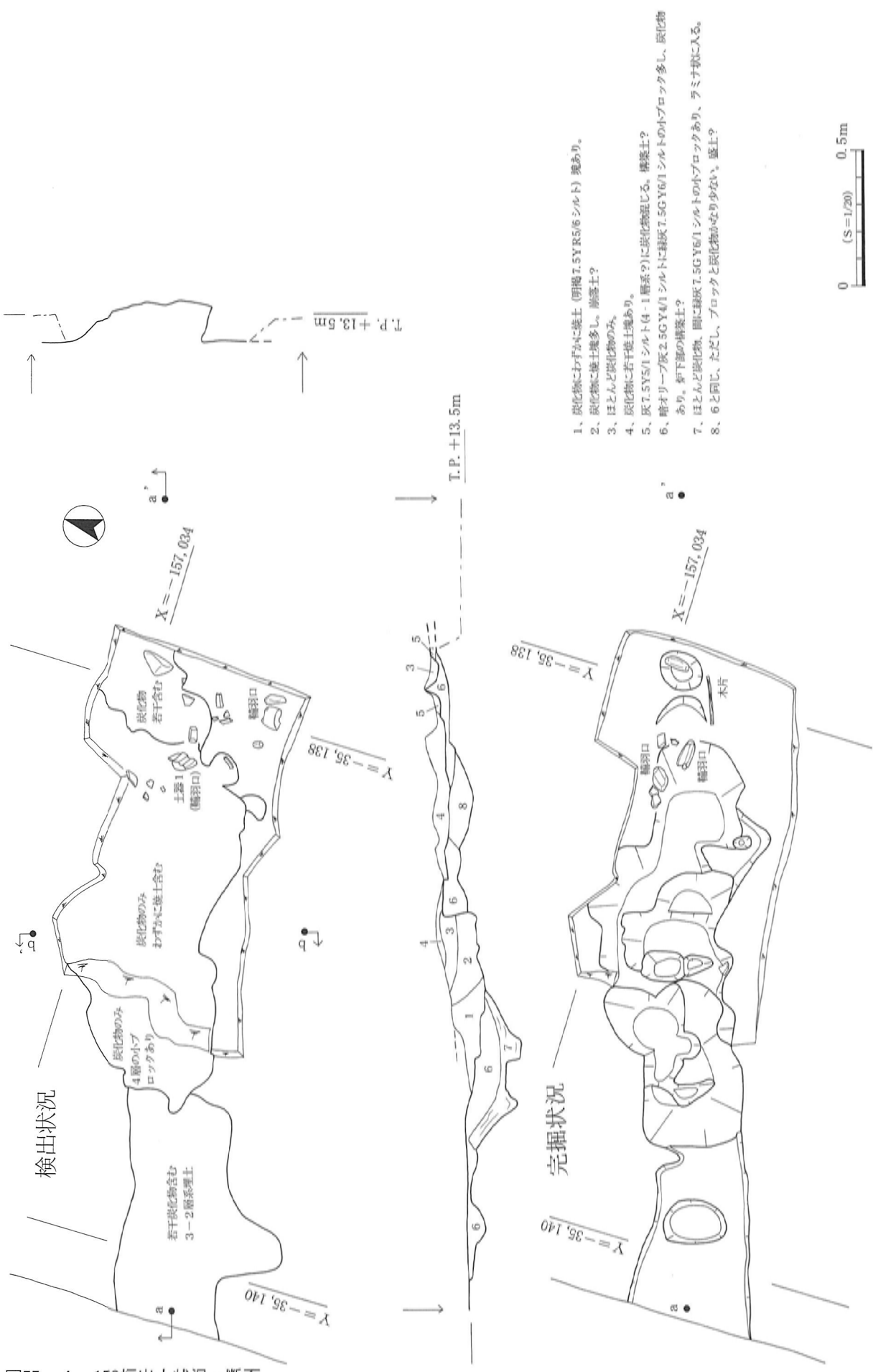
一番深いのは断面図の7が堆積している部分である。この層は炭化物の中に細かいブロック土が薄い層状に入るが、炭化物を数回に分け人為的に詰めた痕跡のようである。そこより西側は、濃い炭化物層がなかったために検出面を高く止める事ができなかったが、トレンチ西端に達しているとは言え、底部が西へ上がっていくため、それ以上はあまり伸びないと思われる。東側も底面が徐々に上がっていくが、6・8の盛土により、垂直に立ち上がる段が作られているのが注目できる。7の堆積している部分を中心に、西側にも同じ段が作られていたと仮定すると、中心床面下に炭化物が埋め込まれた、長さ約1.1m、幅約0.45mほどの、壁の立つ長方形の土坑が作られていたと考える事もできる。

それより東の床面はわずかな段差で下がってから0.7mほどで上がりきり、その先にピットがあるような形状になる。

上部の炭化物層は2が焼土を多く含むので、その焼土が破壊された上部構造の破片である可能性があるが、その上の3がほぼ炭化物のみの層である事や、遺構の底面・床面・壁面に一切被火の痕跡がない事から考えると、1～3は先述した長方形の土坑を埋めるように入れられたものと見た方が自然である。ただし、4は東側の浅い溝状部分に薄く堆積している状況と、轡の羽口片など遺物のほとんどが、その中から出土している事からすると再堆積である可能性が強い。

以上の事から考えると、焼土混じりの炭化物を充填した長方形の土坑の東側に浅い溝が付いた形を復元できる。東側の溝部分から轡の羽口片が多く出土している事から、その部分を轡施設と考えれば、推定される長方形の土坑は、炭化物や焼土を入れて防湿を図った、炉の下部構造の可能性が強まる。その





1. 炭化物にわずかに盛土 (明掲 7.5YR5/6 シルト) あり。
2. 炭化物に盛土多し。崩落土？
3. ほとんど炭化物のみ。
4. 炭化物に若干盛土あり。
5. 灰 7.5Y5/1 シルト (4-1 層系?) に炭化物混じる。構装土？
6. 暗オリーブ灰 2.5GY4/1 シルトに緑灰 7.5GY6/1 シルトの小ブロッグ多し。炭化物あり。下部の構装土？
7. ほとんど炭化物。間に緑灰 7.5GY6/1 シルトの小ブロッグあり。ラミナ状に入る。
8. 6と同じ。ただし、ブロッグと炭化物がかなり少ない。盛土？

図55 4-150炉出土状況・断面

事からこの遺構を炉とした。調査区出土の遺物から考えれば、ガラス小玉鑄造用か鍛冶の炉である可能性が高い。炭化物層内には多くの鉄滓状のものがあつたが、それはほとんど高師小僧であつた。だが、埋土を篩選別し、さらに磁石で選別すると、鍛造剥片が含まれている事が判明した。長さ3mm以下と非常に細かいもので、確認したものは全て板状である。この遺構が炉として操業している時のものではないが、他に小鍛冶の炉が存在し、そこからの炭化物と焼土を充填物として使用している証拠とは言える。

出土遺物では甗の羽口が多い。また、弥生土器の混じりはない。石も甗の羽口が集中している部分から出土しているので、甗施設の構造に使用されていた可能性がある。図56に実測可能なものを載せる。

1は甗の羽口片。先端部は下に垂れる。先端は溶融し黒2.5Y 2 / 1その右縁辺は発泡。さらに右では灰黄褐10Y R 5 / 2でナデ残る。胎土は石英多し、長石あり。

2も甗の羽口片。図左側の先端部は斜めになっている。先端は溶融し黒～灰5 Y 2 / 1～4 / 1を呈し、そこから右へ3cm幅ほどは発泡部分で灰5 Y 4 / 1～浅黄橙10Y R 8 / 3を呈す。そこより右側は器面なめらかでナデが残り、黄褐10Y R 5 / 6を呈す。胎土は石英多く、長石あり。

3も甗の羽口片。右の先端部は内側へ垂れる。先端の溶融部分は黒10Y R 2 / 1を呈し、それに続く発泡部分は褐灰10Y R 5 / 1、左側はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈す。胎土は石英多く、長石あり。

4は土師器皿片か。残りが悪いので径・角度に不安がある。器表磨滅調整不明。胎土は橙7.5Y R 7 / 6を呈し、赤色粒若干ありの精良な胎土。

5は土師器高坏脚部片。外面は磨滅するがヨコナデか。内面上部はユビナデ、下部はユビオサエ。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 4を呈し、赤色粒をわずかに含む精良な胎土。

6は須恵器甕片。外面は木目の出た平行タタキ、内面は同心円タタキ。胎土は灰白7.5Y 7 / 1を呈し、長石わずかにあり。

7は凝灰岩。板状だが加工は不明。

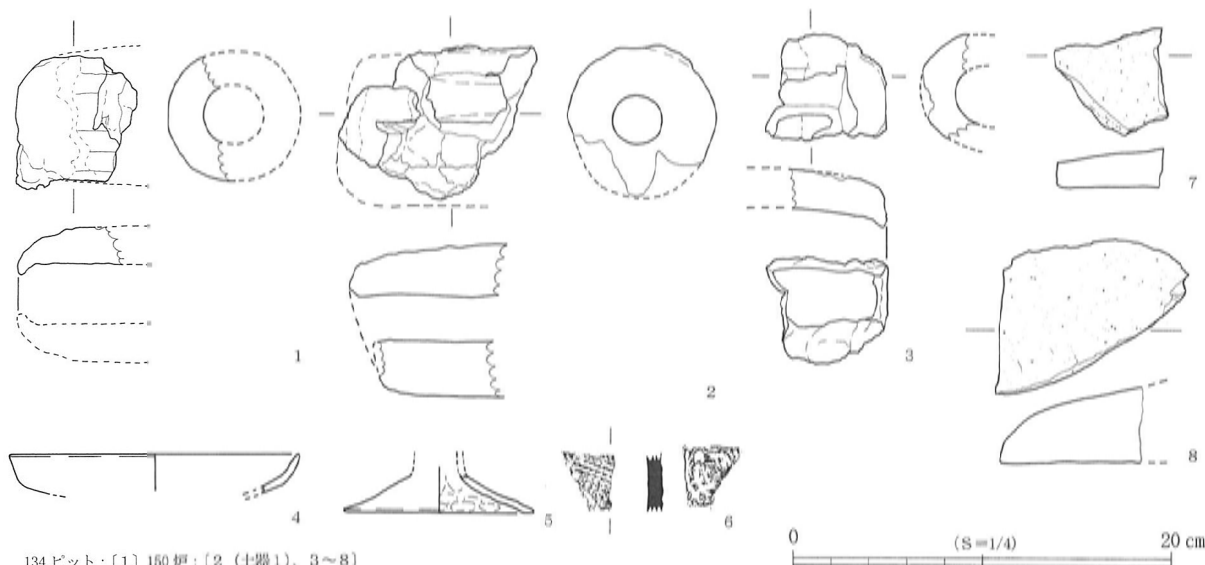
1面だけ煤附着。

8も同じ凝灰岩。断面形は加工したような形だが加工痕は認められない。

遺物からは時期を確定しにくく、掲

表28 4-150炉 遺物破片数集計表

天別	総数	種別		器種			
		破片数	%	破片数	%		
土器・陶磁器	35	弥生	0	0.0	甗	1	2.9
		土師器	34	97.1	高坏	3	8.8
					坏皿類	3	8.8
					甗羽口	20	58.8
					甗	1	100.0
その他	石	1					



134ピット：〔1〕150炉；〔2〕（土器1）、3～8）

図56 4-134ピット・150炉出土遺物

載土器も羽口片以外は破片が小さく、3-2層による上面攪乱で混入した可能性を否定できない。

4-161ピット・162土坑（図57・58・表29・30） 02-3-2トレンチ東端付近で検出された。切り合った位置関係から、当初何らかの関連性のある遺構かと考えたが、結論的にはやや時期が異なり切り合った遺構である。

4-162土坑は、埋土は図57の断面図の1・2を上層、3・4を下層とした。上層は流入土のようで、特に1は土坑の外にも広がり、かなり後の部分堆積である可能性が高い。下層は断面の3がブロック土、4は水成堆積であるが、どちらも植物遺体が分解して細粒化したものを含む。炭化はしていない。また、灰のようなものも認められたが、植物遺体のガラス質かも知れず、断言は避けたい。下層上面は比較的平坦で、北東側の一部では炭化物が面的に広がっていた。また、その面で、断面セクション交叉部分に径約30cm、深さ10cm強のピットがある。

全体の平面形は、隅丸方形の南西辺が突出する五角形と考えると、方軸方向はおおよそE22°N。平面形や整地土のような下層埋土があるのは3-707・708土坑と共通すると言えるが、下層に水成堆積層があり、低湿な雰囲気があるのがやや疑問で、炉などの下部構造とするのに躊躇する。

4-161ピットはその突出した南西部分を切るやや不整な楕円形の平面形を持った遺構である。噴砂がピット内を途中まで上昇している。4-162土坑の埋土がこのピット側に落ち込むのも噴砂を起こした地震の影響かもしれない。ピットの壁は立ち、大型の柱穴のようでもあるが柱痕は認められない。

出土遺物を見ると、4-161ピットは、小片が多く、意図的に入れられたと思われる遺物はない。ただ、高台坏など奈良時代の須恵器を含み。黒色土器A類椀片も見られる。後述の4-162土坑上層と考え合わせると掘削時期は平安時代以降と言える。

4-162土坑も若干の奈良時代遺物を含むが、それらは小片で、いずれも上層から出土している。下層の遺物は北西側の上面付近と、北隅の層内に集中する。土師器・須恵器は飛鳥時代にまとまり、破片も大きく、完形率高い。あと、燃えさしのような一部が炭化した自然木と、製品としての炭が出土しているのが注目できる。

以上から、4-162土坑は飛鳥時代前半に掘削され、下層で埋められるが、しばらくは凹部を成したままであり、完全に埋没するのは平安時代頃であると考えられる。さらにその後4-161ピットが掘削されるのであろう。

実測可能な遺物を図58に掲載した。1・2は4-161ピット出土。他は4-162土坑出土で、3～8が上層、9～21が下層。

1は須恵器のかなり大型の甕か鍋の肩部片と思われる。外面は平行タタキで頸部の回転ナデがそれを切る。内面は同心円タタキで破片上半はヨコナデがそれを消す。胎土は灰5Y6/1を呈し、長石あり、黒色粒若干あり。

2は須恵器高台坏片と思われるが、胎土が東海地域産の可能性があり、長石が見られないところから、灰釉陶器の可能性もある。内外面とも回転ナデ。胎土は灰白N7/0を呈し、石英・黒色粒をわずかに含む。8世紀代のものか。

3は高台椀片、釉は一切残存しないが、軟質白色の胎土から緑釉椀でないかと思われる。磨滅激しく調整不明。胎土は灰白10YR8/1を呈し、細かい石英がわずかに見られる。平安時代頃か。

4は須恵器高台坏片。内外面とも回転ナデ。胎土は灰N6/0を呈し、混和砂粒なし。微細粒に石英・長石あり。8世紀のものか。

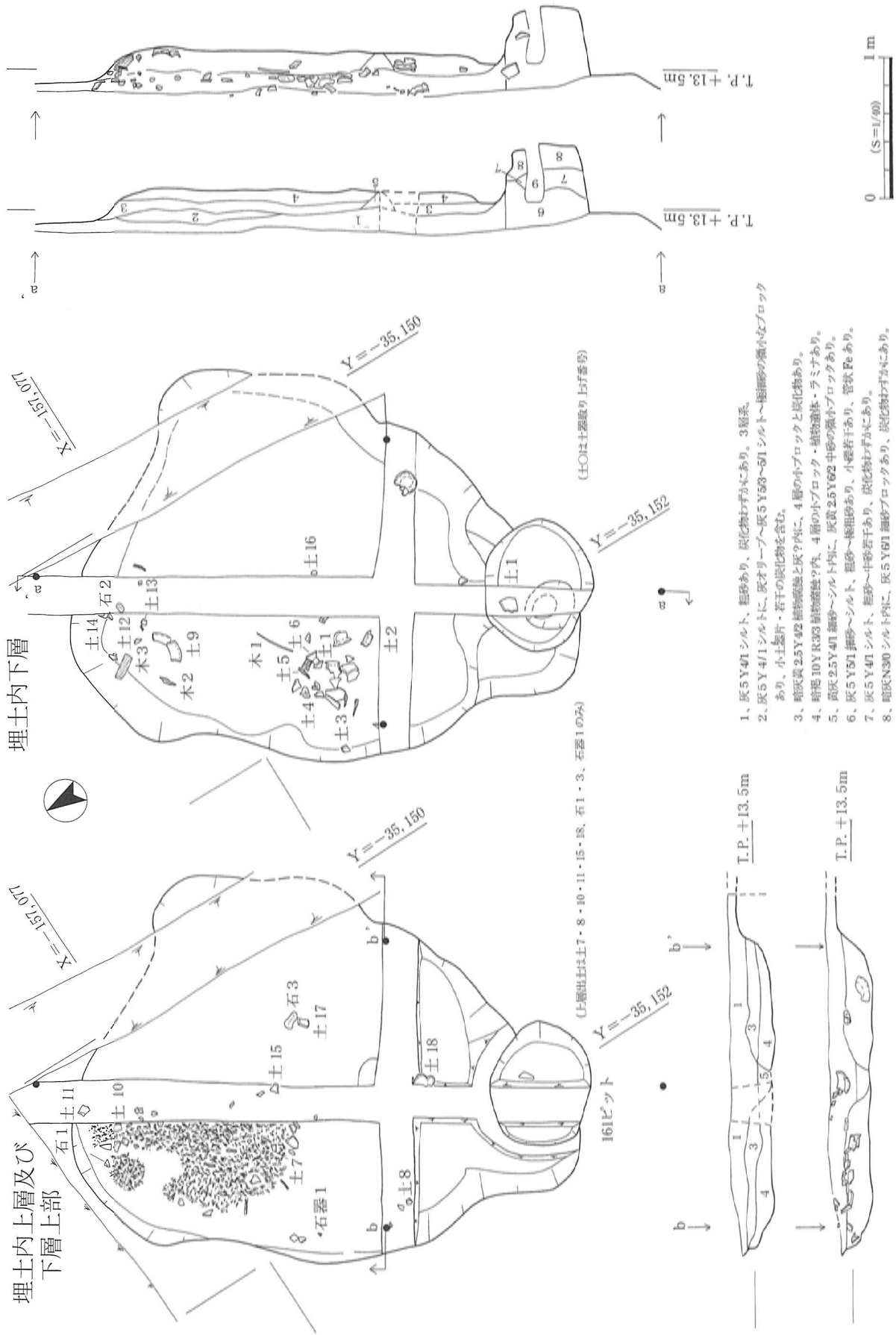


図57 4-161ピット・162土坑出土状況・断面

5は土師器皿片。漆パレットとして使用されたようで、内面に層状に厚く生漆附着。復元の角度にやや不安あり。外面は底部ユビオサエ、体部ナデ。小皿の部類で、時期は確定しがたい。

6は小片で器壁もかなり荒れるが、製塩土器の類ではないかと思われる。二次的被火か。内面にはタテユビナデ・ユビオサエが残る。胎土は灰白10Y R 8 / 1を呈し、石英多し。

7は燻し平瓦片、上面は布目にナデ、下面はナデ。胎土は灰5 Y 5 / 1を呈し、長石・石英あり。

8は土師器土鍾。調整不明。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、石英あり。

9は土師器輪状土器である。胎土・調整の共通点から移動式竈に伴うものと考え。上部口縁形態や煤の付き方からして、竈掛け口に置き、使用するものであろう。今回の調査でも2点しか出土せず、稀少な器種である。外面は上部口縁端面は同心円タタキ後ケズリ。体部はタテハケ後、上部のユビヨコナデ、下端からのヨコナデがそれを切る。内面は上部ヨコケズリ、下のヨコナデがそれを切る。内面から上部口縁端面まで厚く煤が附着。外面も部分的に薄く煤附着、下端部の隙間から煙が洩れたような付き方である。胎土は灰黄褐10Y R 4 / 2を呈し、石英・長石・角閃石ありの生駒西麓産胎土。

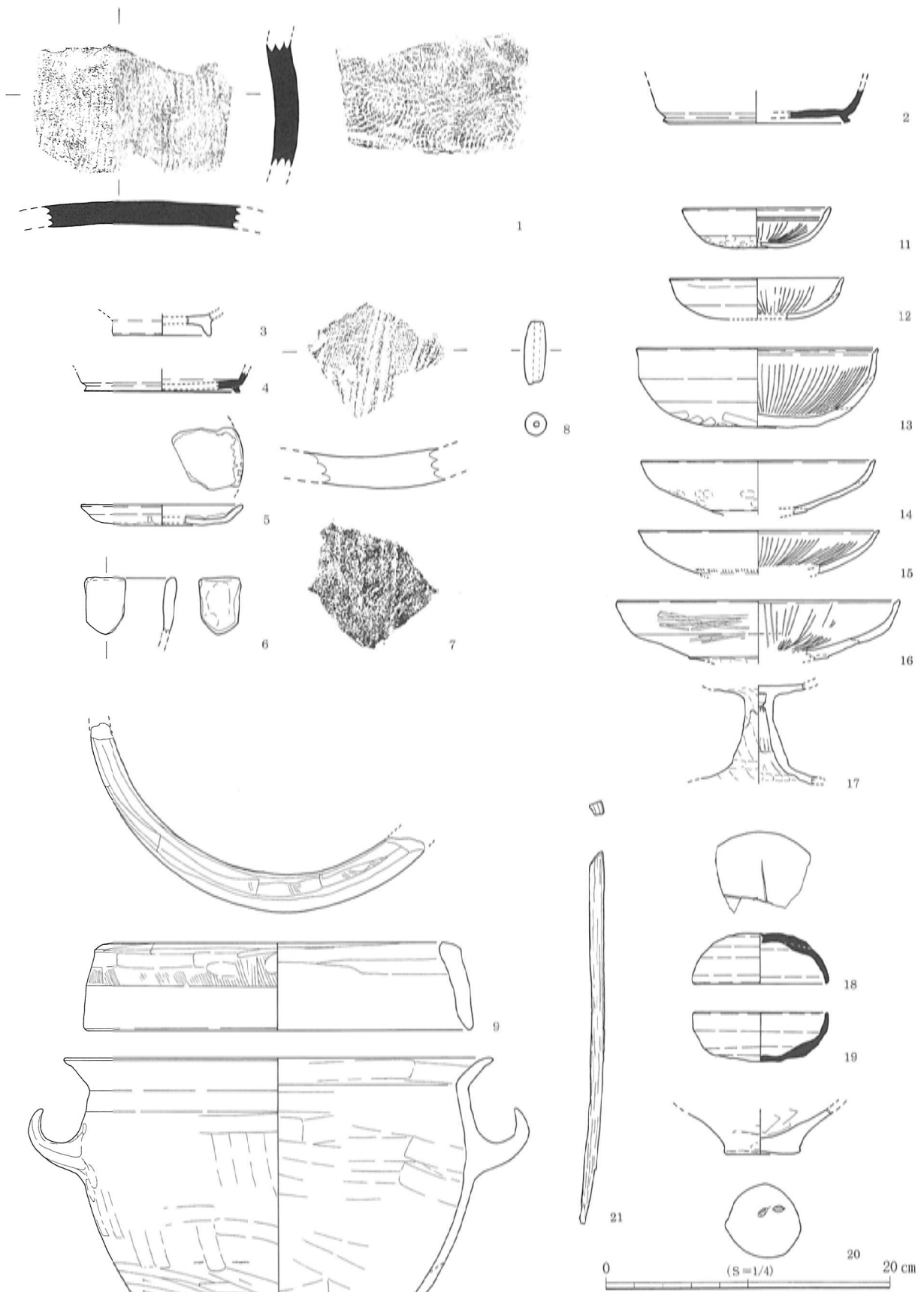
10は把手付き鉢に近いが、胴部が深いので、鍋としておく。飛鳥・平城宮分類で言えば、ハケはないが甕Bか。外面は、底部は平底で、その周辺磨滅調整不明、下部にはケズリ、体部の大半はそれを切る

表29 4-161ピット 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別				
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%			
土器・陶磁器	56	弥生	3	5.4	壺	3	100.0					
					土師器	45	80.4	甕	6	13.3		
		羽釜	1	2.2								
		鉢	1	2.2								
		高坏	1	2.2								
		須恵器	7	12.5	坏皿類	1	2.2					
甕	3				42.9							
その他	1	1.8	A類椀	1	100.0							
			木製品	1								
							奈良	2	66.7	高台坏	1	50.0
										無高台	1	50.0

表30 4-162土坑 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別								
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%							
土器・陶磁器	228	弥生	24	10.5	甕	1	4.2									
					壺	5	20.8	長頸壺	1	20.0	生駒西麓	1	100.0			
		土師器	147	64.5	(生駒西麓)	2	8.3	広口壺	1	20.0						
					高坏	1	4.2	底部	3	60.0	生駒西麓	1	33.3			
					甕	21	14.3									
					羽釜	12	8.2									
					甌	3	1.4									
					輪状土器	2	1.4									
					把手	1	0.7									
					鉢	57	38.8									
					高坏	25	17.0	脚部	3	12.0						
					坏皿類	77	52.4	皿	1	1.3						
					製塩土器	1	0.7	小皿	1	1.3						
					土鍾	1	0.7									
					須恵器	56	24.6	甕	17	30.4						
								壺	8	14.3						
								坏	30	53.6	II形式	6	20.0	身	1	16.7
					緑釉陶器	1	0.4	高台椀	1	100.0						
								土鍾	1	0.7	III形式	2	6.7	身	2	100.0
					その他	11		瓦	1							
								サヌカイト	1							
		石	11													
		木製品	1					炭化木	26		高台坏	1	25.0			
							無高台	1	25.0							
							蓋	1	25.0							
							炭	3								



161 ビット：〔1(土器1)、2〕 162 土坑上層：〔3~8〕  
 162 土坑下層：〔9(土器9)、10(土器 16・17)、11、12、13(土器 19)、14、15、  
 20、17(土器6)、18、19(土器14)、20(土器4)、21(木1)〕

図58 4-161ビット・162土坑出土遺物

タテナデだが、中位に一部ヨコナデ、頸部以上はヨコナデ。内面はヨコナデのみ。内面の底部から口縁端部まで煤附着。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 3を呈し、長石わずかに含む精良な胎土。

11は土師器坏。外面は体部上部ヨコナデ、下部はユビオサエが残る。内面はヨコナデ後暗文、上半2条の水平の暗文あり。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石・赤色粒わずかにありの精良な胎土。

12も土師器坏片。外面は上部のヨコナデのみ分かる。内面ヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英・長石・赤色粒ありの精良な胎土。

13も土師器坏。外面は、底部ユビオサエ後ケズリ、体部はヨコナデ。内面はヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、石英・赤色粒若干、長石わずかにありの精良な胎土。

14は土師器高坏片。外面は口縁ヨコナデ、下部はユビオサエ残るが最終調整不明。内面は磨滅により口縁のヨコナデ以外不明。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、混和砂粒ない精良な胎土。

15も土師器高坏片。外面は、ヨコナデ、接合の段の上に三日月状の刺突痕1列あり。内面ヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、混和砂粒ない精良な胎土。

16も土師器高坏片。外面、ヨコナデ後ミガキ、接合の段の下にはユビオサエ残る。内面は右上になで上げるヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、混和砂粒ない精良な胎土。

17は土師器高坏脚部片。外面ユビナデ。内面ユビナデ・ユビオサエ。身部内面は調整不明。胎土は橙7.5Y 7 / 6を呈し、赤色粒若干、長石・石英わずかにありの精良な胎土。

18は須恵器坏蓋。外面は、天井部粗い不定方向ナデ、粘土塊附着、屈曲部は回転ヘラケズリ後回転ナデ、体部は回転ナデ。内面は回転ナデ後天井部一定方向ナデ。外面にヘラ記号。胎土は灰N 6 / 0を呈し、石英若干あり。

19は須恵器坏身。外面は、底部回転ヘラ切り後粗いナデ、体部回転ナデ。内面回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は灰5Y 5 / 1を呈し、石英若干あり、大粒の流紋岩1個あり。器表に瓦器のように炭素吸着する。

20は弥生土器壺底部片。外面は、底部側面にユビオサエ残り、上にタタキ残るが、ナデ。内面は左上がりナデ。外面底部に2個の刳圧痕あり。圧痕のサイズ、長さ8.5mm幅4.7mm、長さ8.3mm幅4.9mm。胎土は暗灰黄2.5Y 4 / 2を呈し、角閃石多し、長石若干、石英ありの生駒西麓産胎土。

21は木製品。点け木か。図上端は斜めにカットされる。下は細くなるが途中で折れる。

4-305柱穴(図59) 02-3-3トレンチ南東隅で検出された柱穴である。調査区内では属する建物を確認できていない。柱穴としては小型の部類で、平面形はおそらく楕円形であろう。埋土上面で柱抜き取り痕が確認されている。

出土遺物は1片のみであるが、それが注目できる。図59に挙げた須恵器円面硯片である。抜き取り穴埋土上面から出土した。削平を考えれば、抜き取り穴に落ち込んだものであろう。

外面は上面から側面上部にかけて回転ナデ、その下は不定方向のナデである。下端面はヘラケズリ。内面はヨコナデ。透かし孔はヘラ切り。上面は残存部分で海部の下端に達しているようで、海部の幅は狭いようである。透かし孔の間隔は円周に対し不均等で、復元すると6孔の可能性もあるが、おそらく5孔であろう。下端部は内外に膨らみにぶい突帯状を成すが、その稜線は不規則に蛇行する。胎土は青灰5B 6 / 1を呈し、石英あり、長石若干、黒色粒わずかにありで、おそらく陶邑産であろう。

円面硯は大阪府陶邑古窯址群において6世紀末から生産が始まるが、この円面硯を飛鳥Ⅱ期のものとすると、先行する陶邑TK43-I・TG64-A・TG68号窯例や、同時期と飛鳥Ⅳ・Ⅴ期の遺物が混在

するTK116号窯例の圈脚円面硯は大型品のみである。6世紀末～7世紀前半の小型の円面硯を見ると、滋賀県中畑古里遺跡、京都府準上がり瓦窯跡に例があるが中空円面硯である。小型の圈脚円面硯としては最古のものになるかもしれない。

4-324柱穴(図18・60・表31) 02-3-3トレンチの中央付近で検出した。属する建物は確認できない。上面で柱痕は確認しているが、断面は観察していない。柱穴の中では比較的多く遺物が出土したので報告する。

遺物は柱痕からは出土していない。また、柱穴底につくものではなく、いずれも浮いている。比較的大きな破片はあるが完形率は悪い。以上の事から意図的に入れたものはないと思われる。

出土遺物は土器25片、自然石2個を数え、土器の大部分は弥生土器であるが、須恵器・土師器の小片が含まれる事から、遺構自体は古代以降に位置付けられる。弥生土器は甕が圧倒的に多いが、接合するもの少なく、数個体分が混在している。周辺に弥生時代の遺構が多い事を反映している結果であろう。

出土土器で実測可能なのは図60の3点のみであった。弥生土器のみである。

1は高坏脚柱部片。外面はミガキ、下部に3条の沈線巡り、その下に爪形文が1列並ぶ。上端には身部との接合の際に附加した粘土帯の剥離痕が残る。内面は

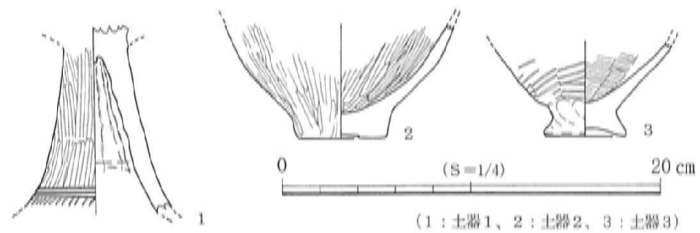


図60 4-324柱穴出土遺物

表31 4-324柱穴 遺物破片数集計表

大別	総数	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位	破片数		細別	破片数				
			破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%			
土器・陶磁器	25	弥生 (生駒小片)	22	88.0	甕 (生駒西麓)	44	200.0	夕夕キ	3	6.8	生駒西麓					
			7			1	2.3	底部	1	2.3		1	100.0			
						3	13.6	甕				底部	1	33.3		
						1	4.5	鉢								
						1	4.5	高坏								
						2	8.0	甕	2	100.0						
土師器		1	4.0													
須恵器		2	8.0													
その他		石	2													

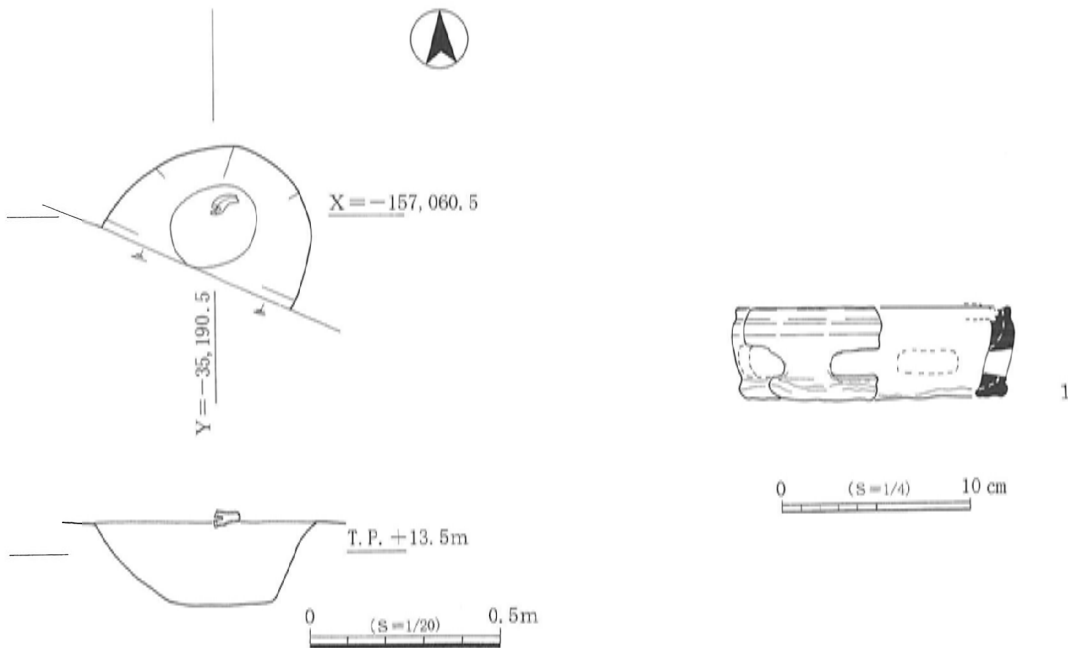


図59 4-305柱穴出土状況及び出土遺物



絞り痕残り下部にヨコナデ。胎土は橙5YR6/8を呈し、石英多し、長石・赤色粒若干、チャートわずかにあり。

2は鉢片。内外面ともミガキ、底部外面は中央の凹部は無調整、周囲は植物茎圧痕ありで不定方向ナデ。胎土は灰白10YR7/1を呈し、石英・長石若干、チャートわずかにあり。

3も鉢片。外面はタタキ後軽くナデ、底部側面はユビナデ後ヨコナデ、底部はユビナデ。内面は左上がりのハケ後軽くナデで、底部以外に薄く炭化物附着。胎土は2.5Y7/1を呈し、長石若干、石英わずかを含む。

以上の3点はおおよそ畿内V様式後半に位置付けられるだろう。

小結 大型の土坑は、埋土に上面から遺構が切り込む層が見られるものがあり、特に、3-707・708・4-162土坑は規模や平面形まで似ている事が注目される。

性格としては3-150炉と同じく、炉の下部構造である可能性が考えられるが、上部の構造物の位置まで推測できる3-707土坑から、下層に水成堆積層があるなど疑問点の多い4-162土坑まで、各々その妥当性に差があり、確定できるものもない。また、3-483土坑や3-687土坑などはさらに根拠が薄弱だと言わざるをえない。

しかし、位置や方向性から建物群と併存が考えられ、遺物の面からも矛盾がない事から、周辺になんらかの施設を持つ建物群として、飛鳥Ⅱ期の工房域の様相に具体性を加えている遺構と言える。

建物に近接しているものと離れているものがある事にも注目できるだろう。4-150炉や、4-163土坑が、調査区外の建物に近接し、そこに調査区西側の建物群と別の建物群が存在しているとすれば、空閑地を隔てて建物群が散在している景観を復元できるかもしれない。

柱穴は出土遺物に特徴のあるもののみを掲載したが、建物の確定ができない柱穴が多い事も一つの特徴である。しかし、4-324柱穴例のように、弥生時代の遺物を含んでも弥生時代の遺構とは言えず、土師器・須恵器の小片を含む柱穴が多く見られ、土師器は精良な胎土のものが多い事からも、基本的にこの調査区の柱穴は古代のものであり、そのほとんどは飛鳥時代前半のものとして良いと推測される。

しかし、若干の柱穴同士の切り合いも見られる事から、全ての建物が一時期に一斉に建てられたとは言えない状況である。柱穴の中には、同じ飛鳥時代前半でも、4-柵列2のように、溝群の時期に遡るものもある可能性を考えておかななくてはならない。

これらの遺構を建物群と共に工房域と捉えても、この面積の中で一つも井戸と確定できる遺構がない事は疑問として残る。弥生時代の井戸が5基検出されているのと対比的で、取水条件にさほど差があるとは思われないのに、不思議な点である。むしろ、工房域としては普通の集落以上に水が必要なように考えられるのであるが。

また、「(2) 中世遺構」の部分で述べたが、02-3-1トレンチ南側で検出された、条里地割とは方向を違えた耕作痕が、これらの時期にまで遡る可能性がある事も忘れてはならない。方向性も共通点があり、自然地形に基づいた耕地区画が、これらの遺構の方向性の基準となっていた可能性もある。同時期併存が認められるならば、耕地区画の中の微高地に工房域が散在している景観が復元できよう。

遺物としてはガラス小玉鋳型や甕の羽口ばかりでなく、製塩土器や漆パレットも出土しているのが注目でき、工芸生産の多様性を示唆しているように思える。また、円面硯の出土は、識字者の存在を示しているのだろうか。しかし、土器は豊富な調理具と供膳器を持ち、定住性のある集落の様相を示している。これも重要な要素であろう。

## (6) 飛鳥時代 溝

4面では、南東から北西に走る溝と、ほぼそれに直交し、南西から北東に走る溝が、調査区全面に分布していた。それらの溝は、交点でも切り合うものはほとんどなく、同時期併存、同時期埋没と考えられる。切り合い的には、建物の柱穴の他、重複する飛鳥時代以降の遺構には全て切られていると言っても良く、飛鳥時代の建物群に先行する溝群と言える。

しかし、出土遺物からは両者の時期差は認められない。それと溝内にほとんど水成堆積層が認められないことから、これらの溝群は建物群の成立直前に、掘削されてすぐに埋められたと思われる。

調査区東側と西側では方向性が異なる傾向にあり、東側は柱穴との切り合いは確認されないので東西2群に大別できる。また、幹線的な広く深いものと、狭く浅いものに大別する事ができるのも知られる。

しかし、数も多く、分布範囲も広く、出土遺物も多いが、性格を特定しにくいものである。

3-154溝(図61・61・表32) 02-1トレンチ北西側で検出された。02-3トレンチ東半の3-572溝と4m強の間隔をあけて平行し、おそらくはトレンチ南半の3-172溝に続くものと思われる。平行して走る浅い溝3-155溝が枝を伸ばし取り付く。

ほぼ直線的でN23°Wを指向する。断面逆台形で、幅1.3mほど、深さ20~40cm。底のレベルはT.P.+13.15~13.3mの間で凹凸するが、どちらかの方向へ傾斜する傾向は認められない。埋土は単一の粘質土である。

遺物は集中する事なく散漫に出土しており、みな底部からは浮いている。完形率の高いものは少ない。総量もさほど多くはないが、弥生土器がなく、土師器で鉢、須恵器で壺が多いのがやや特徴的と言える。飛鳥時代前半と思われる。図62に実測可能な遺物を示す。

1は須恵器蓋坏身である。外面は自然釉多くかかり、底部はそれが発泡して調整不明、体部は回転ナデか。内面は回転ナデ後底部一定方向ナデ。受け部に溶着痕あり、蓋を重ね焼きしたか。胎土は灰N4/0を呈し、黒色粒多し、石英あり。

2は須恵器平瓶。頸部以上を欠く。外面は上半回転ナデ、下半回転ヘラケズリ。内面は底部ユビオサエ後全面回転ナデ、接合痕残る。頸部は粘土継ぎ目で剥離している。胎土は、表面灰N5/0、破断面灰赤7.5R5/2を呈し、チャート・石英・長石わずかにあり。

3は土師器短頸壺片。外面は口縁ヨコナデ、体部ヨコハケ後ナデか。内面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ。胎土はにぶい黄橙10YR7/2を呈し、長石・石英・赤色粒をわずかに含む精良な胎土。

4は砂岩である。点線で囲んだ部分に煤附着。他には人為痕なし。

5は凝灰岩である。板状で表裏も平行する。図の右の上辺と右片は加工した端面のようであるが直角ではない。左の3辺は割れ。割れ面も含め、全面に煤附着する。

3-158溝(図63・64・表33) 02-1トレンチ南東隅で、3-139堀田の底部から検出された。当初は溝群の認識がなく、堀田に伴うものかと考えたが、02-3-2トレンチの4-164溝につながり、飛鳥時代溝群に含まれる事が判明した。

ほぼ直線的で、E26°Nを指向する。幅は最大1m弱だが、堀田の削平以前は1mを越えるか。断面は逆三角形。底面レベルはT.P.+13.34~13.42mで、強いて言えば南西にやや傾斜するか。埋土は単一である。上半にコンポリュートラミナが見られるのは後世の3-2層の影響か。

遺物は特に集中する部分なく出土し、底部に付くものは少なかった。弥生土器が皆無なのは調査区東側の特徴か。土師器・須恵器の組成には特色はない。図64に図化可能なものを挙げる。

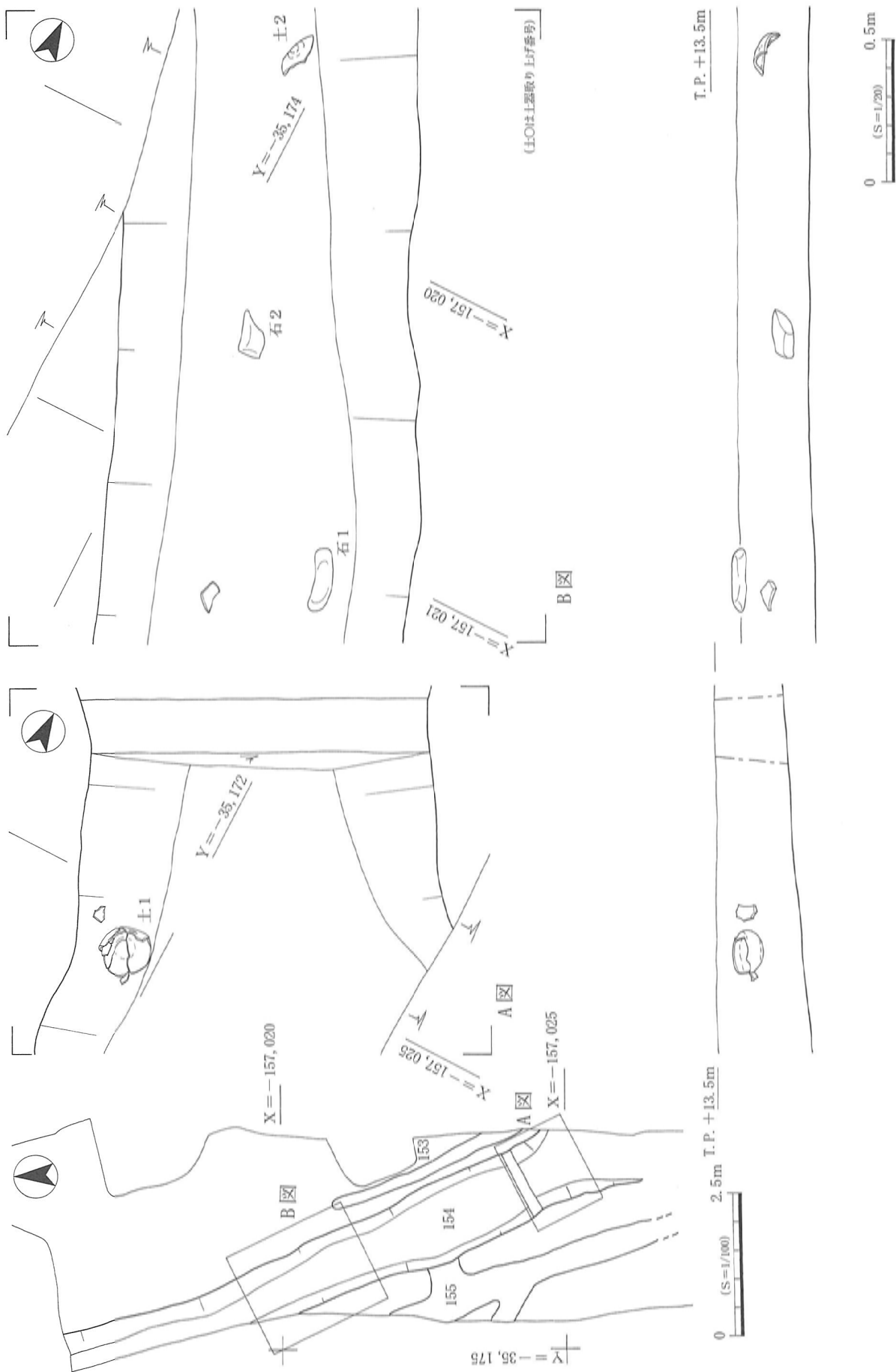


図61 3-154溝全体図・出土状況

1は須恵器甕片。外面は口縁部回転ナデ、胴部カキメ。内面は胴部同心円タタキで、口縁から頸部下側まで回転ナデ、タタキにも軽く回転ナデが入る。胎土は灰N5/0を呈し、石英・長石あり、黒色粒わずかにあり。

2は須恵器甕胴部片。法量は似るが1とは同一個体ではない。外面はタテの平行タタキ後、肩部にカキメ、下部にヨコナデ、胴部中位に何かの擦痕が不規則に入る。内面は同心円文タタキ後、棒状工具によるヨコナデが散発的に入る。胎土は灰N6/1を呈するが、外面は炭素が吸着し、暗灰N3/0～青灰5PB5/1で、瓦器のような光沢を成す。石英・長石をわずかに含み、微細粒に黒色粒あり。

今回の調査では、これと同じように器表に炭素が吸着して瓦器のような金属光沢を成す、須恵器甕の破片がいくらか出土しているが、飛鳥時代のものようである。破断面から見ると比較的低温の焼成であるのも共通する。

3は須恵器坏蓋。外面は、体部と、つまみとその周辺が回転ナデ、その間は回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ後天井部に一定方向ナデ。胎土は灰N6/0を呈し、石英わずかにあり。陶邑産か。

4は須恵器短頸壺片。口縁部が一部下がる。外面は口縁～肩部回転ナデ、最大径部分に1条ヘラケズリ、そこより下は左下がりのヨコナデ。内面も口縁～肩部回転ナデ、以下は左下がりのヨコナデ。胎土は灰5Y6/1を呈し、石英・長石をわずかに含む。陶邑産か。

表32 3-154溝 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種	破片数		型式・部位		細別											
		破片数	%		破片数	%	破片数	%	破片数	%										
土器・陶磁器	41	弥生	0	0.0	甕	2	13.3													
												土師器	15	36.6	鉢	14	93.3			
		高坏	1	6.7																
																		坏皿類	2	13.3
		須恵器	26	63.4																
																		壺	10	38.5
		坏	3	11.5								II形式	3	100.0	身	1	33.3			
その他	石				3	(人為痕)	2													

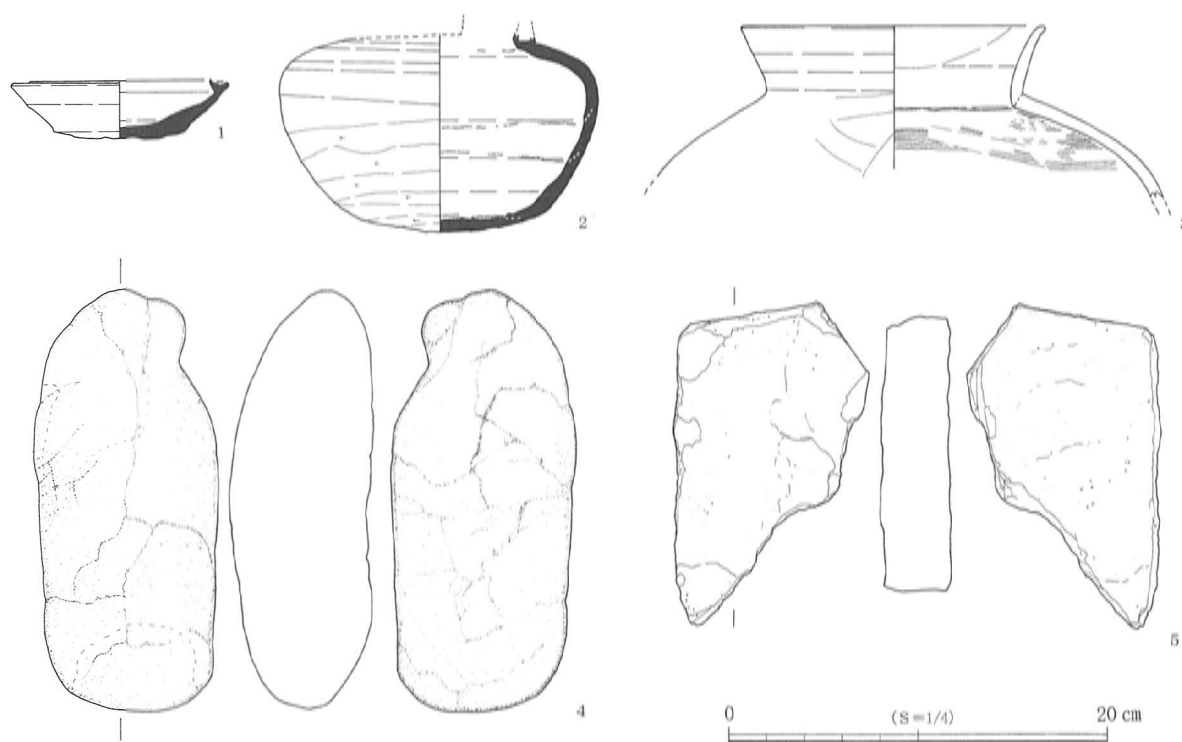


図62 3-154溝出土遺物

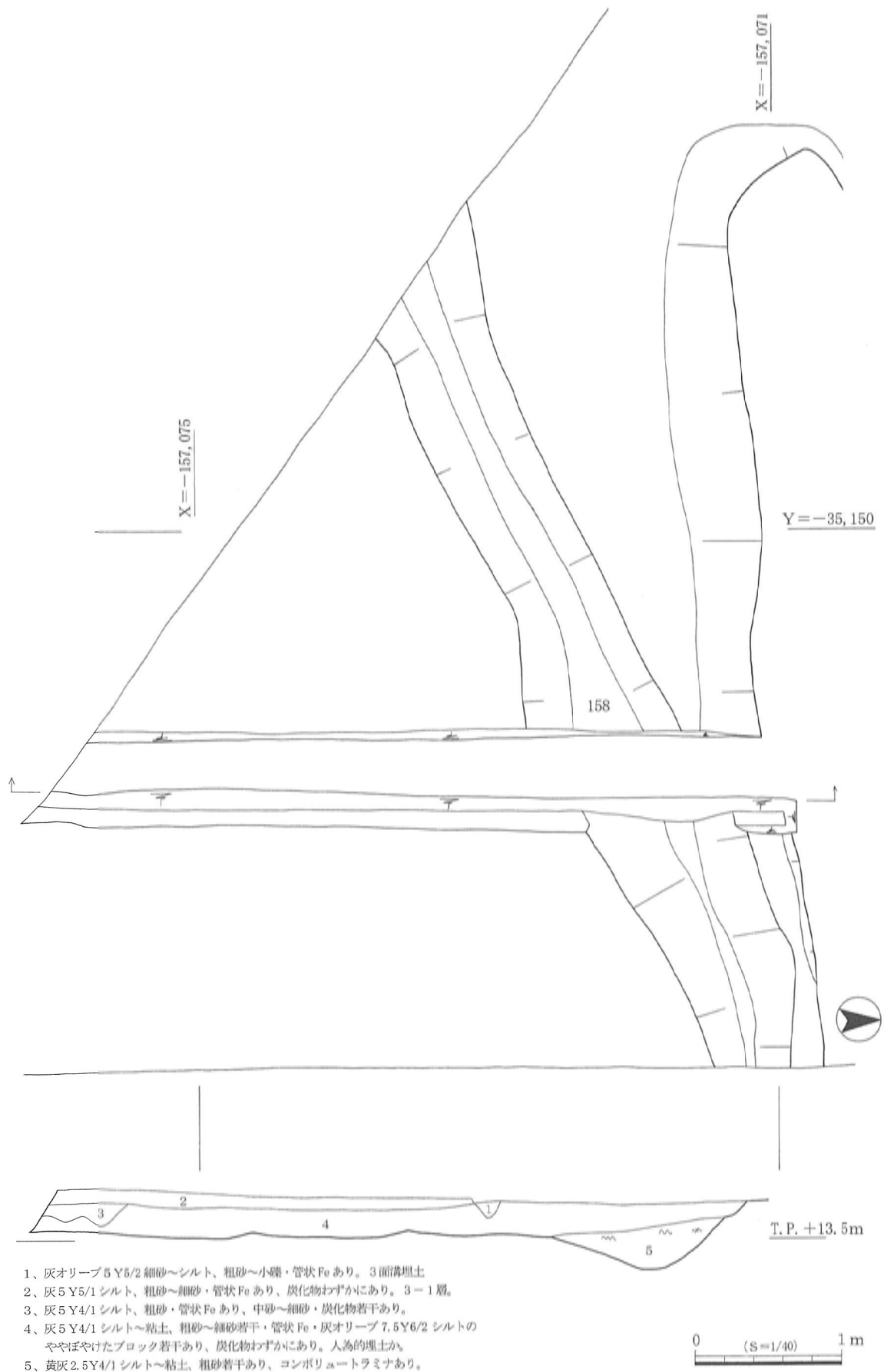


図63 3-139堀田・158溝平面・断面

5は椀形鍛冶鉄滓である。下面には炉壁片と炭化物、上面には炭化物が附着する。

遺物全体を見て、飛鳥時代前半としても矛盾はない。

3-165・180・183溝(図65) 02-1トレンチ南半で、出土状況などは記録していないが、幾つか注目できる遺物を出土した溝を挙げておく。3-165溝は、3-154・172溝の続きの可能性が高いものである。飛鳥時代の溝であろう。3-180溝は、3-154溝に平行する3-572溝の続きの可能性の高い3-196溝を切り、堀田に開口する南北正方位の溝である。新しい時期のものである可能性が高い。3-183溝は平面形を明らかにできなかったが、139堀田の北肩が西側で北に曲がるのは、この溝の肩であったようで、3-158溝には切られている事を確認した。調査初めの側溝掘削中に出土した遺物に、この溝内であった可能性が強いものがある。切り合的には飛鳥時代溝群より前になるが、出土遺物に時期差はない。

以上の溝から、主要な遺物を図65に示す。

1は土師器羽釜片である。口縁から鋤まで遺存しているのはあまりない。外面は、口縁中位にユビオサエ後、タテハケ。その後、鋤の接合部は上側はヨコハケ、下側はユビナデ。最後に全てヨコナデ。内面はヨコハケ後ヨコナデ。外面鋤の下には煤附着。胎土は暗灰黄2.5Y 4/2を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

2は土師器鉢片。外面は、ヨコナデ後ミガキ、下部はケズリ。内面はヨコナデ後暗文。胎土は灰白2.5Y 8/2を呈し、長石わずかにありの精良な胎土。

3は弥生土器壺口縁片。長頸壺系の短頸壺というべきか。調整はナデ。胎土はにぶい黄2.5Y 6/3

表33 3-158溝 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別			
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%		
土器・陶磁器	120	弥生	0	0.0							
		土師器	92	76.7	甕	14	15.2				
					鉢	12	13.0				
					高坏	14	15.2				
					坏皿類	31	33.7				
					須恵器	28	23.3	甕	24	85.7	
					壺	9	32.1	長頸壺	1	11.1	
					坏	8	28.6	短頸壺	6	66.7	
								II形式	5	62.5	
								III形式	3	37.5	
						蓋	5	100.0			
						蓋	3	100.0			
その他		サヌカイト	1		鉄滓	1					

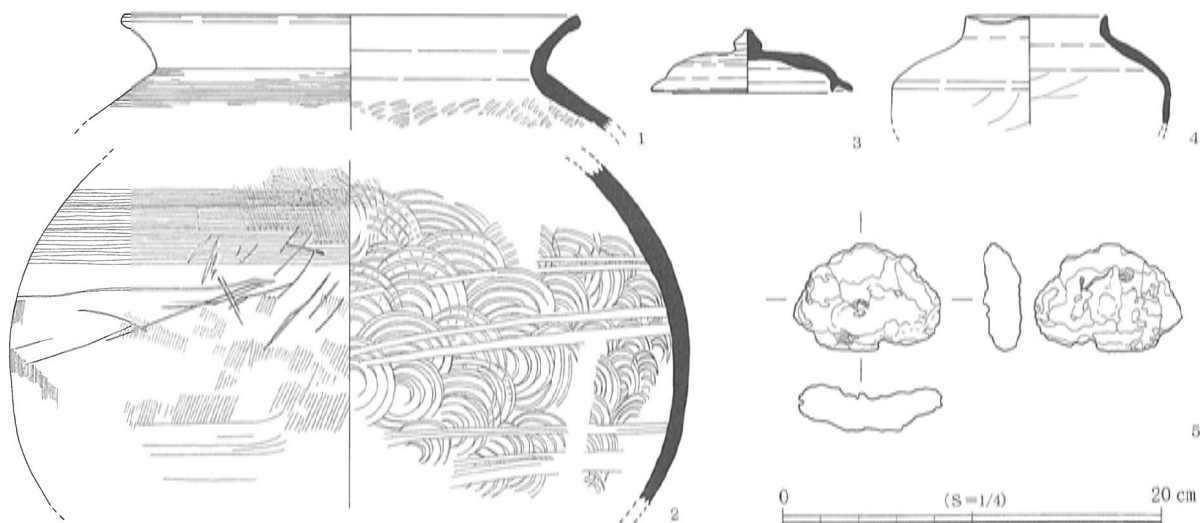


図64 3-158溝出土遺物

を呈し、石英・長石・赤色粒あり。微細粒に黒雲母もあり。

4は土師器ミニチュア高坏。外面はほとんどナデだが、身部と脚部の接合部分に板状の工具痕残る。身部内面は右下がりのナデ。脚部内面は手捏ね後粗いナデ。脚柱部が中実なのは珍しい。

5は土師器甗の羽口。調整はナデ、開く部分の内面はユビナデ1条。開いた方の端面に紐の圧痕らしきものがある。器壁の状態は図の点線で分ける範囲毎に変わる。右の先端部分は褐灰～灰白10Y R 4 / 1～7 / 1を呈し、器表剥離。そこから左は明赤褐2.5Y R 5 / 6の二次的被火による赤変。その左は黄橙10Y R 7 / 2で一番元状を保つか。左端は灰白N 7 / 0で還元的雰囲気があり、長石が溶けかかっている。胎土には、石英多し、長石あり。微細粒にチャートを含む。

6は椀形鍛冶鉄滓。上下面ともに炭化物附着。

7は須恵器坏蓋。外面は、体部とつまみは回転ナデ、その間は回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ後天井部一定方向ナデ。外面の半分ほどは発泡してはげた痕がある。胎土は青灰5PB 6 / 1を呈し、石英・黒色粒を若干含む。

8は完形の土師器高坏。外面はナデだが、脚部上下にその前にユビナデ。身部内面はヨコナデ後暗文。見込みの螺旋状暗文が上部の放射状暗文に切られる。脚部内面は、脚柱部は絞り痕残るが、指の入る範囲でユビヨコナデ、脚裾部はタテユビナデで端部ユビオサエ。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、長石・黒雲母ありの精良な胎土。

3-412溝(図66~68・表34) 02-2トレンチ西半南側で検出。初めは島島から堀田への肩部で不整形な土坑として検出したが、掘削し出すと、部分堆積層に覆われている部分が検出され、最終的に溝と確認された。肩が不整形に広がる部分があるが、おそらく埋没までに浸蝕を受けたためと思われ、本来は直線的な溝であったようである。埋土上面を幾つかの柱穴・ピットに切られる。

おおよそN17° Nを指向する。肩の崩れていない部分での幅は最大0.85mを測り、本来は1m強か。

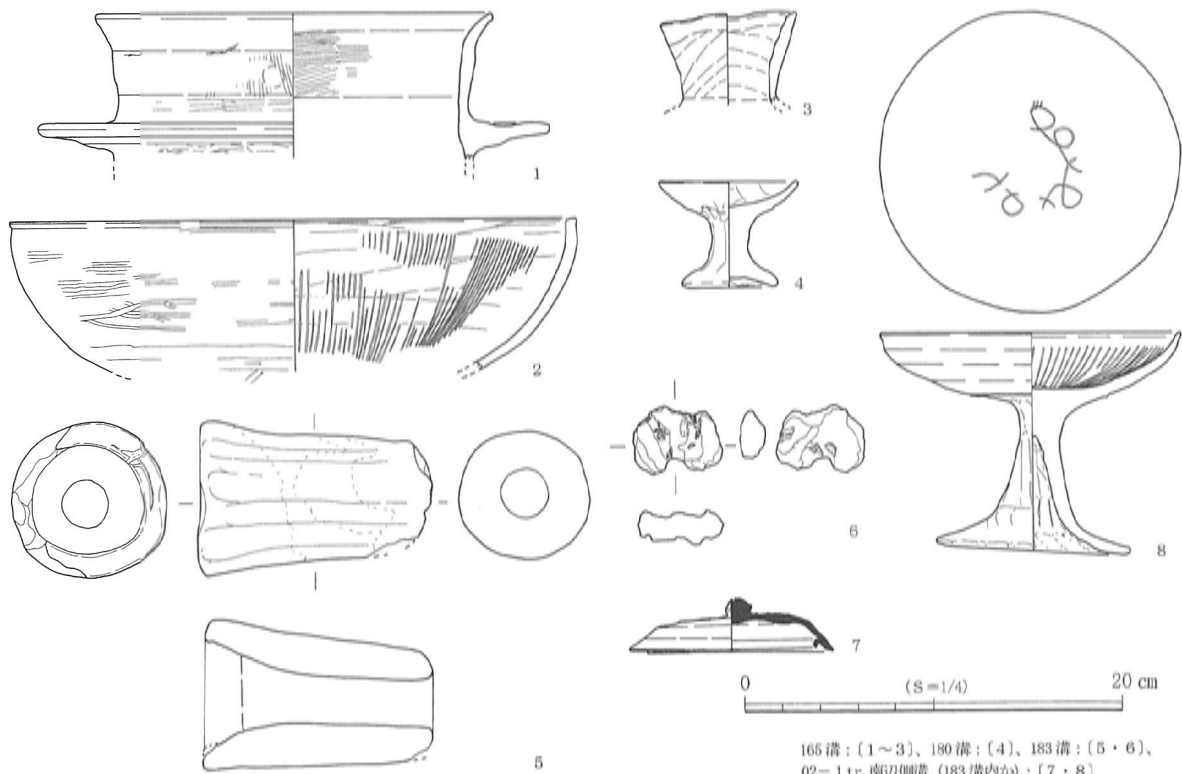


図65 3-165・180・183溝出土遺物

165溝：〔1~3〕、180溝：〔4〕、183溝：〔5・6〕、  
02-1 tr. 南辺側溝(183溝内か)：〔7・8〕



图66 3-412溝出土状況



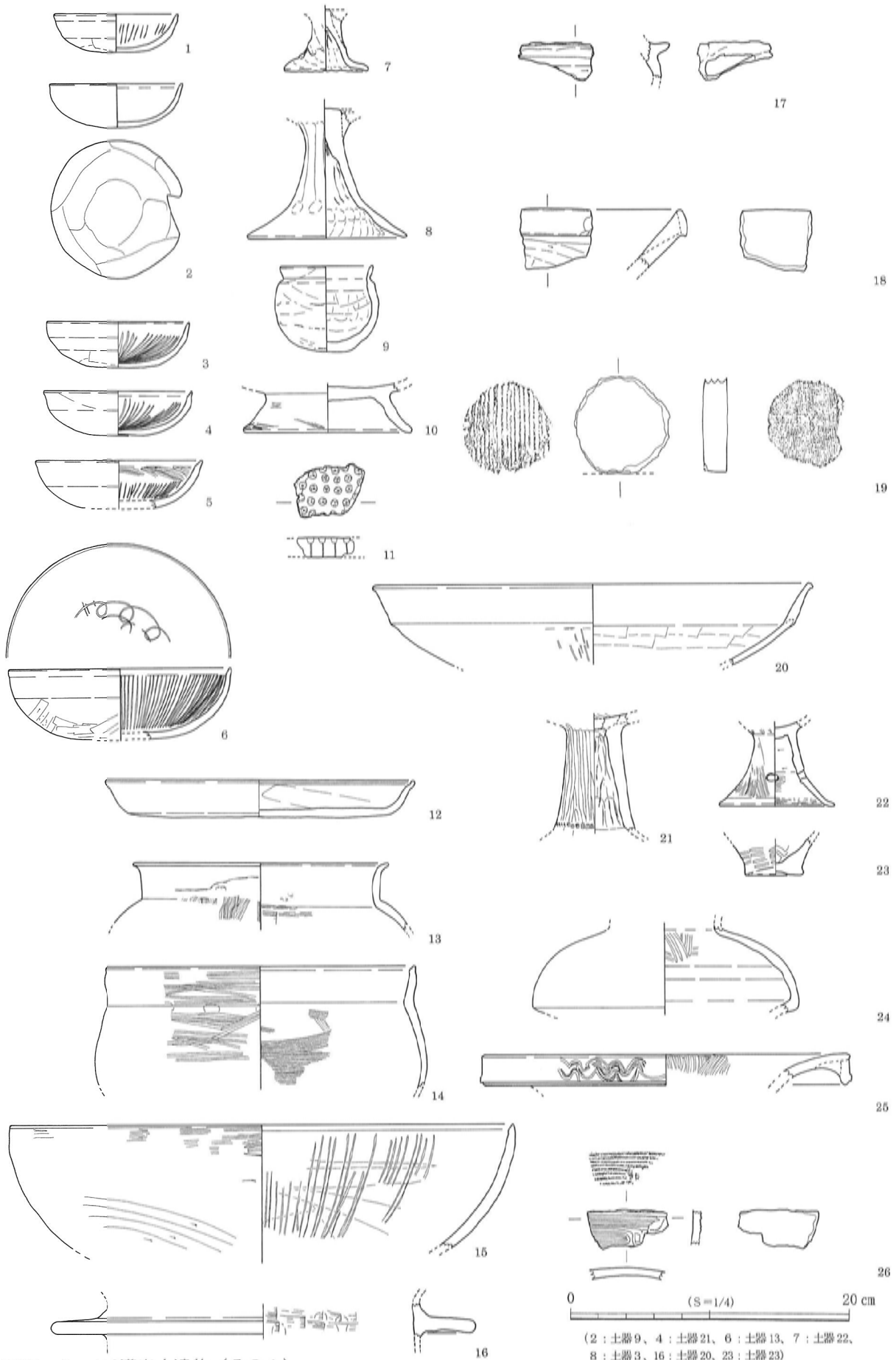


図67 3-412溝出土遺物 (その1)

(2 : 土器9、4 : 土器21、6 : 土器13、7 : 土器22、  
8 : 土器3、16 : 土器20、23 : 土器23)

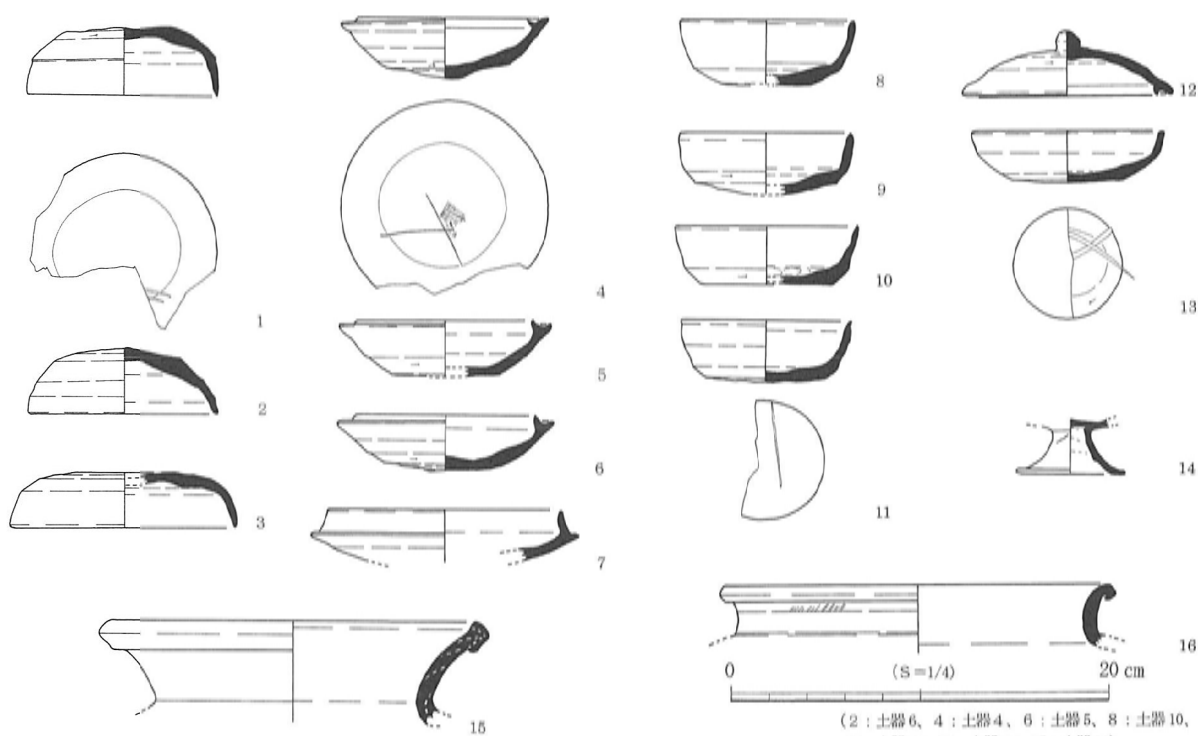
断面は逆台形。底のレベルはT. P. +13.1~13.5mで、北西方向に傾斜する。埋土は複雑で、ブロック土や4層の再堆積などが部分的にあったが、セクションが崩壊し、図化できなかった。

遺物の出土は、図上は北西に多いように見えるが、これは南東側の遺物が出土状況実測前に遺構水没のためかなり流されたためである。本来は偏りなく全体的に密に出土した。底に付くものは少数で、特に北西の深い部分は20cm以上浮くものが多い。

遺物にはかなり多く弥生土器が含まれるが、完形率は悪い。土師器・須恵器の小さい器種に完形率の

表34 3-412溝 遺物破片数集計表

大別	種別	破片数		器種	破片数		型式・部位	破片数		細別	破片数			
		破片数	%		破片数	%		破片数	%		破片数	%		
土器・陶磁器	1997	弥生	717	35.9	甕 (生駒西甕)	67	9.3	タタキ	1	1.5				
						1	1.5	ハケ	3	4.5				
								底部	4	6.0				
					甕	3	0.4							
						131	18.3	長頸壺	18	13.7				
								広口壺	18	13.7				
					鉢	1	0.1							
						37	5.2							
						4	0.6							
					土師器	1078	54.0	74	6.9					
								54	5.0					
								130	12.1					
								69	6.4	脚部	5	7.2		
										ミニチュア	1	1.4		
								312	28.9					
								1	0.1					
								68	33.7	口縁	4	5.9		
								11	5.4					
1	0.5													
須恵器	202	10.1	113	55.9			II形式	60	53.1	身	21	35.0		
							III形式	12	10.6	蓋	39	65.0		
									身	7	58.3			
									蓋	5	41.7			
その他			瓦	6		平	6		須恵質	4				
									土師質	2				
			サヌカイト	2		石	96		粘土塊	3				



(2:土器6、4:土器4、6:土器5、8:土器10、10:土器12、11:土器14、15:土器11)

図68 3-412溝出土遺物(その2)

高いものが見られる。弥生土器では壺が甕の2倍近くあるのが目立ち、高坏も比較的高率である。土師器・須恵器の組成には特色はない。瓦質の羽釜・鉢と瓦片はいずれも小片で、上部を覆っていた部分堆積層内にあった可能性が高い。まとまりのいい遺物群から、飛鳥Ⅱ期の溝とするのが妥当であろう。

実測可能な遺物を図67・68に示した。図67の1～16は土師器、17・18は瓦器、19は瓦、20～25は弥生土器。図68は全て須恵器である。図67から各個述べる。

1は坏。外面は、体部ヨコナデ、底面不定方向ナデ。内面はヨコナデ後暗文。胎土は橙7.5Y R 6 / 8を呈し、石英・長石若干ありの精良な胎土。

2も坏。1より口縁の大きいタイプ。器表剥離激しく、口縁の一部にヨコナデ残るのみ。しかし、白色粘土が混ざった胎土により、粘土素材の接合のしかたが良く見える。図下側がその底部から見た全体像。底部の円板状粘土の上に、1段目3本、2段目5本の粘土紐をつなげて作る。胎土はにぶい橙5Y R 6 / 4を呈し、長石・赤色粒若干、石英わずかを含む精良な胎土。

3も坏。法量的に2と同タイプ。外面は、体部ヨコナデ、底部不定方向の軽いナデ。内面はヨコナデ後暗文。胎土は灰黄褐10Y R 6 / 2を呈し、石英・長石若干、チャート・赤色粒わずかにあり。精良な胎土とは言いがたい。

4も坏。法量的に2と同タイプ。外面は口縁に左上になで上げるヨコナデ、それより下はユビオサエ後不定方向ナデ。内面はヨコナデ後暗文。胎土はにぶい黄橙を呈し、長石わずかにありの精良な胎土。

5も坏片。4より口径大きい。外面はヨコナデ。内面はヨコナデ後暗文。ただし、上段の暗文は下段より太くミガキ状で、下段に切られる。胎土は浅黄橙7.5Y R 8 / 3を呈し、赤色粒・長石をわずかに含む精良な胎土。

6も坏片。5よりかなり大きく、法量的にもう1タイプ間にありそうである。外面は上部ヨコナデ、下部ケズリ。内面はヨコナデ後暗文。見込みは二重螺旋か、上の放射状暗文を切る。胎土は淡黄2.5Y 8 / 3を呈し、長石・石英をわずかに含む精良な胎土。

7はミニチュア高坏脚部片である。調整はほとんどユビナデで、脚裾内面端部のみユビオサエ。外面は身部との接合部に附加した粘土を脚裾部にまで伸ばした接合痕が残る。上端は身部に挿入して接合した面で剥離した部分が残る。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

8は高坏脚部片。外面は脚柱部ユビナデとその下のユビオサエ残るが、磨滅のため最終調整不明。内面は脚柱部ユビヨコナデ、その下ユビオサエ列、脚裾はタテユビナデ。上端は身部に挿入した先端部分に沿って剥離し、附加した粘土との境目も分かる。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、長石・石英・赤色粒若干ありの精良な胎土。

9は小型壺かミニチュアの甕か壺か判断に迷う。外面は口縁はヨコユビナデ、胴部は粘土継ぎ目を残しながらヨコナデ基調のナデ。平底を作るが不明確で、口縁に対しかなり斜め。内面は、口縁から頸部までヨコナデ、胴部は上半タテユビナデ後、全体右上がりヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、赤色粒を若干含む精良な胎土。

今回出土した他の小型壺に比べると、一回り小さく、口縁端部に面がない、器壁が厚いなど違いがあるが、ミニチュア土器にしてはユビ調整のみで終わらず、ナデを多用する。

10は台付き鉢の脚部片である。脚部外面はヨコハケ後ヨコナデ。内面はヨコナデ、身部外底面は不定方向ナデ。身部内面は磨滅するがナデか。胎土はにぶい橙7.5Y R 7 / 4を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

11はガラス小玉鋳型片。芯持ち孔は貫通し、径約0.5mm。鋳型穴は径5mm、深さ4mm。上面はナデ、下面は無調整か軽いナデか。胎土はにぶい赤褐5Y R 5 / 4を呈し、長石多し、石英あり。かなり赤いが上下面に色調の違いなく、ナデも認識できるので、二次的被火は不明。

12は皿。外面は、体部ヨコナデ、底部はユビオサエ後周縁部にケズリ、最後にナデ。内面は、底部の中心に一定方向ナデ後、ヨコナデ。暗文はない。胎土は赤色粒わずかにありの精良な胎土。

13は、直立する口縁は直口壺のようだが、調整・胎土から甕片とした。外面は、肩部タテハケ、口縁からのヨコナデがそれを軽く消す。内面は、ヨコハケ後ヨコナデ。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、石英・長石を含む。精良な胎土ではない。

14はあまり類例のない器形だが鉢片か。外面はヨコミガキ、頸部にまばらにユビオサエ残る。内面は口縁ヨコナデ、胴部はやや磨滅するがヨコハケ。胎土は橙7.5Y R 7 / 6を呈し、混和砂粒のない精良な胎土。

15は鉢片。外面は下半ケズリ、上半ヨコナデ、最終に口縁部ミガキ。内面はヨコナデ後暗文。暗文同士は左が右を切る。胎土はにぶい黄褐10Y R 5 / 3を呈し、長石若干ありの精良な胎土。

16は羽釜の鏝片。外面ヨコナデ。内面はユビオサエ・タテユビナデ後ヨコハケで、最終ヨコナデ。鏝下面に煤附着。胎土は褐7.5Y R 4 / 4を呈し、角閃石・石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

17は瓦質羽釜片。外面は、鏝部はヨコナデ、下の胴部はヘラケズリ。内面はわずかな残存部はナデ。器表はオリーフ黒7.5Y 3 / 1、胎土は灰黄褐10Y R 6 / 2を呈し、石英わずかに含む。球胴化し、鏝の退化したもので、14世紀代か。遺構上面を覆っていた部分堆積層から出土か。

18は瓦質鉢片。外面は、口縁ヨコナデ、体部はケズリ。内面は口縁付近ヨコナデ残るが下部は激しく磨滅、使用痕か。器表は灰N 4 / 0を呈し、胎土は灰白10Y R 8 / 1、石英あり。14世紀頃のものか。17と同じ出土状況と思われる。

19は須恵質平瓦片。端面がわずかに残る。上面布目、下面タタキ。径7cmほどの円板状に割って、何かに再利用したようである。胎土は灰N 6 / 0を呈し、石英・長石あり。厚さからも平安時代以降のものと思われる。出土状況は上2点と同じか。

20からは弥生土器、20は高坏身部片。外面は、口縁ヨコナデ、下部はタテミガキ。内面はヨコナデ。胎土は浅黄橙10Y R 8 / 3を呈し、石英あり、長石・赤色粒わずかにあり。

21は高坏脚柱部片。外面は、身部ヨコナデか、脚柱部はタテミガキ下端屈曲部に刺突文1列あり。刺突文は三日月状のものや、斜め下方向からの棒状の刺突痕などがあるので、径2.5mmほどの竹管状の工具によるか。内面は絞り痕残り、下半はタテユビナデ、その下の屈曲部はヨコナデ。上部は円板充填。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 2を呈し、長石あり、石英若干、チャート・角閃石わずかにあり。

22は高坏脚部片。外面は、身部タテミガキ、脚部はタテハケ後端部ヨコナデ。身部内面は磨滅激しいがミガキか。脚部内面は、上部ヨコケズリ、下部ヨコハケ、下端部ヨコナデ。透かしは四方透かし。胎土は橙7.5Y R 6 / 6を呈し、長石・石英多し、石英片岩わずかにあり。

23は甕底部片。外面はタタキ、底部はナデ。内面は左上がりナデ。胎土は灰黄褐10Y R 4 / 2を呈し、角閃石多し、石英・長石ありの生駒西麓産胎土。

24は細頸壺肩部片か。外面は、上部皺状の痕跡残り軽くナデ、下部はヨコナデ。内面は頸部直下にタタキ、肩部にヨコユビナデ1条残るが、その上にヨコナデ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、長石若干あり。

25は器台か壺の口縁片。外面はヨコナデ、垂下口縁に波状文。内面はタテミガキ。胎土はにぶい黄橙10Y R 7 / 3を呈し、角閃石多し、石英・長石あり。角閃石が多いが、素地が緻密で明色を示すので、生駒西麓に近い中河内低地産か。

26は縄文土器か。外面は幅2mmほどの沈線で工字文状の文様を入れる。内面はヨコナデ。胎土は灰黄褐10Y R 5 / 2を呈し、石英多し、長石若干あり。

大洞式を源流とする入組工字文か。北陸の鳥屋式、藤橋式など縄文晩期後半の浅鉢に多い。

図68には須恵器をまとめた。1は坏蓋。外面は回転ナデ、天井部との境に回転ヘラケズリ1条、天井部は植物茎圧痕や粘土塊が見られ軽いナデ。内面は回転ナデ後天井部一定方向ナデ。胎土は灰7.5Y 6 / 1を呈し、長石若干あり、石英・チャートわずかにあり。

2も坏蓋。法量的には1と同タイプである。外面は、体部回転ナデ、天井部との境に回転ヘラケズリ、天井部は不定方向の軽いナデ。内面は回転ナデ後天井部一定方向ナデ。胎土は青灰5B 7 / 1を呈し、黒色粒多し、石英あり、長石若干あり。

3も坏蓋片。ただし、土師器坏形の坏身の可能性もある。外面は、体部回転ナデ、天井部との境に回転ヘラケズリ、天井部は不定方向ナデ。内面は回転ナデ後天井部一定方向ナデ。胎土は灰N 6 / 0を呈し、黒色粒あり、角閃石若干あり、石英わずかにあり。

4は蓋坏身。外面は、体部回転ナデ、底部は周縁回転ヘラ切り、中心部は粗い不定方向ユビナデ。一部に編物の圧痕残る。ヘラ記号あり。内面は回転ナデ。胎土は灰N 6 / 0を呈し、黒色粒あり、石英若干、長石わずかにあり。

5も蓋坏身。外面は、体部上半回転ナデ、下半回転ヘラケズリ、底部は不定方向の粗いナデ。内面は回転ナデ後、底部に不定方向ナデ。胎土は灰白2.5Y 7 / 1を呈し、長石わずかにあり。

6も蓋坏身。外面は、体部回転ナデ、その下に回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。内面は回転ナデ後一定方向ナデ。胎土は灰N 6 / 0を呈し、石英・長石若干、黒色粒わずかにあり。

7は有蓋高坏身部片と思われる。壺蓋の可能性もあるが、ここまで径の大きなものは少ない。外面は回転ナデ、受け部より下の一部に自然釉。内面も回転ナデ。胎土は灰白N 7 / 0を呈し、黒色粒多し、長石わずかにあり。白っぽい胎土で堅緻な焼成は特異である。

8は坏身。外面は体部回転ナデ、その下は回転ヘラケズリ後ヨコナデ、底部は回転ヘラ切り後軽く不定方向ナデ。内面は回転ナデ後底部に一定方向ナデ。胎土は灰N 6 / 0を呈し、長石若干、石英・黒色粒わずかにあり。

9も坏身。外面は、体部回転ナデ、その下に回転ヘラケズリ、底部は回転ヘラ切り後手持ちのヨコナデ。内面は回転ナデ後、底部に一定方向ナデ。胎土は灰N 5 / 0を呈し、石英あり。陶邑産か。

10も坏身。外面は、体部回転ナデ、その下に回転ヘラケズリ、底部は軽く不定方向ナデ。内面は屈曲部にユビオサエ1列残り、回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は青灰5B 5 / 1を呈し、長石・石英あり。陶邑産か。

11も坏身。外面は、体部回転ナデ、屈曲部は回転ヘラケズリ後回転ナデ、底部は粗い不定方向のナデ。内面は回転ナデ後底部一定方向ナデ。底部外面にヘラ記号あり。胎土は、表面青灰5PB 6 / 1、内部赤灰7.5R 5 / 1を呈し、石英・長石多し、黒色粒わずかにあり。

12は坏蓋。外面は、体部とつまみ回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ後天井部に一定方向ナデ。胎土は灰N 6 / 0を呈し、石英・長石・黒色粒あり。

13は坏身。外面は、体部回転ナデ、屈曲部回転ヘラケズリ、底部の周縁部は回転ヘラ切り後ヨコナデ、中心部は不定方向の粗いナデ。内面は回転ナデ後底部一定方向ナデ。胎土は表面青灰5B6/1、内部赤灰5R5/1を呈し、石英・長石あり。陶邑産か。

14は高坏脚部片。外面回転ナデ。身部内面回転ナデ後底部一定方向ナデ。脚部内面は、上半螺旋状のユビナデ、下半回転ナデ。胎土は表面灰N6/0、内部鈍い赤褐5YR5/3を呈し、石英若干あり。

15は甕口縁片。調整は回転ナデ。胎土は灰白7.5Y8/1を呈し、石英・長石・黒色粒をわずかに含み、微細粒に黒雲母もあり。白っぽく軟質の胎土と含まれる砂粒がやや特異である。

16も甕口縁片。調整は回転ナデだが、外面に平行タタキ残る。胎土は灰N5/0を呈し、石英・長石・黒色粒若干あり。

3-445・446・4-285溝（図69～73・表35・36） 3-445・446溝は02-2トレンチ西半で、幹線的な3-447溝の北東側に平行して走る2本の溝である。北側は堀田を隔てて3-370溝にどちらかがつながっていると見られる。4-285溝は堀田部分で切れ、直接の接合は確認できないものの、02-3-3トレンチで、3-446溝の南東側の続きとなるのはほぼ確実である。

3-445溝は最大幅50cmほど、深さ10cm前後で、N37°Wを指向する。3-446溝はその南西側に20～30cmの間を空けて平行するが、北西側ではやや曲がり3-445溝に合流しそうな形になる。また、枝溝でつながり、4-447溝ともつながる。3-447溝の埋土上面では枝溝が切られた形になるが、これは埋土上層が後の流入土であるせいで、3本の溝は同時期存在と見ていい。4-285溝部分は4-287溝と直交し、4-287溝の方が深いので、そこから南東は別の溝と言っていいが、平面形ではずれはない。

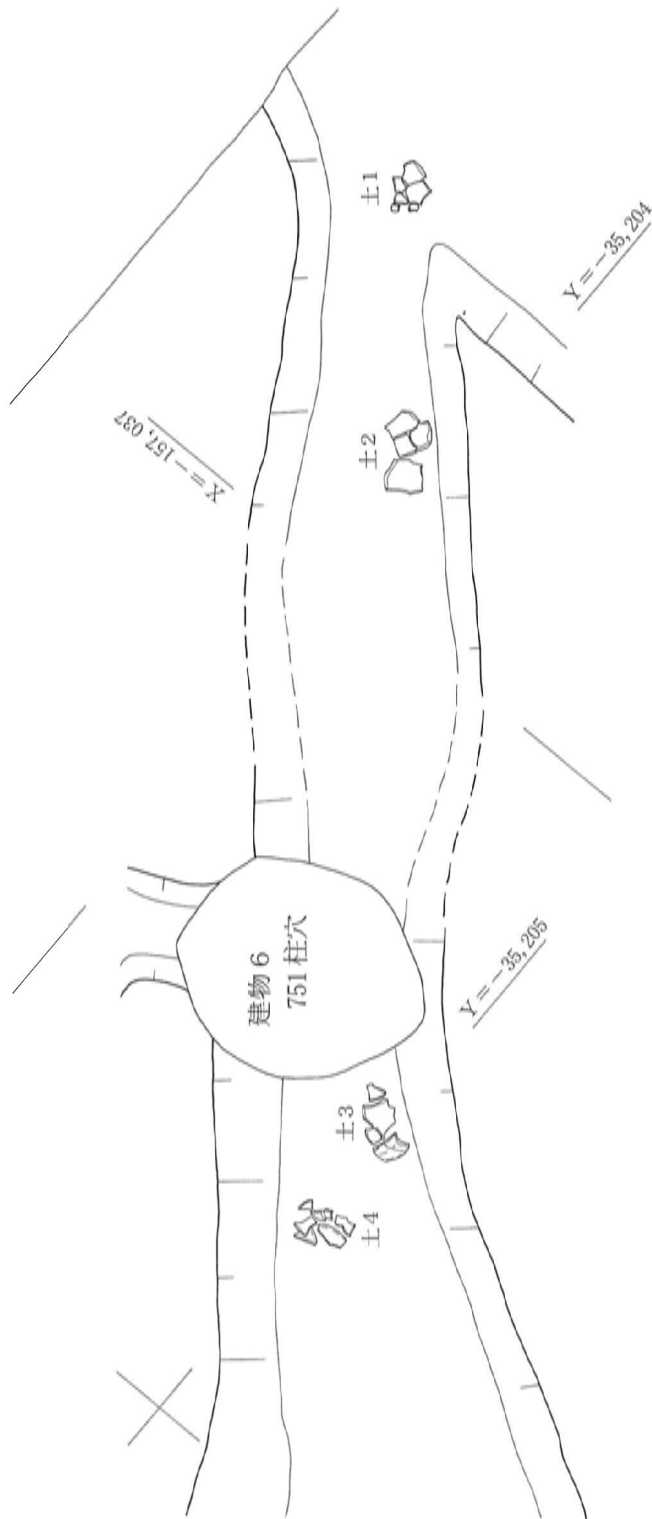
3-446溝・4-285溝は肩に乱れなく削平も少ない部分で幅1m弱。底のレベルは446溝部分では中央が一番高くT.P.+13.5mで、両端は10cmほど下がる。285溝の北西側はそれにつながり、4-287溝

表35 3-446溝 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別					
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%				
土器・陶磁器	208	弥生	189	90.9	甕	62	32.8	タタキ	14	22.6			
					(生駒西麓)	5	8.1	底部	2	3.2			
					壺	33	17.5	長頸壺	3	9.1			
					(生駒西麓)	6	18.2	広口壺	1	3.0			
								底部	7	21.2			
					鉢	7	3.7				生駒西麓	4	57.1
					高坏	2	1.1						
					土師器	17	8.2	鉢	2	11.8			
								高坏	1	5.9			
								坏	2	100			
		須恵器	2	1.0									
		石	1										

表36 4-285溝 遺物破片数集計表

大別	総数	種別		器種		型式・部位		細別					
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%				
土器・陶磁器	388	弥生	383	98.7	甕	100	26.1	タタキ	84	84.0			
					(生駒西麓)	65	65.0	底部	4	4.0			
					壺	81	21.1	長頸壺	34	42.0	生駒西麓	28	82.4
					(生駒西麓)	56	69.1	広口壺	9	11.1	生駒西麓	3	33.3
								底部	9	11.1	生駒西麓	5	55.6
					鉢	4	1.0						
					高坏	3	0.8						
					器台	11	2.9				生駒西麓	10	90.9
					土師器	2	0.5	坏皿類	1	50.0			
					須恵器	3	0.8	甕	2	66.7			
			壺	1	33.3								
その他		石	1										



(土Oは土器破り上げ番号)



図69 3-446溝出土状況(その1)

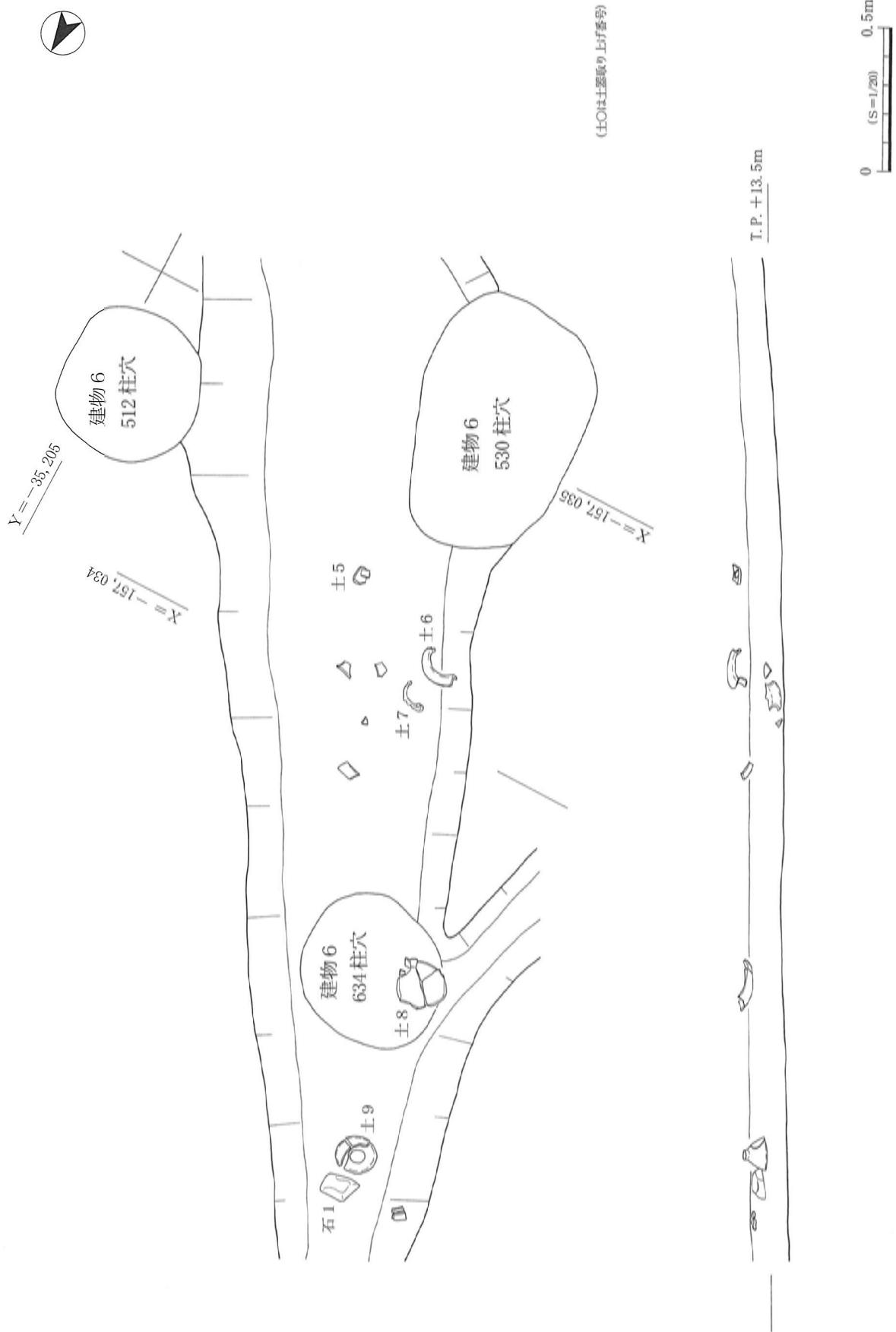


図70 3-446溝出土状況(その2)



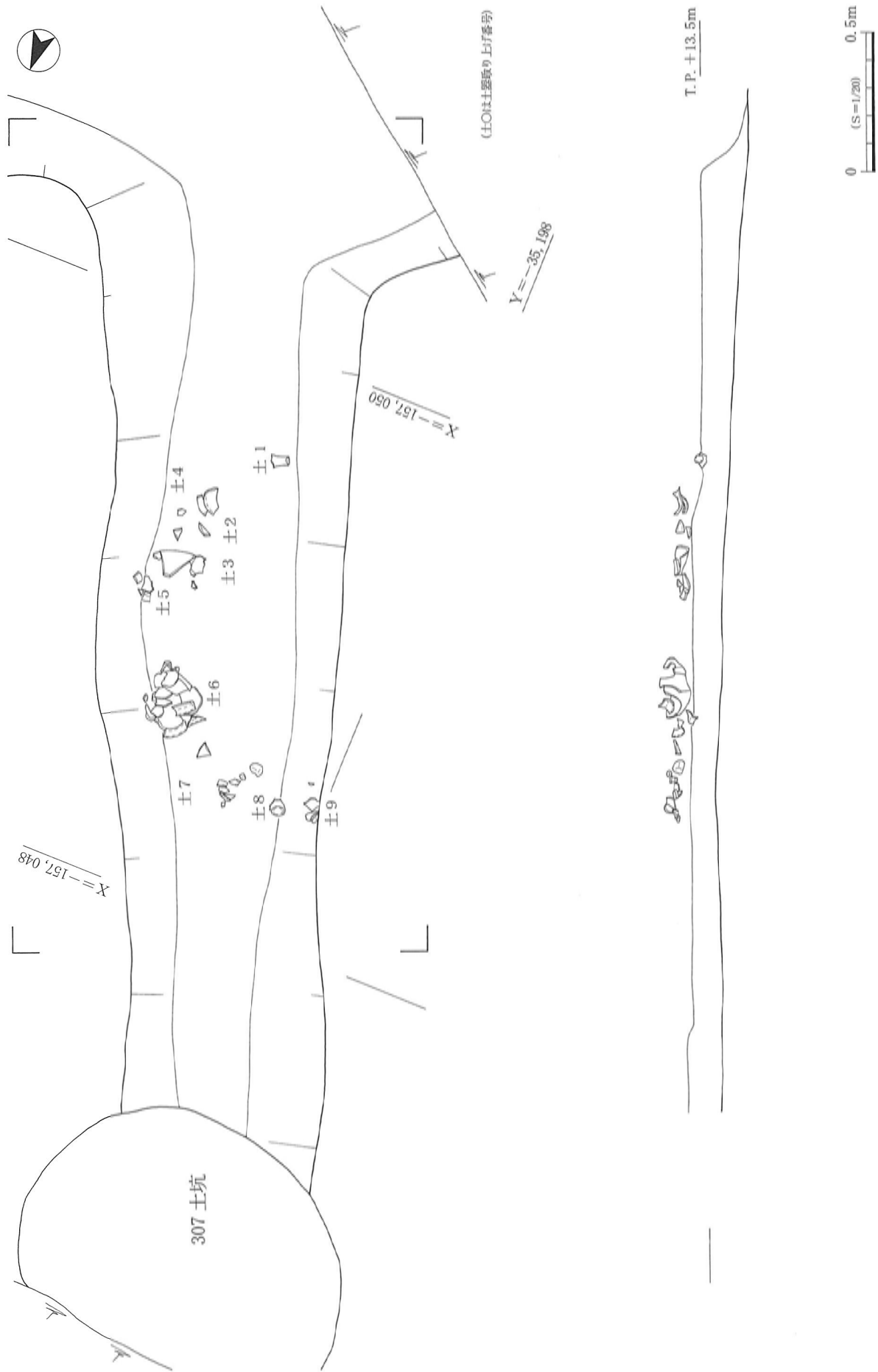


图71 4-285溝北西侧出土状况

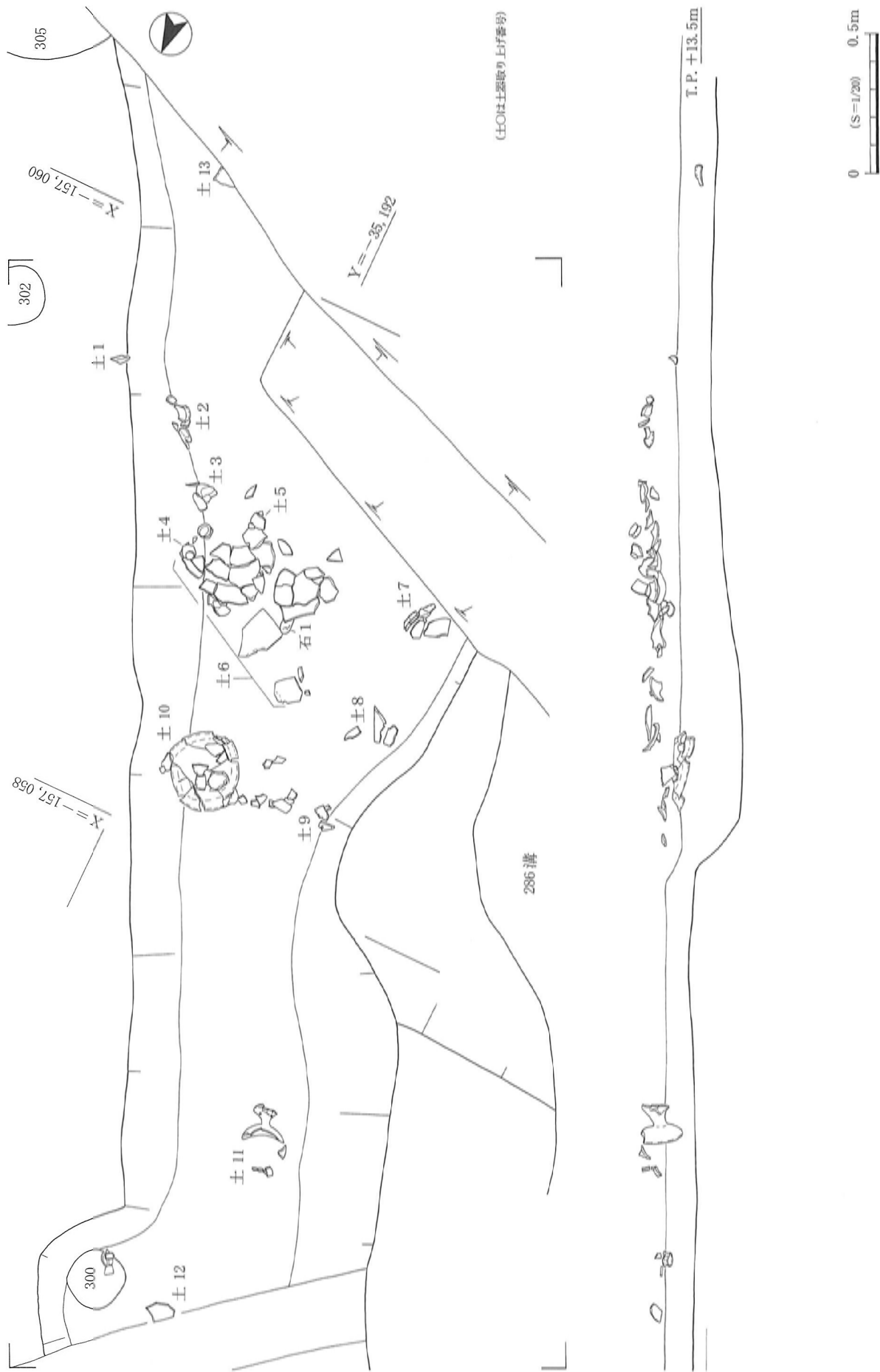


图72 4—285溝南東側出土状況